第二巻

天竺徳兵衛韓噺

幡随長兵衛精進爼板

美濃屋三勝
あかねや半七 艶容女舞衣

櫻姫
清玄 傾城入相櫻

PL 767 K32 v.2
Kawatake, Shigetoshi
Sewa kyogen kessaku shu

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎 共編

世話狂言傑作集

第貳卷

東京 春陽堂發行

PL
767
K32
v. 2

LIBRARY
MAR 15 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

目次

天竺徳兵衛韓噺（天竺徳兵衛）……一
幡随長兵衛精進俎板（鈴ケ森と俎板長兵衛）……九一
美濃屋三勝 あかねや半七 艶姿女舞衣（酒屋）……二二七
櫻姫 清玄 傾城入相櫻（清水清玄）……二五七
巻末に……一

挿繪目次

清水清玄（初代　中村歌右衛門）……口繪
天笠德兵衞（三世　尾上菊五郎）……六九頁の前
權八（五世　岩井半四郎）……一六一頁の前
爼板の長兵衞（五世　松本幸四郎）……二一九頁の前
挿繪解說……本文の前

挿繪解說

「淸水淸玄」の口繪は、初代中村歌右衞門です。彼が淸玄を始めてやつたのは、寶暦十二年七月大阪三桝大五郎座の「淸水淸玄六道巡」です。明和六年三月江戸の中村座で、二度目にこの狂言を出してゐますが、「脚色餘錄」に「色衣を着け、柄香爐を持ち出でたる時、自然と尊き大和尙と見え、墮落の時、櫻の散るを見て、生死無常を思ふ場、獨舞臺、古今大出來。」とあるやうに、彼の淸玄は有名です。この繪は、繪本舞臺扇三册のうちの一つで、大きさは實物の通りです。

「天笠德兵衞」は、三世尾上菊五郎が、文化十四年八月市村座で、天笠德兵衞を演じた時に出來た錦繪です。初代歌川豐國の筆です。

「俎板の長兵衞」は、五世松本幸四郎が、文政元年三月中村座で、この狂言を出した時に、同じく初代豐國の描いたものです。

「權八、文を讀んでゐる繪」は、五世岩井半四郎が、文化六年四月市村座の「靈驗曾我籬」で權八に扮した時の錦繪です。この時の長兵衞は五世幸四郎で、「鈴ケ森」も出まして、その基本的演出といはれてゐます。矢張豐國の繪です。尙「酒屋」の挿繪を入れるのですが、これは卷末にも一寸斷つて置いたやうに、歌舞伎で盛んに上演するやうになつたのは、明治以後で、從つて錦繪も見當らないので、やめました。

天竺徳兵衛韓噺

てんぢくとくべゑ いこくばなし

天竺德兵衛韓噺

序幕

北野天神境內の場
同別當所廣間の場

役名 梅津掃部元春、山名時五郎氏連、佐々木桂之介、石割源吾、下部磯平、蛇遣ひ段八、神職齊宮、仕丁、若徒、梅津の妹銀杏の前、侍女袖垣等。

北野天神境內の場　本舞臺上手石の鳥居、後ろ玉垣、所々に紅葉の立木、本社より末社の靑割、上下植込、北野天神鳥居先の體、毛氈を掛けし床几を並べ、爰に蛇遣ひの段八蛇の入りし籠を抱へ、酒に醉ふたる體にて、仕丁四人竹箒手桶を持ち立掛り、幕明く。

段八　やい〳〵、こいつら何でおれを打ちやあがつた。おまけに見ろ、商賣物を逃がしやあがつたから、料簡しねえぞ〳〵。

○　料簡しないとはこつちで言ふのだ。今日は爰の天滿宮に神樂があるので、

△　今朝から掛つてこちとらが、折角綺麗に掃除をしたを、

□　人の厭がる長虫を、しこたま抱へて喰ひ醉ひ、

◎　鳥居先を荒したから、打きメめて、

四人　追ひ出すのだ。

段八　それぢや今日のお神樂は、將軍樣の神事であつたか。不斷は何所の緣日でもかかさず出掛ける蛇遣ひ、此頃のしけつゞきでくすぶつて居たところ、今日は北野のお祭りで人の出るのを當込みに、たんまり錢儲けをしようと思つて、前祝にお神酒を上つて出て來たが、夫れぢやあ今日は見世物も出せねえのか。何處をどう荒したか生醉のことだから、どうか摺辨して下せえ。

○　さうおとなしく出られちやあ、こつちも荒い事は出來ねえ。

△　さつきからのごた〳〵で、大方醉ひも覺めた時分、

□　正氣になつたら持つてゐる、其しろ物を籠へ入れ、

◎　迯げねえ樣に始末して、早く脇へ行くがいゝ。

段八　なあにこいつあ盲だから、何處へも迯げる氣遣ひなしだ。

ト蛇を籠へ入れる。

○　旨蛇におちずと能く言ふやつだが、本物をついに見た事がない。

段八　見度くば出して見せませうか。

△　いや〳〵夫には及ばぬ。

□　どれ臺所で休息しよう。

段八　わつちも錢儲と出掛けよう。

ト上下へ別れて這入る。向うより銀杏の前、腰元袖垣侍女の拵へにて、若徒一人供をして出て、花道にて、

袖垣　姫君樣、嘸お勞れでござりませうが、つひ向うが北野の社、今少し御辛抱遊ばしませ。

銀杏　いえ〳〵何の勞れうぞ。戀しい殿樣に逢ふと思へば、心も勇む神詣、殊に長閑な小春凪、能い氣晴しをしたわいの。

若徒　是れが常の御參詣なら、お乘物にお召遊ばし、數多のお附が隨ふ筈なれど、人目を憚る忍びの御社參。

袖垣　どうぞ首尾能う彼の方に、

銀杏　お目もじさせてたもいのう。

若徒　何は兎もあれ社内迄、

袖垣　先づお越遊ばしませ。

ト三人舞臺へ來る。此時、鳥居の内より石割源吾、上下大小にて出て、

源吾　それへお越しありしは梅津樣のお妹御、銀杏の前樣、御參詣でござりましたか。

袖垣　是れは〳〵どなたかと存じますれば、佐々木の御家臣石割源吾樣、能い所でお目もじいたしました。

銀杏　そんなら豫て話に聞いた、

源吾　手前は石割源吾でござる。

若徒　何は然れ、姫君には暫らく是れにて御休息。

ト銀杏の前床几に掛ける。袖垣若徒に囁く、若徒下手へ這入る。

銀杏　袖垣よりの話にて、委しく聞いたそなたの親切、忘れは置かぬ嬉しいぞや。

袖垣　姫君樣のお心をお察し申せばおいとしうてならぬゆゑ、桂之介樣にこつそりと、お逢はせなされて下さりませ。

源吾　仰せ迄もあらず、後刻首尾してお逢はせ申せば、別當方の小座敷にて、暫時の間御休息。

銀杏　そんなら人目に立たぬやう、

袖垣　お忍び遊ばす御座所と言ふは、

源吾　夫ぞ手前が、（ト袖垣に呀く。）

袖垣　心得ました。

銀杏　そんなら源吾、

源吾　何かは後刻、

袖垣　さあお越し遊ばしませ。

ト銀杏前の手を取り、鳥居の内へ這入る。

源吾　あれほど迄に桂之介様に、戀焦がるゝ銀杏の前、夫と知りつゝ山名公が御執心をお掛けなさるは、みすく無益な戀爭ひ、なるほど色の世界だな。

呼び　梅津掃部參詣。（ト向うにて呼ぶ。）

ト東の揚幕にて、

呼び　佐々木桂之介參詣。

源吾　噂をすれば影とやら、最早お入りのお先觸れ、此趣きを神職方へ。

ト爰へ鳥居の内より神職齊宮狩衣、仕丁二人附添ひ出て、

神職　いやお知らせには及び申さぬ。

源吾　御身は神職齊宮殿。

神職　御雨侯のお入りとあれば、

源吾　いざお出迎ひ、

兩人　仕らん。

呼び　參詣。

ト向うより梅津掃部先に山名時五郎、侍二人目錄臺に目錄を載せ持つ、東の揚幕より佐々木桂之介若徒二人唐櫃を荷ひ、その跡より若徒磯平附添ひ出て、双方花道に留る。

掃部　昨夜よりして雨を催し、今日の奉幣祈念、如何あらんと心勞せしに、小春長閑けき此日和、是れも全く將軍家の御威勢瑺々盛んの吉瑞、悅ばしい儀ではござらぬか。

時五　足利家も當東山殿に勝りたる將軍家、夫に隨ふ諸侯一統、實に仕合せな事でござる。

桂之　猶も國家安全を祈念のために、義政公より我が佐々木家へ、御預けありし浪切丸。

源吾　兎角言ふ内祈念の時刻、御持參ありし御劍を、一檢分の御兩公へ、お渡しあつて然るべう存じ

まする。

掃部　いや〳〵おろそかならぬ劍ゆゑ、別當方へ立越申さん。

時五　ではござらうが一刻も早く、劍を受取つて改めざれば役目の疎忽、某是れにて預り申さう。

桂之　さやうござれば山名氏、いざお改め下され。

時五　承知いたした。どれ檢分いたさう。

ト合方きつぱりとなり、若徒二人唐櫃より刀の箱を三寶に載せ出す。時五郎箱の蓋を取り見て惘り、

やゝこりや何ゆゑ。

桂之　劍は如何いたしてござる。

時五　掃部殿、御覽なされ。大切なる浪切丸は一腰にてあるべきを、同じ拵への寶劍が並べて三腰入れあるは、何んともつて心得ず。蓋を取らぬ前よりも劍に違はしからぬ箱なりと、不審に思ひおつたるに、案に違はぬ紛れもの。こりや何か見分けの役目を蒙る梅津殿や某を、嘲弄召さるか。

桂之　何といたしてさやうな事を。

時五　然らば何んで三腰ござるな。

桂之　三腰入れあるその仔細。只今申し上げるでござる。

時五　後學のため承らう。（ト合方。）

桂之　抑此劍の威德と申すは、假令水火の中なりとも是れを帶して入る時は、燒亡なさず水を避け、如何なる波濤の海底へ飛入るとも、浪を別かち往來なす事平地の如く、かゝる稀代の名劍ゆゑ、浪切丸と號けたり。さるに依つて此の如くかげの劍を幾振もしつらひ置きしは、此中に眞實の寶劍見極むる御眼力ある仁ならでは、お渡し申すことならず、達つてお改めなさるとあらば、いざ御檢分下さりませ。

ト思入にて言ふ。時五郎きつとなり氣を替え、

時五　はゝゝ、又あるまじき浪切丸、三腰は扨ておき何十萬、束にしてある迚も此山名が活眼にて、鑑定いたさば何として、眞僞の分らぬ事のござらう。して梅津殿貴殿の御所存は如何でござるな。

掃部　何さま大國の老職ほどあつて、尤もなる計らひ、さりながら、三腰の劍のその中に慥かにあるに相違なし、先別當所へ立越して、此元春が目利なし、眞實の劍を受取り申さん、萬一拙者に及ばぬ時は、添役の貴殿へお頼み申すでござらう。

時五　然らばゆる〱検分いたさう。

ト是れにて時の太鼓を打込み、

源吾　や、あの太鼓は。

神職　最早奉幣祈念の刻限。

ト此内桂之介刀箱の蓋をする。若徒元の如く唐櫃へ入れる。

磯平　何は兎もあれ御祈念の時刻でござれば、いづれも様。

桂之　左様ござらば山名殿。

時五　拙者は跡より参るでござらう。

源吾　然らばお先へ。

桂之　元春殿。

掃部　いざ御同道仕らん。

ト唄になり、此人々鳥居の内へ這入る。時五郎殘り思入あつて、

時五　戀の敵の桂之介、彼れが預る浪切丸を、今日の神事を幸ひに、神前に飾る前方に、密に盗ませそれを落度に詰め腹切らせん、豫てのもくろみ。桂之介さへ失へば、銀杏の前も往生なし、身

が心に隨ふ道理、それで行かずば人知れず、姫を攫つて逐電なさんと、石割源吾が手引にて、姫を當社へ釣出す魂膽、盗む劍の刃渡りより危い今日の働きを、誰に申し附けたものか心許ない事ぢやわえ。

ト思入。此時下手より以前の蛇遣ひ段八、仕丁の裝にて出て、

段八　その御用は私が勤めたうござりまする。

時五　あゝ、そちは以前の我が家來犬上段八にてありしよな。

段八　御前樣にも御機嫌よろしく。

時五　そちも堅固で重疊々々。

段八　かやうな姿でお目通りをいたします事、面目次第もござりませぬ。

時五　何樣三年以前に家出せしが、只今にては仕丁を勤めおると見えるな。

段八　是れも今日出來合の、いや今日あなたの御參詣と承つて、境内へ入込みましたも御執心の銀杏の前を引攫はんと。

時五　これどうして夫を其方は。

段八　聞出したのもどうぞして、一つの功を立つた上、元の身分になりたいと思ふ矢先へ、來掛る姫の

君、はて美しいと仕丁に聞けば、梅津の妹銀杏の前、成程あなたが首つたけ、お惚れになさるも尤と、惡つて一升資本を張込み、仕丁仲間にのめずり込み、姿を變へた犬上段八、山名の家來と言ふ事を誰れも知らぬがもつけの幸ひ、姫は元より浪切丸も盜み出せば、私におつしやり附けて下さりませ。

時五　はて小氣味能きそちが性根、然らば汝に申附けんが。そちが酒亂にあらざれば遖れ武士にもならうもの、

段八　持つたが病ひの災も、

時五　今年で足掛け三年目、

段八　お役に立つと言ふ前表、

時五　どうか首尾よくやつてくりやれ。

ト兩人囁き上手へ這入る。鳥居の内より以前の源吾出て、

源吾　かの棟梁が指圖に隨ひ、疾くより中間猪之助に金子を遣はし身が盜ませ、產れ故鄉の江州へ歸國さすれば氣遣ひなし。さうとは知らず神前へ、眞の劍があると心得、姫の執持頼むを幸ひ、山名の犬山段八に盜ませたれば、今日の祈念に紛失と披露なすは目のあたり、かく諸事萬事手

つがいの首尾能く行くも遠からず、大望成就の幸先なるか、はて悦ばしき、（トよろしく道具替りの知らせ。）事じやわえ。

トにつたり思入。大拍子にて、

此道具廻る

同別當所廣間の場　本舞臺平舞臺、正面上手一間床の間、次に一間地袋戸棚、此下唐畫の襖、上下折廻し杉戸の出這入。總べて別當所客殿の體。爰に掃部時五郎桂之介住ゐ、合方にて道具留る。

時五　扨て掃部殿、もはや祈念に程もなければ、只今の內寶劍を撿分しては如何でござる。

掃部　大切なる寶劍ゆゑ、身を淨めて撿分なさんと水垢離とりて參りしが、貴殿は最早よろしうござるか。

時五　手前は六根淸淨ゆゑ、淨める所は更にござらぬ。

桂之　然らば是れにて浪切丸、

掃部　いざ立合うて、

時五　撿分なさん。

ト合方替つて掃部不審の思入。時五郎今に見ろと言ふこなし、桂之介箱を前に出し、蓋を取り恂り

して、

桂之　やゝこりや何時の間に、ふむ。

掃部　して寶劍は、

時五　如何せしな。

桂之　につ最前迄三腰ありしに一と腰紛失いたしてござる。（ト言ひつゝ、二腰とも拔放して見て、）やゝ、かげの劍を跡へ殘し、誠の寶劍奪ひ取りしか、ほい。

時五　なに正眞正銘の浪切丸が紛失いたした。こりや一大事が出來いたした。

ト わざと歎息の思入。

桂之　それ。（トきつとなつて下手へ行掛るを、）

掃部　あいや桂之介殿暫らく待たれよ。

桂之　お止めあるな、劍の盜賊片時も猶豫なし難し。

掃部　はて其盜賊は某が、能く存じ罷りあれば、先々お下にお出なされい。

ト 是れにて桂之介こちらへ來り、

桂之　劍の盜賊御存じにて、何ゆゑ撿分なされしぞ。

時五　如何さま是れも不思議の一つ、

桂之　包まず所存を、

兩人　お明し下され。

掃部　實は手前が其盜賊を今方社內で召捕つたり。

桂之　して〳〵誠の浪切丸を、

時五　奪ひし賊は、

兩人　如何召された。

掃部　只今是れへ呼出し申さん。（ト下手に向ひ）それに控へし下部磯平、そやつを是れへ引立て參れ。

磯平　はゝあ。

ト下手より以前の磯平下げ緒にて縛りし段八を引立て、寶劍を持出て、

下におらう。

ト時五郎段八と顏見合せ思入。桂之介磯平に向ひ、

桂之　こりや磯平大切なる浪切丸を奪ひし賊と劍迄、守護なしおつてなぜ告げぬ、言はうやうない不忠者めが。

磯平　その御立腹なき内に申上げんと存じましたが、梅津樣の口留めゆゑ、言ふに言はれぬ下郎が切なさ、お察しなさつて下さりませ。

時五　主が主なら家來まで、聞き度くもないよまい言、祈念の時刻近附けば、劒が出たなら撿分いたさう。

磯平　はつお改め下さりませ。

ト件の劔を桂之介へ渡す。桂之介拔放し見て恂りなし、

桂之　やゝ、是れも影の劔なりしか。ふむ。

磯平　さすれば劔は二腰とも、皆僞物でござりまするか。

段八　いや詰らぬ物を盜んだ許り、とう〳〵終ひが此態とは氣の利ねえものになつたな。

ト掃部思入あつて、

掃部　桂之介殿、眞實の劔は疾うよりして紛失せしを御存じなきか。

桂之　えゝ。

掃部　よも御存じはござるまい。（ト合方。）察する所檢分の眼をくらまし、露顯の折りはわれ〳〵が落度になさん底企み、此謀計は誰なるか、貴殿がお心附かぬとは、ちと御庶相な事でござる。

時五　すりや眞實の浪切丸は、疾より紛失いたしおりしか。さりとは知らず否さ然うとも知らず檢分なし、大方是等がそれだらうと、受取る時は手盛りを喰ひ、虎穴に落ちる今日の役目、危い事でござつたわえ。

磯平　掃部樣のお詞を承はれば、寶劍の賊は正しく外にあり、然しこいつも眞僞はしれねど、劍へ心を寄せるからは、頼まれしやつに違ひない。嚴しく詮議をいたしたら、何か一つの手掛りになりませうかもしれませぬ。

段八　えゝ餘計な事を言ひなさんな。全體、箱ごと引攫ひ、金に仕樣と思つたが眞晝間目に立つて、三本呑みやあ腹がふくれ、始末が悪さに一本盗んだ。劍はおどしに遣ふつもり、僞か眞實か知らねえおれに、頼むやつがあるものか。御自身の出來心でこりやあとつたが返してしまやあ、盗み損の縛られ儲け、此上嚴しい詮議をされちやあ、實に埋らねえ盗人だ。

時五　成程是れも尤も至極かやうな企みをなすものが、賤しきやつに頼む筈なし、殊に劍を返せしからは、詮議いたすは無益なり。かやうな者よりまだ外に、詮議いたすものがござる。

桂之　外に詮議の者があるとは。

時五　只今貴殿へお目にかけん。（ト下手へ向ひ、）やあ〳〵家來共その兩人を急いで是れへ。

△　はゝあ。とく／＼お立なされ／＼。

ト下手の杉戸より銀杏の前、袖垣を引立て出る。

掃部　やゝ、そちや妹。

桂之　銀杏の前殿、如何いたして此所へ。

銀杏　さあ、それは。

時五　こりや滅多には申されまい。桂之介殿と銀杏の前は、疾より不義をいたしおる事、手前はよつく存じておる。さあ有體に言はつしやれ。

銀杏　いえ／＼何んで自らが、不義をいたしておりませう。最前社へ参詣をいたせし折に計らずも、

袖垣　源吾殿に呼び留められ、暫く御休息をなされしばかり。

桂之　此方迚も不義せしと、疑ひ受ける覺えはござらぬ。

磯平　こりやいつそ、源吾殿を、是れへお呼びなされたら、直ぐに知るゝでござりませう。

時五　いや源吾を是れへ呼ぶに及ばぬ。不義せしと言ふその證據、手前が是れに所持しておる。

桂之　してその證據と言はるゝは、

時平　外ではござらぬ此一通。

ト懐中より一通を出す。袖垣名宛を見て、

袖垣　ヤそれは。

時五　桂之介殿へ、銀杏の前が今日當社で逢はせてくれよと、則ちそれなる袖垣が、源吾方へ頼みの一通、何と確かな證據でござらう。

銀杏　どうして夫を。

○　先刻廊下を通行なす折り、

△　落散りありしを拾ふてござる。

磯平　そんならいよ〳〵源吾殿が、忌々しい事だなあ。

時五　此文體の樣子では、度々出會ひし事と見ゆる、はて苦々しい事でござる。

ト掃部に當て言ふ。

掃部　こりや妹、其方ゆゑに此のしだら、言はう樣なき不埒者めが。

トきつと言ふ。桂之介思入あつて差添ひに手を掛ける。

こりや何ゆゑに切腹なさるゝ。

桂之　貴殿の家の瑕瑾となりしも我が不埒より起りし事、夫のみならず劍の紛失、旁以ての申譯。

掃部　某への言譯は切腹なして濟むにせよ。將軍への申譯は切腹にては濟まざるぞ。

桂之　ヤ。

掃部　今死する一命にかへて、劍を詮議なし知れざる時は天下の大法、必ず共に早まり召さるな。

ト思入あつて言ふ。

桂之　面目次第もござりませぬ。

銀杏　桂之介樣へ、御難儀を掛けるも因は自らゆゑ、まだ其上に兄上へお恥辱與へし不孝の罪、申譯がござりませぬ。

袖垣　いえ〳〵是れも私が、お執持をいたせしゆゑ、死なねばお詫びが出來ませぬわいな。

磯平　そのお執持を源吾殿がお斷りなされたら、こんな事にはなりますまいに、殘念な事をいたしました。

掃部　面は忠義と見すれども、心知れざる石割源吾、火中なすべき一通を、持參いたして取落し、是れなる書を退きおるは、深き所存のある事ならん。

時五　何時迄言つても果しのなき事、して奉幣祈念は如何なさるゝ。

掃部　浪切丸が紛失なせば神事の日延を願ふ所存。

時五　すりやそこ許が一存にて。

掃部　いかにも。

時五　はて御苦勞な事でござる。

段八　そちらの評議が附きましたら、何にも取らねえ私の繩をゆるめて下せえまし。

掃部　オヽ、其方はゆるして遣はす、勝手にいたせ。

段八　早く歸ると一升も買はずに濟むのを無駄にして、揚句の果が又元の、蛇遣ひとは何んの事だ。

ト〇△兩人、段八を引立て下手へ這入る。

桂之　御厚志のお詞にあまえて願はくば紛失の寶劍詮議と日延の儀、何卒今日より百日の御猶豫下し置かるゝ樣、お取成のほどお願ひ申す。

掃部　その儀は手前が上へ願へば、隨分共に怠りなきやう。

桂之　一命にかへ桂之介、急度詮議いたすでござる。

掃部　寶劍出るそれ迄は、桂之介は老職たる宗觀方へしかと預け、妹は手前が屋敷にて糾明きつといたすでござる。

時五　双方縁者の預りにて、上よりお咎めありし時は、

掃部　申譯は拙者がいたす、貴殿へ御苦勞掛けぬ所存。

銀杏　そんなら此儘私を、

袖垣　何から何迄厚きお情、

桂之　掃部殿のお計らひ、

磯平　有難うござりまする。

時五　いで不義者を宗觀方へ。

ト立掛るを、

掃部　あいや手前に任せて、（ト下に居させるを木の頭。）お構ひ召さるな。

ト此仕組よろしく引張り誂への合方にて、

幕

二幕目

吉岡宗觀屋敷の場

同裏手水門口の場

役名。　天竺德兵衛實は木曾官一子大日丸、吉岡宗觀、梅津掃部元春、山名時五郎、佐々木桂之介、下部磯平、庄屋沖右衛門、庄屋二人、蛇遣ひ段八、宗觀妻夕浪、梅津の妹銀杏の前、侍女袖垣、捕人大勢、近習、中間等。

吉岡宗觀屋敷の場　本舞臺三間、常足の二重、眞中に龕燈口、金襖彩色畫、上下塗骨の腰障子、上手椽先に誂への筧、是れに寶劍を隱すこと、青石誂への手水鉢、上下柴垣、後ろ網代塀、總べて吉岡宗觀屋敷の體、此道具のちに家體崩れになる事、爰に中間二人手桶箒を持ち掃除をして居る。白拍子にて幕明く。

仲間　さあ〳〵一服やらう〳〵。

△　さうしよう〳〵。時に角內、あの奧座敷に引籠り、本計り讀んでゐるのが佐々木桂之介樣と言ふのか。

○　貴樣は譯を知るまいが、あの若殿樣は東山義政公より預りの浪切丸とやらをなくした咎で、詮議の間此屋敷へ押込められてゐるのだ。それは兎に角梅津掃部樣の妹銀杏の前樣とやらが、大層慕ふてござるさうだ。

△　いかさまそんな話も聞いたが、其姫君様には山名時五郎様とやらが思ひを掛けてゐる故、桂之介様をしくじらさうと云ふ企み事、何と意地の悪いやつじやあねえか。

○　あいつあ名代の意地悪だ。いくら思ひを掛けたとて、あの若殿様とは較べものになるものか、はゝゝ。

ト此時奥にて、

夕浪　聲高に下部ども、御前間近く控えおらぬか。

ト合方になり、奥より佐々木桂之介羽織衣裳にて出て、褥の上へ住ふ。宗観の妻夕浪老けたる拵、補衣裳にて附添ひ出て、

桂之介様の御前間近く只今の高聲、ちとたしなんだがよいぞや。

兩人　へい〳〵恐入りましてございます。

夕浪　次ぎへ下つて休息しや。

兩人　どりや部屋へ參るでござりませう。

ト仲間二人下手へ這入る。合　になり、

桂之　誠に下部と申す者は、後先き揃へもなう、はゝゝ。いやなに夕浪此程より宗観を初め、そち達

迄が心遣ひ、桂之介過分に思ふぞよ。

夕浪　是れは〳〵改つたる其の仰せ。誰あらう九州の探題豐後一國の城主たる佐々木桂之介樣、僅かな落度にお上のお咎め、夫吉岡宗觀武將に願ひ紛失の浪切丸を詮議なさんと、百日の日延も、最早今日限りゆゑ、お上への返答に當惑いたしております。

桂之　成程某の放埓より、お預りの浪切丸の紛失、義政公への申譯立ち難く、切腹と思ひしを、宗觀が勸めにて、百日の日延の願ひも今日限り、在處知れねば佐々木の滅亡、今此時に極まりしか。はて是非もなき事じやな。

夕浪　お氣遣ひ遊ばしますな、夫宗觀申しまするには、手掛りのないと申す儀にもござりませねば、必ずきな〳〵思召まするな。

桂之　ぢやと申して詮議の日限も今日ゆゑ。

夕浪　サそこが下世話の膝とも談合、我々夫婦に何事もお任せなされて下さりませ。

ト向うより侍一人出て參り、

侍　ハツ申上げます。

夕浪　何事じや。

侍　ハツ御領から小竹島へ最前入津仕りましたる商船一艘、船頭は播州高砂の徳兵衛と申すもの、五年以前吹流され、天竺へ渡りしが、此度恙なく本國へ歸り、日和待ちをいたしまするゆゑ、則ち徳兵衛を召連れ、御訴へのため推參仕りましたるが、是れへ通しませうや、いかが計らひませう。

夕浪　ナニ天竺へ渡海せし徳兵衛とやら言ふ船頭が、小竹島へ入津せしとな。定めし珍らしき異國の話、幸ひ若殿もお渡りあれば、是れへ呼寄せ異國の話をなされては如何でござりませう。

桂之　如何さま、珍らしき異國の話、聞くも一興、是れへ呼べ〳〵。

夕浪　是れへと申しや。

侍　ハツ（ト向うへ向ひ、）小竹島の庄屋急ぎ徳兵衛と同道いたせ。

ト揚幕にて、

沖右　さあ〳〵徳兵衛殿わしと一所に、

庄屋二人　ござらつしやい〳〵。

ト濱唄になり、向うより庄屋沖右衛門、羽織袴、扇を持ち、後より徳兵衛五十日鬘あつし、大阪手甲脚袢、麻上下を着たる好みの拵へ、藁苞に入れし刀を持ち、跡より床屋二人袴羽織にて附添ひ出て、

花道にて、

庄屋二人　さあ〳〵早く歩行かつしやれ〳〵。

德兵　是れさお前方はわしを何所迄連れて行くのだ。

沖右　はて此お屋敷は佐々木家の御家老吉岡様のお屋敷だ。こなたの様な異國へ渡つた珍らしい人は、御訴へ申して置かねば後で庄屋が落ち度になります。

德兵　はて扨それは迷惑千萬、殊に聟入の時にでも着る様な上下を引張らして、何だか姫糊を嘗めた化物を見るやうだ。

三人　はてまあ一所にござれと言ふに。

ト捨台詞にて皆々舞臺へ來る。

侍　こりや〳〵村役人、御前間近く下りおらぬか。

沖右　へい〳〵私は小竹嶋の庄屋沖右衛門と申す者でござりますが、天竺へ渡海いたしました船頭德兵衛と申す者、昨夜御領分へ入津仕ましたるに付、召連れましてござります。

夕浪　おう退儀々々、則ち是れにお渡らせ遊ばさるゝが當國の御領主、佐々木桂之介様ぢや。こりや德兵衛とやら、お目見得仰せつけらるゝほどに近う〳〵。

沖右　さあ〳〵徳兵衛殿、殿樣の御前だ。そこへ出て天竺へ渡つたあらまし申上げたがよいぞや。

徳兵　へい〳〵御免なされませ、私は播州高砂の船頭徳兵衛と申す者でございます。

夕浪　苦しうない、殿樣よりお許しの出た上からは、少しも早く異國の話をしたがよいぞや。

ト是れにて侍下手へ莚を敷く、徳兵衛此上へ乘り、

徳兵　へい〳〵いやもう五年以前に、國許を出ました時は、女房子もございましたが、あゝこんなことは言はずとも。まあお聞きなされませ。先づ北國の荷物を積まして吹流されて唐天竺　いやもう恐ろしい島々を廻りましたが、命から〳〵船計りを御領分へつなぎました。お改めの上出船いたし、早く國許へ歸りたうござります。

夕浪　さあ、その本國へ歸りたくば、天竺へ渡つた話をば早う聞かしやいの。

徳兵　いやもうお話申さいで何といたしませう。その天竺と申しましても廣いことでござります。先づ長崎から凡そ千里ほど走りますると、トロンカ島と申すところがございます。ト言ひかけ、もぢ〳〵思入あつて。どうもこいつあ鹽梅しきが惡い。もしお庄屋さん、わしやあ物言がぞんざいで、殿樣の前では話がし惡くい、お前樣聞手になつちや下さらねえか。

沖右　成程わしが聞手になるのか。よし〳〵さあ〳〵話さつしやい〳〵。

ト是れにて德兵衞胡坐を搔き、

德兵　どれ話して聞かせませう。（ト合方になり。）先づトロンカ島と言ふところは、達摩大師誕生の古跡、此島よりまだ百里も走りますと、摩迦陀國の龍沙川、長崎からは凡三千八百里ほどの道程、此川上を四五十里も登りますと、ウカイソと申しまして弘法大師と文珠樣と智慧競べをさつしやれたところがござります。

沖右　はゝあ、ウカイソそれは大方菅相丞の島守にならしやつたところでござらうの。

德兵　何を言はつしやる、菅相丞は筑紫でござります。

沖右　はてそれでも菅原の二の切に、身はうかいその島守と言ふではないか。

ト一寸太夫を語る。

德兵　何を言はつしやる。まあ默つて聞かつしやれ。

沖右　それからどうしたな〳〵。

德兵　さあ聞かつしやい。其島にデビヤタイと言ふ寺がござります。爰はじゆだつ長者の屋敷跡ださうで、又その近邊に間口二十里奧行三十里づつの釋迦堂が三つござります。デビ家體より此堂迄三四十里の町つゞき、釋迦は則立釋迦居釋迦寐釋迦の尊像、立釋迦の背の高さが十三里、小

指の長さが八十間、堂の柱の廻りを七十尋の眞網で卷いて見ましたが、三分の一も屆きません。佛樣の體の內に幅八間の町が三筋ござります。是れ則ち釋迦堂町と申します、ところで大象を見ましたが丸で日本の二十日鼠程にしか見えません。夫れから靈鷲山と申して高さ一間、横巾八町、長さ十六町の岩がござります。爰が佛の說法所で、商人が夜見世を出して、毎月四日、市が立ちますので爰を天竺の四日市と申します。其横町は皆芝居で歌舞伎あやつり力持ちと、實に賑やかなところでござります。

沖右　これ德兵衞殿、天竺の役者は定めて大きからうの。

德兵　大きい所が、天竺の役者は、日本の半鐘どろ棒見るやうさ。すんでの事にわしも背が高いと天竺の役者になるところだが、此通りちいさいゆゑ、歸つて來ました。

沖右　いやそれは惜しい事をしたな。

庄屋二人　夫からどうしたな。

德兵　まだ珍らしい一年に米が三度づゝ出來ますが、人參が二抱で三文、伽羅が一かけ十六文、夏向き貧乏人が伽羅で蚊いぶしをするゆゑ、いやもう逆上返つてなるものじやあござりません。まだ〳〵珍らしい事は澤山ござります、先づざつとかいつまんだお話は、こんなものでござりま

す。もしお庄屋樣、咽がひつ付くやうだ。お茶を一つ貰つて下さい。

沖右　おつと承知じや。どうぞお茶を一つ願ひたうござります。

ト是れにて侍高茶臺へ茶碗を載せて出す。德兵衞茶を呑み、

德兵　先づこんなものでござります。

桂之　珍らしき天竺の話を聞き、某も鬱散いたした。

夕浪　左樣でござりましたか、何を申すもあなたのお心をお慰め申さうため、一しほ能き物語。德兵衞とやら退儀であつた。此樣子を夫宗觀殿へ話し、船改めの役人も遣はさう。村役人は德兵衞を殘し、立歸つたがよいぞや。

沖右三人　へい〳〵畏まりました。

德兵　へい夫では私は殘りますのでござりまするか。

夕浪　いかにもそちには御前より、御褒美に御酒を下さるゝ程に、心置きなう頂戴しや。

德兵　それは有難う存じます。

沖右　いや德兵衞殿は仕合者、お大名の御馳走とは定めし小豆飯に鮪のうしほ、是れに上越すお料理はあるまい。

上ノ庄屋二ノ庄屋　これ徳兵衛殿や、餘りにたべ過ぎて、必ず食傷、

三人　さつしやるな。

徳兵　何を云はつしやる。

沖右　そんなら徳兵衛殿。

徳兵　船を何分頼みますぞえ。

三人　おつと承知じや。どれお暇いたしませう。

ト庄屋三人捨臺詞にて下手へ這入る。

夕浪　先づ我君様には奥の間へ。

桂之　そなたも一所に。

夕浪　畏りました。これ徳兵衛とやら、必ず外へ行くまいぞや。

ト唄になり、桂之介夕浪奥へ這入る。徳兵衛邊りを見廻し、

徳兵　はて結構な座敷の構へ、天竺よりもまた日本はどうも違つた物だ。したが大名の内よりもこつちの内が結構でござるとは、馬士の三吉が臺詞、おれは船頭、まんざら退いた中でもねえわ

い。

ト二重へ上り、胡坐をかき思入。此時奥にて、

宗觀　なに德兵衞とやらがそれにおると、吉岡宗觀只今參つて面談いたさう。

ト序の舞になり、奥より宗觀胡麻鹽、總髮、そけん法眼袴大小にて出て來り、

天竺より歸國の船頭德兵衞とやら、只今の物語に相違もあるまい。其方が船吟味に及ばぬ。勝手次第に歸國いたせ。

德兵　へい有難うござります。左様ならあなた樣が當家の御家老吉岡宗觀樣でござりまするか。

宗觀　いかにも。

德兵　あのあなたが宗觀樣とな。（ト言ひつゝ宗觀の顔を見詰めて、）はていぶかしきあなたの人相、今日中に劒難にて命を落すあなたの人相、はてお氣の毒千萬な。

宗觀　何と申す、此宗觀が今日中に劒難にて、相果る死相ありと申すのか。

德兵　憚りながら左樣お見受け申してござります。

宗觀　ふむ今日に迫る死相ありとは合點行かず、それ相は天氣地氣の二つを計り、其人氣に依つて考ふる、尤世上に相見あれど、只善惡を分つ斗り、人間の生死は天のなせるところにて、陰陽師

卜者と言へども是れを計られず、まして況んや船頭づれが某に徹する今の詞、他家より學び覺えしか、仔細ぞあらん物語れ、どゝどうじや。

德兵　別に師匠とてもござりませぬが、五年間天竺を經廻りました天竺德兵衞、習ふより馴れろとやら、何時覺えると云ふ事なく、見なれ聞き馴れ覺えた一德、見ましたところが御老體の御身なれど聞及んだ宗觀樣、餘り笑止に存じましてつい浮か〳〵と申しましたものゝ、お氣に障らば幾重にも、御料簡なされて下さりませ。

宗觀　いや氣に障る事少しもない。さりながら德兵衞とやら今の詞で其方に尋ね問うべき仔細もあり、身と一所に奧へ來てはくれまいか。

德兵　お召しとあらばいづれへなりと參りませうが、あなた樣の劍難を退れる術もあるまいかとのお尋ねならば、必ずよしになさりませ。どうあつても今日中には。

宗觀　はて年こそ寄つても吉岡宗觀、未練な性根は得持たぬ。委細は奧で船頭德兵衞。

德兵　宗觀樣。

宗觀　から來やれ。

卜唄になり、宗觀先に德兵衞附いて奧へ這入る。跡早き合方下手より銀杏の前、ふり袖姫の拵へにて

走り出る。後より蛇遣ひの段八、どてら三尺帶、籠を抱へ、侍女袖垣好みのこしらへにて是れをさゝへ乍ら出て、銀杏の前を圍ひ、

袖垣　ヤそなたはいつぞやの曲者。

段八　知れた事だ。神樂ケ岡で見掛けた女、目を附け置いたに違ひなく、梅津掃部が妹銀杏の前、桂之介がお預けになつてゐる宗觀が此屋敷、跡を慕ふて來たのであらう。さすれば二人はいよいよ不義者、さあかう言はれるがいやなれば、おれが一緒に山名樣へ連れて行かうか。

銀杏　えゝ、穢らはしいその一言、あの憎體な氏連の何んで心に隨ふぞ。わしや殺されてもいやぢや〱。

段八　是れさ〱銀杏の前達つていやだと言ひなさりやあ、それ此通りだ。（ト持つてゐる籠より蛇を出して、）商賣物の此蛇を、こなた衆の懷へ放り込まうか。

銀杏　あれ恐ろしいあの口繩、こりやどうしよう〱ぞいなあ。

袖垣　これ其蛇爰らへ放すまいぞ。

段八　さあ放されるのがいやならば、姫を渡すか。

袖垣　さ、それは。

段八　放り込まうか。
袖垣　滅多な事を。
段八　いつその事に。
ト籠を置き、姫にかゝる。袖垣是れを突廻し一寸立廻る。此時後ろへ德兵衞出て、段八を突廻し兩人を庇ふ。
袖垣　や、こなたは。
德兵　こゝ構はずと早くござれ。
袖垣　えゝ忝ひ。
德兵　禮には及ばぬ早く〳〵。
袖垣　からお出でなさりませ。
ト袖垣銀杏の前は奥へ這入る。段八起上り德兵衞を見て、
段八　やあ、うぬは能くも女を逃がしやあがつたな。(ト一寸掛るをあり合ふ蛇の籠を冠せる。蛇這ひ纏ふ)えゝ蛇遣ひに蛇をぶつ冠せ、そこら邊りが蛇だらけ、うぬから先へ。
ト段八腰に挾みし出刄庖丁を出し、切つて掛る。德兵衞手早くもぎ取り、ぽんと切る。段八見事に返

へる。此時どろ〳〵蛇さしがねにて上手の筧へかゝる。一時に蛙の聲夥しく鳴く。蛇一疋、筧へとらうとして、二つに裂けて落ちる。德兵衞是れを見て見得。

德兵　はて心得ぬ。今曲者が携へし籠の内より數多の口繩出ると等しく、庭の面頻りに蛙の啼きつるゝ聲を知るべにあれ〳〵、あの椽先の筧の竹へ登りし蛇は、其身をさき一度ならず二度三度、切放れたる此不思議、殊に蛙は聲ばかり俄の村雨あれと言ひ是れと言ひ、奇異なるこの場の振舞ひじやなあ。（ト是れにてどろ〳〵を打上け、蛙の聲止み思入あつて思を替へ）役にも立たぬ蛇の不思議、どりや奧で酒でもねえだらうか。

ト唄になり德兵衞思入あつて奧へ這入る。後調べになり下手の柴垣の蔭より、奴磯平一本差しにて四邊を伺ひ、

磯平　勝手覺えし宗觀樣の下邸、若殿桂之介樣お預りの浪切丸、詮議の日限りも今日限り、我君のお身の上心許なく、一家中の人目を憚り奧庭傳ひに忍び入りしが、何はしかれ我が君のお身の上が案じられてならぬわい。

ト此時奧にて、

宗觀　こりや我君御短慮千萬、先づ〳〵お鎭まり下さりませう。

ト合方はたく、奥より桂之介刀を持ち出る。宗觀留めながら、跡より銀杏の前、袖垣附いて出る。是れにて磯平小蔭へ忍ぶ。

銀杏　桂之介樣には何ゆゑの御生害。

袖垣　まあ〱お鎭まり遊ばしませ。

桂之　いや〱大切なる浪切丸を失ひ、百日の日限りも今日限り、今もつて在處知れねば義政公への申譯、此場に於て潔く。

ト刀へ手を掛けると、

宗觀　いや假令日限りは切るゝとも此宗觀息ある内にあの御太刀詮議仕出し、差上げれば先づ〱お待下さりませ。

桂之　さゝ、その言ひ譯なきにはあらねど、時五郎が讒言にて、銀杏の前と不義の疑ひ、中譯なき其時は、家の大事と思ふゆゑ。

磯平　あいや其儀は憚りながらお氣遣ひなさいまするな。

ト磯平柴垣の蔭より出る。

宗觀　その方は下部磯平、疾より是へ參りおりしか。

磯平　御主人桂之介様は當家へお預け、お館に御座ある時は、お傍に附添ふ拙者めゆゑ、朝夕寢覺めに心がゝり、お跡を慕うて參りました。して浪切丸の手掛りが知れましたか。

桂之　そのありか知れぬゆゑ、桂之介が此場の生害。

ト又切ろうとするを姫留めて、

銀杏　あれ御短慮な桂之介樣。

袖垣　宗觀樣のお詞もあれば、先づ〳〵お任せなされませ。

ト留める。此時向うより侍出て、

侍　はゝ申上げます。義政公より御使者として、梅津掃部樣、今一人は山名時五郎樣、御入りにござります。

ト言ひ捨て這入る。

桂之　すりや兩家同道にて入來とな。

銀杏　なに兄上が御出とや、さすれば自らが身の上も。

宗觀　あいやあなたの御身の御難儀より、正しく使者は御太刀の御詮議ならん。お二方、此場にありては何かの邪魔、幸ひなるかな磯平は、我君のお供して、一旦此場を立退き、知るべの方へ身

を忍ばれよ。

磯平　仰せにや及ぶべき、御大切なる桂之介様、下部がしつかりお預り申しました。

袖垣　姫君事は兄上のお入りと言ひ、殊に讒言のあの氏連、目に掛つては一大事私がお供してお館へ。

銀杏　そりやどうでも館へ歸るのかえ。

桂之　心懸りは使者の入來、もし宗觀が身の上に。

宗觀　はて何事も拙者が胸に、片時も早くあなたは此場を。

磯平　然らば拙者がお供せん。（ト向うにて、）

呼び　御使者。

宗觀　使者の入來なき内、早く〳〵。

磯平
袖垣　心得ました。

　ト忍び三重にて桂之介先に姫、磯平袖垣附いて東の揚幕へ這入る。向うにて、

呼び　お入り。

　ト中の舞ひになり、向うより、山名時五郎　衣裳上下大小、梅津掃部元春衣裳上下大小にて出て、

花道へ留る。

宗観　是れは〱梅津掃部元春様、まつた山名時五郎氏連様、見苦しき宗観が住居、能うこそ御入來。

掃部　役目を蒙り尋ね問ふべき仔細あつて、罷り越したる梅津掃部。

時五　その相役として山名時五郎氏連。

宗観　いでお通り下さりませう。

兩人掃部　然らば許し召れ。

ト右鳴物にて兩人舞臺へ來て上手に住ふ。

宗観　してお使者の趣は。

掃部　かく言ふ、梅津掃部使者に參りしは餘の儀にあらず。先達て、義政公より佐々木家へ、預け置かれし浪切丸の一腰、紛失詮議の日限りも百日限り、其日延べも今日に極る。殊更桂之介儀は執權たる其方へ嚴しく預置かれし事。シテ劍のありか相分りしか。有無の返答承らう。

時五　まだ〱夫計りではござらぬ。桂之介儀は是れにござる梅津掃部殿妹御銀杏の前と不義密通、夫れゆゑにこそ御劍の紛失、何んでありかが知れるものか。どうで始終は佐々木の滅亡、桂之

介は逆磔、相手の女も縛り首、その時こそはどいつも、こいつもほえ面かわくを見るやうだ。むゝ、はゝゝゝ、笑止千萬。

掃部　あいや氏連殿お控えなさい。桂之介は兎に角不義の相手は身が妹、縛り首と言はるゝが何ゆゑ妹が御成敗になりまするな。

時五　そりや申さずとも知れた事、其許の妹御を申請うと手前が度び〳〵、言入れしが聞済みなく、桂之介とほれ合つて居るからは、不義と言つたが誤りでござるか。

掃部　こりや珍らしい儀を承つた。成程手前が妹を、貴殿御懇望とは承つたが、此方より進ぜませうとお請申さぬ其内は、夫と定る主なき妹、手討にいたしてよい筋なら、兄たる拙者が仕る。横合ひからいらぬ世話、縛り首の成敗のと、何者が成敗仕るか。

時五　サそれは。

掃部　返答ござるか。

時五　サそれは。

掃部　よも返答はござるまい。シテ宗観殿、紛失の浪切丸詮議の日限も則ち今日、返答は如何でござる。

宗観　如何にも紛失の浪切丸、疾くより拙者手に入れましてござります。

掃部　それは重疊、してその劍は。

宗観　只今御覧に入れまする。

掃部　はてな。

時五　はゝ、老ぼれたる吉岡宗觀、紛失したる浪切丸、再び出よう道理がない。夫れともにせ劍が。

宗観　只今御劍御覧に入れん。やあ〳〵夕浪申附けたる浪切丸、急いで是れへ持参いたせ。

夕浪　畏りました。

ト合方になり、奥より夕浪三寶に九寸五分を載せ持ち來り、

仰せに隨ひ浪切丸の一腰、いざ御披見下さりませう。

ト山名此體を見て、

時五　こりやどうだ浪切丸と思ひの外、三寶腹切刀、あゝ聞えたそんなら未だ劍は出ず、詮方なさの切腹かこりや腹を切るなら其方より、桂之介に腹を切らせろ。血迷ふたか大痴け。

宗観　さ、その主人桂之介儀は。

掃部　問ふに及ばず此家の内を逐電さしたと申すのか。

宗觀　いかにも。

掃部　預り置きたる主人を失ひ、殊に劍のありかも知れず、申わけなき切腹の、誠にかくこそあるべき筈、さはさりながら、佐々木家の忠臣吉岡宗觀、あたら武士を氣の毒千萬。

時五　掃部殿猶豫なさるゝところでない。桂之介を落したる一つ穴の吉岡宗觀、拷問なして白狀させ、桂之介のありかをば。

掃部　はてお急きなさるな氏連殿、劍のありか今もつて分らねば桂之介は天下の科人、取逃がせしは宗觀が誤り、申譯なき此場の切腹、言譯あらば承らん、なゝなんと。

宗觀　こは有難き其お詞、百日の日限りの內、預る主人を取逃せし申譯は、まづ此通り。

ト九寸五分を突立つる。夕浪縋る。

掃部　科人を取逃せし言譯、かうなうては叶はぬ事。さりながら、宗觀が切腹したとて失せたる、劍の出べき謂はれなし、早まつた此生害、此上は義政公へ願ひを立て、此身にかへて劍を詮義し出し、佐々木家を無難に納める身共が寸志、是れを、あの世へ土產として、最期を淸く成佛いたせ。

宗觀　あ、忝い。今改めてお願ひは、年月馴染し老の身の、殊に女の取亂し、未練の別れもあるべ

きところ、流石は武士の、（ト夕浪と顔を見合せ、）一世の別れ、我が亡き跡の諸事萬事、申し殘すは夕浪一人、御推量あつて御兩所共、暫時の間奥の間にて。

ト苦痛のこなし。時五郎是れに目を附け、

時五　やあ、ならぬ〳〵。かすり手の切腹で、われ〳〵に心を許させ、此場を迯げようとはしぶとい老ぼれ、其手はくわぬ、いざ某が介錯なして。

ト立懸ると、

掃部　いや待たれよ山名氏、貴殿の詞一理あれど、あれ見られよ、あの疵口、耆婆遍鵲の療治でも、中々存命思ひも寄らず、息ある内に夫婦の別れを。

時五　でも淺疵の樣子ゆゑ、是非に拙者が。

掃部　はて聞きわけない。もしかすり手と見定められし上からは、手負を預り、本ぷくさせ、劍の詮議おしやるか。

時五　さ、その儀は。

掃部　よも本ぷくはいたすまい。夫にいらざるさゝへ立て、扣えておいやれ。

時五　おうよいわ。宗觀がくたばる上は、言はずと跡は缺所であらう、奥へ參つて諸式の改め。

掃部　末期の際に夫婦の名殘り、猶豫いたすも武士の情け。

夕浪　えゝ忝ひ。

掃部　吉岡宗觀心靜かに。いざ氏連殿。

時五　とは言へ老ぼれ。（ト息込むを、）

掃部　いざ御同道仕らう。

ト唄になり、掃部時五郎奥へ這入る。夕浪思入あつて、後ろの緞帳を引切り、宗觀の疵口を結ぶ。

夕浪　これ宗觀殿、苦痛を堪へて豫ての願ひを。

宗觀　言ふにや及ぶ、面談いたさぬ其内は死なぬ〳〵。やあ〳〵船頭德兵衞はいづれにある。天竺德兵衞早參れ。

德兵　はゝあ。（ト奥より以前の德兵衞出て、）やゝ宗觀樣には御切腹、こりやどうじや。

夕浪　これ德兵衞、知らぬ事とて最前逢うても他人向、宗觀殿はそなたの實の親御にて、産みの母は此夕浪、ようまあ息災で成人してたもつたのう。

ト德兵衞の傍へよるを、

德兵　お待遊ばせ夕浪樣、私を忰だの、いや産みの母ぢやのと合點の行かぬ其詞、殊に宗觀樣は切腹

と言ひ、ア、聞えた夫との別れに血迷ふて、跡方なきその詞、お心慥かにお持ち遊ばせ、夕浪さま。

夕浪　成程合點の行かぬは尤も、元自らは播州產、宗觀殿も浪々の折々、ふとした事にて忍び逢ひ、ほどなうそなたを儲けしが、出世を願ふ身の上とて、飾間五作と言ふ人に、一生不通の子にやりし、その時はまだ三つの年、其後夫の行衞を尋ねさまよふたも八年以前、次第々々に寄る年に、我が子はいづくに居ることかと、こがれ〳〵て今日爰で巡り逢ひしも盡きぬ緣、幼な名は大日丸、何んと覺えがあらうがの。

德兵　成程一々覺えがござります。さりながら別れしは三つの年、よも面體に覺えござりますまい。何をもつて大日丸とは見極められしぞ。

宗觀　おゝそれこそは最前、われが人相を見て、最早命數盡きたりと、見極めたる汝が詞、是れこそ十干の法と號し、某が祕する所の法にして、普く日本に知る者なし、汝成長の後傳へよと、書殘して國を立退く。その書を學ぶ天竺德兵衞、我が死相を敎へしが親子の印、疑念を晴らせよ大日丸。

德兵　はつその仰せ覺えあり、然らば誠の親人なるか。

宗觀　我が子の德兵衞。

德兵　產みの母人。

夕娘　ようまめで居やつたなう。

德兵　えゝお懷しうございます。御切腹は悔んで返らず、さはさりながら年頃の、あなたの大望成就して、嘸本望でございませうがな。

宗觀　やあ心得ぬその一言、今相果つる某に、本望叶ふて滿足とは何をもつて申すのじや。

德兵　お隱しあるな。あなたの胸中さとくも悟りし天竺德兵衞、仔細是れにて申上げん。

宗觀　何んと。

ト肥前節になり、

德兵　義政公より佐々木家へ預け置きたる浪切丸、あなたが密かに奪取り、隱し置いたでござらうがな。

宗觀　やあ默りおらうぞ。御劒紛失いたせしゆゑ、主人に代る此切腹が目に掛らぬか大日丸。

德兵　はゝゝゝ、その切腹が則ち手立、盜んだこなたが盜まぬ顏にて切腹して相果てなば、天下に誰あつてこなたを疑ふ者たけれど、德兵衞許りはその手はくわぬ。劒の盜賊吉岡宗觀、其證據こそ

今目前顯はす不思議は筧の內、聞ゆる蛙の聲々に啼音を尋ぬる口繩の、竹に掛れば五體は忽ち、ちぎれ〳〵、又も這ひ寄る、多くの口繩ちぎれ〳〵に身を亡すは、これ銘劍の德ならずや。蛙の鳴聲は筧の內、善惡邪正は只今拙者が、

トつか〳〵おいて上手の筧を打割る、仕掛けにて箱とれる。竹の中より錦袋入の浪切丸出る。是れを宗觀の前に持ち行き、

是れぞ正しく浪切丸、何と覺えがござらうがな。

宗觀　さとくも察せし悴が才智、今こそ俗性物語らん。（ト唐樂樣な合方になり、）某元來日本の生れならず、朝鮮國王の臣下にて木曾官と言ひし者、國の仇を報ぜんため、日本に渡り義政に近寄りしに運拙なくも見出され館を立退き、習ひ覺えし蟇の妖術、此法を行ひ再び旗上なさんずものと心は千々に碎けども、抑々蟇の妖術は、その國に名を得し銘鏡銘劍を閏月に誕生せし男子の血汐と蛇千疋の血汐を合せたるものにひたし、是れを所持する時は妖術は心の儘なりと傳へらる、これ、（ト懷中より銘鏡を出し、）此鏡の德によつて形を隱し、姿を變へる其術は行ふと云へども、銘鏡銘劍合體なさねば心に任せず、さるに依つて佐々木家に傳はる劍を奪取り、法の如くに血をそゝぎ、鏡と共に揃ひし上は、大望成就と思ふに甲斐なき我が命數、もし家搜しの難

あらんと、筐に隱す此銘劍、此二品を所持なして、我れに代つて謀叛の旗上げ、主の仇父が存念晴らしくれよ、大日丸。

徳兵　驚き入つた物語、今より謀叛を受繼かば、此日本を奪ひとる事、此徳兵衛が手裏にあり、あら悦ばしやなあ。

宗觀　その一言を聞く上は、今こそ授くる我が妖術。

徳兵　すりや妖術お讓り下されんとや。

宗觀　いざ徳兵衛身を淨めて是れへ參れ。

徳兵　はゝつ。

トのつと樣な合方になり、宗觀夕浪に目くばせする。夕浪奥へ入る。宗　ちり手水をなす。徳兵衛上手の筧の水にて身を淨め、ちり手水を遣ひ下手へ住ふ。

宗觀　南無さつたるまぐんたりぎや。

徳兵　南無さつたるまぐんたりぎや。

宗觀　守護聖天。

徳兵　守護聖天。

宗觀　はらいそ。

德兵　はらいそ。

ト印を結ぶ。宗觀此秘文を德兵衞に打附ける。是れにて德兵衞放心する。どろ〳〵になり能き時分に心付き、

授かる所の蟇の妖術、ためしみるには幸ひ、

ト上手の手水鉢の石を碎き持ち來り、

南無さつたるまぐんたりぎや、守護せうでんはらいそ〳〵。

トどろ〳〵になり件の石蟇となる。舞臺を飛び歩く、此體を見て、

かゝる妖術授かる上は、頓て日本を切取つて修羅の妄執晴させ申さん。氣遣ひあるな親人さま。

宗觀　その詞こそ未來の安堵、え忝ひ。

ト此時奥より夕浪出來り、

夕浪　いや〳〵その大望は思ひも寄らず。

德兵　すりや船頭づれの私ゆゑ。

夕浪　どうで及ばぬ其大望、後の歎きを掛んより、國に妻子のあるならば、片時も早う本國に戻つてたも、これ德兵衞どうぞ早う戻つてたも。

ト言へども返答なきゆゑ、

是程言ふに聞きわけないは母を初め、妻子を捨て謀叛に加擔の心よな。其心なら是非がない。此通りを奥の掃部殿へ物語り、母は謀叛の徒黨でないと申譯する、德兵衞そこ退きや。

ト奥へ行かうとすると、

德兵　すりや父の詞を用ゆれば、此場の事を、あの上使へ。

夕浪　言はいでかいやい。

德兵　是非に及ばぬ。

ト德兵衞浪切丸にて夕浪を切る。

夕浪　そちや親を手に掛けたか、適れ出かした、よう切つた。

德兵　やゝ何んと。

夕浪　宗觀どの見られしか、親にも子にも女房にも心引かれぬ倅の德兵衞、適れ謀反の能き大將。

宗觀　おゝ我も滿足、能く切つた。

徳兵　扨ては、心を引き見るためと推察は仕れど、四海を敵とする某故、仕損ずる其時は現在母を木の空へ、其憂きめを見んよりはと、思ひ切つたる不孝の罪。足手纏ひの親はなし、一本立の天竺徳兵衛、雲に隠れ水に入る、妖術奇術は心の儘、あら嬉しや心地よやな。

宗観　えい。（ト正面の欄間へ礫を打つ。是れにて額落ちる。中より甚仙人の畫像出る。宗観夕浪兩人の血潮を付けて、）是れを見よ。朱に染みたる甚仙人の畫像、則ち母と某が血汐をもつて描きたれば、我魂は此畫に止まり、汝と共に本意を達せん。主人と頼む桂之介、落し遣つたは後日にそちが味方にせんため。心憎きは梅津掃部、彼も味方と思へども、一筋繩では行かぬやつ、言ふべき事も早やこれ迄、片時も早く立去れ、悴門途の尊像大事にかけよ。

徳兵　仰せにや及ぶべき、此世の縁は薄くとも、共に天にて再會なさん。お二人様。

宗観　悴堅固で。

夕浪　頓て吉左相。

徳兵　言ふにや及ぶ。

兩人　忝ない。

トタ浪懐劔にて自害、宗観刀を引廻す。徳兵衛思入あつて宗観の首を落す。是れにて切首出す。向う

にて遠寄せを打込む。徳兵衛思入あつて、

徳兵　はて心得ぬ、扨ては梅津掃部が計らひにて此徳兵衛を搦め捕らんず合圖よな。

ト浪切丸を腰にさし、鏡と畫像を懐中なし、宗觀の切首を腰に附け、行きかける。どん〳〵になり、

左右より四天の捕人六人捧を持ち出て、

六人　徳兵衛動くな。

徳兵　何を小癪な。

ト六人懸るを一寸立廻る。此時上下にて、

掃部　天竺徳兵衛、そこ一寸も。

時五　動くまいぞ。

ト六人小六になり。上手より梅津掃部、下手より時五郎肩衣をはねたる裝にて、半弓を持ち出て來り、

掃部　謀反の張本木曾官が一子大日丸、今の其名は天竺徳兵衛、いで兩人が一矢にて、

時五　討つて落さん覺悟なせ。

ト兩人弓矢を引きしぼる。

徳兵　此身に立つべき刃があらうか。守護せうでんはらいそ〳〵。

ト印を結ぶ。どろ〳〵にて兩人の持つたる弓の弦切れて矢折れる。

兩人　むゝ。

徳兵　何と肝が潰れたか。

兩人　者どもそれ。

ト早笛大どろ〳〵にて皆々掛る。徳兵衛印を結ぶ、皆々放心する。此内に家體一時に崩れ掛る。本舞臺一面の大家根、眞中に大蟇、此上に徳兵衛宗觀の切首を持ち立身、皆々平舞臺左右に別れ、乾度見得にて道具納る。

皆々　是れは。

徳兵　我が妖術のなせる業。

ト九字を切る。是れにて六人見事に返　。

掃部　奇異なる此場の。

ト足を踏み出すを木の頭。

時五　妖術じやなあ。

徳兵　へゝはゝゝゝ。

ト大どろ〳〵早笛、𫝶雨眼を開き、口を明け火焔を吹く。捕人鎗を附くる。双方引張の見得にて、

幕

トどん〳〵にてつなぎ、

同裏手水門口の場　本舞臺一面の平舞臺、眞中に一間二重の蹴込み、此上に樋の口、上の方松の立木、上下禰矢來、左右小高き石垣、共の下に下草水布を敷く、總て宗觀邸外水門口の體、爰に以前の磯平拔刀にて、黑四天六人取卷き居る。どん〳〵にて幕明く。

磯平　こりや、うぬらは何とするのだ。

○　何とするとは知れた事、此家の主宗觀こそ、正しく異國の謀反人、

△　その主人たる桂之介が家來の磯平、

□　一味徒黨の片割れと疑ひ掛つた一文奴、

◎　引立來たれと君の嚴命、さあ尋常に、

四人　腕廻せ。

磯平　うぬら寄つたら撫切りだぞ。

○　面倒な、それ。

ト立廻りあつて、とゞ磯平捕人を上手へ追込み這入る。

大ざつま〽夫洛陽の乾なる白川越の山麓に、物好したる宗觀が館も不思議や、妖術に鳴動なして打崩れ、するどき兩眼名鏡の光を放つ有樣は、物凄くも又恐ろしゝ。

ト鳴物になり、花四天八人鍬を持ち出て水門の樋の口へ鍬を突附る。大どろ〳〵にて日くらめき、大べしになり、樋の口より大蟇のさ〳〵出て、あちこち步き捕人一人づゝ鍬を突懸る。術にて五體の自由にならぬ立廻り、銘々あつて悶絕する。此內蟇、口を明く事などよろしくあつて、大どろ〳〵にて花道すつぽんの所まで行き、蟇引拔き天笠德兵衞百日糸だれ、四天の拵へにて、切首を持ちすつくと立上る。舞臺の八人心附き、花道へ息込む。德兵衞印を結ぶ。皆々ポント返る。

德兵　むゝ。（ト笑ふを木の頭。）むゝはゝゝゝ。

ト舞臺を見込むをどろ〳〵にて

ト幕外誂への鳴物になり、六法にて向うへ這入る。あとシャギリ。

幕

大詰　　梅津掃部邸の場

役名　座頭徳市實は天竺徳兵衛、斯波左衛門義照、細川修理之助政元、梅津掃部元春、足輕棒突松平、笹野才藏、梅津の妻葛城、腰元四人、奴鹿藏、奴四人、近習六人、花四天等。

梅津掃部邸の場　本舞臺四間高足の二重、四枚飾りの御簾御殿、正面金襖上手一間斜に塗骨障子家體、眞中に白洲階子、上下網代塀、平舞臺上手に誂への蓮池、本水、人の飛込む事、能き所に秋草を入れし花籠、花車に乗せあり、爰に鹿藏伊達奴の拵へ、是を繻子奴四人取卷いて居る。總て梅津掃部屋敷庭先の模樣、渡り拍子にて幕明く。

鹿藏　こりや、おぬし達は何で此花籠をさゝへるのだ。

○奴　そのさゝえる譯と言ふのは、此頃世上に噂ある、

△　蟇の妖術行ふ曲者、當國に横行なし、

□　やゝともすれば諸家へ入込み、館の樣子伺ふ由、

◎　さるに依つて此の如く、非常を守るわれ／＼四人。

○　誰に斷り庭先へ此花車を、

四人　引込んだ。

鹿藏　是れは又御念の入つた其お咎め、此花車へ秋草を澤山入れて持つて參れと、御主人の仰せを受け、持參なしたる此花籠、それを何ゆゑさゝえるのだ。

四人　さ、それは。

鹿藏　仰せのあつた花籠を、持込む事はならねえか。

四人　さういやいつそ。（ト双方より懸るを留めて、）

鹿藏　こりや鹿藏を何とする。見掛けは吝な奴でも大事の役目の濟む迄は、滅多に此場は動きやあしねえ。

○　夫れはそれとしてやらうが、

△　日頃自慢の劍術やわら、

□　から出合つたを幸ひに、

◎　おら達四人が、

四人　一寸かうして。

鹿藏　何を小癪な。

ト四人繼ひぐるみにて掛る、鹿藏一寸立廻つて見得。此時向うにて

呼び　奥様のお歸り。

鹿藏　なに奥様の、

四人　お歸りとや。

鹿藏　命冥加なやつだなあ。

ト拵える。唄になり向うより奥方葛城、襠衣裳庭下駄花筒へ女郎花を入れたるを持ち、後より腰元四人螢籠を持ち、その次に笹野才造上下衣裳大小にて附添ひ出て、花道にて、

葛城　人の見る事や詫しき女郎花、秋霧にのみ立歸るらん。昔忘れぬ葛城が手づから殿へお慰み。

小菊　奥様御供にて今日は思はぬうさ晴し、

桔梗　野邊の草花いろ〳〵に、啼く音やさしき秋の蟲、

關谷　私ども迄今日は、能き慰みをいたしました。

才造　拙者も同じ道すがら、晝の螢も時の興、雨と變りし打水の、涼しさ添ゆる歩行路の御供、殿様にも嘸お待ち兼ね。

小菊　奥様には先々あれへ、

四人　お越しあられませう。

葛城　皆もおじや。

ト舞臺へ來り葛城腰元は二重、才造は下の方。

鹿藏　奥様には只今お歸りにござりまするか。殿様より仰せつけられし百草の花籠、取り寄せまして

ござります。

小菊　ほんに美事な秋の錦を取揃へ、

桔梗　ても、優しいその花籠、

闘谷　今を盛りに咲添ひし花の數々。

葛城　はてしほらしき草花に、結び付いたるあの短冊。

ト花籠の短冊に目を附ける、

鹿藏　てにはも合はぬ腰折れ歌。

才造　なに下部に似合はぬ鹿藏が一首とや。

葛城　苦しうない是れへ持ちや。

鹿藏　畏りました。

ト鹿藏花車に附し短册を取つて渡す。葛城見て、

葛城　招ぐ蝶、尾花が下の思ひ草。朽なばくちよ袖の雫に。くちなば朽ちよ袖の雫に。

ト花籠へ目を附ける。どろ〳〵になり籠の中よりさしがねの蛇出る。

腰元四人　あれ、口繩が。

奴四人　扨こそ怪しい。（ト立掛るを、）

鹿藏　あいや何も怪しい事はねえ、草を假寢の口繩が、宿りを求めてゐたのであらうよ。

奴四人　御座敷間近く其口繩。

四人　どれ取捨てませう。

葛城　皆控えい。自らは巳の年月日時揃ひし産れゆゑ、やはり其儘。

才造　すりや奧樣には巳の年度お揃ひなされし、

鹿藏　お生れとや。

四人　怪しい花籠。

ト寄らうとするを、鹿藏蛇へ礫を打ち、是れにて蛇消える。

葛城　朽ちなば朽ちよ袖の雫に、はて心ありげな此ありさま。

ト向ふばた〳〵せうぶ革の侍、出て來り、

侍　申上げます。

才造　何事ぢや。

侍　東山家より上使とあつて、細川修理之助政元樣お入りにござります。

ト言ひ捨て引きかへす。

才造　東山殿より上使とな。

葛城　殿樣へ此由を、

腰元四人　畏りました。（ト此時奥にて、）

掃部　聞いた〳〵。

ト奥より掃部羽織衣裳大小にて出て、

笹野才造お出迎ひを、

鹿藏　して私共は。

掃部　部屋へ參つて相待ちおれ。

鹿藏四人　畏りました。

ト鹿藏先に奴四人下手へ這入る。

呼び　御上使。

ト太鼓諸になり、向ふより細川政元長上下小刀にて出て花道にて、

政元　東山殿より上使として、細川修理之助政元、是れ迄參着いたしてござる。

掃部　是れは〳〵政元公には御上使とあつて、俄の御入來、取敢へず梅津掃部元春、

葛城　則ち妾の葛城、

才造　當家の陪臣笹野才造、

掃部　御上使樣にはいざ先是れへ、

皆々　お通り下さりませう。

政元　上使なれば罷り通る、許し召され。

ト舞臺へ來り二重上手へ通る。

掃部　して御上使の趣きは。

政元　東山殿よりの上使。

皆々　はゝつ。(ト管弦になり、)

政元　上使の趣意の儀にあらず、此度佐々木家の騷動執權吉岡宗觀が惡逆にて、浪切丸の一腰奪ひ隱すといへ共、大望滿ずして最期の折から、一子大日丸と言へるもの、世渡る業に船頭天竺德兵衛と變名なし、蟇の妖術を習ひ覺え、父宗觀が謀反をうけ繼ぎ、一國を亡せし天下の大變。しかるところ梅津掃部には内縁あるに付、佐々木の世繼豐若丸を圍ひ置くよし、二つには近頃世上に流布するところの蟇仙人の畫像、梅津掃部歸依なす事、相聞えたれば、いよ〳〵夫れに相違なきや、相糺し歸れよとの上使、掃部どの右二ケ條のお請。

掃部　はつ御上使の趣逐一承知仕つてござる。思ひ寄らざる佐々木家の騷動、豐若丸を圍ひ置きまするは折りを見合はせ、本領安堵の願ひ立て申さんところ、また紛失したる浪切丸の儀は、拙者身命に替えましても詮議仕る心底なれど、蟇仙人の畫像に歸依致すとは、此身にとつて毛頭覺えござりませぬ。

政元　いや〳〵しかといたせし證據もあれば、有體にお請けあれよ。

掃部　こは思ひ寄らざる御疑ひ、申開きは暫時の間、

葛城　御上使樣のお計らひにて、御猶豫を、

才造　われ〳〵共に至るまで。

掃部　願はしう存じまする。（ト此時向うにて、）

足輕　下れ〳〵〳〵下りおろう。

德市　用さあるから通して下せえ。

足輕　下れ〳〵。

德市　上る〳〵。

トてんつゝになり、向うよりせうぶ革袴、股立の足輕棒を突き、後より天竺德兵衞田舍座頭の裝、嫁の袴、淺黄石持の着附け、投頭巾を冠り、木琴を背負ひ、藁草履杖にて出て、花道にて、

足輕　下れと言ふに下らぬかえ。

德市　是れさ、此ふとは判らねえ人だ。後の宿で梅津樣の邸を聞いたら、三丁上れと言ひ申したが、まだ坂を一丁も上り申さぬに、又下れとは、あぜうにもがせうにも理屈が判り申さない。

足輕　是れさ、坂を三丁上る事ではない。此お屋敷は三條通り、上る下ると言ふは都の方角、何でも御所樣の方へ向つて行くのを上ると言ふのだ。

德市　おつと夫れで解せ申した。目のない德には耳で見て、鼻で聞き申すが、こゝは梅津樣のお屋敷

さうでござり申すか。

足輕　さうよ、梅津掃部樣のお屋敷だ。夫れだに依つて通す事はならぬと言ふのだ。

德市　梅津樣のお邸と聞き申しては猶々通らにやなり申さぬ。

足輕　これ〳〵御坊、そんな穢い裝をして、御前へは叶はぬ。用があるなら取次いでやらう。それを言へ〳〵。

德市　いやこんたなぞと話しても判り申さぬ。お殿樣へ直訴しなけりやなり申さぬ。

足輕　さうぬかしやあ猶の事、通す事はならぬ。下れ〳〵。

德市　上ると言ふに上げ申さぬか。

足輕　ぜうの強い、どう盲め。

德市　ぜうの突つ張つた二本棒、上る〳〵。

足輕　下れ〳〵。

德市　上る〳〵。

ト兩人杖と棒にて舞臺を叩きながら、上手へ行かうとする。

足輕　そりやあお泉水だぞ。

徳市　はゝあ、お泉水か、やれおつかねえこんだ。

才造　こりや〳〵下部、是に御上使様もゐらせらるゝに騒々しい、何事ぢや。

足輕　へい御上使様の御入ゆゑ、中の御門を固めおりましたるところ、是れなる田舍座頭が參り、殿樣へ直訴申すと申して、通りますゆゑ、支えましても聞入ず、無理に是迄入込みましてござります。

才造　直訴などとは不屆きやつ、其方の手に合はずば、多勢をもつて追拂へ。

足輕　畏りました。（ト立掛るを、）

掃部　待て〳〵盲人の身をもつて、某に逢ひたしとは何ぞ樣子があるであらう。然し御上使の御前なれば。

政元　いや〳〵某に遠慮はいらぬ、いづくの者か國の話を聞くも一興、是れへ通し召されい。

掃部　こりや下部、盲人を是れへ。

足輕　畏りました。サアおめくお許しが出た、望み通り上つたり〳〵。

徳市　そりやこそな、何ぽ目がなくつても、一番、目とつん出申した。

足輕　こりやあ一番あやま。

徳市　おつと針の療治なら、洗濯なら仕召され。
足輕　御坊は中々洒落をるわえ。
徳市　ちくとんべいやり申す。又もや御意の替らぬ内、上りませう〳〵。
足輕　さあ〳〵上つたり〳〵、そりや段々だぞ。

ト徳市白洲階子をさぐり見て、

徳市　なに段々を上るのか。段々有難いこんだ。これ此ふとや、此草履と杖を仕舞つて置いて下せえ。

ト草履を杖へ通して渡す。

足輕　はゝあ杖に草履か。
徳市　なくさつしやるな。（ト二重へ上り、さくり〳〵二重の下手に住ひ、）是れは殿樣御無禮をいたしました。御免のう蒙ります。
部除　こりや葛城旨人の事ぢや、何事の願ひか聞いて見やれ。
葛城　はつ。これ旨人是れには東山の殿樣より御上使として細川修理之介政元樣も入らせらるゝ、お目通りいたすは其身の仕合せ。何事の願ひなるか、早う申しや。
徳市　ハイみんどもは、越後の國出雲崎の産れでござり申す。外の座頭ば官位を取りに都さあへ登り

申すが、みんどもは官の望みはござり申さぬ。只三絃のう人に教へ申して、諸國を巡り申すが願望でござり申す。此お屋敷にも定めしお姫様がござるべえから、わざ〳〵罷り出で申した。

葛城　こりや與がる法師ではあるわいの。

足輕　何の事だえ、殿様のお目に掛つて直訴の願ひのと、御大さうな熱を吹くから、何の事かと思つたら三味線を彈いて聞かさうとは、本氣の沙汰ぢやあねえ。これおめく都には松崎檢校、粟田法師のと三味線の名人は幾らもある。それに何ぢや、田舎座頭の越後ぶし、本氣の沙汰とは思はれぬ。さあ立て〳〵。

政元　あゝこりや折角是迄參つたもの、越後ぶしも又一興、掃部どの何ぞ盲人に所望いたしては、如何でござる。

掃部　何がなおもてなしと存ずる所、幸ひの越後の盲人。

葛城　御上使様より御意の下りし上からは、何なりとも初めやいのう。

足輕　これお盲、おぬしはとんだ仕合せ者だ。併し越後と言へば新潟三條柏崎、戀の今町寺泊、皆傾城町なれば、何ぞ浮き〳〵することを賴む〳〵。

德市　望まつしやらないでも藝を教へるわしが商賣、まだ〳〵爰に珍らしい物がござります。

ト背負ひし風呂敷の中より木琴を出しよき所へ直す。

政元　異形な形を顯はすもの、シテその名は何と申す。

德市　こりやあお前、日本にある鳴物ではござり申さぬ、唐から渡つた木琴と言ひやすわ。

葛城　こりや珍らしい鳴物ぢやわいな。

掃部　何と御坊、夫れを打つて聞かせてはくれまいか。

德市　お望みなれば、打つてお聞かせ申さうが、わしの爺樣は旨く打ちましたが、わしやあほんの眞似事さ。

政元　いや是非とも所望いたしたい。

才造　御上使の御意なるぞ、少しも早く。

足輕　さあ御坊所望だく。

德市　さらばお聞かせ申さうか。

ト是れより木琴と下座と打合つて、

〽かねて手管とわしや知りながら、口說上手につい惚れ込んで、欺されて咲く室の梅。

ト此文句を繰返してやることあつて、

幾度打つてもこんなものさ。

足輕 やん／＼。（ト大きく譽める。）

政元 珍らしき木琴とやら、却々面白い事であつた。

徳市 わつけもない事が御意に叶ひ申した。はゝゝ。

掃部 此返禮には其方に酒を取らす、腰元ども酒の用意いたせ。

腰元 畏つてござります。（ト腰元入る。）

掃部 こりや下部其方に用事はない、立て／＼。

足輕 はつ、何の事だ馬鹿々々しい。併し木琴と言ふものは、いゝ音がするわえ。カランコロン／＼と音が好い／＼いや音がいゝやあ。

ト足輕捨臺詞にて上手へ這入る。奥より腰元三寶にかわらけ、干肴、長柄の銚子を持ち出て、徳市の前へ置く。

才造 殿様より下し置かるゝ御盃、有難く頂戴いたせ。

ト徳市三寶をさぐり、かわらけを取りて、

徳市　こりや三寶かな、是れで頂戴するかな、頂戴鏡立とはどうぢや。

ト腰元酌をして徳市呑む事、政元思入あつて、

政元　盲人シテその方の名は何と申す。

徳市　わしかな。わしが名は徳市と言ひ申す。

政元　なに徳市と申すか、越後は八ツ房の梅を始め、七不思議あるとの事、きつう繁昌な土地ぢやさうな。

徳市　何さ、何所を歴巡つても都のやうな所はござり申さない。併し他國にござらないは、石灰水の油、妙法寺村の丈七が夜番の火、竹ずつぽうで灯りさあ、取り申す。自體わしやあ船乘でござりますから、何所の船着へも行かない所はござり申さぬが、かう目がなくなつては只鼻でかぐ計りでござり申す、はゝゝゝ。

政元　そりや其方以前は船乘りぢやと申すが、然らば播州高砂の浦船頭天竺徳兵衛を存じおるか。

徳市　え。(と悔りして土器を落す。)是れはまあ麁相を仕ました。

ト手拭で拭ふとする。政元半紙を出して、

政元　いや〳〵苦しうない、是れで拭け〳〵。

徳市　こりやまあ結構さうな紙、勿體ならござります。
政元　いや〳〵そりや反古じや蟇仙人の畫像ぢやて。
徳市　あの是れが。
政元　其畫像では拭はれまい。

ト きつと言ふ、徳市目を明け一寸見て、

徳市　はて蟇とやら畫像とやら、掛構ひのない此座頭、拭いてお目に掛けませう。

ト 拭く事、政元掃部顔見合せ、

掃部　蟇の畫像と聞きながら、
葛城　怖ぢも恐れもせぬ此樣子、
政元　畫像と言ひしはやはり白紙、夫れを存じて居る樣子、盲人そちや見えようがな。
徳市　や。
政元　いやさ兩眼見えぬと申すは僞り、誠眼は明かならん。
徳市　なんと。
掃部　試して見るには、えい。

ト花籠へ礫を打つ、どろ〳〵中より蛇出て徳市の裾に纏ふ。

扨こそ怪しい。

政元　座頭が振舞。

ト徳布二重より飛びおりてきつと見得。

掃部　者共それ。

ト下手より袴股立鉢巻の近習六人、火繩附の鐵砲を持出して、

近習六人　動くな。（ト鐵砲を向け、取り巻く。徳市頭巾を脱ぎ、雨眼見開き、）

徳市　さとくも政元察せしよな。

政元　我が推量に違ひなく、田舍座頭が此場のありさま。

六人　火蓋を切らうか。

徳市　りやうじいたすな。

政元　本名名乘るか。

徳市　さ、それは。

六人　さあ〳〵。

政元　それ打留めえ。

六人　はつ。

ト六人詰寄る。徳市前の泉水へ飛込む。是れにて本鐵砲の音して池より水氣上る。此時向ふ揚幕にて、

呼び　御上使。

六人　なに上使とや。

掃部　者共引け。

六人　はつ。（ト六人下手へ這入る。）

政元　某爰に居合はす內、又候上使は心得す。

掃部　義政公の嚴命にて、胸を痛むる折に臨んで。

葛城　又もや上使入來とは、我が夫のお身の上。

才造　心ならざる此場の樣子。

ト此時又と向うにて、

呼び　上使お入り。

ト掃部葛城出迎ふ。向うより、太鼓謡になり、斯波左衞門長上下小刀、油付蒸手にて出て花道にて、

左衛　武將義政公よりの上使として、斯波左衛門義照。

掃部　御上使とあつて長途の所、御苦勞千萬。

葛城　是れへお通り下さりませ。

左衛　ゆるし召され。

ト鳴物にて舞臺へ來り、二重へ住ふ。

掃部　先刻東山殿より上使とあつて細川政元公、

葛城　御入來ありしに又候や、

才造　わづかの内に二人の御上使、

掃部　一同合點が參りませぬ。

左衛　なに我より先に上使となつて參りしえせ者、打捨置かれぬ詮議もの、そこ一寸も動くまいぞ。

政元　はゝゝゝ、身元怪しき上使の曲者、某を誰ぞと思ふ、九洲の探題細川修理之介政元なるわ。

左衛　某こそは若洲の城主斯波左衛門義照。

政元　そこ一寸も、

兩人　動くまいぞ。

ト両人きつと見得、掃部思入あつて、

掃部　御両所共に先づお待下さりませう。黒白しれざる二人の御上使、返答いたすは拙者一人。何はともあれ上使の趣き一と通り仰せ聞かせられ下さりませう。

ト是れにて左衛門座を改め、

左衛　東山殿より上意。

掃部　はゝつ。（ト管弦になり。）

左衛　上使の趣、餘の儀にあらず。佐々木家へ預け置かれし浪切丸のひと腰、紛失と言ひ、桂之介には同時の家出、きつと曲事たるべき所、梅津掃部詮議の願ひ、武士の情と御感あつて、百日の間詮議の御諚、それに何ぞや今もつて有無の返答なきは曲事、浪切丸を請取参れ、さなきに於ては桂之介が首討つか、梅津掃部切腹なすか、三つに一つの返事を此場に於て承はらん。

掃部　御尤なる三ケ條承知いたしてござりまする。

葛城　浪切丸の出ぬ時は、あなたの御身の一大事、どうして此場でお請けをば。

掃部　あいやお請の儀は今宵初夜迄御猶豫願ひ奉る。

左衛　則答もえゝなるまい。暫時の猶豫は武士の情だ。

政元　情と言へど人を害ふ辯舌は、上使の身共も。

左衛　義政公の上使だぞ。

政元　知れぬで持つた人心。

左衛　善と、

政元　惡との、

左衛　有無の、

政元　返事を、

掃部　後方迄にいたすは口繩、えい、

　　ト掃部花籠へ礫を打つ、さしがねの蛇一疋左衛門に纏ふ。左衛門蛇をつかむ。

　扨こそ怪しい。

葛城　御上使樣には恐れげもなく。

才造　眼前蛇を一つかみ。

左衛　なに是れしきに恐れませうや、身共至つて蛇は好物。

政元　すりやそこ元には其蛇を。

左衛　お志の此小蛇、各々方の見る前で、上使の拙者が一料理。

ト蛇を引裂いて捨てる。

政元　はてな。

左衛　言はゞ下世話のたとへの通り、窮鼠却つて猫を喰む、はゝゝゝ。

掃部　あいや上使の御前へ不淨の蟲類、お請は追つて。

左衛
政元　梅津元春。

掃部　二人の御上使。

政元　きつと返事を。（ト左衛門と顔を見合せるを木の頭。）

左衛　案内しやれ。

ト三人よろしく見得にて

幕

此道具襖を取替へ、池を消し一面に御簾をおろし、調べにて幕明く。

下手より以前の鹿藏窺ひながら出て來り、

鹿藏　最前細川政元公上使として參られたるに、又候後より御上使とはどうも合點が行かぬわえ。

（トどろ〳〵になり、花籠よりさしがねの蛇出て、蛙と争ふ。此體を見て、）是れにて思ひ當りしは己の年月日時、揃ひし女の生血其身にかゝれば、忽ちに蟇の妖術消ゆると聞く、葛城さまこそ己の年度揃ひし生れ、何にもせよ、稀代な事を見るものだなあ。

ト此時御簾の内にて

葛城　世の中の人の心は花染の、移れば變る色に染めけん。

鹿藏　あの聲は葛城樣、殊に依つたらお家のため、こりや一思案せにやならぬ。

ト思入あつて下手へ這入る、是れより獨吟になる。

唄〽いつしかに秋は通して朝氣より初め涼しき雲行の、蟬の羽衣かたしくも、仇にか詫びをまつの戸の。

トよきほどに御簾を捲き上ぐ。内にはぼんぼりを置き、硯箱文臺など、葛城文を書いてゐる。傍に以前の女郎花の花筒へ、さしがねの蝶二羽舞ふて居る。此體を見て、

葛城　世の中に憂きもつらきも身は一つ、今宵に限る望月の空も曇りて晴れぬが謎、それよりいつそ家のため、死んでくれいと只一言、打明け給ふが女夫中、他人がましい謎のお詞、夫がやつぱりお恨みでござりまする。

〽こぼるゝ色に中垣の咲いて嬉しき糸芒。

ト文を書終り、蝶の飛ぶを見て、

蝶の羽風に白粉ならで、一度に散りしは、

ト風の音、以前の短冊、さしがねにて緣先へ落ちる。取上げ見て、

こりや最前鹿藏の讀み歌、朽なばくちよ袖の雫に。袖の雫の泪の種、ふつと見染めた義照様、勤めの身にてあるならば、言ひ寄る事もあるものを、今は任せぬ人目の關、筆に言はせし此玉章、どうぞ屆けたい物じやなあ。

〽夢や覺めけん浮きや世の中。

ト唄の上げ、どろ〳〵後ろの楨田樂にて左衛門義照立身にて出る。葛城顔を見て、

あなたは御上使義照様、いつの間に。

左衛　葛城殿是れにござつたか。

葛城　さしつけました事ながら、ちとあなたへお願ひが。

左衛　して身共へ願ひとは。

葛城　是れ御覧じて下さりませ。

ト口紅の文を出す。

左衛　こりや媚きし玉章を。

葛城　恥しながら妾が拙き水莖も、口に言はれぬほだしの種、せめて不便と思召すなら、仰せ嬉しきお返事を。

左衛　流石に以前は九條の傾城、色を商ひ召されしゆゑ、色で仕掛けて紛失の浪切丸の日延べの願ひか、はゝゝゝ、餘人は知らず此義照、古手な馳走は食べ申さぬ、馬鹿な事を。

ト右の文を返す。

葛城　疑ひあるは無理ならねど、ふつと見染めて恥かしい、心の迷ひやるせなく、筆に誠を明かしても、まだ薄墨のにじみ勝ち、曇りなき身の證據には、夫の身の上あなたの心にありさうなもの。

左衛　すりや夫元春切腹しても。

葛城　何の厭はう、邪魔を拂うて二人して。

左衛　すりや眞實こなたは、

葛城　命に懸けても叶へる願ひ、

左衛　叶はぬ時は。

葛城　此身を捨て、
左衞　證據が見たい。
葛城　その心中は。

ト思入あつて小指を切る。どろ〳〵になり左衞門うつとりとなる。

やゝ血汐に恐るゝ上使の有樣、扨ては違はぬ。

ト葛城懷劍にて切つて掛る。左衞門心附き、葛城を切る。どろ〳〵にて左衞門放心する。ときほどに後ろより政元伺ひ出て此時、つか〳〵と傍へ行く、左衞門の刀へ持紙を當る。是れにて左衞門心附き、兩人よろしく見得あつて政元刀を拭ふ。左衞門鞘へ納めて、

左衞　政元殿。
政元　義照殿、何ゆゑあつて葛城を。
左衞　無禮慮外な女ゆゑ、手討にいたした。
政元　してそこ元の御氣色は。
左衞　別に變りはごさらぬて。
政元　はてな。（ト五つの時計鳴る。）

左衛　ありや約束の。

政元　戌の上刻。（ト此時奥にて、）

掃部　浪切丸の一腰御覧に入れるでござりませう。

兩人　何んと。

ト管絃になり、掃部一腰を三賓に載せ持出て、

掃部　いざ御覧下され。

左衛　すりや浪切丸が手に入りしとな、どれ。

ト左衛門刀に手を掛けるを、政元その手を押へ。

政元　あいや義照どの、先役は此政元、拜見いたした其上で。

左衛　いゝやたとへ先へござらうと、埒のあかぬ長詮議、汝參つて請取り參れと仰せを受けし拙者が是非とも。

政元　いゝや身共が。

左衛　えゝ身共が是非とも。

ト一腰を奪合ふ。箱の中より浪切丸出る。左衛門手早く拔放し、

掃部殿是れが誠の浪切丸でござるかな。

掃部　如何にも千辛萬苦の甲斐あつて、漸々手に入る今日只今。

左衛　はゝゝゝ。目の寄る所へ玉とやら、揃ひも揃つた細川梅津、餘人は兎もあれ、此義照かやうな刀を浪切丸と請取りさうな、上使と思ふか馬鹿な事を。

政元　すりや此一腰は僞物とや。

左衛　知れた事だわ。

掃部　義照殿には。何ゆゑあつて此劍を僞物とは。

左衛　知らずんば申して聞かさう。抑浪切丸の一腰は足利代々の寶劍、尊氏公九洲より兵庫へ著船の砌り、海上風波に逢ひ給ふその時、此太刀に祈誓を掛け、終に軍の勝利となり、夫れより號けて浪切丸、燒刄金色すぐにして銘は則ち來國光、こんな炭かき同然な刀を持つて浪切丸などと、此場をくゞめる梅津掃部ハテ淺薄な。

掃部　詳らかなる劍のお目利、浪切丸の一腰こそ、尊氏公より拜領ありし其砌り、他門は元より代々の家督だに、一世に一度拜する計りを、どうして貴殿は委しくも。

左衛　や。

掃部　御存じでござるな。

左衞　いや是れはかやうでござる。上使に參る其砌り、耳に聞いて口に得る譬への通り。

掃部　よも知つたとは言はれまい、もうよい加減に化の皮を顯してお仕舞ひなされい。

左衞　やあ僞物をもつて上使を詐はる梅津元春、此趣きを言上なし、今にほえ面かわかせ見せう。首を洗つて待つておれ。

ト左衞門二重より下りて花道へ行きかける。遠寄せになり、思入あつて氣を變へ、又行きかける。向うより庇藏四天の裝、鈴を持ち出てきつと見得。

はて心得ぬあの遠寄せ。

ト上手より才造肌脫ぎ鈴を持ち後より花四天八人鈴を持ち出て、突いて掛るを留めて、

一度ならず二度三度、無禮の振舞、扨ては元春言譯けなきの謀反よな。

政元　謀反抔とは事おかしや、斯波左衞門とは僞り、誠は木曾官軍亭凊一子大日丸と見たは僻目か、井の内に住む蛙の妖術、此政元を欺かんとは愚か〳〵。

ト是れにて左衞門つか〳〵と舞臺へ來る。此内花四天左右を圍ふ。

左衞　やあ上使に立ちし左衞門義照、大日丸とは何をもつて。

政元　やあ如何ほど陳じ爭ふ共、疾より察せし其身の素性。

掃部　館の八方取卷たれば、蟻の匍出る所もなし。

才造　最早叶はぬ大日丸、さあ尋常に覺悟なせ。

鹿藏　但しは踏付繩掛けやうか。

左衞　それは。

政元　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵、

掃部　其返答はなゝなんと。

左衞　假令岩石にて取圍むとて、なに、これしきに恐れんや、もう此上は是非に及ばぬ。今こそ父の敎へたる、守護せうでんはらいそ〳〵。

ト印を結べど利かぬ思入あつて、

やゝこりやどうじや。

掃部　やあ愚か〳〵抑も墓の妖術を挫くには、巳の年月日時揃ひし女の生血、其身にかゝれば忽ちに、妖術消ゆると聞き及ぶ。幸ひなるかな妻の葛城、巳の年月揃ひし生れ、不愍なれども彼が

最期に蟇の妖術消失たれば。

鹿藏　もはや遁れぬ大日丸、いで本名を、

皆々　名乘つた〳〵。

左衞　扨ては葛城は巳の年月の生れとや。さは知らずして殘念〳〵。名乘るまじとは思へども、かくなる上は包むに詮なし。名乘つて聞かせう、よつく聞け。（ト肥前ぶしになり、）誠我こそは大明餘障王の臣下、國の仇を報ぜんと此土へ渡りし木會官亭淸が一子、父が謀反をうけ繼いで、天下を望む賊徒の張本大日丸とはおれが事だ。

皆々　扨こそな。

左衞　妖術挫ける上からは、あつて益なき此銘鏡、まつ此通り。

ト鏡を投げ附けんとするを、政元手早くもぎ取り。

政元　銘鏡再び戻らせ給ふか、忝ない。

掃部　まつた、浪切丸を異議なく我へ渡して仕舞へ。

左衞　浪切なぞとは、存ぜぬ知らぬ。

政元　やあ逹つてあらがふ上からは、先刻汝が落せし觀合の印、破却なさうか。

ト懐中より觀合の印を見せる。

左衞　早やまるな。

政元　然らば御寶かへ〳〵に。

左衞　いざ。

政元　いざ〳〵。

ト刀を渡し、小刀にて、

左衞　もう此上は元春觀念。

ト切つてかゝるを、掃部鍔元を捉へ、

掃部　こりや是れ尋ねる浪切丸。

左衞　それを。

ト掛るを、才造鎗にて突いて出て留める。

掃部　二品の寶手に入る上は、此場は見遁す大日丸、只此上は政元公の御推擧にて。

政元　佐々木の家は日ならず再興。最早遁れぬ大日丸、先非を悔んで、

皆々　降參々々。

左衞　やあ降參抔とは事おかしや。假令此場は別るゝとも、又重ねての再會には、

政元　先づ夫迄は大日丸、

左衞　政元元春。

掃部　大日丸、

左衞　かたぐゝさらば。（ト是れよりよろしくあつて、）

東西是れより二番目狂言初まり、左樣に御覽下さりませう。

ト辭儀をする。片シャギリ遠寄せになり、毛氈を掛けたる三段の乘りにて、皆々引張りの見得宜しく、

幕

幡随長兵衛精進俎板

ばんずゐちやうべゑしやうじんまないた

幡隨長兵衛精進爼板

序幕

濱松明神の場

役名　本莊助太夫、白井權八、久下玄蕃、若黨八內、足輕、奴袖內、奴辰平、飛脚善平等。

濱松明神の場　本舞臺三間の間向う淺黄幕、雨覆したる牡丹の花壇、後ろ萩垣、石燈籠飛石、すべて遠州濱松五社明神神職庭先の體、大拍子にて幕明く。

トこゝに本庄助太夫、麻上下、大小、久下玄蕃、野袴、深編笠、羽織、菖蒲革の足輕大尺棒を持ち、仲間二人控へ居る。

足輕　へイ〳〵本莊助太夫樣へ申上げまする。此程鎌倉表を御發足なされたる久下玄蕃樣只今これへお出でゞございます。貴方樣には今日奥方當社へ御參詣のお供と承はり、則ち下郎奴が此所へお伴ひ申しました。

助太　スリヤあなたが久下玄蕃様か。

足輕　左様でござりまする。

玄蕃　イヤナニ本莊氏、久々にてお逢ひ申した。

ト笠を取る。

助太　これは〳〵一別以來、先は御健勝の段祝着に存じまする。

玄蕃　身共態々これまで參つたるは豫ての一條、御上屋敷へ參りし處、奧方の供いたされ當社へと聞き及び、それ故これへ尋ね參つた。

助太　ハテよくもこれ迄お尋ね下された。其許様の御執成をもつて鎌倉表の首尾も調ひ、豫々御内談仕り置きました濱名領地の家國を。（ト思入あつて）コリヤ下部退儀であつた。

足輕　へイ〳〵。

助太　拙者はこれにて申し談ずべき仔細もあれば其方は神職へ參り、御近習方へ申さうには、暫らく暇取りまする間、御前よしなに取り計ひ下さるやうと、申傳へてくりやれ。

足輕　畏りました。左様なら、私にもう御用はござりませぬか。ヤレ〳〵これで今日の御奉公も濟みました。併し奧方様のお供、お出なさるゝ迄は御社内を嚴しう廻りませう。ヘイ〳〵左様な

御免下されませう。どりや廻つて參らう。

ト大拍子になり、足輕仲間下手へ入る。玄蕃思入。

玄蕃　助太夫殿、先達て貴殿身共に談じられたる彼の毒藥の。

助太　アモシ、サ其一藥も、傳を求めて申遣はしてござれども、未だ出來仕らず、さりながら最早使の歸るに程もござりますまい。

玄蕃　その一藥調ひ申せば身共が請取り、鎌倉に殘りある若殿常陸之助に呑ますは此方の胸中にござる。

助太　萬事あなたの計らひを以つて、三老の手前もよしなに、殊更密事を認めおきましたるコレ此密書。

ト手紙を出し、

一藥今にも持參いたさば、密書諸共憚りながら、拙者に同心いたしたる御家中の者へお屆けなされて下さりませ。

玄蕃　其儀は氣遣ひなされな、密書に添へてその一藥。

助太　コレ。

ト四邊へ思入。

玄蕃　密にしかと渡すでござらう。

ト此時向うにて、

辰平　イヽヤ料簡しねえ〳〵。

袖內　料簡しねえと云つてどうするのだ。

ト大拍子になり、袖內仲間にてたんぽ附の稽古槍をかつぎ、辰平仲間にて生醉、破れたる目錄臺を持ち、取り合ひながら出て來り、花道にて、

袖內　これ何するのだ〳〵。

辰平　どうと云つて鎌倉のお客人樣の所へ引摺つて行くのだ。

ト言ひ〳〵本舞臺へ來て、

この折助めが喰ひ醉つて、私が持つて參つたお初穗の目錄臺をば、稽古鑓にて突かゝり、壞しましてござりまする。えい〳〵。

ト助太夫見て驚く。

助太　そちは身が方に居る權八が召使。

袖内　なるほど袖内でござりまする。旦那權八様のお迎ひ、毎日此五社明神へ日參故、今日もこれへ參る道にて、大部屋の仲間衆の無禮のいたし方。

辰平　どこが無禮、汝が喰ひ醉つて目錄臺を臺なしに、えゝい。

袖内　イヽヤ酒は一向飲みませぬ。

助太　默らう下郎め、これなる辰平は大切なるお客人玄蕃様をお見送のお供の者、スリヤおろそかならぬお上の御用、それへ對して慮外いたす不屆者め。

玄蕃　殊に當社へ參詣の初穗の目錄臺、壞せしは第一不吉の身が心懸り。

袖内　イヽヤお旦那助太夫様、何の私が突當つたのではござりませぬ、彼方から此方へ。

辰平　ナニを戯け、慮外をした上うぬが勝手を。

袖内　勝手とは何を。

助太　コリヤやい袖内、控えぬか。

袖内　モウ私に酒を下された譯ではなし。

助太　ハテ扨てこいつが。

袖内　イヤ／＼仲間奉公こそいたせ、武家の扶持を戴きまする袖内、曲つた事は申しませぬ。

助太　ヤイ〳〵おのれ常々から、たとへ無理非道でも權八が申すことは一言にて控える、身が申すことは常からも、聞入れぬ憎い奴のう。

玄蕃　ようござる。助太夫殿構はつしやるな。身も發足の幸先、神詣の目錄臺碎かれては心懸り、身共自身に召連れて濱名殿の屋敷へ歸り、きつと曲事に申附けてみせませう。

袖内　えゝ。（ト悔り思入。）

助太　誠に蛙は口故と固意地者、日頃の不屆、身が家來ながら權八が國元より附添ひ參つたその方故、不憫を加へおけば增長がつて、今更身共が相濟まぬわやい。

玄蕃　ヤイ下郎め。玄蕃が手を卸し、濱名家へ召連れ、きつと成敗、サアうしやあがれ。

ト三味線入の拍子になり、玄蕃袖内を引立て花道へ掛る。向うより白井權八、竹刀しなへを持ち出て來り、中程にて行き合ひ、是れを見て驚き思入。

往還の邪魔するわつぱ奴。其處のけ。

ト行からとする。

權八　ヤそちや家來の袖内。

玄蕃　汝が下部か。

権八　何故にお侍にはこの狼藉。

玄蕃　此奴が慮外。

権八　何か様子は存じませぬが、先づ〳〵。

ト袖内を引分け、押して本舞臺へ來る。

助太　こりや〳〵白井權八ではないか。

権八　貴方は助太夫殿、今日は奥方のお供御苦勞に存じまする。

助太　こりやそれなるは此度江戸よりお登りのお客人。

権八　ナニ貴方が。ハツ。

助太　今日御發足故、當社へ御參詣、お初穗の目録臺をば壞せし不調法、それ故身が樣々と申聞かせしが、常からの片意地。

ト權八思入あつて、

権八　ハ、大切なるお客人樣とあれば、家來が不調法、權八只管お詫申上げまする。

助太　スリヤ下郎が詫を。

権八　ハ、。

助太　なり難い下郎めが詫なれど、まづ其家を齊へんと欲する者は、その身を治むの道理で、本國より附添ひ參りし袖内が事なれば、まづ權八、其方がお詫をいたすがよい。
權八　あの私がお詫びを。
助太　玄蕃殿にはお役柄と申し、大家の御家臣。お詫をいたさうと思へばな、大小を取置いて犬蹲ひに恐入つてお詫を申せ。
辰平　それ〳〵その上にて此仲間の辰平にも頭を下げて、丸裸で踊を舞つて平伏しろ、えゝい。
權八　ヤ。（トむつとする。）
玄蕃　こりややい。それが詫言の種であらう。流石助太夫殿は老功の料簡、出來た〳〵。
袖内　そりや又あんまり。
權八　こりや。
袖内　ぢやと申して餘りなるお詫のしやう。
權八　ハテ扨聞き分のない、大切なるお客人とあるゆゑ、七重の膝を八重に折つてもお詫申すが貴賤の禮儀、それに心のつかぬ無禮者めが。何卒お容しのほど偏に願ひ奉りまする。
助太　さほどに思はゞお客人のお傍へ參り、お足にて踏躪られてお詫を申せ。

権八　サそれは。

助太　但し犬蹲ひか。

権八　サア、サア〳〵。

助太　権八、お詫いたさねばどういたす、助太夫が相濟まぬ。

権八　その儀ばかりは。

助太　出來ぬと申すか。

権八　身不肖ながら私も、武術の家に生れし者。

助太　すりや劍術上達ゆゑならぬと云ふ汝が高慢か。

権八　イヽヤ全く左樣では。

玄蕃　左樣に武術を申立て、過を省みぬものならば、寧そ試しに身共が相手になつてくれうか。

権八　エヽ。

玄蕃　劍術の相手に。

権八　あの私を。

助太　いや〳〵そりや要らぬ事、申さずとも知れてある、鎌倉家の御家風、武術鍛錬の玄蕃樣と。

権八　どういたして私と、中々以つて。

玄蕃　そりやはや此玄蕃は、ぎやつと言ふと武家に生れて弓矢鐵砲槍長刀、刄金の中に育つた身共と権八との試合は、誠に鬼に餓鬼の戯事。併し志が不憫だ。まづ玄蕃が武術鍛錬と謂へば、劍術が關口流で槍術が寶藏院流、馬が大坪、弓が日置流、魂が大將で守護神が魔利支天、誠に鬼に鐵棒だが、餘り劍術々々と申すゆゑ、一試合いたした上、其方が負とならば眞劍でたつた一討。

袖内　エ。

玄蕃　何も驚くことはない。一刀の下に命終るはしれた事、若又千に一つ、いや萬に一つ其方が怪我の勝負に勝つたならば、それを詫の種にして、科を赦してくれう。

権八　すりや何と仰せられまする。此試合に私めが勝ちましたらば。

玄蕃　まぐれあたりに、詫の一埒ゆるして呉れる。

権八　そりや有難うござりまする。

玄蕃　幸ひ汝が持つて參つた竹刀をこれへ。

ト袖内辰平竹刀を直す。

権八　然らば試合の、
玄蕃　一手が百術、
権八　御不足ながら、
玄蕃　竹刀のあしらひ、
権八　冥加に叶ひし、
玄蕃　幸福者め。
ト打つてかゝる。権八止める。立廻り白囃子になる。
権八　こりや中々味をやるわえ。
玄蕃　いや誠に未熟でござりまする。
権八　所を。（ト又見すまし打つて掛る。立廻り三味線の白囃子。）こりや丁稚め、中々出來すわえ。
玄蕃　これではお相手になりませうか。
ト立廻り。
権八　いや實があつて面白いわえ。
玄蕃　左のみでもござりませぬ。

玄蕃　ムウ、こりや助太夫殿の仕込と見えて、一傳流の出精が見ゆるわえ。

權八　ほんの猿が人眞似とやらで御座ります。

トぎつくりとなり立廻りの中、玄蕃危くなる。辰平つかつかと行き、權八へかゝるを、手酷く叩きのけ、玄蕃が持つたる竹刀を打落し權八玄蕃を打たうとする。助太夫權八を突退け、扇にて打すゑる。

袖内　こりや權八樣を。

權八　何故打擲召さるゝな。

助太　何故とはこゝな不調法者めが、大切なるお上のお客人へ對して此疎忽。

權八　デモお聞きの通り試合の一手、勝つたらば慮外の科は赦すとあるお客人のお詞ゆゑ、立合ひましたるは身の科をお詫びのため、それに何ぞや此折檻。

助太　如何に若年なればとて、今の試合を勝つと云ふは、慮外に慮外を重ぬる呆氣、默りをらう。

玄蕃　こりや助太夫殿苦しうござらぬ。丁稚の勝ちはほんの紛れ中り。この玄蕃が負けと、さ言ふは言ふものの、こりや上手の手から水だ。殊に神職の此庭先、こゝの飛石あそこの木の根で躓いたのだ。大行は細瑾を顧みずと、これしきの事大事ない、大事ない。ヤイ權八。

權八　ハツ。

玄蕃　其方の武術に免じ、赦し難き科なれど、赦してくれる。

權八　有難う存じまする。

助太　ハテ幸福者め。

辰平　俺アどうも酔ひが醒めたやうだ。

助太　此場はあなたの御仁心にて、其儘に御用捨下さるのぢや、有難いと思ひおらう。

袖内　有難うござりまする。

ト袖内平伏する。

玄蕃　下郎め、以後の見せしめ。

ト扇にて眉間を打破る。

袖内　コリヤしやつ面へ。

トかゝるを止めて、

權八　お詫が濟めば最早參詣。玄蕃様。

玄蕃　權八とやら。

權八　袖内參れ。

袖内　ムウ。

ト唄になり權八、袖内を伴れて下手へ這入る。玄蕃、助太夫、辰平殘る。合方になり、

玄蕃　助太夫樣、あの者は貴殿の御養子、助市とやらの實の弟でござるかな。

助太　左樣でござる。生れは因州大江の家中、彼が兄めは拙者が養子のあの助市。

玄蕃　すりや共許も權八とは內緣、ハテよい若者を御緣者に持たしやつたな。

助太　イヤもう、それがそれ、片腕にもなる者をと思へども、片意地拗な彼等が親。寂滅させたは彼等が主家より預から備前長光、卽ちこれなるひと腰。（ト腰の太刀を示す。）密かに盜取つたる所、案の如く白井家の滅亡、權八諸共身が厄介なれば、則ち隨身、なんと巧く參つたではござらぬか。

トばた〳〵にて向ふより侍一人出て來り、

侍　ハツ玄蕃樣へ江戶より火急の御狀。

ト書狀を差出す。玄蕃取つて披き見て思入。

玄蕃　こりやこれ江戶より書狀、披見次第身共に立歸れよとの書翰、すりや唯今より出立いたさずばなるまい。

侍　火急な御用ゆゑ早々御歸宅なさるゝ樣、飛脚の口上でござりまする。
玄蕃　然らば左樣いたさずばなるまい。
助太　サある時は渡し申す彼の一藥、只今以て手に入らず、ハテ扨殘念な儀でござりまする。
玄蕃　助太夫殿、其許のためと存じ、今日までは逗留いたし、一藥持參とは存じましたが、此書狀ではもう片時も猶豫はなり申さぬ。
助太　御尤の仰せ、いづれ後より到着次第。
辰平　下郎が殘つて何事も、御用を聞きたいものなれど、奴とても旦那の御供。
玄蕃　只今より出立いたすにもせよ、いづれ天龍川の渡しか池田の泊りと存じますれば。
助太　御旅宿までも持參いたすでござりませう。何を申すも折惡しく奧方のお供先。
玄蕃　跡より屆け召さるゝにも、天龍川は暮六つ限り。
助太　然らば一藥手に入らば、暮六つ限りきつと彼方へ。
玄蕃　相待ち申す本庄氏。
助太　玄蕃殿。
玄蕃　なるべくお早く。

助太　心得申した。

辰平　イザお立ち下されませう。

ト唄になり、玄蕃辰平向うへ皆々入る。助太夫殘り、

助太　ハテあの善平めは何をいたして居るやら、玄蕃殿出立の前方彼の一藥を渡したいものぢやが。あゝこれ心の急かるゝ。

ト向うを見て氣の急く思入。てんつゝになり花道より善平、飛脚にて、狀箱を首にかけすた〳〵と出て來り、助太夫に行當る。

善平　ハイ〳〵御免なされませ、御免なされませ。

助太　ヤイ〳〵、わりや善平ではないか。

ト善平、助太夫を見て、

善平　ヤア貴方はお旦那。

助太　待ちきつて居つたはやい。

善平　左樣でござりませうが。相良表へ參りました所、先樣にても遠方へお出なされてお不在、かねて御調合もござりました樣子では御座れど、何事を申すも大事のお藥故、お歸りの上にて遣は

されましたゆゑ、大きに暇取りました。則ち御狀箱に。

助太　ア、これ一足の事で玄蕃殿へ御渡し申さぬが殘念、退儀であつた。神職方へ參つて休息いたせ。

ト首にかけた狀箱を出す。

善平　それは有難うござります。左樣なら旦那樣。

助太　往け往け。

善平　ヤレ〳〵大汗になつた。

ト善平下手へ這入る。助太夫狀箱をあけ、

助太　ア、これを些とも早く玄蕃殿へ、と云ふて奧方の御歸館なければ罷越されず、ムウ。

と當惑の思入。此時權八鳥居より出かゝり思入あつて、

權八　助太夫樣、まだ奧方は御歸館ではござりませぬか、私はお先へ。

ト行かうとする。

助太　こりや〳〵權八、些と其方に申聞かせねばならぬ事がある。

ト權八戻り、

權八　私に御用とは。

助太　先刻江戸のお客人の手前とて、身共が申した事定めて非道と思つたであらうが、畢竟汝がため、必ず惡う思はぬがよい。

權八　御厚情の助太夫樣、何しに惡う存じませう。殊に助市殿の緣によりますれば、誠に實父とも思ひまする。

助太　然らば其方に申し聞かさう、金打しやれ。

權八　背かぬと言ふ金打見たい。

助太　エヽ。（ト權八思入。）

權八　たとへ非義非道にもいたせ。親に返す詞は御座りませぬ、如何にも拙者が心底。

ト合方になり金打する。

助太　適れなる心底、そちも當社へ日參いたすが、何か望みがあらうがな。

權八　望みと申すは何卒紛失の長光の刀詮議し出し、再び白井の家を立てたい願ひ。

助太　その長光は身が。

權八　ヤ。

助太　イヤサ何を見やれ、あの花壇の牡丹、あれが望みであらうがな。

權八　心得ぬそのお詞、この牡丹が望みであらうとは。

助太　牡丹は花の富貴草、花の富貴は身の富貴。

權八　ヤ。

助太　白井の家を大家に取立て、榮華の上にも家國を押領なさん汝の魂。

權八　ム丶。（トこなし）

助太　見抜いた眼に違ひはあるまい。

權八　スリヤ私が。

助太　思ひ内にあれば色外に表はれるの道理、兼ねて此助太夫が思ひ立ち。江戸にある若殿のお側仕へ、袋井刑部と心を合せ、毒殺なさん手段ぢやはやい。

權八　エ丶。（ト悔りする。）

助太　サア紛失の一腰も身が詮議なさば手に入るは眼のあたり、白井の家も大身に取立てゝの榮華、悴助市には大事は明さぬ。汝が魂見込んだゆゑ、委細を申して身が片腕、荷擔をしやれこりや權八。

權八　すりや助太夫殿には、家國押領の思召、それに荷擔を致せとあつて、武士の誓ひの金打までを、ムウ。

ト思入あつて、

委細畏まつてござりまする。

助太　すりや得心か重疊々々。萬事江戶の方のお取持は則ち久下玄蕃殿、しかし密計の毒藥、相良在にゐる卜庵に調合いたさせ、取りに遣はせしところ、玄蕃殿の御出立の間に合はざるゆゑ、今夜の泊り池田宿まで、奧方御歸館の上、自身參つて何かの密談、天龍川の渡船は暮六つ限り、その六つ限り天龍へ參らねば、毒藥を玄蕃殿へお渡し申す事がならぬ故、甚だ身共心急き、と云ふて奧方御歸館なければ參られず、種々に心を痛め居るわい。

權八　左樣ならば毒藥を暮六つ迄に玄蕃樣へお渡し申すその使は、私が往くでござりませう。

助太　イヤ〳〵汝が荷擔の事、まだ御存知なき玄蕃殿ゆゑ、參つても御承知もあるまい、いづれ身共が奧方の御歸館なされた上にて暮六つ迄に天龍へ。

權八　如何さま御道理。

トこの內以前の善平小蔭にて樣子を立聞く。

助太　まだ〳〵言聞かす事樣々あれどこゝは途中、ナニはしかれ其方荷擔の上からは身共も安堵。誠や唐土に、

善平　義を結んだは桃園、

助太　こゝは牡丹の身の富貴、

善平　それは兄弟、

助太　これは親子、

善平　そんなら毒藥、

トこれにて助太夫拔討にぽんと善平を斬る。權八刀へ思入。助太夫ちやつと隱して、

權八　助太夫樣、

助太　ドレ御歸館を相待たうか。

ト唄になり、助太夫思入あつて下手へ這入る。權八殘る。

權八　日頃より心良からぬ助太夫樣、助市殿の緣により、恩を見せての誓ひの金打。さるにても彼の一腰、ハテナ。

ト思入。落ちたる狀を見て、

ム、袋井刑部殿へ、本庄助太夫。この刑部といふは若殿のお附、すりや江戸にて。（ト悔りして。）ナニ〳〵かねての約束の通り、若殿へ毒薬の儀、首尾よくお計らひなさるべく候。則ち毒薬の儀は、萬事御取持下され候御使者久下玄番殿をお頼み、御届申し候。宜しく御計らひ頼入り候以上。（ト悔りして、）扨てはいよ〳〵若殿を毒殺なさん悪計オ、ほい。彼の毒薬もしも露顕のその時は、助太夫樣は自業自得。さりながらその邪は情けなや助市殿まで思はぬ難儀、品多きその中にも君を毒殺、打捨措いては御家の大事。この事兄者人に申聞けん。

ト　つか〳〵と花道へ行く。七つの鐘鳴る。權八数へて、

ありや七つの鐘、暮六つ迄は僅か一時、奥方の御歸館あらば用なき助太夫樣、兄を庇護ひ權八が、こりやもう一生懸命。

ト　思入あるそぶりにて、寢刃を合はすことあつて、

モウ是非に及ばぬ。

ト　しやんと刃を納める。唄、時の鐘にて道具廻る。

同神職座敷の場　本舞臺三間の間二重舞臺、見附欄干、正面は障子閉切り、内に燈ともしある見得。

すべて神職座敷の體、雨車合方、時の鐘にて道具止まる。

ト向うより若黨八内、箱提灯を持ち、すた〳〵出て來り、よき所にて、

八内　アヽモウ親旦那はお立ちかしらぬ。助市殿をお見送り申して取つて返した神職樣の此座敷、あゝこれ雨が降つて來る。早くお立になればよいが。賴まう〳〵、あゝ挨拶のないは爰はお座敷、こりや勝手口に廻らずばなるまい。

ト合方にて下手へ入る。ト障子内にて、

權八　スリヤ何の樣に申しましても、御承引はござりませぬか。

助太　小癪な事を、若輩者の謂れぬ意見、聞く耳持たぬわ。

權八　何うござつても。

助太　諄いは。

權八　是非に及ばぬ。

助太　おのれ權八、刃向ひだては、親同然の某に。

ト ばた〳〵と音する仕組、燈火消えて障子へ血煙り立つ。障子かへると內に權八、血刀を持ち立身、助太夫の死骸斬倒しある、權八止めを刺し、刀を拭ひ乍ら凝とそれへ見込み思入。捨鐘になり下手よ

り八〻出て來り、

八内　お旦那助太夫樣、是れにお出なさりまするか、〳〵。

ト この聲に權八思入あつて、摺抜けて下手へ入る。

これはしたり、さて〳〵暗いは、助太夫樣助太夫樣。（ト尋ね來り死骸に行當り、科あつて、）ヤ、、、、。コリヤこれ確か重傷の樣子、扨ては今摺違ひしは。（ト行かうとして落ちたる小柄に踏かけ、手早く取って探り見て、）こりや小柄、

トロにくはへ嚴と尻を褰げる、この見得、時の鐘にて道具まはる。

同裏手の場　本舞臺一面の板塀忍返し、見越の松、雨車、時の鐘にて道具とまる。

ト向うより足輕、幕明の形にて棒を突き、箱提灯を提げ、まんぢう笠、安下駄を履き、時廻りにて出で來り、

足輕　ア、降つて來たな、どうやら雷も鳴りさうだ、いやとんだ日和だ。

ト行きかゝる。雷鳴。下手より袖内仲間にて、蛇目の傘、下駄を持ち來る。

袖内　ア、こいつは時ならぬ雷だ。イヤもう雷はきつい嫌いだ。それに就けても權八樣は何處へ御座つたやら。

足輕　火の廻り。
袖内　時廻りの衆か、雷が鳴り出したの。
足輕　サウサ、天龍の方が豪氣に光る。
ト雷鳴に、ばつたり音して板塀より白刀出る。雨六惘りして、
袖内　ソリヤまた光つた。
足輕　ア、桑原〳〵。
袖内　萬歳樂々々々々。
ト傘下駄をよき所へ捨て、耳を抑へて、袖内は一散に向うへはいる。足輕顫ふてゐる。誂への鳴物になり、塀を切抜き權八ずつと出る。足輕これを見て顫ひ居る。
足輕　曲者。
權八　ムウ。（ト白刀を見せる。）
足輕　あゝ桑原々々。（ト思入。）
權八　兄助市の榮えを思ひ、不憫ながらも助太夫自が手にかけて。（ト思入あり。）兄者人に討たれなば、この身の本懷。

ト刀を鞘に納め思入。足輕この中ぶる〳〵して棒を權へ打たうとする。權八この棒を取つて捨て、頷にて知らせる。足輕心得、下駄を直して傘を渡す。權八きつとなる。これより本神樂になり、足輕提灯を持ち、顫えながら先へ立ち、權八傘をさして悠々と向うへ入る。

幕

二幕目　鈴ヶ森の場

役名　幡隨長兵衞、白井權八、飛脚、雲助大勢。

鈴ケ森の場　本舞臺三間の間後ろ一面の黒幕、此前藪疊、上手に大きなる題目の石碑、下手に六十六部の供養塔、此のわきに榎の大樹、所々に松の立木、同釣枝、舞臺前波板。爰に雲助一、二、五合德利を焚火にあぶり茶碗を置き酒を飲んで居る。總て鈴ケ森夜の體、時の鐘、浪の音にて幕明く。

雲一　成る程夜は短くなつた、たつた今暮れたと思つたらモウ東海寺の五つだそうだ。

雲二　あまり仕事がねえによつてさしで呑んで居るも智慧がねえぜ。

雲一　そんなにくやむ事はねえ、今にいゝ鳥を引いて來るだらう。

雲二　それもさうだ、エ、モウ一つかつくらわせ。

ト雨人酒を呑む。禪の勤めになり向うより雲助三出で來り、

雲三　オ、そこに居るなア七に八ぢやアねへか。

雲二　オ、お坊か、なんぞ甘え仕事でもあつたのか。

雲三　さればよ聞いて呉れ、今日かいうふ譯よ、川崎で鎌倉の飛脚だとかいつて見る〳〵から間抜〳〵した野郎が、江戸表への爲替の金三百兩といふものを持つて大師へ參る道筋に、待ち受けて仲間の野郎と立合せて、鱈腹酒に醉はせて他愛もなく寢た所を、胴卷から金を引ずり出しまんまと三百兩こつちへふんだくつたのよ。

一二　そいつアお坊大仕事をやらかしたな。

雲三　イエサその跡をきいてくれ、まんまと引さらつたが持つて居るのは、危ねえものと仲間の野郎へ預け先へ行つて山割と極めてゐた處、その野郎めその金を持つて一目さんに逃げ出し、跡を追つかけたが渡し場の曲り角で見はぐつこ仕舞つた、がモシ爰へうせやアしなかつたか。

雲一　イヤそんなやつは通らなかつた。

雲三　なんとマアとんだ仕事をしたちやアねえか。

二人　ハヽヽヽヽ。

雲二　かうお坊きげん直しにいつぺい引つかけねえか。

雲三　そいつア有難い、お辭儀なしにやつつけやう。

雲一　なんぞいゝ肴がかゝりそうなものだなア。

三人　サア〱がんばれ〱。

ト浪の音になり、向ふより飛脚一人出る、跡より雲助四、五、六ついて出で來り花道にて、

雲四　モシ〱わづかな駄賃だ、此の物騷な鈴ケ森をひとりあるきしようより安くしてのせて行きませう。

飛脚　エヽひつこい、飛脚が駕にのるやうで道中がなるものか。

雲五　成程さうだらうが二本の足で歩くより四本の足でかつがれる方がはかゞ行きますぜ、さう言はずと乘つてくんなせえ。

飛脚　イヤ〱どのやうにすゝめても乘らぬ〱。

雲六　さう言はずと酒手で乘つて呉んなせえ。

ト言ひ乍ら舞臺へ來る。四先へ廻りいゝ鳥だといふこなしする故皆々呑込み、

雲四　十五六丁先から口のすくなる程いつても聞入れねえのよ。
雲一　どうで乘りかゝつたものなら乘つて貰へ。
飛脚　やアひつこい雲助めら、たつてと申さば手は見せぬぞ。
雲一　エヽ氣の長いぶちのめせ〳〵。
皆々　合點だ〳〵。

ト飛脚ふるへ乍ら、

飛脚　さてこそ噂に聞いた鈴ケ森、ドリヤ身拵えして。

ト懷中をさぐりびつくりして、

やア〳〵〳〵大變だ〳〵、三百兩のかわせの金を落した。
皆々　ナニ三百兩。

ト此時雲助三焚火にて飛脚を見て、

雲三　今の咄の金はこいつのよ。

ト飛脚雲助三を見て、

飛脚　うぬはさつき身共に酒を吞ませた坊主だな、そんなら其時。

ト三に掛るを皆々引すえ、

雲三　金はとつても又ものされた。

一二　せめてのはらいせ身ぐるみふんはげ。

皆々　合點だ。

ト飛脚をはだかにする。

飛脚　是はまた情ない。どろぼう〳〵。

ト言ひ乍ら逃げて下手へ入る。皆々顔見合せ。

皆々　大笑ひだ。

ト雲助四飛脚の着物をかきあつめ

雲四　ひつくるめて二朱と一本よ。

雲五　まだこんな狀箱がある。

雲一　なんぞ中にある、あけて見ろ。

雲五　合點だ、こんな手紙ばかりだ。

ト開けて手紙を出す。

雲一　なんぞ仕事になるめえものでもねえ、よんで見ろ。

雲五　無理な事を言つたものだ、是がどうして、俺に讀めるものか。

雲一　さうだツけ、さしづめ和尚の役だ、讀んだり〳〵。

雲三　ドレ〳〵。江戸屋敷御役人衆中鎌倉屋敷役人中。ナニ〳〵飛札を以て申入候、然れば如何の意趣に候や本庄助太夫を討つて立退候曲者は、助太夫の甥、白井兵左衛門悴權八と申す者、此段お届け申し上げ候、尤も右のもの江戸表へ出府仕候間此儀吟味第一に存じ奉り候、此段態々申達候。以上。月日。

ト讀み皆々思入あつて、

雲一　ハヽアそんならその白井といふやつが、叔父の助太夫といふやつを討つたといつて、江戸屋敷へしらせの飛脚だな。

雲四　その權八といふ奴、色白な綺麗な若衆だが顏に似合ねえふてえやつだ。此の手紙の樣子では江戸へふけるに違えはあるめえ。

雲二　さしづめ爰が通り道。

ト雲助六思入あつて、

雲六　まてよ、そんならどぶ六や德が乘せて來て、大森の駿河屋に立つて居た、
雲五　それ〳〵丸に井の字の紋附を着てゐる若衆だが、よもやそれぢアあるめえか。
雲三　ナニ丸に井の字の紋附を着てゐる。
雲五　さうよ。
雲四　それだ〳〵、その權八の定紋が丸に井の字だ。
皆々　そいつア咄せら。
雲三　ア然しあいつアめつぽう腕利きだから、うかつにやアかゝれねえ、何でも仲間の野郎どもを呼んで、大勢かゝつてたゝんで仕舞ふのが一の手だ。
雲一　それがよからう、みんなを呼ぶがいゝ。
雲四　オイ〳〵甘え相談があるから、みんな來い。
皆々　オーイ。

ト上下より雲助七八九出で來り、

雲一　なんぞまうけ口か。
今爰へ、丸に井の字の紋附を着た侍が來るから、そいつを大勢よつてたゝんで仕舞ふのよ。

雲七　そんな事なら氣遣ひなし、先は大勢こつちは一人。

雪四　エヽあわを喰ふな、先は一人こつちは大勢だ。

雲八　定めし御金もずつしり持つてゐるだらう。

雲九　そいつをばらしたら七里の雲助がうらむであらう。

雲一　べらほうめくじらぢやアあるめえし、

雲二　むだを言はずとがんばれ〳〵。

皆々　ドリヤ果報を待たうか。

ト皆々焚火に當り居る。時の鐘、浪の音になり、向うより駿河屋と印したる小田原提灯をつけし駕を雲助十、十一してかつぎ出で來り、舞臺よき所へ駕を下し、

雲十　モシ約束の所まで參りました。

十一　何と早く來たぢやアありませんか。

ト汗をふきなどするこなし、駕の内より權八、大小、着流し、好みの形にて出てあたりを見廻はし、

權八　然らば爰が約束の觀音前と申す所か。

雲十　左樣でござりまする。

権八　ヤレ〳〵退儀であつた、誠に夜中と申し勝手知れざる此道筋、あたりは濱邊のやうぢやな。

十一　左樣でござりまする、晝間見ると安房上總が一と目に見えます。

雲十　どうぞ賃錢をお貰ひ申したうムります。

権八　成る程決めの駄賃は六合とやらより、觀音前迄五百文の處なれど、夜中と申し別段急ぎし故是にて一つ呑みやれ。

ト懷中より二朱出してやる。雲助取つて、

雲十　コリヤモシ二朱かえ。

権八　五百文の決めなれど心を付けて。

十一　たつた二朱か。

雲十　おきやアがれ、二朱や三朱貰はうといつて夜夜中汗をかいて駕をかつぐものが。

ト権八に打付る。

十一　勿體ねえおれが拾つて置かう。

権八　シテどれ程取らうと申すのぢや。

十一　おれ達の駕へ乘れば持つて居る金はありつたけ、

十一　身ぐるみぬいで置いて行け。

權八　ム、さては案内知らぬ獨り旅とあなどつて、うぬらはもの取りな。

兩人　知れた事だ。

ト此時前の雲助一、二、兩人出て留める。

一二　コリヤ待て〳〵。

ト留めるをかまはず權八にかゝるを兩人して留めて追ひちらす、是にて兩人出て來た雲助お互に小隱れする。こなしあつて、

雲一　ヤレ〳〵承はれば、無法の事を申しましてさぞお腹が立ちませうが。

雲二　是がほんのかつたいと棒打とやら、御料簡なされて下さりませ。

權八　是は〳〵各々の挨拶忝ふムる、然し乍ら餘りの法外故。

雲一　サヽ御尤でムります、あいつらは私が又致しやうもムります、まづ〳〵御料簡なされて下さりませ、シテあなたはどれへお通りでムります。

權八　そこ許は所の町人さうなが、是より江戸表へは道のりいか程ムるな。

雲二　江戸表へはモウ二三里ムりまするが是から家續き、マアゆるりとなされませ。

権八　イヤ〳〵夜も更るし殊に不案内の某いそがずばなりますまい、大きに世話であつた。

雲一　マア莨でも呑んでおゐでなされませ。

権八　イヤ〳〵拙者は莨所望で御座らぬ、是はいかい世話であつた。

ト行掛るを立ちふさがり、

雲二　是サ〳〵旅人、人に道を尋ねて禮もせずに通るのか、その上莨を呑めと云へば所望でない、べらぼうめ、莨がまつりに出やアしめし。

雲三　こりやアこちとらを雲助だと思つて此の火で莨を呑むはきたねえといふのか、いやでも、おうでも呑んで貰はう。

権八　是はまた無理を申す男ではないか、こなた衆が雲助やら何ものやら拙者は存ぜぬ、莨は身は嫌ひゆゑ所望でないと申したが何と致した、無法を申すと手は見せぬぞ。

ト柄に手を掛けきつと云ふ。

雲一　コレ〳〵お若いの、お氣の短い只今のやうに申しましたは皆嘘でござりまする。然し流石はお武家様、此鈴ケ森を只お一人お通りなさるは誠に驚き入りました。

雲二　モシお侍物を聞いて只行くやつがあるものか、いくらか爰へ置いて行け。

権八　身共當所の勝手を知らぬが、此の道筋では道を教へて禮物をとると申すか。

雲二　左樣さ。

ト此内權八の紋所を見て、

雲一　そりやこそ丸に井の字だ。

ト是にて皆々左右より出てばた〳〵と取卷く。

皆々　丸に井の字だ〳〵。

權八　マテ〳〵、身どもの紋が丸に井の字なら、其方共は何と致す。

皆々　オヽ、酒手をねだるのだ。

權八　スリヤまたなんで。

雲一　エヽめんだうだ、たゝんで仕舞へ。

皆々　合點だ。

ト禪勤になり、皆々あり合ふものにて打つてかゝる、立廻りあつて、誂への鳴物になり、仕拔の立廻りあつてよろしく雲助の三手を負ひ榎の木の上へはい上る事など、よき時分、向ふよりたれを下した駕をかつぎ出で來り、直ちに舞臺へ來り此體を見てびつくりし、

駕や　ヤア拔いてゐる〳〵。

ト駕をよき所へ置きいつさんに逃げて入る。此内權八は皆々と立廻りあつて切返しとゞめをさす。本釣り鐘合方かわつて權八そろ〳〵と今かついで來りし駕の傍へ來る。此時駕のたれを上げる。内に幡隨院長兵衞好みの拵えにて駕にのりゐる。權八長兵衞の鼻の先へ刀を出す、長兵衞と顔見合はせ權八こなし上手へ行きかゝる。長兵衞思入あつて、

長兵　お若いの、待たつしやりませ。

權八　旅のお方か存ぜねど、待てと仰らるゝは手前の事で厶るか。

長兵　左樣さ、鎌倉方のお屋敷へ多く出入のわしが商賣、それをかこつけありやうは遊山半分、江の島から片瀬へ參る道連れに、どうで泊りは品川と川端からの戻り駕、通りかゝつた鈴ケ森、お若えお方のお手の內、あまり美事と感心して思はず見とれて居ましたが、お氣遣ひは御座りません。マアお刀をお納めなせえまし。

ト駕より出て棒鼻の提灯を持つて權八と入れ替り、上手の松の枝へかける。

權八　こぶしもにぶきなま兵法、お恥しう存じまする。

長兵　お見受け申せばお若いのにはお一人旅で御座りまするか、どれからどれへお通りで厶りまする。

權八　御親切なるそのお尋ね、御覽の通り拙者めは勝手存ぜぬ東路へ中國筋からはる〴〵と暮に及ん

で磯際に一人旅とか侮つて、無禮過言の雲助どもきやつらは正しく追落し、命を取るも殺生と存じたなれど、つけ上り手むかひ致す不敵やつ、刀の穢れと存ずれど往來のものの爲にもと、よん所なくかくの仕合せ、雉も啼かずは討たれまいに益ない事をいたして御座る。

長兵　ハテ大丈夫切られたものは六七人、あなたさまには只お一人御若年のお手の内には感心致して御座りまする、承はれば中國からお下りと申すこと、御生國はいづれにて何の御用で江戸表へ。

権八　別して用事もムらねどまゝしき母の讒により心に思はぬ不孝の汚名。故鄕は即因洲生れ父の勘氣に力なくお江戸は繁華と承り武家奉公を致さんと仕官の望みに習はぬ旅、見受け升れば其許は江戸表のお方と見え御深切なる其お詞、御覧の通り知るべたよりも御座らぬ拙者お詞にあまえおたのみ申す、何卒お世話下さらば忝う存じまする。

長兵　御身の上の一と通り承りまして、事によつたら引受けてお世話致すまいものでもムりませぬが、往來端に犬の餌食。

ト死骸を後の藪疊の蔭へ片付ける事あつて、

口外はいたしませぬ、お氣遣ひなされますな、

権八　流石は江戸氣のそのお詞、爪づく石も緣のはし力と頼むそこ許の御家名聞かぬその先きに、名

乘る拙者が姓名は因州の產にして當時浪人白井權八と申す者。

長兵　スリヤお若いのには權八さまとか。

權八　シテそこ許の御家名は。

長兵　問はれて何の某と名乘る樣な町人でもムりませぬ、然し生れは東路に身は住みなれし墨田川流れ渡りの氣さんじは、江戸で噂の花川戸幡隨院長兵衞といふイヤモごろつき上りの吝な野郎でムります。

權八　スリヤそこもとが中國筋迄、噂の高い長兵衞殿。

長兵　イヤ其中國筋迄噂の高い正眞正銘の長兵衞といふは、私が爲には爺さんに當り鼻の高い幡隨長兵衞、又其次は目玉の大きい私が親仁、其長兵衞だと思ひなさると當が違ふ。イヤ大違ひだ〳〵。尤も今いふ目玉の大きい長兵衞の由緣にやア違えねえが、私は尻から三番目の夜喰のかたなと何の役にも立たぬうどの大木、併し弱いものならよんで通し強いやつなら向う面を韋駄天が革羽織で鬼鹿毛に乘つて來やうともびく共するのぢやア御座いません、及ばずながらたてしのはしくれ、いはゞ烏は浪華がた藪鶯は京育ち、吉原雀を羽げへにつけ江戸で男と立てられた男の中の男一疋、何時でも尋ねてごぜえやせ、蔭膳すえて待つて居やさア。

権八　御深切なる其のお詞、然らばお世話下されて萬事よしなに長兵衛どの。

長兵　よろしうごぜえやす、斯ううけやつた上からは親船に乘つた氣で落付いてお出でなせいやし。

権八　何から何迄御禮は詞に。

長兵　ナニちつとやそつと世話をしたとて、恩にきせるのぢやアねえ、そこは江戸ツ子だ、サア來なせえ。

ト提灯を持ち長兵衛行き掛る。此時權八手紙を拾ひ開き見て、

権八　飛札をもつて申入候、然れば如何の意趣に候や本庄助太夫を討つて立退候曲者は。（ト權八讀みて手紙を隱す。長兵衛思入あつて手紙を受取り後を讀み、）

長兵　助太夫の甥、白井兵右左衛門の倅權八と申す者、此段お屆け申し上げ候、尤も右の者江戸表へ出府仕候間此儀御吟味第一に奉存候、此段態々申達し候、以上。ム、權八さんの苗字もたしか。

権八　エ。（トぎつくり思入。長兵衛提灯の火にて手紙を燒きすて、）

長兵　ナニ是でなんにも白井氏。

権八　武士も及ばぬ。（ト人影を見て、）

長兵　水にうつりし人影は。

權八　エイ。

ト下手の榎へ礫を打ち、是にて雲助九飛び下り、

雲九　權八、うぬを。

ト掛るをねぢ上げ、

長兵　それも正しく、

權八　きやつらが同類。（ト拔打にきる。）

長兵　イヤ適れ手の內。

權八　長兵衞どの、

長兵　權八さん、

權八　ゆるりと江戸で、

ト顏見合せ長兵衞たゝみし合羽を肩へかける、權八刄を引く、雲介見事に返るを木の頭。

兩人　逢ひませう。

ト此の模樣よろしく、

拍子幕

三幕目

新吉原の場
大音寺堤の場

役名　寺西閑心、絹賣彌一、極樂重三、俳諧師我笑、奴土手助、早物半助、湯灌場仁右衞門、石塔六助、骸骨仁藏、長兵衞悴長松、若黨八內、白井權八、幇間五丁、禿みどり、たより、仲居お由、藝者春、かん。傾城小紫等。

新吉原の場　本舞臺三間の間、二重舞臺、向う襖、一文字庇附軒暖簾、下の方揚縁、青簾、井筒屋と云ふ掛行燈、すべて仲の町七軒茶屋の體。爰に幇間五丁、仲居お由、兩人枕拍子を取つて藝者かん、禿たより、同じくみどり、三味線を彈いてゐる此唄にて幕明く。

ト上下双方より女郎買の仕出、大勢來り行違ふ。此人數捨臺詞にて左右へ分れて入る。舞臺の拍子よろしくあつて五丁枕を取落す。

禿 藝者　ソレ五丁さんが負け〳〵。

お由　サア一つ飲みなさんせ。

五丁　今のは俺が眞の負けだと思ふか。
四人　知れた事いなあ。
五丁　今の負はうそ負、有樣は一つ飲みたいから、わざと負けてやつたのだ。
たよ　皆さん、あの負けおしみを聞きなさんせ。
お由　憎い事云ふてぢやなあ。
みど　そんならお酒は飲まさぬぞえ。
五丁　酒を飲ませねば此枕をかうやつて。
四人　どうするのぢやえ。
五丁　閑心樣のお出でまで、一寢入りやるのさ。

ト寐る眞似する。

四人　そりやならぬわいな。
五丁　あやまつた〱。（ト向うを見て、）あれ〱向うへ閑心樣。
みど　此糸さんも連立つて、
四人　おゝい〱。

ト合方になり、向うより若い者、大紋提灯を持ち、此糸、禿二人附添ひ、後より寺西閑心、五十日羽織衣裳、白柄の大小、下駄がけ、仲間土手助草履を持ち、石塔六助、骸骨仁藏、湯灌場仁右衛門、早取半助、着流白柄の一本差、誂への丹前仕立の羽織を肩にかけ、香盒香爐など銘々持ち、俳諧師我笑附添ひ出て來る。極樂重三着流し一本差、後より絹買彌一、着附羽織雪踏にて風呂敷を背負ひ、見物の心にてうろ／＼と出て來り、皆々花道に止る。

閑心　一双の玉手、千人の枕、此不夜城の三千の櫻花、その頃の發句にも、闇の夜は吉原ばかり月夜かな、とは三十日の月もあればあるもの。

土手　そこで四角な卵の君へ、通ふ御供にて若葉土手助。

半助　俺がお頭閑心樣のお召かへ、よしや男の丹前羽織、

仁藏　東木といふ名香を、炷しめさせて福香の、光もゆかしきお召物、

仙藏　男を研く内看板の仁右衛門と云ふかすり取り。

六助　おらあ何にも白柄組、名も白柄の六助と云ふめでたい男。

此糸　傾城の賢な柳のいとしらしい、男の肌もまだ知らぬ、

みど　禿は綠、二葉より、

たよ　花は紅色見草。

我笑　その大盡のお髭の塵、とつて千句の秀逸は、大佛の髭のあたりが若葉かな。

重三　見かけは悋な野郎でも、肝の大きな山の宿、出入が來れば待乳山、山谷の船に積込んで、橋場はしたの喧嘩でも、咲かせて見せる花川戸。

土手　この野郎め、癡言ぬかすと擲き碎くぞ。

此糸　ハテ奴さん、よいわいな。

五丁　是れはお早い閑心樣、大門から連立つて、揚屋入の此糸さん。

みど　聞えたわいな、此糸さんの取持ちで、お咄がはつて、

たよ　それで皆さん打連れて、

お由　一緒にお入りでございまするな。

かん　マア〳〵爰へ、

閑心　若い者共、

四人　ございませ。

ト[illegible]捨になり、皆々本舞臺へ來り、床几にかゝる。絹賣彌一けずつと下の方にゐる。

閑心　誠や長生殿の不老門たる此廓、今宵も降るゝ花の雨、乾す方もなき袂と思へば若い者ども一つ飲まうではあるまいか。

半助　コリヤお頭の言ふ通り、酒と討死と、

四人　出かけませうかえ。

我笑　酒と討死なら我等が先驅けして高名手柄がいたしたい。時に花魁のお顏が見えぬが。

此糸　ホンニ花魁、小紫さん。

皆々　閑心さんが御座んしたぞえ。

ト奥にて、

小紫　ハテせはしない、今行くわいな。

ト合方になり、暖簾口より小紫、傾城の扮裝　禿二人莨盆、長煙管持ち、附添ひ出て、眞中の床几にかゝる。

小紫　閑心さん、花魁がござんしたぞえ。

此糸　座敷がぐつと浮いて來たてな。

小紫　申し閑心さん、あれ程私が譯言ふに、情も氣根に通はしやんすなあ。

此糸　そんなら私がどのやうに頼んでも。

小紫　否と云ふより外に返事はないわいな。

閑心　あはれ蚊が耳の端で、ぶん〳〵と喧しい、蚊遣に伽羅でも炷きやれな。

六助　アイ。

彌一　なるほど偉い、小紫さん、貴方にお目にかゝりたさに。

ト そこへ出る。

半助　やい〳〵在郷め。

彌一　わしが事かえ。

仁右　そこへ出ろ。

ト大きな聲にて云ふ。

彌一　へイ〳〵。（ト悄りして坐る。）

半助　お頭の御執心の小紫殿に、指でもさすと、奥さまの罰があたるぞ。

彌一　ハテお女郎は賣物、買生得上州の絹賣彌一といふ者、金にかけたら此通りなれど、

ト一寸金財布を取出して、

あの様に怖い男の權柄では、心のたけの小紫殿、もうお女郎買はよしませうわいな。

ト行からとする。紫小思入あつて、

小紫　ハテよう御座んす。情を商ふ流れの身なれば、心意氣で賣る事もござんせう。怖い事はないほどに、マア煙草でも呑ましやんせいな。

ト煙草を吸付けて出す。禿煙管を取つて、

禿　おいらんので御座んすよ。

ト煙管を差出す。彌一取つて、

彌一　これは忝ない。

我笑　ハテ花魁の意氣地といふものは又格別、傾城の親見よがしの鴛鴦と閨、とは蕉門の骨髓ぢやなあ、しかし旦那、どうやらあれでは。

閑心　ハテ小紫がいやといはうが、根引にすれば閨の花、そこが白柄組の達前だわ。

重三　イヤ白柄組の閑心殿とやら、外に人もないやうに云はつしやるが、こゝにも一人達衆の端くれ、お江戸はえぬき日本橋、土一升に錦升が、子分となつた極樂重三、面を見知つて貰ひませう。

土手　此奴は大分に大束附木と出たが、お旦那に逢ふてきつきと吼えるなよ、どれ近附に土手助がにぎり拳をやるべいか。

ト つか〳〵と來て重三を捉へる。

重三　この二合半め。（ト取つて投げる。）

土手　あいたゝゝゝ、痛いぞ〳〵。

閑心　ウヌ身共が家來を。

重三　投げたが何うした、二本差であらうが、喧嘩といつちやあ五分でも退かない、これが江戸の侠伊達。

ト彌一肝を潰し、

彌一　ハテお江戸の衆は手荒なことを。（ト彌一驚いて入る。）

土手　ウヌ野郎め。（ト又かゝる。）

閑心　こりや土手助、捨てゝ措け。

土手　デモ腦天が痛くつて。

我笑　かうもあらうか、卯月時てつぺん痛む郭公。

みど　なるほど俳人さんぢやなあ。

我笑　ドレ醫者樣がはりに介抱してやらうか。

ト合方になり、我笑土手助を伴れて奥へ入る。空に月出で郭公鳴く。

閑心　一聲は月が啼いたか郭公、あれを肴にどれ一つ。

五丁　それがよろしうござりませう。

女皆々　サア閑心樣、一つ呑ましやんせいな。

ト閑心盃を取上げる、禿みどり酌する。

閑心　ナント小紫、今啼いた鳥は郭公、初音は何と面白いか。

小紫　アイ珍らしい郭公ぢやから、聞事でござんすわいな。

閑心　其郭公も初音の時はよけれども、西も東も耳やかましく聞えては物がない。初めは啼く音も賞美すれど、八千八聲啼きつくし、血を吐く思ひをしらすだけ。されば俳句に、啼きつゞけに啼け郭公々々、人間も丁度その通り、血を吐く思ひのない中に、覺悟が大事。

ト小紫思入あつて、

小紫　加茂川に放して見たき都鳥、あゝまゝにならぬものぢや。ナア閑心さん、私をあてつけて鳥や

鱇の譬、身請々々を口癖に言はしやんしても、たとへ郭公でも鰹でも、まさかの時は死ぬる覺悟、命を捨つるとさへ思ふてゐれば、別に驚くことはござんせぬ。

閑心　ナント。

小紫　死骸を身請けする氣なら、アイお心まかせ。

閑心　ヤ。

小紫　啼きつゞけに啼け郭公々々々。

閑心　エヽ汝はなあ。

小紫　子供、來や。

禿　アイ〳〵。

ト淸搔になり、小紫先に禿ついて奥へ這入る。

皆　あきれたものだ。

此糸　張と意氣地の吉原に、今全盛の小紫さん。

みど　氣隨も廓の道具かいな。

閑心　小紫が我儘も、道は江戸の水育ち。

重三　江戸者のはえぬき。

閑心　この閑心が近附の盃くれう。

重三　あの俺にかえ。

ト閑心盃を取上ぐる。閑心重三へ盃を打ちつける。盃微塵に破れ、重三思入。

コリヤ近附きの盃を。

女皆々　あの樣に破らしやんしたは。

閑心　閑心が盃取上げて一つ飲め。

四人　よもやそれでは飲まれまい。

重三　横に車、牽れぬ此場の難題の盃、受けぬも重三が恥辱、

四人　飲まねば濟さぬ白柄組、

重三　とは云へ碎けし、

四人　盃受けぬか。

重三　サアそれは、

四人　サア〳〵。

ト重三きつと思入。空を見て、

重三　ムウ。（ト肥前節になる。）

〽水の面に照る月波を數ふれば、庭の面今照る月を。

ト鉢肴を取つて、

此鉢へ一つ注いで下され。

みど　アイ。（ト銚子を取つて酒を注ぐ。重三一口飲んで閑心に廻す。）

重三　微塵にわつた盃の返盃。

閑心　碎いて捨てし盃のその難題に、鉢肴を極樂重三が返盃とは。

重三　受けたる酒に映つる月、所も直さず此盃、心の返盃閑心殿、一つ受けずばなるまいが。

閑心　酒に映りし空の月、譬の盃納めてくれん。

重三　そんなら肴に一寸。

ト閑心へ斬懸ける。立廻りにて閑心懷より一卷落す。重三見て、

この一卷は。

四人　ウヌお頭に慮外千萬。

ト四人かゝる。立廻り重三しやんととめる。

重三　こなさん達に近付にならうか。こんなものかえ。

四人　何を野郎め。

重三　その息の根が止まつたら。

閑心　ナント。

重三　引取る旦那の寺西殿。

閑心　膳を据えるは奥の間で、

重三　箸を取るぞよ。

閑心　ゆるりと馳走に、

重三　預りませう、閑心殿。

閑三　極樂重三。

六助　ウヌ。（トかゝるを重三投げて、）

重三　さらばでごんす。（ト唄になり、重三奥へ這入る。）

四人　モシお頭。

閑心　これから身共が一思案、是非とも小紫が身請の一埒

半助　さうさへなればお頭の、

四人　いよ〳〵奥様、御新造様。

閑心　エ、おだてるな〳〵。

四人　それでも嘘ぢやなし。

閑心　さうせう爲の通ふ神、身請の門に鋲乘物、

四人　その御祝儀にめでた酒、

閑心　奥でわつさり、

四人　そんならお頭、

閑心　サア來やれ。

ト淸搔になり、閑心先にみな〳〵奥へはいる。引違ひに我笑すこし醉ひたる科にて出て來り、

我笑　土手助が腰骨を洗ふてやらうと、燒酎をがぶりとやつたら、豪氣に醉ふた、燒酎で虎の泪や千鳥足、アよく叶ふた句だ。

トよろ〳〵して行からとする。この内下手より謝一出て來て、

彌一　まうし〳〵。

我笑　ヱ此方人の事かえ。

彌一　いえ〳〵。（トかぶり振つて知らぬふりでゐる。）

我笑　玉句があらばお附けなさい、執筆いかゞで御座るな。

ト次行からとする。

彌一　イヤ〳〵申し。

ト云ひ兼ねて、どうせうかと思入。

我笑　ハテきつい繩張な。

彌一　ヤ俳諧師とやら樣。

我笑　お句があるかな。

彌一　アイ申し兼ねましたが、此方を見かけお願ひが御座ります。

ト風呂敷包を卸す。

我笑　俳諧師を見かけてお願ひとは、賀の句か、但し入句の御相談か、神祇か釋教か戀のお句かな。

彌一　なる程御推量の通り、其戀故に御覽じませ、並々に月代さへも剃らぬ戀煩ひでござる。

我笑　エヽ。(ト悔りする。合方、彌一手拭を取る、長[illegible]の氣。) ハテ何處も同じ戀の世界、シテ先の女は娘か後家か、月圍ひの藝者か、傾城ならば何も戀煩ひにもなるまいに。

彌一　サア其傾城も傾城、三浦屋の小紫といふ美しいお女郎。

我笑　そんならあの花魁に。

彌一　恥しい事ながら惚れました。

我笑　それを何も戀病にする事があるものか、金さへ出せば三つ蒲團の上で、抱いて寢られる事だわな。

彌一　されば何時しかふつと此正月、仲の町の道中と聞いたによつて、どう鞋がけで歩くことかと思ふたら、揚貴妃とやらの樣子、美しい顔で錦襴とやら繻とやらの着物で歩く姿、中にも紫の衣裳を着やはつたお女郎、見るから直に惚れたとこそいへ〳〵、あの女郎の名は何といふと聞けば、三浦屋の小紫と、耳へ入るより恍惚と、跡を慕ふてあちこちする間に、其夜もはや引四つ、又來る月も吉原へ密と來てから、どうぞあのお女郎を買ふて見たいと商ひの、細い利分を少しづゝ、段々と溜めた金、先刻にも見せた二百兩。(ト財布を出し金を見せて。) ア、何卒小紫殿を買ひたいと、思ひ思ふて來て見ても、何にも知らぬ田舍者、サテうか〳〵と身は空

蟬の絹賣風情、見れば此方は廓の案内詳しい様子、あの小紫をお世話にて買はして下され、コレ頼みます。

ト手を突いて頼む。我笑横手を拍つて、

我笑　したり、戀病に巻紙はそる秋の暮、とあるは今ぞ發明いたした、シタが女郎買は兎角金次第。

彌一　サ其金次第は合點なれど、一向不案内の事故、此方の御指南を受けられますまいか。

我笑　それは隨分世の中の滑稽を渡世にいたす俳諧師の事で御座れば、承知の助〳〵。

彌一　その承知の助と申す人も、傾城買に要る人で御座るかな。

我笑　イヤ是れは廓の洒落で、合點だといふ事を承知の助と申す、とかく傍の人も承知でなければならぬ、茶屋揚屋の若い者、女共へ心附が肝心〳〵。

彌一　その心附も隨分合點。

我笑　それそこが承知の助〳〵。

彌一　心づけ承知の助〳〵。（ト何か考へる科、我笑奥へ向ひ。）

我笑　サアお客だよ〳〵。

女皆々　アイ〳〵。（ト禿みどり、仲居お由、藝者かん。幇間五丁出て來り）

五丁　宗匠さん、お客とは〳〵。

我笑　それお客は主だ。

みど　あの人は先刻に関心さんが、

お由　邪魔にさんした田舍の衆。

かん　あれがお客かえ。

五丁　モシ難かしさうだぞえ。（ト金の仕方する。）

我笑　コレ愚老が承知の助〳〵。

ト こなし、皆々に呑込ませる。この中彌一風呂敷包より反物夏八いろ〳〵出して、

彌一　俺はこの宗匠さんのお世話で、小紫殿を買ふ者。固より上州者でござれば、持合せたる此反物は上州織の出來のよい太織一反。

ト みどりの前へ持ち行く。

みど　この太織はお由さん。寢間着物でござんすなあ。

お由　さやうさ。（ト笑ふ。）

彌一　こなたは沼田莨、男衆には斜子の帶地。（ト銘々ならべる。）

お由　わたしや莨は嫌ぢや、男帶でもよい、半襟にするから五丁さん取替へてよ。

五丁　いえそれは私が名指、シタガ上州斜子とはちとあやまる。

ト言はうとする。

彌一　どうぞしましたか。

五丁　あんまりお心がつかれて、

皆々　嬉しいなあ。

彌一　扨て宗匠樣は派手に誂織の上州八丈。

ト反物を出す。我笑取つて、

我笑　是れは本八と思ひ外、上八とは白木屋の手代で、チトにたいでは御座らぬか。

彌一　イヤ二分はいたさぬ。それで二十三四匁の八丈で御座る。

我笑　チト此邊には好き嫌ひが御座りまするな。

ト不承無精に八丈を取る。

彌一　時に女郎買の御指南はな。

我笑　まづ其長髪を剃つて、くこ梳きのちよい束ね、仲の町の井筒屋へずつと上ると、内から女郎や若い者が、

五丁　申し旦那、ようお出なされました、

みど　それお客ぢや、お莨盆、

お由　あい〳〵あい。（ト皆々立つて仕方をする。）

我笑　あの樣に大層に囃し上げるが、どうだえ〳〵。

ト彌一悦び、

彌一　それははや面白い事でござらう。

みど　それからは、藝者を聞きにやると、三味線箱をずいと持たせて、

お由　から藝者衆が參つて、よくお出なさんした、

我笑　あの通りお定まりの挨拶があつて、調子を合せて彈くと、それから、

みど　外に男の藝者衆が、二組も三組も來て大騷ぎ、

五丁　約束の見立迎ひで、初會から花魁が仲の町へ八文字で來向あると、味な心になる奴さ。

ト仕方にてする。彌一思入あつて、

彌一　さうであらう〳〵。

我笑　そこで褄をひらりとして、店へ腰をかけ、おかさん此間はとたつた一口、つんとして其日許口許の可愛らしいおいらんと一つ寝するとは。

ト彌一の顏を見て、

彌一　この樣に上州太織の形では惡い。下着は本八丈、島ちり小紋ちり、いづれもごり〳〵物の意氣な奴、花魁買のことなれば、羽織は二重の黒仕立、帶は博多、銀煙管、越革の莨入、沼田でなしに本薩摩の、國府でスツトやに下り、（ト一つ〳〵仕方して）それから揚屋入、大騷ぎの上、座敷は引いて、二つ蒲團の中で大ぎまり。

我笑　そこは言ふに言はれぬ命とり。

彌一　そこでどうするのぢやな。

我笑　なる程合點承知の助〳〵。

彌一　時に暫らく寢しづまると、憎や鷄鳴きぬ〳〵の別れ。

みど　そんなら私が、花魁へ一寸知らして、

彌一　小紫殿にあはれることならば、たとへ此身は。

ト思入あつてじつとなる。

我笑　それさへ委細合點で、

彌一　ハテ教はつて承知の助〳〵。

皆々　ハヽヽヽ。

我笑　サア御座りませ。

ト唄になり、皆々奥へ這入る。チヨン〳〵にて、

三浦屋奥座敷の場　本舞臺正面二間の二重、丸太柱、大和葺の庇、石の手水鉢、鉢前下草、四つ目垣、下の方へ反橋をかけ二階へ通ふ、九尺の二階、障子開閉、建仁寺垣の蹴込、奥座敷の正面違棚、ここに風呂を飾り、小紫、馬盥に杜若を活けてゐる、禿二人附添ひゐる、靜かなる唄にて道具とまる。

ト咲きまぜの杜若を活けよき所へ直す。禿水を入れる。小紫こなしあつて、

小紫　昔女兄弟住めり、杜若それは三河路、水の流れの身盛りなきは、まあ眞に果敢ないものぢやなあ。

ト合方になり、奥より秀みどり彌一を伴れ、我笑ついて出て來り、

我笑　おいらん、先刻お前に話したは、主でござります。

小紫　ほんに情のあるお客さん、近附になつて下さんせ。

我笑　ソレ挨拶を。

彌一　オツト承知の助〳〵。

ト言ひ小紫に顔見合せ俯く。

小紫　彌一さんとやら、何かの樣子は聞きました。あんまりお前の深切に、惚れて〳〵惚れたわいなあ。

彌一　ヤア、。（ト惘り、）そりや眞實に、（ト小紫を見て、）小紫殿、忝ない〳〵。

我笑　こいつは飛んだ事になつたわえ。

彌一　宗匠樣の働き、忝なうござる、小紫殿、早く寢て下されい。

ト小紫の手を取つて立たうとする、五つの鐘になる。

五丁　あれは觀音の五つでござりませう。今うつ鐘は。

彌一　エ、。

みど　五つを聞いて、なぜ驚かしやんす。
彌一　今うつ鐘は初夜の鐘、諸行無常を告げると云へば、何やらものの。

ト言ひ〳〵寒氣立ちたる科にて身を震ひ、

小紫　まうし痛うお前は震はんすが、寒氣でもするのかえ。
彌一　こりや病氣では御座らぬ。
みど　でも其樣に震はんすもの。
彌一　こりや小紫殿を戀風ぢや。
小紫　エ、、
彌一　これ皆の衆、ちと折入つて話したい事があるわ、暫らくこゝを。
五丁　なる程こりや心づきませなんだ。
みど　そんなら奥へいてゐますぞえ。
我笑　テモあやかり者奴が。

ト唄になり、我笑、みどり、五丁ついて奥へ這入る。彌一思入あつて、

彌一　これ小紫殿、樣子を聞いた其上で、私に眞實惚れたのでは御座らぬか。此度の江戸出は先月

の十九日、此方の顔を見るより、忽ちぞつと戀風が身に染み、夜半の廿日月戀の一言、踏も生得、亥中の月のおぼろにも、此方の顔がちら〱と、見ゆると思ふ戀風に、此身も震ふ初夜の鐘、四つ、五つが相圖の時、一夜の契りあるならば、思ひ出に死ぬとても、何の厭はう小紫殿、お情賣つて下されい、これ拜むわいの〱。

小紫　夏の夜はまだ宵ながらその寒氣、身を震はしての戀煩は、よく〱の事で御座んせう。それほど迄に、在所氣質に思ふて下さんす實故に、私もお前に惚れたれど、抱かれて寢られぬその譯は。（ト邊りを見て、）あの馬盥。

彌一　なに寢られぬ譯は馬盥。（ト合方、）是れがどうしませう。

小紫　わたしが深う言ひ交はした男と言ふは杜若。

彌一　スリヤ間夫の男の業平風。

小紫　花の白いは苗字は白井、間夫の變名は杜若とは、比翼の契り權八樣、主の姿繪、（ト懷中より守に入れたる權八が繪姿を出して、）主の似顔を肌身放さず此樣に。

彌一　すりやどうあつても此彌一には。（ト思入、）情が賣れぬとか。（ト錦繪を戻す。小紫とつて、）

小紫　あい。

彌一　まことや傾城傾國とて、（ト言はうとして）なる程杜若の言譯、聞入れぬではなけれども、又わしが言ふ事もちつとは聞分けて下され、今も見せた二百兩、手附にこなたへ遣る程に、親方と相談して、私の妻さんになつて下され頼みます。

小紫　取るも憂し、取らぬもつらし、と弓に譬ふ古歌の心。

彌一　二挺の弓は引かぬと言ふのか、そりやどうあつても得心はござらぬか。

ト小紫默つてじつとなる。彌一思入あつてずつと行かうとする。小紫とめて、

小紫　こりや何處へ行かしやんす。

彌一　知れた事、傳がこれ迄いうても、得心なき故思ひきつて。

小紫　それでは身請のことも、その二百兩の手附けとやらも。

彌一　得心なければせう事が御座らぬ、わしや悲しうてならぬもの。

小紫　サアそれ程迄に。

彌一　すりや聞入れて下されるか。

小紫　そしてまあ手附の二百兩はえ。

彌一　こゝに大事に持つてゐるが、小紫殿、身請の上は抱かれて寢ようと言ふ約束。

小紫　あれまだ疑深い。

彌一　間夫と名の立つ權八と、

小紫　緣を斷りかへ。

彌一　手切を見せた其上では、手附所か直に身請け。

小紫　えゝ。（ト思入。又彌一がたがたと震ふ。）ほんに私への寒氣凌ぎ。

ト褄を脫いで彌一へ着せる。

彌一　こりや忝う御座る、そんなら二階で、あの心中の樣子をば。（トいひいひ二階梯へ行き、思入あつて、）小紫殿、田舍者ぢやと思ふて、必ず欺して下さるなや。

ト謠への獨吟のめりやすになり彌一は二階に上る。

〽紫の水にあふたる杜若、開くや花の五丁町、露とこぼるゝ此涙。

トこの內小紫思入あつて、文を書くことあつて手を叩く。奥より禿二人出て來る、

小紫　これ京町か江戶町に、權八さんが居さつしやるなら。

禿中　つれまして來いせう。

小紫　往て來や。

禿乙　はやう連れましして來いせう。

小紫　ちつとも早う。

兩人　あい〱。

ト兩人向うへ入る。小紫思入あつて、

小紫　いかに勤の習ひとはいひながら、何事も知らぬあの彌一さんを騙して、手附の二百兩、是れも誰故皆權八さんのため、とはいへつひに是れまで物いひ一つした事のない權八さんへ、心にもない愛想づかし、彼方を念へば此方へ氣の毒、此方を思へば彼方へ笑止、ほんに思へば郭公の八千八聲であるわいなあ。

へ華胥に夢の命毛も、ありたけ緣の濃迄と、かはらぬ契りなか〱に、中に籠めたる玉章は。

ト此文句にて向うより禿二人後先にて、白井權八著流し大小裏附雪踏にて文を見い〱引ばられて出て來て、花道にとまる。この內、小紫いろ〱科あつて手酌にて酒をつぎ飲んで見て、又煙草盆を引寄せ莨を吞む。

權八　紫の色によるべの井筒の井の字、たまの通ひ路を、待兼ねての文での迎ひ、長兵衞殿には濟

白井権八
岩井半四郎
豊国画

まぬながら、引かれ廓の花の雨、濡るゝも知らぬ此身には、色は思案の外ぢやなあ。

禿甲　サア權八さん。

禿乙　早うござんせいな。

權八　ハテ行くといふに。

〽ぬれて寢よとの郭公、しばらく空にぞ出でにけり。

ト是れにて本舞臺に來り、

禿二　おいらん、權八さんが。

權八　小紫、そこにか。

小紫　權八さん、お前あの、〽ト權八の顏を見て、〕よう御座んしたなあ。

權八　そして文で逢ひたいと、呼びによこした其用は。

小紫　サア其用は。

權八　樣子を聞かねば氣がおちつかぬ、サ何の用で。

小紫　サ私が身請の事で。

權八　ヤ。

小紫　あいたう御座んす。

ト權八急いたるこなし、

權八　シテ其身請は誰が。

小紫　サアそれは。（ト奥より、）

閑心　その身請は白柄組の閑心だ。

ト合方になり、奥より閑心、早物半助羽織を持つて、幇間五丁つき添ひ出て來る。權八見て、

權八　ム丶こなさんが聞及んだ、あの小紫へ通はつしやる、

閑心　如何にも寺西閑心だ。

權八　大方身請は襟につく、白柄組であらうと思つた。

ト皆々庭の竹床几にかける。

閑心　ヤイ若い者。

五丁　へイ〳〵。

閑心　明日迄に相違なく、手附けを渡す其證據に、おれが着替へのその羽織。

半助　金の代りにお頭が、伽羅をこめたる移り香の、よしや男の丹前羽織、明日までの當座の質物。

ト羽織を渡す。五丁取つて、

五丁　此樣にぷん〳〵と伽羅の薫のお羽織を、明日まで預かりまして、これこの通り衣桁へ掛け、

ト二重舞臺へ持行き、衣桁へかけ、）併し今にもお金の早い方へ、御相談いたしますぞえ。どれ委細を皆に話しませう。

ト奥へ這入る。

半助　これで落付きました。

閑心　どうで勤の盗みをして、くつつく愚人夏の蟲、飛んで火に入るさまを見るかえ。其蟲けらのぶう〳〵と、煩さくまとふ蠅蟲めら。（ト權八へ當て）穢を拂らうはこの香氣。

ト側にある香爐を引き寄せ香をつぐ。

權八　スリヤあのいよ〳〵、

小紫　わたしが身請は、

閑心　この閑心だ。

小紫　いゝえ閑心樣ぢやござんせぬ。

閑心　ヤなんと。

小紫　アイいとしい可愛い男の方へ。

閑心　ムヽ此閑心と思ひの外、いとしい男といふからは、やつぱり白井權八か。

半助　イヽヤ若衆は立派に見えたとて花川戸の食客人、一文なしのほんの素丁稚。

ト小紫默つてゐる。

權八　イヽヤ出來まいものでもあるまい。

小紫　何の出來よう、お前の樣なかいしよなしに。

權八　ヤなんと。

小紫　あい働きのないお前には、身請は出來ぬと云ふ事。

ト權八きつとなつて、

權八　ヤイ小紫。

小紫　なんでござんす。

ト此時二階の障子を明け彌一窺ひゐる。

權八　今更いふも愚なれど、去年初めて燈籠の灯かげにふつと見るよりも、初手は一度か二度の月、長兵衛殿を力にて、やう／＼逢ふた際の戸に、立てし屏風は吉原の、雀形なる比翼塚、思ひの

の鳥の深き里、それに今夜の心がかりな今の一言、是れには何ぞ譯があらう、サア其譯をいへ。

小紫 サア是れには深い樣子の。

ト いはうとして思入、つんとして彼方をむく。閑心こなしあつて小紫の傍へよつて

閑心 コレ小紫、廓の意氣地か知らねども、さう情張にいはずとも、思案しかへて閑心が、御新造樣になる氣はないか。どうだ／＼。

小紫 知らぬわいな。

ト 平手にて閑心の顔をつく。閑心これにて愠として捫へ手を掛け、むツと立ちかゝる。この時神妙劍の一卷を落す。小紫手早く取つて、

小紫 この卷物は。（ト權八見て、）

權八 ソリヤ慥に。

ト きつとなる。閑心一卷を手早く取り懐中する。權八つか／＼行き閑心が懐中へかゝる。閑心振拂ひ、

閑心 こりや武士の懐中へ手を差込んで何とする。

權八 合點の行かぬ此懐中、

ト 權八閑心へ掛る。閑心振放し、扇子にて打つ。權八きつとなる。小紫とめ、

小紫　これ權八さん。

ト とめるを引廻し立廻り、奥より極楽重三つか〳〵と來て權八を止め、

重三　これ權八さん、場所が惡い待つしやれ。

ト止める。權八じつとなる。

閑心　金銀にあり餘る閑心樣が、奥方になれるを嫌ふとは甚い物好き、なんぼ嫌ひなされても、金といふ色男には、業平樣でも叶うまいわい。ハヽヽヽ時にそろ〳〵行かうかい。

半助　そんなら今夜は、

閑心　どうで歸りは大音寺前。

半助　駕籠を吩咐けませうか。

ト 權八これを聞いて思入、小紫の前の文を出し、

權八　呼びによこした此文は、今で思へば緣のきれ文。

ト小紫を見て思入。小紫以前の馬盥を見て、

小紫　その馬盥の杜若、（トつく〴〵見て、）白いと一緒に活けらるゝを、小紫がいやがるわいな。

權八　スリヤ馬盥の、

重三　あの杜若を。（ト重三馬盥の中を見る、此時彌一の顏映る。）この人影は。

小紫　エ。（ト悄りする。權八見ようとする。彌一障子を閉す。小紫ちやつと馬盥を引かへす。皆悄りして、）

重三　スリヤ馬盥を打ちあけて、

小紫　どうで落花は緣のきれ目。

重三　再び返らぬ、

小紫　この紫の。

ト杜若を取つて差出す。權八きつと、

權八　朱を奪ふて。

ト花を打ちつける。重三に來いと顏に思入。權八花道まで來り、

スリヤ閑心が歸路は。

重三　エ。

權八　サア御座れ。

ト唄になり、權八早く向うへ入る。重三從いて入る。小紫はあゝと泣落す。此時奥より我笑、半助、仁藏、仁右衛門出て來り、

我笑　モシ絹屋の彌一は。

閑心　そんなら。

我笑　見屆けましたが、アノ。

ト言はうとする。

閑心　ハテ大音に野暮な聲だぞ。

ト思入。小紫の方を顏にて敎へ。

四人　そんならお頭。

閑心　サア歸へらうか。

ト唄になり、向うへ四人附添ふて這入る。淸搔になり、小紫思入。奥より此糸走り出て來り、

此糸　申し／＼花魁。何かの樣子聞きました。あの彌一さんは裏から直にお歸りなさんしたゆゑ、五丁さんや皆樣が一緒に送つて往てでござんすぞえ。

小紫　エ。（ト恟りして、）そんならあの彌一さんが、折角見請の手附の二百兩を貰ふため、心に思はぬ愛想づかし、いつそ跡追つかけて。

ト行かうとする。

此糸　まうし〳〵お前、それでも廓の内を。

小紫　ホンニ私は勤めの身、廓を出られぬ籠の鳥。

此糸　よう御座ります。（トあたりを見て、）金のかたの此羽織、これを着て大門を。

小紫　そんなら、こなさんが。

此糸　權八さんにはチト御恩があれば。

小紫　あの後のことを受込んで。

此糸　それ。（ト羽織を着せて手拭を渡す。小紫不調法にかむる。）

小紫　そんなら必ず。

此糸　こゝ構はずと御座んせ。

トすがゝきになり、兩人よろしく、

道具廻はる―

大音寺提の場　　本舞臺通し土手、後に藪ありて眞中に大木の松の立樹、左右雜叢あまたあり、大音寺堤の體、雨車、時の鐘、蛙の聲にて道具とまる。下手より長兵衛悴長松、極樂重三出て來り、橋懸りより土手助以前の形、寺西閑心の紋つきたる小箱提灯さげ出て來り、双方行合ひよけようとして、兎

角土手助が邪魔するゆゑ、長松下駄にて提灯を蹴つて行過ぎようとする。土手助思入あつて。

土手　コリヤ待て〳〵。

重三　奴さん何ぞ用か。

土手　ヲ、用がある、この廣い往還をなぜ此様に提灯へ泥をはね上げた、濟まないぞ〳〵。

重三　コレ〳〵濟まないといつて夜路の事だ、料簡さつしやい〳〵。

土手　いゝや否だ、行當つたは子供とも思ふが、ついてゐる野郎の、マアうぬが面を、（ト重三を見て、）ヤアわりやア極樂重三だな、うぬアよくも廓で酷い目に逢はしたな、濟まないぞ〳〵。

重三　これ濟まない〳〵と云つてどうするのだ。

土手　ヲ、斯うするわ。

ト胸づくしを取り、一寸立廻つて下へ突据える。長松下駄を脱いで土手助の天窓を打割る。

長松　二合半め、覺えたか。

土手　あいたゝゝゝゝサア痛いぞ〳〵、（ト天窓を押へ、）あのこりや血が出る、濟まないぞ〳〵、と云つた所が先は下供、忌々しいわえ。可いわ、汝には親があらう、サア其親の名を吐かせ〳〵。

重三　ヲ、言はねえでどうするものか、形は小さなちよつぽりでも、立派な江戸の達衆の伜。

長松　お父さんは花川戸の幡随院長兵衛、それでおれの名は長松、わるく洒落ると撲ち殺すぞ。

土手　ムウ忌々しい、可いわ、おれではとても敵はない、是れから頭へ申上げう、どうするかうぬ覺えてゐろ。

重三　ヲヽ何日何時でも尋ねて來い、金輪奈落あとへはひかねえ。

土手　トハ云ふものの、

長松　どうしたと、

土手　忌々しい。

重三　長松さん。

長松　サア行かう。

ト土手の提灯になり、二人は向うへ這入る。土手助下手へ這入る。時の鐘ばた〳〵にて花道より牛助、六助、仁藏、仁右衛門出て來り、

牛助　彌一が歸り道は大音寺前、

仁藏　こゝに待ち受け騙すに手なし、

仁右　アレ〳〵向うへ、確か彌一、

六助　必ずぬかるな。

四人　合點だ。

ト一寸騒ぎ、四人稲叢の蔭へ隠れる。騒ぎ唄になり花道より彌一以前の形、禿みどり相合傘さしかけ幇間五丁、仲居お由、藝者かんついて出て來り、

五丁　まうし旦那、雨の降る夜は一人ゆかしと申しまする、早歸りとはどうで御座りまする。

お由　それ〳〵、色に逢ふ夜はしつぽりと、こんな晩がよう御座りますぞえ。

みど　お前方、そんな所ぢやござんせぬ、あれ花魁の頼み、おかへし申しては叱られますわいなあ。

かん　お戻りなされませいな。

彌一　貴樣達がそのやうにおだてゝも、肝腎の太夫殿が不承知、この樣に金持の大盡でも、そこに惚れぬが流石は吉原ぢやてな。（ト又雨車。）

五丁　又降つて參りました。

彌一　ヲヽ、幸ひの松の下。

皆　ちと、やめて參りませう。

ト皆々菅笠の蓋を取つて來て雨を凌ぎゐる。この内騷ぎの三味線。

みど　可笑な形ぢやなあ。

五丁　悉皆女中霜降をした樣な。

彌一　時に此方衆はもう去んで下され、併し只も去なれまい、（ト財布取出して思入あつて、）イヤ〳〵こりやこはれぬ封金ぢやわえ。

五丁　申し封金でも大事ござりませぬ。

ト來るを振拂ひ、

かん　厚顏しい人ぢやな。

お出　ほんにお前も爪ぢやなあ。時に雨も小熄んだ、申し仲の町までなりとお出なされませな。

かん　お出でなさらぬと叱られますわいな。

ト兩人よつて手を引いて引立てる。

彌一　アイタ、、、。

五丁　お手が痛みまするか。

彌一　イヤ手では御座らぬ、此間から氣合が惡うて、アイタ、、、。

みど　お癪でござりますかえ。（ト介抱する。）

彌一　イヤ〳〵大事御座らぬ。持病ぢや構ふて下さるな、所詮これでは廓へは行かれぬ。どうぞ駕籠など雇ふて下されぬか。

五丁　そんならどうも仕方がない、私が田町へ往つて。

みど　駕籠雇ふて下さんせ。

お由　ほんに折惡いこの雨。

みど　そんなら旦那。

四人　お近い內。

トさわぎ、禿みどり、仲居お由、藝者かん、傘をさし先へ這入る。幇間五丁傘がない故、

五丁　オヽイ交際のない、待つて下さんせ〳〵。

ト追つて這入る。あと蟲の聲、時の鐘、雨車。彌一跡見送り、

彌一　あれ〳〵姦しい衆ではあるぞ。（ト思入あつて、）ア誠に人の身の上と水の流れは知れぬもの、白井の惣領、本庄の養子なる助市ともいはるゝ者がこの有樣、實父兵左衞門殿は長光の刀、神妙劍の一卷紛失、それにつき申譯なく其場で切腹。我は實子といひながら本庄家の養子、其騷

動の砌より、弟權八を我家へ引取り、寶詮議もするならば、白井の家再興と、思ふ效なき權八が所行、これと言ふのも養父助太夫殿の惡事、露顯せしは死骸の傍に落散りありし密書より、されども弟權八は養父の敵、討たねばならぬ武士の表。仇討に出立つても權八を狙はず、却つて逢うまい〳〵と身を隱すこの助市、それに引かへ權八は、傾城にうつゝをぬかし、寶詮議も上の空、意見もならぬ敵同志、絹賣と姿を變へ、小紫に無理いふて、緣斷らせたも、二品の詮議をさせて、白井の家再興させんためばかり。委細のことは此遺書に、どうぞ人知れず權八へ渡したい者ぢやなあ。(ト時の鐘、雨車。)又降つて來たが、折惡い持病の癪。(ト財布を出し、)この樣に冷えるものを懷へ入れてゐたゆゑ。

ト言ひかけてあたりへ思入。この中敵役四人立ち閉きて、此時早物半助、彌一が持つたる財布へ手をかける。

これや何をする。

半助　さつきに見つけた絹賣彌一。

六助　其金こつちへ渡しやがれ。

彌一　さては汝等は盜賊だな。

仁藤　ヲヽお頭関心様の吩咐で、

仁右　小紫が請の手附、

半助　きり〳〵此方へ、

四人　渡しやがれ。

彌一　イヽヤこりや金ぢやない、小紫を騙した贋金ぢや。

半助　そんなで行くのぢやない、面倒な　たゞんで終へ。

ト四人斬つてかゝる。彌一あり合ふ傘にて立廻り、前役の持ちたる一腰をとつて四人と立廻あり、其身も手負ひ四人を斬倒す。よき程に向ふより若黨八内、小提灯を提げ旅形大小半合羽にて出で、此立廻の内へ入り、よろしく追散らす。彌一斬つて寛る。八内きつと止めて彌一を見て、

八内　ヤヽ貴方は若旦那助市様。

彌一　八内か、會ひたかつた〳〵。

八内　こりや見ますれば數ケ所の手疵、すりや今の悪者共が。

彌一　愚人ばらが手にかゝり、此深傷ア、ヽ、。

ト苦しみ倒れる。八内介抱して、

八内　申しお心を確かにお持ちなされませ、手疵は淺い、八内でござりますぞ。

ト彌一心づき、

彌一　八内〱。

八内　ヘイ〱〱是れに居りまする、心を確かに氣を丈夫に。

彌一　八内、心をこめし此一書、弟權八へ。

八内　現在敵の權八殿へ。

彌一　屆けてくれい。（ト又おちいる。）

八内　申し。

ト寄らうとする。半助、仁藏、うぬとかゝるを、ほん〱と見事に斬倒し、彌一を見て合掌する。この仕組よろしく、

幕

大詰　幡隨長兵衛内の場

役者　幡隨長兵衞、悴長松、白井權八、極樂重三、鶉權兵衞、若黨八内、寺西閑心、奴士手助、勇み清吉、石佛半助、三吉、判人勘八、若衆喜助、梓拾治郎吉、家主茂兵衞、三浦屋小紫、長兵衞女房おちゑ等。

幡隨長兵衞内の場　　本舞臺一間の間上の方まひら戸の押入、眞中に暖簾口、其上に立派なる神棚を取附け、納太刀など掛け下の壁に佛事の進物札澤山に張つてある、いつもの處に門口、ずつと上に二階家を取附け、一面に障子立切つてあり、都て長兵衞内の體。聖天囃子にて幕明く、トここに長松太鼓を足に引挾み叩き居る、三吉同じく玩具の附太鼓を叩き、治郎吉は汐吹の面を被り、采配を持ち舞つてゐる。半助清吉兩人蜜柑箱にて獅子を拵へ居る。極樂重三廻し前の裝にて大組板の上で出刃庖丁にて獅子のばれんを拵つてゐる。

半助　念佛日球にする九年母を買つて來たから、切つて貰やゐ。

清吉　默つて居やがれ、ぢよさいはない。重公。庖丁序にそいつを中から二つにして下つし。（ト九年母を出す。）

重三　オツト承知だ。（ト二つに割つてやる。此のうち子供よろしくある。）

三吉　治郎吉、僕にもちつと其の面を借して下さい。

次郎　イヤだ〳〵、俺が貴樣に出來るものか。
重三　手前ばかり冠つて居ずと、三吉にも借してやるがよい。
三吉　ソレ見たかな。
次郎　何も出來もしないくせに。
三吉　出來ないといふ事が有るものか、御用め。
次郎　俺が御用なら、手前は丁稚だ。
三吉　丁稚が世話になるものか。
ト摑みつく、次郎吉突きのめす、人摑み合ふ。長松太鼓の撥にて次郎吉の天窓を叩きながら、
長松　御用や〳〵（ト散々に打つ、次郎吉泣出す。）
半助　コウ〳〵長さん、止しな〳〵。（と立かゝり、）
清吉　手前も何うしたものだ。（ト同じく中へ入る。）
重三　サア〳〵仲をよくしろ〳〵、喧嘩をする者にこの獅子を持たせないぞ。
ト出來上つた獅子を見せる。
治郎　こいつはいゝ〳〵、明日三社樣の祭に舞ふのか。

重三　さら〳〵、今宵は宵宮だから何でも山の宿から馬道の方へ舞つて行くべい。

清吉　若しケチをつけやあがる者でもあつたら、構ふ事はない向脛をぶんなぐれ。

半助　そりや又眞の事か、この石佛半助がついてゐる。

清吉　又大業な事を吐しやがるわ。

半助　吐しやがるとは何の事だ。

三人　オヽしつし〳〵。（ト犬のやうにけしかける。）

清吉　なにをこの猿唐人め。（トくらはす。）

半助　ウヌ打ちやがつたな。

ト立ちかゝり兩人喧嘩となる。重三は煙草を喫みながら見てゐる、子供囃す。奥より小紫、女郎しどきの裝にて出て來り、兩人を止め、

小紫　ア是れ待らなさんせ、どうした物でムんす、重三さん、お前もそこに居乍ら見て居ずと留めたがよいわいなア。

重三　何さこつちも留めて見たがな、男達の内に居るからは喧嘩の稽古をするやうな物だ。お前もさう思ふてうつちやつて置きなせい。併し親方に聞えると大きな目玉だ。

両人　夫でもあんまり。

小紫　ハテもうよいわいな。（トそれにて両人静まる。）これ長松さん爰へお出、よい物上げやうわいなア。

（ト懐より蒔絵の香箱を出し、長松にやる。）

重三　何だな〳〵。

長松　こんな物を貰つた。（ト見せる。）

重三　ア丶よい箱だ、こいつへ金米糖を入れたらよからう。

次郎　むくを入れるには小さいね。

重三　措きやがれ。

清吉　コレ大三も伊勢孫もいゝ加減に行かないか。

次郎　アイ〳〵。

三吉　半助さん、入替の帯を返しなさい。

半助　いいよ、明日の祭を締ふと返すわ。

清吉　祭りといやあ延喜直し、せめて宵宮の印に獅子を廻して見るがいゝ。

半助　よからう〳〵、小紫さんの股倉へ舞ひ込んでやらう。

三次　サア／＼みんなで舞ひ込め／＼。（ト獅子を持つて立上る。）

小紫　ヱヽモそんな事はよしてくださんせいなア。

重三　イヤ／＼こいつは面白からう、おれが木やりを○ヱヽやりよふ。

ト囃子ばやしになる　小紫、奥へ這入らうとするを先へ廻つて獅子を舞ふ事、此内奥より長兵衛、好みの拵えにて出て来る、とたん皆々長兵衛の鼻の先へ獅子を突出す。

長兵　エヽべら棒め何をしやアがる。

皆々　ヤア。

トあわてゝ長松を連れ四人奥へ這入る。

小紫　オヽ長兵衛様か。（ト小紫重三少し悄げて居て、）

重三　親分、茶を進ぜませうか。

長兵　何のこつたおぬしも野郎共とおなじやうに馬鹿々々しい、さうして吉原から人でも来たか。

重三　イヽエ、今朝来たまんまさ、何お前三浦屋でも外の者と違つてこなさんが挨拶してやらつしやつたものだから何とも言つて来ることぢやないのさ、夫だから小紫さんも何ぼ駈落者だつて遠慮して奥にばかり這入つて居るにやア及ばないのさ。

長兵　イヤ〳〵それやアさうしたものぢやアねい、何を言つても先づ吉原は難しくてやア間違り、殊に寺西閑心殿が身請の相談、そこを此方へ帶代で殘年を貰ひたいと話合つて見た處、向うも承知しく預けて歸つたものだから、夫丈こつちも達引にマア分る迄遠慮してやらにやならない。然し長兵衛が内へ駈落して來た小紫、モウ三浦屋へ返す事ぢやアねえ程に、そこの處は落付いて居るがよいのさ。

小紫　何のそりやアモウお前が受合ふたと言ふて下さんしたゆゑぢやに依つて其の事は案じませぬわいな。

長兵　ほんに權八どのはまだ歸らねえ。

小紫　私が爰へ來た事を知らしやんせいで、大方廓へ來んさう程にもし出違ふてはと、由縁に文を渡して置いたれば、それを見やしやんしたら直に戻らしやんす筈ぢやに、何處にマア何をして居やしやんす事ぢややら。

長兵　ハテそのやうに案じやるな、おぬしが廓より外に泊りもする氣遣ひはねえ程に落ちついて居やれ、然しおぬしが殘して置いた文を見たら早速戻つて來る筈だに、ちつとの間でも物を思はせるとは、成る程無粋な心意氣だノウ重三。

重三　邪慳な處にのろくたるやつさノウ小紫さん。

小紫　エヽ知らぬわいなア。（トこなし、獨吟。）

〽紫の由縁の色の杜若比翼放れぬ筒井筒夕の袖の通路も、雲間隔て歸る雁。

ト此内トヒヨになり空へ雁出て舞ふ。向うより權八一本ざし、口紅の文を見乍ら出で來り、花道にて止りこなし、

權八　れんじまで便りきかせよ雁の文、廓を拔けて小紫は長兵衞殿の内に忍ぶと知らせの文、とは云へ心あり氣な愛想盡し、ハテ氣がかりな事ではあるぞ。

〽戀仲さへも、薄墨の夜目には讀めど、讀み兼るこゝろづくしの君が玉章。

ト此唄の内件の文を卷納め門口へ來り内へ這入る。この内長兵衞浴衣を着かえる事。

ハイ只今歸りました。（ト小紫見て嬉しき思入。立かゝり、）

小紫　オヽ權八さん戻らしやんしたかいな。

權八　そちや小紫。

小紫　もしなアあの閑心が身受の切迫、それもみな金故と心にもない愛想盡し、夫故夕べこつちへ驅落して來やんした後さきの樣子、こまぐ〵と書いた文、定めて見てくださんしたであらうな。

權八　サアそれ見たゆゑに急いで戻つたも、長兵衞どのへの重なるお禮。

長兵　コウ言ふ中で何の禮、それはさうと小紫もこつちの内に居る事を知り乍ら、今迄どこをあるいて居たのだ。

權で　サア外の事でもムりませぬが、兼てお噺申した彼の神妙劍の一卷、チト手掛りがムりまして夫ゆゑ所々を。

長兵　そんならよいが、もう晩からあんまり夜あるきをしないがよい、大ぶ物騷だと言ふ事だ。

重三　方々で人を切るが、何でも切つた奴は强勢な手者だと言ふ評判、夫で浪人者を嚴敷く詮議すると言ふ事だ、權八さんも隨分氣を附けなさるがやうごんす。

小紫　いやな噂でムんすなア。

長兵　權八、おぬしはそんな噺は聞ずかえ。

權八　イエ一向に承はりませぬ。（ト思入。）

長兵　辻切か意趣切かしらないが何しろいやな事だ、おぬしも浪人丈そんな沙汰を聞くと大抵あんじる事ぢやない程に、マア〳〵當分どこへも出ないがよい。

權八　イエもう御深切なる其のお詞恭う存じまする、フトした御緣で私をお世話下さる其の折柄女房が居ては何かに氣兼と御内室を里へ迄お返しあつたと申す事、承つて此程よりどうぞ目出

度く元のやうに御夫婦添ふてと申せども、お聞入れござらぬ程此の身になつては猶々氣の毒でなりませぬ。

長兵　是さ／＼またお時が事を言ふのかえ、ありやア全くこなさんに氣兼させない爲ばかりに里へやつたのぢやアごんせぬ。ちつとあれには譯のある事必ず氣の毒がらないがよい。

小紫　そりやどうか知らねども、權八さんの身にしてはどうしてわたしが世話になるにも、おかみさんがござんすりや何かに附けて。

重三　そりやそんなものさ、殊に長松さんもある事だ、二人の衆も言ふ通りに是親分。

長兵　ヱヽ何の事だ、捨てゝおきやがれな、おれが女房の事より。權八コウ小紫が駈け込んで來ちやア破れかぶれおぬしも男だ、是非共女房に持たずばなるまい。

權八　サア。

長兵　そこだて、今朝おぬしが出た後で吉原の方へ掛合つて貰つたことも、まんざら長兵衞を潰しもせまい、大方晩は分つて來やう。さうすりやア天下晴れておぬし達は誠の夫婦、是迄の吉原通ひも小紫と言ふ者があるゆゑ、それも女房にすりやア吉原に用はないと言ふもの、そりや早尋ねる品の事で用もあらうが、其の替りに又お主をも敵と、イヤサ堅い約束した刀を引受けた

ら、仲むつまじく内に居て、外へは出かけぬやうにしやれ。

權八　お世話の上に、小紫迄お世話の段々、其の上に言ふに言はれぬ今のお詞、權八承知致しました。(ト思入。)

長兵　また小紫も其通りだ、今迄よりは大事にして權八が傍を放れず外へは出さぬやうにしやれ。

小紫　そりやもうお前が言はしやんせいでも朝も晩も引つ附て居て人が笑ふと構はず、モシ權八さんわたしや傍を放れぬ程に必ず叱つて下さんすなえ。

ト寄り添ふ。

重三　もう傍へくつ附てか。(ト思入。)

權八　是迄明さぬ身の上も明せばトヽは此の命。

小紫　エ。

長兵　サア命に掛けても惚れた日には、又拙者より小紫今日からしては樽酒を醉ないやうに呑ませてくりやれ。

ト小紫と思入、こなしあつてよろしく、長兵衞あちらを向く。重三是を見て、

重三　こつちは奥で酒でも呑まう。

ト家體ばやしになり重三與へツイと這入る。直ぐに向うより八内、旅形、股引わらじ三尺手拭、大小にて管笠を持ち出で來り、

八内　道理で賑やかな筈だ、翌は三社の祭りだな、ヱ、あそこの肴屋で聞いたが大方此内がそであらう。（ト言ひ乍ら門口へ來る。）チト物が承りたう厶る。（ト是にて皆々思入。）

長兵　やア何だな。

八内　イヤ幡随長兵衛どののお宅は是で厶るかな。

長兵　ハテ聞きなれぬ聲だが。

ト長兵衛權八へ思入、權八心得二階へ上る。

幡随長兵衛はわしだが、どこからお出で厶ります。

ト門口を明ける。

八内　ホウそこ元が長兵衛殿で厶るか。

長兵　左樣さ、さうしてお前マアどこから來なすつたえ。

八内　成程是迄お目に掛りませぬが、拙者はお時が兄で厶る。

長兵　へエそんなら兼ね〴〵噺に聞いた女房お時が兄貴かえ。

八内　左様でムる。

長兵　こりやアようこそ、サア〱こつちへ入らつしやれませ。

八内　ごめんなされ。（ト這入り乍らわらじを解き方々見廻し）よくお宿でムつたな。

長兵　さればサ年中役にも立たぬ用でとんと内には居ませぬが、どこがどうしてか今日は折よく内に居ました。やれ〱よく尋ねて下さりましたな。

八内　拙者とても定めしお聞き及びもムらう、前方身持不埒にて親共に勘當受け憂難澁の仕方なく武家方へ若黨奉公、仕合せと氣に叶ひ勤めます内旦那にも國詰を仰せ付けられ拙者も是非なく倶々に夫より長らく遠國住居、此度所用に付きまして江戸表へ出ましたこそ幸ひ久々にて親共へも對面と、只今坂本へ歸りがけ妹が事もなつかしく一寸お尋ね申してムる。

長兵　そんならまだ内へも寄らずに。

八内　今江戸入り致した斗り、何も縁とは言ひ乍ら不束な妹め定めし御世話膀ちでムらう。

ト此内に小紫しかみ火鉢へ土瓶を掛け、茶を拵え八内の傍へ持ち來り、

小紫　お茶をお上んなんし。（ト茶碗を出す、八内呑み乍ら思入。）

八内　こちらへ片付きまして六七年ぶり始めて兄が參つたに、こりや妹めはどこぞへ參りましたか

な。

長兵　お時かへ、お時は奥に。

八內　さういふやつでムる、奥に居るなら早速に拙者が聲を承り。

長兵　イヱ〳〵お時は奥でムりませぬ。イヤかゝアは寺參りに參りました。

八內　へヱ宿には居りませぬか。

長兵　何さ女房はあの、宿おりでもなしそれさお寺へ泊りがけに行つて、それから直ぐに伊勢參りに行きましたのさ。

八內　へヱ、（ト思入。小紫莨を吸ひ付け）

小紫　一ぷくお上んなんし。

ト出す。長兵衞氣の毒なるこなし、八內合點の行かぬ思入。

八內　長兵衞どの此女中は何でムるな。

長兵　是かえ、こりや何さ此頃お時が留守だによつて賴んで置いた雇ひ婆アサ、

ト出たらめを言ふ。

八內　ムヽ。（ト合方。）

いか様是では妹は内に、こりやさらつたな離縁召されたな、まだ身共が當地に居る内に妹が事を承り、名に負ふ幡随院長兵衛どの不束な妹を能マア面倒を見て下さる由、遠國へ參つてもそこ元の事を今の今迄、それに何ういふことがあつてそこで妹をさらつしやつたか、仲人なしの女房を去つて男と言はれるか、トサ離縁もあつたなら斯う申すでムらうが、イヤ何長兵衛どの此末とても妹が事何分お頼み申しまする。

長兵　エイ／＼（ト術なき思入。）

八内　これはこなさん、妹が留守中何かとお世話でムらう。

ト小紫思入。

ハテ美しい屋婆ア、名は何と言ひますぞ。

小紫　アイ私が名は小紫。

長兵　ア、是小紫ぢやアない、小むらがへりがした、そりや先刻からすわつて斗り居たせいだ。ホウどうも降りさうだ、二階の雨戸をくつておきやれ。

小紫　アノれんじを閉るのかえ。

長兵　オ、サ二階へ行きやア知れる事だ。

小紫　アイ〳〵、モシあなたゆるりと遊びなんし。

ト合方になり、小紫二階へ上る。此内八内前に落ちてある小柄を拾ひ、取上げて見てこなしあり、長兵衛の顔を見ると長兵衛脇へ顔を向けるゆゑ、八内ム、と小柄を持ち思入。是より又合方八内思入あつて静かに小柄を懐へ入れ腰より取縄を出し縄捌きして立上り行かうとする、長兵衛入替つて氣味合の見得、始終合方生殺し是にてしづ〳〵付廻り、八内は上手になり二階へ思入して長兵衛と顔見合せ、

八内　ム、。

長兵　ム、。

兩人　ム、ハ、、、、。

長兵　サア兄貴煙草でも参りませ。

トたばこ盆をさし出す。

八内　是は〳〵始めて参り何かと失念致した、長兵衛殿是は其元へわざと手土産御受納めなされて下されい。

ト紙包の白扇を取出す。

長兵　是は〳〵始めてムつた兄貴の手土産、夫婦の中も末廣がり行末目出度く受納致しませう。

八内　それは千萬忝い。（ト又以前の小柄を取出し、）

又此品は妹へ心をこめし拙者が贈物、どうぞ遣はされて下されい。

ト出す。長兵衞何心なくとつて、

長兵　是は〳〵結構な品を嘸見せましたら悦びませう、ア、結構だ赤銅七々子のきんとべり丸に井筒の紋ぢらし、こりや是慥か。

ト小柄を持ち思入。八内長兵衞の持つたる小柄を引とり、

八内　サア長兵衞どの出して下され。

長兵　そりや何を。

八内　お尋ね者の白井權八。

長兵　どう仕ました。(ト合方。)

八内　江戶で名うての男達幡隨院殿の內に圍ひある由、樣子を聞いて付け込む某、長兵衞どの白井權八出して下され。

長兵　イヱ存じませぬ。

八内　でも落散りありし此小柄、かゝる慥な證據あつても。

長兵　そんな事は先の辻番へ行つてお聞きなせえまし。

八内　ハテ大丈夫、長兵衞殿改めてお手前樣にお賴み申す儀が厶るが、御承知なされて下されうか。

長八　他人の事でさへむしやうやたらに請込むがわしが氣性、殊に兄貴の事だ、品物に依つたら賴まれませう。

八内　すりやしかと賴まれて下さるか。

ト長兵衞二重にある鏡臺の鏡をとり出し、

長兵　ハイロでごて〳〵言ひ合ふよりわしが心は此鏡、怒つて向へば怒つてうつる笑つて見せれば笑つてうつる。本に正直正銘な正直そばのあくぬけだ、御用とあるなら承はりませう。

八内　ハテ賴母しい。

ト此内二階の障子を明け權八覗く。鏡にうつりし心、八内鏡にきつと目を附け。

ヤ鏡の表にうつるは權八。

長兵　ヤ。

ト立廻るを長兵衞八内の裾をとらへ、鏡をぴつしやり是と共に二階の障子しやんとしめる。こなしあつて、

八内　今日のみと見るに思ひのます鏡、

長兵　うつりし影を人にかたるな。

八内　長兵衛どの。

長兵　そんなら兄貴、奥でゆるりと。

八兵　ムヽ。

長兵　茶漬でも喰ひなせえ。

　　　　ト二階を目がけ思入するを、長兵衛八内を下へ入れ替へ上手になり、

　　サアござりませ。

　　　　ト八内又二階へムヽとこなしするを長兵衛一寸額にて留める、兩人氣味合の思入、唄になり八内よろしく小柄を持ち奥へ這入る。長兵衛殘り思入、此内向うよりうづら權兵衛、おはぐろ壺を提げ、後よりおとき世話女房の形にて出て來り、

お時　モシとゝさんわたしは外に待つて居る程に、おまへマア先へ這入つて下さんせ。

權兵　合點だ〳〵。

　　　　ト言ひ乍ら門口へ來り鐵漿壺を持つて、

　　長兵衛内にか、

　　　　トずいと這入る。長兵衛此内莨、思入して、

オ、内に居るわ〳〵、此の頃はいつ來てもついに内に居た事がないゆゑ、けふも留守かと思ふて來たが、能内に居たな。

長兵　わしだつて用がありやア留守な事もなくつてさ、よく厶りましたな。

權兵　來ないでさ、噂を聞けばどうか金の入る事がある樣子だから、娘のお時が鐵漿のかねを持つて來た。銅壺の前へ直しておきやれ。

長兵　去つた女房のおはぐろをなぜ銅壺の前へ直すのだ。

權兵　知れた事だ、お時はおれがかゝり娘家藏を持つた所から貰ひに來たれど、惣領の權太郎は勘當するし、内へ聟をと思つて居る内こなたに喰付、貰ひたいと花川戸で一人の男の言ふ事だから、顏を立て諸道具揃へてよこして、そんな子まで出來た夫婦合の中ぢやアないか、夫に委細は跡からとお時を返してけふが日迄、是おれも坂本ぢやアうづらの權兵衞だ、間男でもしたか、大酒ぐらひか但し小盜でもしたと言ふのか、譯があらうサアそれを聞かう〳〵。

長兵　ハテこなさんも馴じんだ女房去るによく〳〵な事がなくてどうする物だ、疵も附けずに歸したはこりやこなさんへ達引だ、大概そこらは推量して引取つてゆかつしやい、譯を言つたら血で血を洗ふ恥搔道具でござんせうぞえ。

ト此内お時門口にて聞いて居て思入、此時ずつと内へ入る。

お時　ヤイうぬは去られた内に何しに來た。

何にしに來たえ、モシさつきから門口に聞いて居れば、血で血を洗ふ恥掻道具おぢやと、言はしやんしたが、何で譯を言へばはじ掻道具でムんすえサ、ア夫を言はしやんせ〱。

長兵　ハテ言はないのがこつちの情だわえ、

お時　イエ〱お前は言はぬが情でも、こつちは聞かにやならぬわいな。

權兵　そうだ〱夫でこそおれが娘だ、コレ長兵衞其譯を言つて聞かしやれ譯が聞たい〱。

長兵　サア其の譯は。

お時　どうでムんす。

長兵　サア何でもおかれない譯だ、出て行け〱。

お時　イヱ〱、きかぬ内は出やせぬわいなア。

權兵　ヲ、聞かぬ内は出るな〱。

長兵　出ないと言ふて去られた内へ、誰がゆるしでうしやアがつた。

お時　その去つた譯、聞かうと思ふて。

長兵　譯を聞かうもすさまじい、出やアがれ〳〵。

ト外へ出さうとする、出まいとする、此立廻り、みな〳〵よろしく、家體ばやしになり、向うより家主茂次兵衛出て來り、捨臺詞にて直ぐに舞臺へ來り、此中へ這入り間違ふて踏みのめされる。

茂次　是さ、どうする〳〵。（ト是にて茂次兵衛を見て、）

長兵　こりやア大家樣、御免なされませ〳〵。

茂次　御免なされいぢやないわいな、大家を踏むは店賃をふむも同じ事ぢや、どうした事でムる。

お時　ほんに大家樣よい所へお出でなされました、恥を申さねば理が知れぬとやら、私は妾の内を出されましてムりまするが、何が落度やら知れませぬゆゑ、それを聞きにさんじました。

權兵　其譯さへ立ますれば引取らないでどうする物でムりまする。品もなく出されちやア此權兵衛が濟ませぬ。

茂次　なりやアいか樣譯は知らぬが別れるなら是が疵だと得心づくがよささうなもの、長兵衛どの何もわしに遠慮はないからおときどのの悪い事を言つて去るがようござる。

お時　大家樣のおつしやる通り、是ぢやに依つて置かれぬといふ事なら、詫びのしやうもムりますがそれも言はずに親許へ。

長兵　モシ大家樣よい處へお出でなされました、斯ういふ事には他人が一人まじらないと理窟が分りませぬわ、マアよくお聞きなせえ、先づ第一女の分ざいに朝起きだわ、其の上奇麗好きで人樣へ想愛がよくつて無駄錢とてはいかな事。

茂次　成る程、そりやア尤もだわい。(ト感心する。)

長兵　まだ其の上に子を可愛がつて遊ぶ事が大嫌ひ、髮結に髮は結はせず、縫針業は持つて來い、酒を呑まず、長屋歩きをした事なし、どこの國にか此通り人出入の多いわしが內で、つひぞ誰とも一寸でも間男をした事のない、此通りの女房だものを去つたも無理ぢやアムりますめえ。

茂次　イヤモウ聞けば聞く程長兵衞殿が尤もぢや、是ぢやこなたも意地無地言はずに引取らずばなるまい。

權兵　成程さう聞けば娘が惡い。ハテサおぬしがわるいからマアわるいになつて居ろよ。サアそんならこなたの言ひぜう立て、お時はつれて行からから諸道具は言ふに及ばず、夏冬の物を品數揃へて爰へ出しやれ、おはぐろ壺と風呂敷斗りぢやア請取るまい。

長兵　サアそりやア。

權兵　おれもこなたと緣を切て、他人になつてちつと詮義が。

ト二階へ思入。

サア去狀出しなせえ。（ト長兵衛思入。）

長兵　そんならお時を離緣すりやア。

權兵　諸道具揃へた其上に、まだ金にする手段があるのよ。

長兵　それぢやアめつたに去られぬわえ。

お時　そんなら置いて下さんすか。

長兵　サア手めへ置いちやア。

權兵　去狀書くか。

長兵　サア。

三人　サア〱〱。

權兵　どうする積りだ。

長兵　ようござんす、女房を裸にして返したと言はれちやア外聞が惡い、ちりつぱ一本殘さず附けて去る去らないは後方迄に。

權兵　そんなら返事の分る迄はマアやつぱり元の聟舅、こりやア大家樣お世話でムりました。

茂次　何さおまへマアく／＼わしもひよんな所へ來合せて掛り合ひにならうかと案じましたがどうか丸く納りさうだ、そんならもう歸りませう、お内儀是からは心を改めて小遣ひなぞは湯水のやうにぱつ／＼と遣はしやれ、着物なぞも長くしてアノ女房は引ずりだと言はれるやうにせにやア御亭主の氣に入りませぬぞ。

お時　イヱモウ私も內に居ります事なら、隨分心を改めて何一つ言はれぬやうに致しませう。

茂次　マア／＼夫でなけりや納らない、どれ／＼夫ぢやアわしはモウ歸りませう。

ト門口へ行き、一寸考へて、

ハテナ全體わしは爰の內へ何の用で來たのかしら、

ト考へ出せぬ思入にて

長兵衛どのわしが用はこなたは知らつしやらぬか。

長兵　ハテわしの知らうやうはムりませぬ。

茂次　さうだての、イヤ違へねえ、かんじんのお觸を言はず歸らうとした斯う忘れぽくつては困る、長兵衛どの斯ういふ譯ぢや、夕土手で人殺があつたのぢや、所で其者をかくまい抔する時は重き科目を受けるから、ようお觸を守らつしやれ、よいか／＼夫から其の人を殺したやつの名は

アノソレム、ヽ

ト詰り、考へ出せぬ思入あつて持つたる小風呂敷の包へ心付き、

ア、是〳〵忘つぽいから是に扣えがある。

ト内より梅ビラと赤紫の盆と白箸を出し、

其の人を殺した者の名は、（トビラを出し、）しらひ盆に箸ム、そうぢや白井權八と言ふのぢや、よいか〳〵必ず忘れまいぞや、夫にまた其の科人を捕へて出せば褒美の金ぢや、ナ捕へてこなたが出せば夫レ褒美の金は、此大家、ナよいか〳〵長兵衞どのよいかいのう。

長兵　ハテようごぜへやす。

茂次　よきやアようムる。

ト門口へ出る。

長兵　大家さん今のお觸の事はようムいまするか。

茂次　ハテようごぜいやす。

ト思入にて言ひ下手へ這入る。

権兵　どれおれも二階へ。

長兵　イヤ二階は取散かつて足も踏込めねえから、奥へ行つて野郎共と酒でも呑んでムるがいゝ。

権兵　そんならこうせう、是おとき、去状とる共とらない共。

お時　後方迄は、ねえとゝさん。

権兵　そんなら長兵衛、奥で返事を待たうかい。

ト唄になりうづら権兵衛奥へ這入る、長兵衛思はずおときと顔見合せ、奥へ行かうとする。

お時　モシ待たしやんせ、何ぢやいナア共のやうに恐い顔斗りして、ちつとはわたしが心にもなつて見て下さんせ、いつぞや旅から歸らしやんすとどういふ事か譯も言はずに男づくで世話せにやならぬ人がある、手前が居ては遠慮ゆゑ遣ひをやる迄親元へ行て呉れとやら云はしやんして、夫から梨の礫もなくとゝさんは知つての氣質、どうした事ぢやと毎日〳〵聞かれてこまるは私一人、惡いことでもしたやうに世間の手前氣の毒ゆゑ、今日連立つて來たのもな、長松が顏も見たし何やかや、氣が氣でならぬ共の所へ色々な事を人さんが言ふて聞かす、なんの私をしやくるのぢやと思ふては居るけれど、ちつとの間居ぬ内に内の勝手さへ違ふもの、男の心は猶のことひよつと此儘去られたら、マアどうせうと思ふわいの。

長兵　成程女と言ふものは分らないものだなア、是おぬしとは何年添ふて居る、大概おれが氣も知つて居さうなものぢやアないか、モウちつとの間の事だ、今日はまア親父を連れて早く歸れ。

お時　サアさう言はしやんすりやよいやうなものぢやけれど、モシお前はきつう苦勞でもあるか痩せなさんしたぞえ、何をまアそのやうに苦勞があらば私にはなして聞かして下さんせ。

長兵　やかましいわえ、ようだら〳〵と口を叩きやアがるわ、苦勞はおれが好きでするのだ、構はずと早く行きやアがれ。

お時　イヱ〳〵いろ〳〵はなしたい事が。

長兵　ヱヽ歸れと言つたら歸らねえか。

トきつと言ふて奥へ這入る。跡にお時思入あつて、

お時　アレ待つて下さんせといふに、こりやもう所詮相談しても聞濟ンでくれまいわいなア、あの兄さんと言ひ合せておいた通りに。

トホロリとこなしあつて氣をかえ、

どれ長松にそれとなく別れを告げて置きませうか、

ト奥へ這入る、向うより三浦屋判人善六若い衆長助出で來り、

善六　小紫の跡金を後にやるから來いと言つたが、どうぞ渡してくれゝばいゝがの。

長兵　そこは何と言つても花川戸の親分だけだ。

善六　そうは言つても、今朝半金の百兩を受取つて、直ぐに今行くのだから、じつとしびれを切らして居たよ。

長兵　ハテ商賣の事なら仕方がねえ。

ト此のやうな事を言ひ乍ら舞臺へ來て、

それもう門口へ來た、サこなたから入らつしやいな。

善六　よくだしにつかふわ、ハイお頼み申します。

兩人　御めんなされませ。

トずつと內へ這入る、奥より子分一人出て、

一　アイ〳〵どこから來なすつたえ。

長助　三浦屋から參りましたが、親分はお內で厶りますかえ。

善六　內なら一寸お目にかゝりたう厶ります。

一　ヲイ〳〵親分は奥だから一寸さう言つてやらう。モシ親分〳〵。

ト長兵衞出で來り、

長兵　是は三浦屋の衆か。

善六　どうぞお約束の跡金をねえ。

長助　只今お渡しなさつて下さりませ。

長兵　サア〳〵其の事で、今も極樂をこなさん方の所へやる所だ。

長助　ヘイ左樣ならまだ金の都合は出來ないのでムりまするか。

善六　モシ〳〵親方夫はちつとお詞が違ひまする、アノ小紫さんは今申した通り、れつきとした望人がある所を帶代で上げました上、今朝二百兩揃へて受取らにやアならぬ所、半金で今迄待ちましたのも、お前樣の顏を立てるのでムりまする。

長助　それ〳〵そんな事をおつしやらずに、どうぞ只今お渡しなさつて下さりませ。

長兵　ハテ扨長くと言はない、一ぷく呑んで居て下さい。

長助　イヱ〳〵たばこは內でも呑みます、莨を呑みには參りませぬ。

善六　こいつは骨の折れた理屈だアの、閑心殿の方へ身受けさせりやア、此の判人のわしら迄相應な祝儀でも貰ふのを、人に知られたこつちの內の親方だから、それをへんがへにしてよこした

程の達引。

長助　モシ少しは私共の顔も立て、どうぞ只今、

兩人　お渡し下さいまし。

長兵　ハテ立るの立ぬのとこつちも如才に思ひはしねえが、外の事と違つて金づく殊には先がひよつと留守で、こんなに返事の遲いのかそこらも知れない、待遠ならこなさん達さきへ歸らつしやい、わしが方から屆けてやらう。

善六　モシ〳〵丁稚子供ぢやあるまいし、金も持たずにどうして此の儘にや歸られませぬよ。

長助　善さん、こいつは猶々分らぬ事になつたの。

善六　親方がア、言ふからは所詮埓は明くめえ、いゝわ金の分る迄小紫さんをつれて行かふ。

長助　オヽそれがいゝ〳〵。

ト二人立掛るをとめて、

長兵　イヽヤ長兵衞を見掛けて駈落して來た小紫、今更こなた衆に渡してやつてはどうも男が。

善六　立たねえ事なら跡金をよこしなさるか。

長兵　サア渡さう程にちつとの間。

長助　金の來る內、小紫さんを。
長兵　イヤそれぢや顏が。
善六　立ずは金を。
長兵　サア。
兩人　サア。
三人　サア〳〵。
兩人　ヱ、おどきなせえな。

ト長兵衞をかき退け奧へ踏ん込まんとする。此の時奧から八內ツカ〳〵と出て兩人を突退け、

八內　コリヤ待て町人、手詰なりやこそわれ達に、シテ其金の高はどれ程。
善六　サア貳百兩を最前百兩。
長助　其の跡金の。
兩人　百兩さ。
八內　身共只今渡してくれう。
兩人　ヘヱ、イ。

ト尻込みする。合方。八内懐中の銅巻より百兩出し、

八内　サア改めてとく／＼受取れ。

ト出すを長兵衛とめて、

長兵　アイヤ／＼、お志は忝ひがそこ許樣より其の金子借受けませう緣とても、サ此金をお借り申してはどうも長兵衛、マヽ其の金は其の儘に。

八内　是はしたり立つも立たぬも後での事、差當りたる貴公の難儀此の場を濟して。

長兵　イヤどうも夫では。

長助　是は有難う。（ト年季證文を出して渡す事。）

兩人　これさへとればもうおいとま致しませう。（ト立ち上る。）

八内　言分あるまい、男を立てる長兵衛どの、金子のかせに兎や角すればつけ上つたる兩人共、痛い目させる處なれどゆるしてくれる、早歸れ。

長助　イヱもうきり／＼歸りたう厶りまする。

善六　左やうなれば此儘に、（ト兩人表へ出る。）

兩人　早お暇申しまする。

ト合方になり商人捨臺詞にて足早に向うへ這入る。長兵衛じつと思入あつて、

長兵　思ひもよらぬ八内殿が、大まいのアノ百兩、何と禮さへ長兵衛が。

八内　イヤ〳〵それには及びませぬ、役に立つたるアノお金は。

ト此内階子口よりうづら權兵衛覗ひ出る。後より四ツ手駕一挺出る。此時門口より、

權兵　男を磨く長兵衛が難儀を見兼ねて、悴八内と相談づくで娘おときを。（ト門口を開る。）

長兵　ヤそんたら女房が。

ト駕のたれをあげる、おときのつて居る。

八内　また一つにはお主筋小紫どのの身受の爲め、可愛や妹が廓の勤め。

長兵　ヤ、それでも女房を長兵衛が賣ちやア世間へ。

お時　何の去られた私は他人。

長兵　ム、夫でさつきの、

八内　愛想づかし。

權兵　わるものつくりも。

長兵　離縁の爲か。

お時　モシ長松が事頼むぞえ。

ト思入。權兵衛コレトたれをおろす。

長兵　何にも言はぬ。（ト手を合す。）

權兵　サ駕の衆やつて下さい。

ト三重に成り、權兵衛駕に付いて向うへ這入る。八內思入。

八內　此の上は長兵衛殿妹を恩にきせねども、白井權八お渡し下され、

長兵　いかにも權八渡しませうが、夫も何卒今宵中、

八內　さらば明朝、

長兵　いづれ御返事

八內　しかと其時、

長兵　御念に及ばぬ、

八內　必つと詞をつがひましたぞ、

ト八內向うへ這入る、長兵衛は奥へ這入る、向うより間心の若黨吾、絹羽織、袴、股立ちにて早足にて出で來る、門口へきて、

番吾　頼もう〳〵。（ト二階にて小紫。）

小紫　アイ〳〵。

モシお前必ずそこに居て下さんせえ。

ト權八に言ふこなし、合方にて下へおりて來る。番吾門口を叩き、

番吾　是頼もうぞ〳〵。

小紫　アイ〳〵何の御用でムんす。（ト門口を開ける。）

番吾　長兵衛殿家にならら寺西閑心只今これへ參る間、他行致さぬやうにと申しておくりやれ。

小紫　アイ〳〵そう申しんせう。

番吾　よいな承知致したな。

ト引返して向うへ這入る。小紫思入。

小紫　アノ閑心が爰へとは大方わたしが。モシ重三さん〳〵。

ト呼ぶ此時奥にて、

重三　オイ〳〵。

ト奥より出て來る。子分も續いて出る。

小紫さん何ぞ用かえ。

ト小紫心遣ひなる思入にて、

小紫　若しナア閑心が所から長兵衛さんに、逢ひに行く程にと言ふてよこしたわいな
重三　ア。なに閑心が今來るとか。
小紫　サアてつきり私が事であらうと思ふが、よいかいな〳〵。
一　ハテお前の事だと言つて、親分が呑み込んで居るに何の構ふ事があるものか。
二　屋形舟に乘つた氣で落ちついてゐなさいな。
三　夫に親分の後にやアわつちらが付いてゐらア。
四　こわい事はちつともないわね。
重三　イヤ〳〵向ふも白柄組の閑心だ、身受しかゝつた女郎が横切したをわざ〳〵と幡随長兵衛が所迄恥をかきにも來ない筈だ。こりやア大音寺堤で息子どのが奴の天窓をぶち割つた其の尻を持つて來る料簡と見えるわえ。
小紫　そんならわたしが事ではなうて。
重三　大方それに違ひあるまい。夫なら親分の耳へ入れずに。

一　おいら達が寄つてせぢしてやるべい。

皆々　それがよい〳〵。

小紫　どれわたしは二階へ。

ト二階へ上る。

皆々　サア是からは腕づくだぞ。

ト鉢巻をする。向うより閑心、羽織、衣裳、大小にて番吾附添ひ、後より仲間二人にて油革を掛けし釣臺を、かつぎ出て來り門口へ來る。

閑心　長兵衞は是と申すか。

番吾　左やうで厶ります。

閑心　案内致せ。

番吾　畏まりました。頼もう〳〵。

皆々　そりや閑心だぞ〳〵。（トさわぎ立つ。）

重三　是さ、あれ程言つておいたのに。

トなだめ門口を明け、

閑心　是は寺西閑心様にはようお出でなされました。（ト辭儀をする。）

重三　ム、其方は長兵衛が若い者吉原であふた極樂の重三とやら、シテ幡隨は宿に居るか。

閑心　お先觸のあつた事、奥に待つて居りまするが、マアお這入りなさいまし。

重三　それは重疊、然らばゆるしやれ。（ト内へ這入る。）こりや番吾は後に殘り、其の外の者共は歸りて後方迎へに參れ。

若者　ハツ。

ト若衆兩人向うへ這入る。

重三　シテ幡隨長兵衛へは何の御用で態々と。

閑心　近附にならうと思ふて。

重三　それで寺西。

皆々　閑心様が。

閑心　知る人にならうと思ひ心斗りの身が手土産、聞けば長兵衛には一子があると申す事、男の子なら一寸よい手遊びと持せ參つた、釣臺の其手土産を取り次でくりやれ。番吾その品是へ。

番吾　畏りました。

ト油革をとる。釣臺の內より土手助頭より片額血に染みたるを、白布にて卷き是に水引結びのし付けてあるを番吾介抱して引出す、土手助うなりながら出てよき處へ倒る。皆々思入。

一　何だ〳〵見りやア手負のつらへのしを附けて、

二　是を息子へ、

皆々　進物とは。

重三　定めしかうと待つて居ました、土手でそばへた奴がのうてん、ぶちこわしたを根に持つて持ち込んでムつたか。

閑心　いかにも昨夜大音寺堤で身共が家來がすてつぺんぶちこわされて半死半生、先の相手は長兵衞が秘藏のがきが仕業ゆゑ家來を一人進上する、武士の小者のしやつつらへ生疵受けちやア寺西閑心刀の手前相立たぬ、此の趣をとつくりと長兵衞へ申し聞かせろ。

一　こりやア成程、

皆々　親分へ。（ト奥へ行かうとする。）

重三　イヽヤ言ふにやア及ばねえ、相手と言ふのは此の重三郎だ。オイ寺西さんこんたの目から見なさつたら、まだ青二才と思ふだらうが憚りながら幡隨長兵衞が子分、後ろ立は何れも樣と親分

が附いて居るのに、體にほつたくりから紋々向ふ見ずの命知らず、喧嘩と來りやア一番がけ十萬億土へ勇みの先棒、極樂重三と言ふ者だからわつちを相手にしてくだせえ。

閑心　イ、ヤわれにやア取り合ない、是非とも此由長兵衞へ。

重三　ハテ長兵衞は知らぬ事、わしを相手に。

ト體をすり附ける。

閑心　よしない事を。（ト突退ける。）

重三　そこを重三が。

ト又寄り子分皆々立ちさわぐ。此の時奧より長兵衞ツカ〳〵と出て來り重三をさゝへ、

長兵　是はしたり、どうしたものだ。

重三　親分かまわつしやるな〳〵。

一　モシあの閑心どのがね、

長兵　ハテサどう言ふものだ、相手はお武家様だぞ、手めへがそれだから野郎共の形りを見ろ、ヤイわいらが形りは何だ、鉢卷をとれ〳〵尻をおろせ〳〵、馬鹿なやつらだ。

トしづめる、是にて皆々捨臺詞にて扣へる。長兵衞閑心の前へ來り住ふ。

是はあなたが寺西閑心樣でムりますか、則ち私が幡隨長兵衞めでムりまする。見苦るしい所へよう入つしやいました。騷がずとお茶でも入れろ、氣の附かないやつらだ。

閑心　アイヤ心遣ひ無用にしやれ、すりやお手前が男と呼ばるゝ幡隨長兵衞、成程立派な男ぢやわい、身共は寺西閑心と言者委細聞いたか存ぜぬがが、きが仕出したほててんごう取上るもおとなげなけれど、此の儘に濟しては朋友の手前立たぬ、殊に相手は男一疋長兵衞が悴ゆゑ、猶更濟まぬ濟み申さぬ、サ町人作らも性根をすえ身が侍を立てゝくりやれ。

長兵　よう御座ります、あなた樣がおつしやらないまでも、さつきのしだらは私も薄々聞いておりまする、大方今に御沙汰があらう、但しはわたしをあなたへ召さるゝ事かと待ちましたに、反て御自身いらしつて恐入つたる長兵衞が、始末方に手こずつておりまする、と申してお侍樣を私がどうしてどうしてお立申すと言ふ事は。

閑心　出來ぬと申すか。

長兵　ヘイ左やうにも申しますまい、あなたのお氣には叶ひますまいか存じませぬが、此長兵衞が御返事は、

ト合方、あたりを見て、

ヤイ其の俎板を爰へ出せ。

ト有、ふれ、俎板を皆々閑心が前へ直す。此の内長兵衛奥へ這入り、長松を抱えて來て此の俎板の上へ乘せる。

閑心　さうして居ろ。サア閑心樣長兵衛が悴の長松御家來衆の言はど故、あなたのお腹を立てる爲め其の俎板でお手料理、煮るとも燒くとも刺身でも蔽と違つて江戸前の此の長兵衛が生ケスの魚、あなたの差したる太刀魚で親が見るまへ細造り、あらの出ぬ骨付きはわしに下せえ、閑心樣かたみとわけて貰ひたう厶ります。

皆々　親分そりやアあんまり。

長兵　だまつて居ろえ。

重三　親分そりやア小紫さんの腹立を爰へ廻して。

長兵　ハテそりや合點だ、そう見たゆゑに此のがきの命おしまぬ長兵衛が。

閑心　氣性は聞けど是程にはよもあるまいと思ひの外、我子を突出す男氣は流石は達衆の幡隨長兵衛、爰は寺西閑心が義理にも此儘此悴助ける事と思はうが、そこを助けぬ生れ附涙を掛けては白柄組へ刀の手前身が立たぬ、馳走に任せ庖丁するぞよ。

長兵　御念に及ばぬがきが命、お手をおろされ存分にサ切らつしやい突かつしやい、是長松われも幡随院長兵衛が子だ、一度死んだら二度は死なぬ、百迄生きる者もあり生れて直ぐに死ぬもある。われが六つでくたばるも皆夫までの約束だ、俎板の上で死ね、ほへづらは見つともねえどうで死ぬなら笑つて死ね、其替りにやア酒にしてとゝが腹へ納めてやらア、なアにびんぼうゆるぎもさしやアしねえ。

長松　アイ笑つて死にます、是伯父様鯉や鰻を見るやうにはね廻りはしません、誰だと思ふヱヽつがもねえ。

重三　サ切るなら閑心おれを切れ其子は重三が。

ト長松へ思入。長兵衛さゝへて、

長兵　是サ極樂おぬしやアこつちへハテマアのきやれよ。

ト重三を引退け無理に制して、

サア閑心様庖丁さつしやい。（ト閑心思入あつて、）

閑心　どれ馳走に任せて、

ト立上る。皆々思入。長兵衛抑さへて、

長兵　コレ。サアすつぱりとやらつしやい、町人づれのわしらと違ひ閑心樣の御手料理、其替りには下されたつらに當りのあるやつこは。

ト土手助を引とらへ出刄を立てかける、土手助震へる。

土手　ア、是々、どうする〳〵。

トぶる〳〵として恐れる。

番吾　こりやア庖丁であぶない〳〵。（ト同じく震へる。）

閑心　長兵衞、われは身が家來を何とする。

長兵　モシ閑心樣あなたの家來とおつしやるが此奴めは私へ近附きになるしるしだ、是つらへのし迄挾んでわしにくだすつたではムらぬか。

閑心　サアそれは。

長兵　それとは覺えの惡い、伜を突出す上からは貰つた奴はわしが存分、併し此場の追善に精進成らぬなま物は不遠慮ながら此奴生かして置かぬが則弔ひ、あたまの疵が癒ようがきとこいつをかへ〴〵の料理は互角掛刄庖刀、がきの命をとらつしやい、わしア奴が息の根を。

ト出刄にて土手助を切らうとする。番吾も震へ居て、

番吾　こいつはたまらぬ、

ト いつさんに逃げて向うへ這入る。土手助思入、

土手　アヽモシ〳〵小僧を切ると此奴は長兵衛に切られます、モシ親分々々此奴を一人助ければ猫千匹に向ひます、命斗りはどうぞお助けなされて下さりませ。モシ親分さのみな疵でも御座りませぬ

ト のしをとつて見せる。閑心思入。

長兵　むだをぬかすな、どれ息の根を。

ト 立掛る。土手助はいつさんに下手へ這入る。

閑心　長兵衛、待ちやれ。

長兵　どうしました。

閑心　悴が命助けてやらう。

長兵　イヽヤそう言はずにぜひに悴が。

閑心　イヤよい〳〵思へば生先ある悴が命とるも無益。がきを切るよりまだ外に。

長兵　外に切るとは権八と小紫が手を切て貰ひたいといふ事か。

閑心　さすがは長兵衛よく見抜いた。

長兵　大方そこらでムりませう。

閑心　男を立てる長兵衛へ、此の閑心が折入つて頼みといふは小紫、是非とも身受けは身共が致す、そう心得て貰ひたい。

長兵　そりやモウわしが抱への女郎ではなし、身受けの事は三浦屋まかせ、併しアノ權八と今更切れると言ふたとて。

閑心　サアそこを切らせる工夫があるわ。

長兵　何アノきらせる。

閑心　工夫は是だナ。

ト懐よりふくさに包みし一巻を出す。皆々見て、

長兵　シテ其譯は。

閑心　奇兵の秘書、諸流へ渡る眞妙劍。

ト二階より權八窺ひ居て、

權八　ナニ眞妙劍とな。

閑心　扨こそ權八。エイ（ト打　ける。權八受取見て、）
權八　ヤ、是ぞ尋ぬる眞妙劍。
長兵　何故あつて閑心どのが。
閑心　身共が爲めには武藝の師範兵左衞門どのへの聊か寸志。
長兵　すりや師弟の緣により。
閑心　戀路の意恨打捨て權八どのへ此の場の進物。
權八　エ、忝い。

ト此時下手にてどん／＼を打つ。皆々思入あつて、

閑心　ヤ、あの物音は。
權八　われを召捕る手筈なるか。
長兵　上みのお手數かゝらぬうち、
閑心　ちつとも早く其の身の罪を、
權八　直樣是より訴へ出ん。

ト權八下手へ行く。此時手先出て、

手先　御用だ。

ト懸るを權八引付る。長兵衞、閑心思入あつて、

閑心　爰かまはずと。

長兵　跡の事は、

ト此時權八手先をぽんと返すを木のかしら、

案じねえがいゝ。

ト此見得皆々よろしく引ばりドン〳〵にて、

拍子幕

美濃屋三勝（みのやさんかつ）
あかねや半七（はんしち）

艶容女舞衣（はですがたおんなまいぎぬ）

美濃屋三勝
あかねや半七　艶姿女舞衣

上鹽町茜屋酒店の場

役名　半兵衛、宗岸、半七、丁稚長太、宮城十内、徳右衛門、作兵衛、半兵衛女房おさよ、美濃屋三勝、おつう、お園。

上鹽町茜屋酒店の場　平舞臺常足三間の二重、上手障子家體、眞中三尺の暖簾口、二重下手に帳場格子、酒樽の書割、何時もの所門口、總て上鹽町茜屋酒店の體、丁稚長太店先に腹匐ひになつてゐる、唄にて幕明く。ト納戸口からおさよ出て來る。

さよ　これ長太よ、そのなりは何ぢや。今日は親仁どのには代官所からお迎へで、お年寄や町のお衆と朝から行かしやつたゆゑ、何事が起つた事と、内で更やかう案じて居るに、その氣もつかぬ、たわけもの、チトたしなみおれ。

〽しかられて俄にしよげりまじ〱して水洟すゝる斗りなり、早や日も西に片かげを歩む姿は一ト風ある、二ツ三ツの子を抱き酒屋の門へ歩み來て。

ト唄になり、向ふより三勝、好みの拵へ、おこそ頭巾、おつうを抱き門口に來り、

三勝　お邪魔ながら酒を少し下さりませ。

長太　何ぢや酒くれ、こちの内は商賣もの、遣る酒はない程に、とつとゝ通りや〱。

三勝　イエ〱私は物もらひではムんせぬ。よい酒が一升買ひたうムんすわいなア。

長太　そんならおまへは、ア、酒買ひのお客さんか。

さよ　又しても〱阿呆めが麁相ばつかり、モシ御覽の通りの阿呆故、おゆるしなされて下さりませ、してよい酒とおつしやるからは、銘酒でもさし上げませうか。

三勝　ハイ遣ひ物に致しますのぢや程に、隨分よいのを内方の塗り樽に一升入れて下さりませ。

さよ　オ、遣ひ物なら相生がよからう、それ長太、塗り樽を下して、いつものやうに合點か。

長太　ハイ〱。

〽埃を拂ひ塗り樽に、上具さし込み小さんの呑みよい程らいに、詰樽の口にべつたり銘酒の書附け、手早く張つてさし出せば。

ト是にて長太、塗り樽に酒を入れ張紙をなし、三勝の前へ持って行く。

三勝　オヽ相生とは目出度い銘酒、價は。
近頃わりなき事ながら內方の子供衆に此の樽持たせて、一寸そこまでおかしなされては下さりませぬか。

ト　おあし取り出し、

さよ　オヽそれは何よりお安い事、こりや長太よ御前垂をはづしてお女中樣について往て樽の明いた時、とりに行くやうに先きさまを能う覺えて戻らうぞや。

長太　そんならわしは此の樽を持つて、此の女中についてどこまでも行くのぢやなア。

さよ　オヽさうぢや、そして先きさまを覺えてゐいよ。

長太　そりや覺えては居るけれど。もしや此の女中が道で死んだら、わしも死なにやならぬのか。

三勝　エヽ。（ト三勝ぎつくりこなし。）

さよ　これ〳〵何をいふ、延喜の惡いそんな事はいふものでは厶りませぬ、モシ阿呆ゆゑにどうぞごめんなされて下さりませ。

三勝　イヱ〳〵どうで今宵は。

さよ　ヱ。

三勝　イヱ今宵は是非に空けますゆゑどうぞおかしなされて下さりませ、お禮は戻りに申しませう。

長太　そんならお家さん往て參ります。

三勝　いかい御退儀ぢやなア。

長太　なんのおまへ仕やうがないものサア早くお出。

さよ　能うお出なされました。

三勝　テモ氣さんじな子供衆ではあるわいなア。

〽挨拶つど／＼、酒樽を長太に持たせ。

ト唄になり、三勝長太附添ひ向うへ這入る。

〽出て行違へて主人半兵衛元のがんぜう氣はいらくら急ぐ足どり我家の軒、後に年寄五人組打ちつれ伴ひ立歸る。

ト此の淨瑠璃の切より唄になり向うより年寄徳右衛門、羽織袴にて先きに立ち次に半兵衛羽織り着流し手錠をうけしこなしにて懷手をして、後より作兵衛五人組の拵へにてつき添ひ出て花道にて、

徳右　イヤ半兵衛どのや、思ひもよらぬ今日の仕儀何と言ふてよいやらノウ作兵衛殿。

作兵　實にお氣の毒な事でムりますわいの。
半兵　さやうに言ふて下さる程面目もない悴のふしだら、あなた方へも御苦勞かけ何とも申しわけもムりませぬ、しかしながら內へ歸りましても此の事ばかりはどうぞ內分になされるやうお二人さまへお願ひ申して置きます。
德右　その事なら決して案じるには及ばぬ、能う呑込んで居る程に、
作兵　かならず氣遣ひせぬがようムる。
半兵　有難うござりまする。
ト是を又唄になり本舞臺へ來り、德右衛門、門口を明け半兵衛となしあつて、
今戻りました。
さよ　オヽ親仁どの戻らしやつたか、お年寄さまどなたも〳〵いかい御苦勞、思ひがけない代官所からのお召、何事が起つたかと今朝からわしは案じつゞけサア〳〵どうぞ通つて下さりませ。
兩人　そんならゆるして貰ひませう。
ト是にてよろしく三人二重へ上り、
さよ　さうしてまア別に氣遣ひな事ぢやムりませぬか。

徳右　イヤモウお内儀、さして氣遣ひ事ぢやムらぬ。

作兵　たかゞ爰の半七が山の口で人殺し。

さよ　エ、何アノ半七が

トびつくりこなし。半兵衞は是をまぎらして、

半兵　アイヤお宿老、忰めが一頃とは違ふてぞけ出したゆゑの勘當、御挨拶は忝なけれどもまづその分になされて何にもおつしやつて下さりますな。ナ女房ども案じていやつたであらうが何にも氣遣ひな事ぢやなかつた、年の切れた證文の賣買すなハツ畏りましたと何事もなう濟んで戻つた、皆さまは嘸御忘屈お酒でも燗してあげませや。

〽夫が詞に悦ぶ女房。

さよ　それはまあ〳〵目出度い事、身に覺えはなけれども時の災難でどんな事が起らうと、案じた程は悦ばぬ、皆樣のくたびれ休め肴はなくとも御酒一つ。

〽と立つをとゞめて。

徳右　ア、ヤお内儀よしにさつしやれ〳〵、下宿で支度して酒もたんとのんで居れど理に入つたかして醉も出ぬ。

兩人　アヽ氣の毒な事ではあるわえ。

〽宿老のなげ首、何とやら樣子ありげのその折から上の町からおい〳〵と泣いて
戻る丁稚の長太、片手に酒樽片手に抱く幼子も倶に泣く〳〵我が家の內。

ト向ふより以前の長太、おつるを背に負ふて片手に酒樽を持ち泣きながら出て、

長太　ワア。（ト泣きながら內へ這入る。）

さよ　エヽ此の阿呆めが餘所の子にせぶらかされ、よい年をして泣くといふ事があるものかいのう。

長太　イエ〳〵こちやせぶらかされはせぬけれども先刻の女が俺をば辨天の內へ連れて往て一寸そこ迄往て來る程に、此の子をちつとの間抱いてゐて呉れといふて、そしてからどこへ往つたやら戻らぬによつて、金比羅樣や八幡樣や生玉の內をばあちらへ往つたりこちらへ往つたり、尋ねる中に此の子が泣くによつてそれで俺も悲しくなつたワア。（トよろしく泣く。）

さよ　これ〳〵長太それはおのれが阿呆ぢや故に、やつぱり辨天の內に待つて居ればよい事を、定めて爰へたづねて見えるであらう。

〽泣く子をすかし抱きとり。

オヽよい子や〳〵姫ごぜの子ぢやそうな。

ト長太が提げし樽打ながめ、

ハアかわつた書附、進上茜屋半兵衛様とこちらの名が書いてある、これ見やれ親仁どの。

〽と樽さし寄すれば。

半兵　ハテ此の廣い大阪、同じ名前はいくらもある。

〽といひつゝ眉に皺。

進上上鹽町馬場先にて茜屋半兵衛様、ムヽ馬場先で茜屋半兵衛といふはこちの事ぢやが、見りやアこちの塗り樽、こりや様子でもある事か。

さよ　サア様子といふのは、さつき見知らぬ女中が酒買ひに來て、あの長太を雇ふてつれて行かれたが、その樽に此の書附。

半兵　なんぢや見知らぬ女が酒買に來た、その時に何のわけもいわずに長太を雇うてムヽ。

徳右 作兵　ハテめんような。

〽ふしぎに立寄る五人組、こゝらが宿老の分別所と、いふても詰り塗り樽のはげた天窓をかたむけり。半兵衛膝をてうと打ち。

半兵　ハヽアよめた〳〵、こりや捨子ぢやわいのう。

さよ　エヽ捨子とは何を證據に。

半兵　ヘテこちの内で買うた酒に進上茜屋半兵衛樣と書附け、此の子をば阿呆に抱かしてどこへやら行き方知れぬは疑ひもない捨子、此の半兵衛を見込みに養育賴む印しの此の酒。

皆々　エヽ。

半兵　なんとさうぢやあるまいか。

德右　なる程〳〵言はしやればそんなもの、何のよしみもない人が酒呉れる筈もない、これが捨子ならなんとまア利口なしやうぢやムりませぬか。

作兵　それいのう、蜜柑籠にも入れずに新しい捨子の趣向、こりや流行ませうわいのう。

德右　これ〳〵半兵衛どのや、これが捨子の筒もたせではあるまいか。

半兵　はて何といたしませう、突きつけられた事ぢやもの養ふてやらずばなりますまい。

さよ　オヽそれ〳〵こんな事も緣のもの、乳味湯で育てませう。

德右　オヽそれはいかい後生ぢや、イヤそのかわりその子について無論妨げある時は、何時でも町が證人サア作兵衞どの是をしほにもう往かうぢやないか。

作兵　ほんにそれがよからう。

さよ　まア〳〵よろしいではムりませぬか。

徳右　イヤ〳〵又その内樣子をば。

半兵　ア、モシ。

ト目くばせする、徳右衞門呑み込んで、

徳右　そんなら半兵衞殿。

作兵　お內儀。

半兵　御兩人樣。

徳右
作兵　又逢ひませう

ト是より唄になり、徳右衞門作兵衞下手へ這入る。

さよ　サア〳〵何やかやで噪ぐつたりしたであらう。

半兵　奥へ往てくたびれをやすめやうか。

さよ　サアさうさつしやれ、ヱ、まあ道理こそ長太めはこんな所に眠つて、これ長太よ〳〵。

ト是にて長太目をさましびつくりして

長太　オイ樽の使ひなら眞つ平ぢや。

半兵　ヱヽ何を寢とぼけて居るのぢや。

長太　ヱヽなんぢや知らんがけたいの悪い、今日のやうなあんな大きなやゝ子に小し塗り樽をば片手片手にもたらして、此の腕がめり〳〵するに阿呆〳〵としかり飛ばされ、こんな賢い此の俺を阿呆といふは二人共俺よりよつぽど阿呆かしらん。

さよ　何をいふのぢやもう日も暮れた、八方へあかりをつけて置くのぢや、よいかや。

半兵　そんならおばゞ。

さよ　こちの人。

半兵　サアおじや。

〽幼子抱きおぢうばは一間へこそは。

ト半兵衛は幼子を抱き奥へ這入る。長太は庭の八方へ灯を點し奥へ這入る。

〽入相の鐘に散り行く花よりも、あたら盛りを獨り寢のおそのをつれて父親が世間構はぬ十徳に圓い天窓の光りさへ、子故に暗む黄昏時、主の妻は灯を燈し、表を締めにいそ〳〵と。

ト是にて向うより宗岸、坊主かづら、十德の拵へ、後よりおその、若き嫁の拵えにて出で來り直ぐに本舞臺門口へ來る、是と同時に奥よりおさよ、行燈をさげ出で來り門口にて顏見合せ、

〽出合頭に。

さよ　オヽ是は〳〵宗岸樣、そちらに居るはおそのぢやないか。

お園　母さま、あなたもお變りは厶りませぬかいなア。

〽いふ挨拶も何所やらに疵持足の踏途さへ、低き敷居も越えかねる、宗岸は遠慮なく。

宗岸　半兵衞殿はお宿にか。

〽娘を連れて打通れば妻は門の戸引立て。

さよ　サア〳〵まづお上りなされませ。

〽奥底もなき詞の中、それと聞くより半兵衞が一間を出づる澁々顏。

ト奥より半兵衞出て納戸口にて、

半兵　娘を連れて行かれたからは、こちの内に用はない筈、何の爲に厶つた事。

〽針持つ詞に妻は氣の毒。

さよ　イヤもう人さまに追従言はぬ偏屈なこちの人、必ずお氣にさへられて下さりまするな、此間は嫁女の歸つて居られましていかいお世話でムりませう。

宗岸　ナン／＼、半兵衛殿の立腹は皆尤も、三勝とやらに心奪はれ、夜泊り日泊りして女房を嫌ふ半七、所詮末のつまらぬことと無理に引立て行んだのは、娘にひけをとらすまい爲、儂が氣迷ひ、それから思案するにつけ、唐も倭も一旦嫁に遣つた娘、嫌はれうが如何しやうが男の方から追ひ出すまで取り戻すといふ理窟はない筈、こりや宗岸が一生の仕損ひと悔んでも跡の祭、園めも晝夜泣き悲しみ朝夕もすゝまねば、若しや病ひが起らうかと見て居る親の心は闇、儂も天満に年古う住んで居れば、人に理窟を云ふ者なれど、誤りは詫びねばならぬと年寄の面押し拭ふて來ました、なにかの事は料簡して、今迄の通り嫁ぢやと思ふて下され頼みます、これ夫婦の衆。

〽誤り入つたる挨拶にお園はうじ／＼手をつかへ。

お園　父さまの一徹で、無理に連れられ歸りしが、一旦殿御と極つた半七さま。

〽嫌はれるは皆私が不調法、鈍に生れた此の身の科。

今から隨分お氣に入るやうに致しませう程に、やつぱり元の嫁娘とおつしやつて下さりませ、お二人様。

〽跡は詞も涙なり。

さよ　なんのまアそつちさへ其の心なら、こつちは變らぬ嫁姑、ノウ親仁殿さうぢやないか。

半兵　さうぢやない、昔唐にも例しがある、大公望とやらいふ人の妻、夫にひまとり月日を經て、詫言に來りし時、鉢の水を大地にあけさせ、其の水を鉢へ入れよ、元の如く夫婦にならんと、大公望が云はれたと、日外講釋で聞いて來た。それと丁度同じ事、こなたの方から無理隙取つて、今更嫁と思へとは、行時まで云ふても返らぬ口詞叩かずと、早う連れていなしやれ〳〵。

〽膠もしやくりも納戸口、顏をそむけてゐたりける。

宗岸　サアその腹立は尤もなれど、重々の不調法は此の天窓に面じてどうぞ嫁に。

半兵　いやでムる、倅めは勘當したれば嫁といふべきものはない筈。

宗岸　サアそれもこらしめの爲、當座の勘當。

半兵　イヤ當座でムらぬ、七生までの勘當しました。

宗岸　ム、その又七生まで勘當した半七が代りに、こなた何で繩に掛らしやつた。

半兵　やア。

宗岸　半七とは親でもない子でもないこなたが、今日代官所で何の爲に縛られて戻らしやつたぞ。

ト半兵衛の肌をぬがせば繻絆の上から本繩に掛り居る故、皆々びつくりする思入。

〽思ひもよらぬ宗岸が詞に愕り驚く女房、嫁も倶々立寄つて肌押し脫がせば半兵衛が小手を緩めし羽翼締、ノウ情なや何ゆゑと嫁も女房もとりついて歎けば宗岸が。

さよ
お園　まだ驚くことがある、聟の半七は人殺し、おたづねものになつたわいのう。

エ、

〽聞くより二人は又愕り。

お園　それは何故、如何したわけ。

さよ　樣子を聞かして下さりませ。

お園　モシ父さん。

さよ　半兵衛どの。

〽問へども更に返答は、さし俯むいて詞なし、宗岸淚の目をしばたゝき。

宗岸　一昨日の晩山の口で、善右衛門を殺したは、茜屋の半七と噂を聞いた時は、嘸くまいか驚りせまいか、膝も腰も拔け果てしが、思へば〳〵不孝者、よい時に勘當さつしやれた、親に難儀の掛らぬは、未だ此の上の仕合せと思ふたは他人の料簡、違ふた此方の縛り繩、科極つた半七が命、一日なりと延ばしたいと、人殺しの科を身に引受け、繩にかゝつた此方の心は、眞實心に子を思ふ、親の誠と知れば知る程、宗岸が仕損ひ、半七の身の難儀、此方も勘當して仕舞ひ、儕も娘を取戻したら、親にかゝる首繩も無くよい事したと世間から、譽る人もあらうが、親となり舅となるも大てい深い緣かいのう、斯ういふ仕儀になつた時は、譽られるより笑はれるが親の慈悲、片時も早うと連れて來た心はの、一旦嫁におこしたれば、半七がいやがるなら、ハテ尼にしてなと此内で、御夫婦の亡き後の、香なりとも取らして下され、これ手を合して頼みます、詫言が叶はねば引放されたとつき詰めた、短慮な心も出しおろかと、案じ過して夜の目もあわず、母親はなしたつた一人のあいつを思ふ儕が因果、此方の繩目も半七が、科人になつたら猶可愛かろ、譬へ勘當が定でも久離切たが誠でて、眞實親子の肉緣は、切るに切られぬ血筋の親、儕も此方程はなけれども、娘は可愛いまして勘當はせぬ娘、愚痴なと人が笑はうが、わしや可愛不便に厶る、これ〳〵聞きわけて下され、頼みます半兵衛どの。

〽是迄泣かぬ宗岸が、堪へに堪へし溜々を、たくし掛けたる叫び泣き、我強う生れし半兵衛も、舅の心根思ひやり。

半兵　オ、道理ぢや〳〵宗岸どの。

〽と跡は詞もないじやくり、涙にむせぶばかりなり、半兵衛涙のうちよりもお園が顔を打ち守り。

何から何迄気をつけて、孝行にしてたもる、こんな嫁が尋ねたとて、もう一人とあるものぢや無い、世間の人の嫁鑑、半七が事は思はぬが、そなたに別るゝ半兵衛はよく〳〵不仕合せ、いなせとむない返しとむない、とは思へども、こつちに置けば此のまゝ若後家、侍やそれが可愛いいとしうおぢやる。それで詫言聞き入れぬ料簡して呼び戻さぬ、これ嫁女、必ずむごいと恨んでばしたもんなや、一人の倅がお尋ね者、あすより誰を力にせうぞ、孝行にしてたもつたが今ではけつく恨めしうムるわいゴホン〳〵。

〽せきあげせき入る舅の脊さするお園も正體なく、伏沈むこそ道理なれ、半兵衛漸う顔をあげ。

ト半兵衛吹き入り苦しきこなし。両人介抱して、

言はねばならぬ事もあれど、孝行な嫁女の手前、胸につまつて言ひにくい、宗岸殿奥の間で言ひ明さん、これお園そなたをさら〳〵嫌ふぢやない氣にかけてたもるなや、舅殿へ話す間しばらく爰に。

宗岸　そんなら何かの談を、

半兵　言ふたり、

宗岸　聞いたり、

三人　仕舞せうわいのう。

〽と三人はしほ〳〵奥へ泣きに行く、心のうちぞ哀れなり。

ト是にて三人はお園へ心を殘し奥へ入る、是を初夜の鐘鳴る。

〽後には園が憂き思ひ、かゝれとてしも烏羽玉の、世の味氣なさ身一つに、結ぼれ解けぬ片糸の、くり返したる獨り言

お園　今頃は半七さん、どこにどうして厶らうやら、

〽今さら歸らぬ事ながら、わしと云ふものないならば舅御さまもおつうにめんじ

子までなしたる三勝どのを。

〽とくにも呼び入れさしやんしたら、半七さまの身持も直り、御勘當もあるまいに。

思へば〳〵此の園が。

〽去年の秋のわづらひにいつそ死んで仕舞ふたら、斯うした難儀は出來まいものお氣に入らぬと知りながら未練のわたしが。

〽輪廻故、添ひぶしは叶はずとも、お傍に居たいと辛抱して、是までゐたのがお身の仇。

〽今の思ひに比ぶれば、一年前に此の園が、死ぬる心が付かなんだ、こらへてたべ半七樣、わしや此のやうに思ふてゐると、うらみつらみは露程も、夫を思ふ眞實心、猶いやまさる憂き思ひ。

トよろしく愁ひのこなしあつて、

明日はとうから父樣に又つれられて天滿へ往くに、半七さんのひよつとした儚ない便りを聞く

ならば、思ひ死にゝ死ぬであらう、とても浮世に立てぬ覺悟、嫌はれても夫の內、此家で死ねば後の世の、若しや契りの[illegible]にもと。

へ最期を急ぐ心根は餘所の見る目もいぢらしい、かゝる哀れも知らぬ子の、泣く聲に目や覺しけん一間を出て。

ト お園このうち懐より剃刀を出し死なうとする。此の時奥より以前のおつう出で來り。

つう　乳貰はう、乳が貰ひたい、おば〳〵〳〵。

へお園が膝に寄り添ふ子の顔、見て[illegible]り抱き寄せ。

お園　やアそなたはみのやのおつうぢやないか、爰へはどうしておぢやつたぞいのう

へ不思議ながらも抱き上ぐれば、半兵衛宗岸母親も、一間の內をまろび出で

ト是にて奥より三人走り出て、

半兵　オヽこれ〳〵嫁女、忝けない其の心底を、障子の內で聞くたびに拜んでばかりゐたわいのう。

さよ　禮いふ事もたんとあれど心のせくは此の子の事、美濃屋のおつうと言はしやつたが、半七と三

勝の。

お園　アイお二人の中に出來た、おつうといふは此の子ぢやわいなア。

さよ　エヽヽ親仁殿、聞かしやつたか。

半兵　おゝ聞いてゐる〳〵、其の又おつうをナヽヽ何で捨子にしてこちへおこした、こりやわけがあらう、噂どこぞに書いたものでもないか、早う尋ねて見や。

〽といふ內にわくせく開る守袋、內よりばらりと落ちたる一通、取る間遲しと封押し切り。

さよ　やア書置の事。

三人　エヽヽ

半兵　これ〳〵〳〵嫁女、そなたのよい目で早うちやつとよみや〳〵。

お園　アイ〳〵。

〽と淚ながらに封押切る。

トお園、書置きをとつて封を切り、

なに〳〵十度契りて親子となる、父の御恩は山よりも高きとの世のおしへ、我身にも辨へ居り候へどもその御恩も得送らず、儘ならぬ義理にからまれて心にも、心にもあらぬ不孝の罪、お許し下され度く候、わけて母さまの御養育、申しお前の事でござります、能うおき〻なされませ。

さよ　オヽ能う聞いて居ますわいの。

半兵　そしてその跡は、何と書いてあるぞ。

お園　アイ母様の御養育、海より深き御恵み、親父様の御機嫌悪しい時には影になりひなたになり、幾千萬の心遣ひも、泡と消え行く我が難儀、人を殺せし身となり候へば思ひもふけぬ御別れ、

エヽそんならやつぱり半七様は。

半兵　おいのう嫁女、善右衛門をば殺しましたわいのう。

お園　エヽ。

半兵　あの善右衛門といふ奴は大ていや大かた悪い奴ぢやないわいのう、あんな悪者でも喧嘩両成敗、我が子の命を下手人にとらる〻と思へば〳〵宗岸どの口惜しい〳〵無念でござるわえ。

〽無念に厶るとじつくわい涙、母も涙を押し拭ひ。

さよ　これ嫁女、後はわしがよみませう。

お園　ハイどうぞよんで下さりませ。

　トおさよは手紙をとりあげ、

さよ　なに〳〵人を殺し一日も生きながらへる所存なく候へ共おつうと申す娘一人御座候て、か弱き生れつき、不便さあまる親心　それが心に引かされて今日迄長らへ候へ共、所詮助からぬ身に候へば思召も顧みずおつうを遣はし候まゝ、私の小さくなりしと思召され〳〵。

半兵　ドレ〳〵ばゞ見せやいのう〳〵。エヽ、私の少さくなりしと思召され御養育のお世話の程くれぐれ頼み上げ候、子を持つて親の御恩を知るとおつうが不便さいぢらしさに、お二人様の御恩の程を猶更此の身にしみこたへ、有難く存じ奉り候、又々心がゝりは親仁様の御勘當相果て候後にてもお容し下され候様、母様よろしくおとりなしこれのみよみじの障りに御座候。

さよ　エヽ何といやる、そんならア！そのやうなことが書いてあるかいのう。

半兵　オイのう。

さよ　おゝ道理ぢや〳〵可愛やなア。

　へ老の繰言今更に先立つものは猶涙、なく〳〵取上ぐる書置の、讀むも儚なき世の中に。

ト此の淨瑠璃にて以前の三勝、半七と出てこなしあつて、用水桶のうしろへ小がくれする、お園はまた書置を取り上げて、

お園　女子はその家にあつて定まる夫一人を頼みに思ふものに候處、その頼みに思ふ我身持、いつしか愛想らしい詞もかけず、つひに一度の添ひぶしさへもなく候へ共、其の色目も致さずして夫大事親達大事と辛抱に辛抱なされ候段山々嬉しく嬉しく存じ参らせ候、今迄すげなふ致せし事もさら〳〵嫌ふではなく候へ共、三勝とはそもじの見えぬ先からの馴染にて子までまうけし中に候へば万に過ぎ去りもなり難くそれ故疎遠に打過ぎ参らせ候、併し夫婦は二世と申すことも候へば未來は必ず夫婦に候。ヱ、こりやまア誠か半七樣。

宗岸　こりやイ娘未來で夫婦と書いてあるかいやい〳〵。

お園　アイ〳〵書いてあるわいなア〳〵。

宗岸　未來は未來ぢやが一日なりと此の世で女夫にしてやりたい〳〵わい、なんとしてまア半七は善右衛門を殺しましたぞ、どれ〳〵もちつとぢや、わしが讀んでやりませう。

お園　イヱ〳〵私がよみまする。

宗岸　イヤおれにも少と讀ましてくれ。

お園　イエ〳〵私が。
宗岸　イヤおれが讀む。
ト兩々手紙を引き合ひ、宗岸引とつてこなしあつて、
ヱ、そないにしたら破れて仕舞ふわい。兎角不孝の我等に候へども、死後には嘸やお二人や宗岸様の御歎き、隨分〳〵力を付け此の身に代つて御孝行になされたまはるべく候、申し殘したき事どもは數々候へ共、涙に字生も見えがたく、あら〳〵惜しき筆止め申し候、たゞ〳〵おつうが事のみ頼み上げ候。
へ讀みも終らずお園が苦痛。
ト是にて皆々恟りして、
これお園どうぞしやつたか。
さよ　これ嫁女。
半兵 さよ　嫁女やアイ。
お園　イエ〳〵どうもしは致しませぬ、すこしの間此の所で。
さよ　オヽあたゝまつたら直るであらう、幸ひこれに。

お園　イエ／＼構ふて下さりますな。

さよ　それこれで暫時あたゝまりやいのう。

〽お園をいたはり宗岸は納戸の内へ入りにける。後には何の頑是なき幼な遊びのおつうをば見る半兵衛はたまりかね。

半兵　これおばゞ是迄に初孫の顔が見たいと心に思へど世間の義理、それ故逢ひも見せなんだが斯ういふ事と知つたらば顔見ぬうちがましであつたア、あれを見やいのう、なんにも知らずに手打やあばゝ斗りしてゐるわいのう。

さよ　オイのうこりや孫よ、モウとゝもかゝもない程に此おばゞと一緒に寝ませうぞや。

〽とはいふものゝ乳もなし今から先の寝起きにも嘸や歎かん親々が知らずに居るか胴慾もののむごい心いぢらしやといふ聲洩るゝ、三勝が思はず乳房握りしめ。

三勝　乳は爰にあるものを飲ましてやりたい顔見たい、エ、乳がはるわいなア。

〽身をふるわさせてかけ入らんも關の戸に空音もならず羽ぬけ鳥、親は外面に血の涙、子はやすかたの安からぬ悲しさせまる内と外、一度にわつと涌き出る、涙

浪花江いづみ川小さんを汲み出す如くなり、半七は齒をくひしめ。

ト是にて用水桶のかげより半七出て、

半七　深きお情、是非もなや勿體なや、不孝をゆるして下さりませ。

〽悔み歎けば三勝も。

三勝　イヱ〳〵それも皆わたし故、おゆるしなされて下さりませ。

〽ともに詫び入るその内にも。

半七　いつまで泣いてもかへらぬ繰り言、親仁樣のお繩目早うほどくは身の最期、いさや急がんサアおぢや。

三勝　アイ。

〽と立ち上りしが、今生の別れにせめてお顏をと、さし覗けば三勝も。

せめていまわにおつうに一目。

〽と延びあがり見れども親子隔ての關、何と千萬無量の思ひ兩手を合せ伏拜み。

半七　さらば。

三勝　おさらば、
〽さらば〳〵といふ聲も歎きにうづむ我が家の内、見返り〳〵死に行く身のなり果てぞ哀れなり。
ト是を早き合方になり、兩人別れのこなしよろしく立つて、半七は三勝の手をとり向うへ入る。
半兵　此の書置きの文箱では今宵最期と極めし半七、宗岸殿へ〳〵。
〽半兵衛ハツト思ひ付き。
ト奥より宗岸出で來る。
オヽ宗岸殿。此の上は御苦勞ながら半七が行衛、手わけしてどうぞ尋ねて下され。
宗岸　オヽ尤も、娘をばよろしく頼みましたぞや。
半兵　サア〳〵早う。
〽早う〳〵と身づくろひ、立出でんとする所に思ひがけなく表より。
ト下手より宮城十内、野袴、ぶつ先、大小の拵へにて家來提灯を持ち出で來り、門口へ來り、
十内　半兵衛宅は是なるか。
ト家來門口を明ける。

宗岸　オヽあなたは宮城十内樣、まづ〳〵こちらへお通り下され。

十内　然らばゆるしやれ。

ト内へ入る、皆々見て、

半兵　オ十内樣、何用あつて此の所へ。

十内　オヽサ身共が是へ參りしは、善右衛門をば殺せし科人召とつたるゆゑ。

皆々　なんとおつしやる。

十内　その仔細申し聞かさん。（ト合方になり。）半七が殺せしとある今市の善右衛門は、國許にて用金を盜みし盜賊ゆゑ召捕りに來りし所一昨夜半七に殺されし由、則ち善右衛門の同類たる庄九郎を召捕り詮儀なせしに善右衛門を殺せしは庄九郎がなす業と彼が白狀ゆゑ、もはや半七親子に科はあらざるぞ。

半兵　スリヤ半七に人殺しの科はムりませぬか。

十内　オヽサ半七が疑ひ晴れる上は、其の方がいましめはといて遣はす。

ト是にて十内始め皆々半兵衛の本繩にかゝりしを解いてやる事、半兵衛嬉しき思ひ入れにて、

半兵　コリヤマア夢ではないかのう。

宗岸　是といふのも十内様の皆お情。

皆々　有り難うムりまする。

〽悦びあふぞ道理なり。

宗岸　サア此の上は半七が命のある内に止めて下され、半兵衛どの。

〽あせるを聞いて十内が。

十内　なに半七が死に参りしとや遅かりし残念至極、此の上は少しも早く手わけなし夜明けぬ内に詮儀しやれ、我も諸方へ手をわけて必ずさがし遣はさん。

宗岸　わしも後から行く程に、半兵衛どの少しも早く。

半兵　オ、合點ぢや〳〵、そんなら後を頼みましたぞ。

〽親子の愛に引別れ、後を慕ふて。

ト床の三重にて半兵衛せつたをはき、花道附際へ行ききつときまり、せつたを手にとつてぬぎ向うへ這入るを木の頭、風の音にてよろしく

幕

櫻姫（さくらひめ）清玄（せいげん）

傾城入相櫻（けいせいいりあひざくら）

櫻姫
清玄
傾城入相櫻

大序

壬生館の場
鳥羽四つ塚の場

役名 船岡式部、船岡軍藏、清水宿直之助清玄、奴壬生平、磯島嘉忠太、清水寺住職、男山神職、安達逸當、安達惡太郎、奴宇治平、盗賊蝦蟇丸、飛脚藤吉
上使花町、腰元みどり、まゆみ、十六夜、さつき等。

壬生館の場　造物向う一面の御簾家體、見付金襖。天王立にて幕開く。

呼び　安達逸當樣、惡太郎樣お入り。
呼び　清水清玄樣、清水寺の住職お入り。

ト花道より安達逸當、同惡太郎、船岡軍藏、奴宇治平、刀箱を持ち出る。假花道より宿直之助清玄、

奴壬生平、後より清水寺住職、同宿二人付添ひ出る。奥より管領家の使者花町、船岡式部、小姓二人、近習二人を連れ出る。

式部　管領家よりの御使者。

皆々　御苦勞に存じまする。

花町　この度奉納祈禱のうち寺院内の守護には、惡太郎篤と申渡したぞ。

惡太　畏りまして御座りまする。

軍藏　流石逸當殿の子息程あつて、お目見得初めに此大役、惡太郎殿嘸お悦びで御座らう。

惡太　如何にもコリヤ拙者が武藝の程を、お聞き及びなされて、仰せ付けられしものであらう。

軍藏　夫々、畢竟有職の心掛けは浪人者の分相應。刀をさす身が武藝鍛錬致さいでは、足のない駕昇とやら、ハヽヽヽヽ。

宇治　憚り乍ら、御祈禱のうち萬一騷動に及ぶとても、お苦になさらぬ惡太郎樣と御存じなければ、御勤番は仰せ付けられぬでごはりませう。その證據は清玄樣のお役目は、丁稚小僧も同然でごはります。

壬生　コリヤ〳〵主人のお役目が手代や丁稚小僧とは、どの頰桁にてぬかすのぢや。有職の心　は浪

人者同様とは、此耳へ突抜けだぞ。主人の役目に刀の入らない因縁が聞きたい。

宇治　奉納とやら、お使ひとやらは、歩いて行けば済む役ちや、丁稚といふたが誤りか。

壬生　その悪口料簡ならぬぞ。

宇治　うぬ、その頬桁を。

壬生　何を。

ト兩人反りをうつ。

逸當　宇治平、待て。

宇治　ヱ、。

逸當　その箱に凶事あらば何とするぞ。

兩人　眞平御免下さりませう。

逸當　悴、その箱これへ。

惡　ハツ。

ト箱を花町の前へ直す。

逸當　それこそ紛失なせし朝日丸の名劍で御座りまする。

花町　スリヤこの箱の内が。

逸當　應仁の頃橋本大渡りの戰場に於て紛失したる故、土中に埋れあるやも知れずと、百姓共に申し付け搜索致せし處、思案に違はず手に入る名劍、燒刄に永の一字、中身に倶利迦羅明王の咒を彫りしは、紛ふ方なき朝日丸、早速お手に入りまして悅ばしう存じまする。

花町　又と得難き重寶を探り得たる逸當の忠節、その功に依り如何樣の願ひありとも聞き屆けん。

逸當　スリヤ願ひの品お聞き屆け下されるとな、お願と申すは是なる式部殿の息女櫻姬、かねく悴惡太郎が妻女に貰ひ受けたく、屢申し入るゝと雖も、今に返答承はらず、何卒お詞を添へられませうなれば有難う存じまする。

式部　イヤ逸當殿、幾度申し越さるゝとも櫻姬が緣邊承知致さぬは、下世話に申す善い仲の垣、この願ひ某はえお受け申さぬぞ。

軍藏　兄者人、そりや偏屈と申すもの。

逸當　スリヤ上意を背いても親しまれぬかな。

式部　上意とあれば背かれねば、その上意を蒙らぬ內御辭退申す。京都の兩守護職があいやけと成り政道に過ちあらば世の人口が相濟みませねば。

逸當　ハテ是非に及ばぬ。

花町　恩賞は追つての沙汰、名劍の虚實糺すは式部大輔、急いで檢分致されてよからう。

式部　然らば上意に隨ひませう。小姓共手水を持て。

小姓　ハツ。

ト湯桶黑塗りの盥手拭を持ち出る。式部手を洗ひ目利のこなしあつて、

式部　朝日丸の名劍に能く似せては御座れども。

皆々　何と。

式部　俗に申せば贋物でござる。

花町　ムウ。

惡太　ハヽヽ、櫻姫を所望致すを根に葉に持ち、朝日丸を贋物とは、船岡殿意地を立てらるゝも事に寄る。その手では參り惡い。

式部　理不盡に娶はせよと上意あつてこそ。意地を立てる筋もあらう。それ迚も私事、上を僞り守護職の政事がならうか。某先君のお側に勤め、朝日丸の儀は燒刃の鍛ひ、にえの濃淡、永の一字のたがね目迄一々承知、その外天下の重寶重器本阿彌も手を置く某、殊に朝日丸を外の劍と合

はすときんば、劍の威德に戰ふ刄物を打折る奇特、疑はしくば試み召され。

花町　さては贋物なりしか。眞實の朝日丸は愈々行方相知れぬか、ハテなア。

式部　宿直の者、先達て申し渡した男山の神職、召し寄せしか。

宿直　仰せ付けられました一品諸共、次へ召連れ控えさせ置きまして御座りまする。壬生平、男山の神主これへと申せ。

壬生　ネイ〳〵、男山の神職急いでこれへ。

神職　ハア、。

ト神職仕丁二人に唐櫃を荷はせ出て、よき所へ直させ。仕丁は下手に控へる。

式部　退儀々々。恐れ乍ら花町樣へ申上げまする。先達て朝日丸の詮議の手掛り、取り寄せ置きまして御座りまする。

花町　ナニ手掛とは。

式部　男山小金橋の邊りの戰場に、落散つたる武具弓矢打物に至るまで、男山修覆料に寄附せられし其の中にて、名ある者の所持する帶劍を、この唐櫃に納め上意を以つて寶藏へ秘め置かれ、先の管領上杉殿の支配する所たり。この人故人となり給ひてより右の仔細を知る者なし、某心付

き傳奏より鍵を預り奉り、斯くは計らひまして御座りまする。

花町 天晴れ式部、急いで唐櫃改めてよからう。

式部 ソレ宿直之助。

宿直 畏つて御座りまする。

ト宿直之助清玄件の鍵にて唐櫃を明け、太刀刀を尋ね、中より一腰を取り出し。

宿直 梨地に龍の蒔絵の鞘、柄は鳳凰の目貫に北斗七星を据えしは、尊氏公の拵へ給ふ朝日丸の飾り イザお改めを。

式部 (ト取つて)これこそ相違なき朝日丸。

花町 スリヤ眞實の朝日丸とな。

逸當 恐れ乍らお願ひが御座ります。某持參の朝日丸を贋物と申す、式部殿の詞を疑ふではなけれど、この二腰の朝日丸にて式部と立ち合ひ、最前の詞の通り折れし方は贋物と虚實を糺す立合を、何卒仰せ付けられませうならば、恐悦至極に存じ奉りまする。

花町 シテ式部大輔の存念は。

式部 虚實を糺す立合なれば望む所で御座りまする。

花町　双方得心の上からは、立合を許すまいものでもないが、何れにせよ凶事あらば、何の命を以つて東山殿の御用に相立つ所存ぢやの。

兩人　サアその儀は。

花町　表を和げ内に怒氣を差挾むは愚者の爲す業、一方に凶事あらば双方共に所領沒收、家名に替へても立ち合ひ召さるか。

式部　とあつてこの朝日丸の、

逸當　虚實確に相分つは、

花町　兩人の心にあらう。

ト兩人ムムとこなし。

壬生　アイヤ其の立合憚り乍ら、下郎に仰せ付け下さりやうなれば有難う存じまする。

宇治　面白い、下郎の相手は下郎が相應、拙者めにこの立合を。

惡太　出來した宇治平、必ず拔かるな。

逸當　健氣なる望み、許してくれる。

式部　其方にも許してくれる。

兩人　神妙に仕れ。

壬宇　有難うごはります。

兩人　試みの朝日丸、

壬宇　確に預りましてごはります。

壬生　サア宇治平め、用意が能くば早く來れ。

ト兩人立廻り宇治平の刀折れる。惡太郎見るより拔いて掛り又その刀折れる。壬生平兩人をむね打にする。軍藏躍り出んとするを式部睨む故控える。

宇治　何を。

宿直　壬生平、出來した〳〵。

壬生　正銘の劍のむね打、なんと脊骨に堪へたか。

式部　朝日丸に決る上は神職は唐櫃を取り納め、退出の致されてよからう。

神主　畏つてござりまする。（ト唐櫃を荷はせて入る。）

花町　式部大輔が働きに依つて、御劍手に入る上からは、清水寺へ奉納は宿直之助、國家安全の祈りは仕職、勤番の役日は惡太郎各々申渡したぞ。

三人　畏りまして御座ります。

式部　大切なる御劍奉納の最上日柄を相選びたく、奥にて役目の方々へ御盃下し置かれませう。

花町　尤なる願ひ、相計らはれてよからう。

逸當　兩人の下郎は勿論、何れも意趣を殘さぬがよい。

皆々　畏つて御座りまする。

花町　何れも一間へ。

皆々　先づお入りあらせられませう。

ト皆々奥へ、宇治平は橋掛へ入る。跡に壬生平殘る。

壬生　逸當親子が佞奸邪慾、それに付き添ふ奴等迄御主人淸玄樣を罪に落さん惡企み、滅多に油斷はならぬはい。それはさうとお女中方が見えねえが妻木樣、山吹殿になりと逢はねばならぬ用があるが。

ト見廻はす。腰元みどり、まゆみ、十六夜、さつき出て來る故、生壬平小隱れする。

皆々　何とマア困つた事ぢやないかいなア。

さつ　何を申上げても辛氣な顏して御座るお姫樣、

十六　それと申すもこがれて御座る清玄様から、今に御返事がない故、
まゆ　お氣に入りの妻木様は宿下り、
さつ　あのやうにして御座つて、お氣の結ぼれになりはせまいかと、
皆々　ホンに笑止な事ぢやわいなア。
壬生　（ト壬生平前へ出て、）それは困るであらうが、御機嫌を直す工夫がある。その工夫といふのは即ち
これぢや。（ト懐より文箱を出す。）
十六　ヤアそんならこれがお返事かえ。
壬生　ヲヽ、さうだ。ちやつとお目に掛けたり〳〵。
まゆ　これといふも壬生平殿のお蔭、
十六　そのお話を申上げ、
皆々　お姫様を悦ばしませうわいなア。
呼び　（ト内にて、）管領家の御使者のお立ち。
皆々　ハヽア。
壬生　コレ静かにさつしやれ。

ト皆々に囁く　皆々奥に入ると、奥より花町、逸當、惡太郎、式部、宿直之助清玄、軍藏、近習小姓出で、

式部　御前宜しう御執成の儀を、

花町　何かと心勞過分なるぞ。清玄にはお太刀奉納致してよからう。

宿直　畏つて御座ります。

逸當　拙者疎忽にも贋物を差上げようと致せしを、式部殿のお目利にて恥辱を取らず、後日きつとお禮申さう。

式部　痛み入つたる御挨拶でござる。何はしかれ、今日のお役目御苦勞千萬。

花町　何れもさらば。

式部　お立ちの用意。

ト式部逸當一寸心いき、眞中へ花町入る。壬生平宇治平ぎしむを宿直之助清玄、惡太郎止め、花町一同を連れ向うへ入る。式部殘る。

式部　心得難き逸當親子、娘櫻姫を懇望すれども聞き入れぬを根に持つて、如何なる惡事を企まんも知れず、ハテ心ならぬ事共ぢやなア。

ト奥へ入る。是にて山幕を冠せ、上下より獵師八人宛火繩付きの鐵砲を持つて出づ。

□ ヲ、これは高宮新吾殿を始め何れも御苦勞。
○ イヤモウお互でござる。斯く獵人と姿をやつし、
× 夜々、密かに徘徊致すも、
◎ 盜賊蝦蟇丸現はれ出で、
△ 手下を從へ、往來の者を惱ますよし、
× さるに依つて上意に從ひ、詮議の我々。
□ まつた此頃鳥羽四塚の邊へ大きなる蛙出で、
× 往來人に仇するよし、
○ 盜賊蝦蟇丸が幻術かもはかられず、
◎ 若し手に餘らば討つて捨てよと上より嚴命、
△ 必ず共に油斷なきやう、召捕る計略。
皆々 お別れ申さう。

ト別れ入る。上手より飛脚に吾走り出る、跡より嘉忠太駈け出て、

嘉忠 怪しき密書を持つたる曲者、何方へ参る。

藤吾　おりや西國へ飛脚の者、そこ退いて通せ。

嘉忠　ヤア滅多に通さぬ、正しく盗賊蝦蟇丸の手下。

藤吾　ヤ何と。

嘉忠　怪しき一品、こつちへ渡せ。

藤吾　うぬに渡してたまるものかい。

ト兩人立廻りトヾ藤吾向うへ逃げて入る。嘉忠太跡を追ふて入る。是にて、返し

鳥羽四つ塚の場　造物、舞臺向う黑幕、上手に樋の口、蘆原、松の釣枝、本釣鐘にて道具止る。

直ぐ藤吾走り出る。

藤吾　ヤレ〳〵どうやら逃げて來たが、蝦蟇丸殿には確にこの鳥羽四塚のあたりに居らるゝと仲間の噂、どうぞこの連判狀、手渡しをしたいものぢやが。

ト四邊を見てゐる。嘉忠太走り出る。

嘉忠　逃足早い盗賊め。

藤吾　エヽ情ない又うせたか。

ト兩人連判を奪ひ合ふ。よき程に大きな蛙出で口を開く、薄どろ〳〵にて兩人自由の利かぬこなし後

へ寄る。右の連判をさし金にて蛙の口へ入れる。嘉忠太藤吾を切り捨てる。

嘉忠　ハテ合點の行かぬ。

ト蛙上手樋の傍にてせり下げる。嘉忠太樋の口へ行く、樋の口より蝦蟇丸連判を口に咬へ出る。嘉忠太たぢ〳〵として氣を失ふ。

蝦蟇　連判に記せし通り、西國方の大小名大半味方、この上は亡父山名宗全が怨敵鷲尾、清水、船岡の奴原を鏖殺しになし、天下を掌握なさんは瞬くうち、アラ嬉しや悦ばしやなア。

ト嘉忠太心付き蝦蟇丸が持つてゐる、連判に手を掛ける。兩人立廻りあつて蝦蟇丸嘉忠太に當跌を喰はし花道へ行く。嘉忠太再び氣づく、

嘉忠　さてこそ蝦蟇丸。

ト蝦蟇丸印を結ぶ。嘉忠太目のくらみし體。

嘉忠　取り逃したか。

蝦蟇　ム丶。

ト笑ふが木の頭、あときざみにてよろしく、

幕

二幕目　新清水の場

役名　清水淸玄、同宿雲達、淡西、智傳、珍西、稚兒園丸、瀧丸、爲丸、淸水寺住職、順禮作藏、與茂太、安達惡太郎、般岡軍藏、奴鳥羽平、淸水宿直之助淸玄、奴壬生平、淀平、船岡息女櫻姬、腰元妻木、山吹、まゆみ、みどり、十六夜、さかき、夕顏、柏木、夕ばえ、糸遊等。

新淸水の場　造物、櫻の釣枝、奥深に淸水舞臺の飾付、少し下手に登り口、上手に音羽の瀧、舞臺の上に繪馬大分懸けてあり、其の中に傘二本同じく懸けてある。祇園囃子壬生やうの鳴物にて幕明く。ト參詣の仕出大勢出て捨臺詞あつて入る。旅人二人出て亦捨臺詞あつてゝゐる。向うより醫師町人連れ立ち出る。

醫師　やア美事々々、いつに變らぬこの絶景、綾丸先生が句に一日も捨てる日はなし京の春とやら。

町人　成程名句ぢやわい。

醫師　愚老も名吟を吐きました。白糸の瀧白糸の櫻かな。

町人　ヤア面白い〳〵。

ト言ひ乍ら下手へ入る。上手より順禮二人出て來り、

作藏　コレ〳〵與茂太、これが十六番の札所、清水の觀音樣ぢや。

與茂　國で見た繪圖よりは生きた清水樣はよい所ぢやのう。

作藏　これが彼の音羽の瀧、向うにある料理屋が浮無瀬、これから舞臺へ上つて京洛中を見せるぞ。

與茂　それからは本堂で御詠歌を上げようではないか。

作藏　それが肝腎、サア〳〵御座れ〳〵。

ト坂へ上り入る。向うより櫻姫、衣裳振袖襠、後より妻木、さかき、道芝、撫子、山路、山吹、卞枝、十六夜、みどり、まゆみ、糸遊、夕顏、柏木、やよひ、夕ばえ、腰元の形にて付き添ひ、本行列の人數大勢、乗物茶辨當等持ち、本舞臺へ來る。

妻木　お供の衆控えさつしやれ。

供廻　ハア、。（ト供廻皆下手へ入る。）

妻木　申し姫君、咲きも殘らず散りもせぬ、大慈大悲の春景色では御座んせぬかいなア。

櫻姫　ほんに一しほの眺めではあるわいのう。

山吹　草木心なしとは申しますれど、時を知つたる櫻花、ほんに可愛らしう咲きましたわいなア。

撫子　千もとの櫻はまだな事、楊貴妃櫻、普賢像。

山路　匂ひ櫻の返り咲、奥山櫻、初櫻、

左枝　地主の櫻にあらねども、こゝは音羽の瀧櫻、

彌生　何と美事ぢや、

皆々　御座んせぬかいなア。

山吹　今を盛りの櫻盡し、花が花見る花盛りとは、この事であらうぞいなア。

妻木　オヽそれ〳〵花も恥づべき姫君樣、こゝに暫くお休み遊ばすもお氣晴しになりませうわいなア。

山吹　今日この清水へ御參詣にかこつけて、清玄樣に逢ふとの御趣向、嘸お嬉しう御座りませう。

妻木　清玄樣には歌道に心掛け遊ばす故、幸ひあなたのお心のたけを短冊にお書き遊ばし、清玄樣の
お目に掛る所へ括り付け置いたれば、

山吹　さだめし御覽なされませう。

皆々　そりやよい思ひ付きで御座りまするわいなア。

櫻姫　さう仕ようわいなア。

妻木　ソレ料紙をこれへ。

山吹　畏りました。

ト短冊を持ち出る。姫は認める事あつて、

妻木　ソレ振りよき枝へ。

山吹　心得ました。

ト括り付ける。淀平奴の形にて眞中の床几に、毛氈を掛け茶辨當を直す。下手より壬生平、上手より鳥羽平双方共茶辨當毛氈をかたげ出て、入れ違ひ上下の床几に毛氈を敷く。上手から惡太郎深編笠羽織大小にて出て、女形の前をすれ違ひ下手の床几に腰を掛ける。と向うより宿直之助羽織袴大小にて、若黨一人刀箱を持ち付き添ひ出て、上の方の床几に腰を掛ける。壬生平莨盆を出す。妻木は姫を清玄の傍へ突きやる姫恥しさうに跡へ戻る。清玄は立つて行かうとして右の短冊を讀む。妻木姫の手を持ち添へて、清玄の袖を控える。いろ／＼あつて清玄刀箱を見て、氣を替え若徒を連れ入る。壬生平も續いて妻木が同じく袖を控えるのを振り切つて入る。妻木腰元皆々姫に付き、これを追ふて入る。最後に奥へ行かうとする淀平を獨生が支える。淀平が突き飛ばして入るを女は跡を追駈けて入つて了ふ。

宇治　お旦那、今のを御覧じましたか。

惡太　折角よい所で出會したと思ひしところ、

宇治　宿直之助が今の有様、

惡太　櫻姫を始め腰元めらが今の目遣ひ、

宇治　跡を慕ふて參つたからは、

惡太　確に不義と睨んだてや。

宇治　姫が自筆のこの短冊。（ト短冊を取つて惡太郎に渡す。）

惡太　朝日影清水にうつる山櫻われしら浪の浮名立つとも、ハテよい物が手に入つたわえ。鳥羽平來やれ。

鳥羽　ネイ〱。

ト兩人奧へ入る。軍藏上下大小にて侍二人を連れ出る。淸水の住職番僧二人を從へ上手より出て、

住職　船岡軍藏樣御苦勞千萬に存じまする。

軍藏　今日は大切なる朝日丸の劍當寺へ奉納、並に國家安全東山殿御武運祈りの爲め、兄船岡式部が名代、非常を糺す横目の役言ひ付けられて、せう事なしの參詣でござる。シテ安達惡太郎殿は今日警固のお役目で御座るが最早參詣しめされたか。

住職　既に御參詣の事と存ずる。（ト鳥羽平上手より出でこ）

鳥羽　軍藏樣、それにお出で御座りますか。

軍藏　惡太郎殿の御家來鳥羽平。

鳥羽　ネイ〳〵密かに申上げたい儀が御座りまする。

軍藏　ナニ身共へ密かに、家來ども宿坊へ參り休息いたせ。

侍　ハツ。（ト侍二人上手へ入る。）

軍藏　貴僧にもお先へ

住職　然らば客殿にて相待ちませう、サア皆の者參れ。

伴僧　ハツ。

ト住職同宿を連れ奥へ入る。

軍藏　シテ身共に用事とは。

ト惡太郎小蔭より出る。

惡太　イヤ其の仔細拙者直々お話し申さう。

軍藏　貴殿は惡太郎殿。

惡太　この惡太郎が武士は廢つたわい。

軍藏　そりや又何故に。

惡太　ハテ櫻姬を身が妻に遣はさんと契約しながら、身共を馬鹿にさつしやつた故。

軍藏　イヤ櫻姬を貴殿の方へ遣はしさへすれば、そなたの武士は。

惡太　イヤ立たぬ、櫻姬は不義密通を致しておるわえ。

軍藏　そりや何者と。

惡太　清水宿直之助清玄と、卽ち證據はこの短冊。

ト以前の短冊を出す、軍藏讀む。

軍藏　奥へ踏込み不義の相手の清玄を眞つ二つに。

惡太　イヤ清玄を討ち殺せば、可愛い櫻姬も殺さにやならぬぞや。

軍藏　や。

惡太　姬を身が女房にする思案は。

軍藏　シテその思案は。

惡太　オヽ。（ト囁く。）

軍藏　面白い此の儀首尾よう仕了うせ、櫻姬をこなたの妻に取り持ちなば、約束通り船岡の名跡を。

惡太　父逸當に申し入れ、契約通り軍藏殿。

軍藏　エ、忝い。

惡太　即ち誓ひのこの金打。（ト金打する。）

鳥羽　お旦那、こゝは人目もござれば。

惡太　尤、何かの事は客殿にて。

軍藏　然らば惡太郎殿。

惡太　鳥羽平まゐれ。

鳥羽　ネイ。

（ト三人奥へ入る。櫻姫、妻木、吉枝、山吹、彌生、上手より出て、）

櫻姫　これいのう、どうぞ清玄樣に人離れずお目にかゝつて心のたけを言ひたいわいのう。

妻木　何ぼ何でも晝中に、さうして清玄樣は大切な刀奉納の御役目、その相役は安達惡太郎樣まだその上に意地惡の伯父軍藏樣も客殿へ來てござるぞえ。猥らな事をひよつと二人に見付けられては、吉水船岡兩家の大事、今日は御辛抱なされませいなア。

櫻姫　それでも父樣は清玄樣が御劍奉納の役目、そちも參詣してその儀式を見て來いとおつしやつて

ぢやわいなア。

妻木　それでは殿様にはお前の戀を知つて御座る事ぢやらう。そんなら首尾を見合はし清玄樣へ一寸文を上げましたならよう御座りますわいなア。

櫻姫　何と書いて上げうぞいのう。

妻木　ヱ、モウ知れた事ぢやわいなア、お役目の暇あらば寺内のそんじよどこそこ迄、お忍びなされて下されませとサア〳〵早う。（ト硯と紙を姫の前に出す。）

櫻姫　それでもお寺の案内が知れぬもの。

妻木　ほんにナア誰ぞ御座んせぬかいなア。

ト向うより圓丸、瀧丸、爲丸、稚兒の形にて鳩の入つた鳥籠を持ち、清玄一﨟の形にて柄香爐を持ち出る。上手より住職同宿を連れて出づ。

住職　オ、これは一﨟清玄には愚老が名代として、今日の役目退儀々々、シテ上にも御機嫌よく法要相濟しか。

清玄　ハ、これは師の御坊御苦勞に存じまする。誠に今日の役目なか〳〵愚僧などが及ばぬ儀なれど師の御餘光にてお絹勤行の役も相勤め、かやうな悦ばしい儀は御座りませぬ。

住職　それは重疊、尚この上一七日ケ間奥の院にて、國家靜謐の祈り祈禱所へ相詰めてよからう。

清玄　委細畏つて御座りまする。

ト住職同宿を連れて奥へ入る。

園丸　コレ〳〵女中方、女中は堅く禁ぜられたる御祈禱のお庭。

三人　下らつしやれ〳〵。

妻木　イヤこれは船岡式部が娘櫻姫樣でござりまする。今日の儀式を拜みに參りまして御座りまする。

園丸　縱へどなた樣の御息女でも、

兩人　叶ひませぬ〳〵。

清玄　コリヤ稚兒達、苦しうない。これは船岡樣のお腰元妻木殿で御座りまするか。

妻木　オヽこれは清玄樣。

清玄　この程は壬生のお館へも參らぬが、式部樣にもお變りなく。

妻木　御息災にお渡りなされますやうに御座りまする。

清玄　それは何より、イヤナニ稚兒達が申し出し事も、國家安全御祈禱の場所わけて女人禁制と、師の坊の命で御座れば、必ずお氣にさえられて下されますな。

妻木　何のマアそんな事を存じませう。それにつけてお願ひ申しするは御劍奉納の儀式を。

清玄　拜みたいと仰せらるゝか。

妻木　どうぞあなたのお執成にて。

清玄　拜ませませう。併し御祈禱の場所は勿論本堂の前後共に女人は禁制、外から拜見遊ばしますやう寺内の樣子をお話し申しませう。

妻木　申しお孃樣、今清玄樣が寺内の御案内を仰しやる程になソレ今のお文を、サア踏み迷はぬやうにお認めなされませいなア。

清玄　本堂の後より敷臺へ出る道がある。其の道を左へ行くと護摩堂がある、御存じか。

妻木　ハイ〳〵、それ〳〵本堂の後とは幸ひの忍び道。

ト櫻姬呑み込み狀を書く。

清玄　イヤ忍び道では御座りませぬぞ。

妻木　サア忍んで居ねば又稚兒達に叱られますわいなア、さうして。

清玄　その護摩堂の脇から見ると、兩方の谷間に櫻ばかりの所がござる。そこを櫻ケ谷と申す。それに長屋がござる。そこは我々が休息所、女がゐても咎める者もない、心置きなく拜見成され。

妻木　ハイ〱。

ト上手より同宿二人出る。

△　清玄様最早勤行の始まる時刻、

○　師の御坊のお召し、早う御祈禱所へお越し成されませう。

清玄　左様ならばお女中方。

妻木　清玄様。

清玄　後刻御意得ませう。

ト清玄稚兒同宿皆々上手へ入る。

櫻姫　サア文は認めたわいのう。

參木　サアこゝから清玄様へ持たしてやりたいもの。

軍藏　櫻姫はどれに居る、妻木は居らぬか、腰元共々々々。

皆々　アレ又お呼び成されますわいなア。

妻木　ヱ・あたせわしない。

皆々　イザ姫君御參詣あられませう。

と皆々奥へ入る。宿直之助淸玄奥より出る。

宿直　ヤレ〳〵退屈や〳〵、さらばこれにて一服致さう。（ト床几に掛け莨を喫み、）山吹の咲きぬる時は常よりも峯の白雲色まさりけり、ハア面白い〳〵。

ト淀平狀を持ち出て、

淀平　淸玄樣これにお渡りなされまするか。

淸玄　船岡の家來淀平か。

淀平　ネイ〳〵チトお目にかけたい物が御座りまする。これを御覽なされてお返事を承はりたう御座りまする。

ト狀を出す。宿直之助淸玄取つて見て、

宿直　君樣參る、御存じ。ヤイ淀平、大切な祈禱の場所へ斯樣なものを猥千萬。

淀平　イヤこの奴めはお使で、何か樣子は知らないので御座ります。

宿直　シテこの狀は誰が渡した。

淀平　卽ちこの狀は、イヤ何者か存ぜないやうに御座りまする。

宿直　知れぬものをどうしてこゝへ持つて來た。

淀平　サアその儀は、イヤあなたにお覺えが御座りませねば、行く處のないこの狀、こゝへ捨てゝ參りませう。

宿直　そりやどうなりとも。

淀平　捨てたら誰ぞ拾人があるべい。ドリヤ木蔭へ參つて晝寢と出掛けようかい。

ト狀を捨て下手へ行き小蔭へ隱れる。櫻姬上手より出掛けて見て居る、宿直之助右の狀をちやつと拾ふ。淀平小蔭より出て下手の床几に腹匐ひ樣子を見る。

宿直　紛ふ方なき戀君の筆、(ト封を切り上封を袂へ入れ開き見て、)御詠めも耻し乍ら又もや拙なき筆を示し參らせ候、こゝら邊は可愛らしいといとしいだらけぢや。何卒お役目のお暇も御座候へば、櫻ケ谷の休息所迄お忍び下され、谷蔭の櫻と共に人知れず積る話を晴らし度思ひ參らせ候、申上げ度御事も山々候得共、文は落つる恐れを思ひ惜しき水莖かくばかり、くれ〴〵御忍びの程待ち入り參らせ候、清玄樣參る、櫻姬より、そんなら櫻ケ谷で人知れず。

ト思入ある。櫻姬思はず知らず宿直之助の傍へ行く。

櫻姬　淸玄樣。

宿直　櫻姬殿

ト兩人思入。淀平茶辨當より酒肴を出し飲み居る。阪の上より淸玄水手桶を持ち下りて來る。

櫻姬　何ぞ、あなた御覽じましたかえ。

宿直　成程見ました。

櫻姬　オ、恥し。

ト振袖にて顏を隱す。淸玄ふとこの兩人を見る。

宿直　心より見て居る所へ思ひ掛けない、悔りしましたわいなア。

櫻姬　そんならお文の返事の通りに。

宿直　そつちさへ違はねば此方は金鐵々々。

ト兩人寄り添ふ。淀平これを見て酒を引掛け〳〵飮む。淸玄は手桶に頤を持たし餘念なく見とれ居る。

兩人は囁き合ふ。

櫻姬　オ、嬉し。

ト淸玄はこのうちそろ〳〵瀧の水を汲み、矢張り兩人の方に氣を取られてゐて、思はず桶を取り落す。桶の輪切れて水流る。同時に淀平も持つたる盃を落す。

宿直　ヤア淸玄か。

櫻姬　ヤア淀平か。

ト兩人飛び退く。

清玄　兎に角に頼みし桶のたがきれて水溜らねば月も舍らず。今こそ誠に悟道の觀念、エ、有難や南無觀世音菩薩々々々々々々。（ト氣を替へツウと奥へ入る。）

淀平　清玄樣、お姫樣、大切な祈禱の場で何うした事で御座りますする。

宿直　コリヤ誤つた〳〵。

淀平　イヤお姫樣お歸りあられませう。

櫻姫　そんならいなにやアならぬかや。

淀平　お供致さにやアならぬ〳〵、櫻ケ谷へ。

櫻姫　エ、意地の悪い。

宿直　淀平往ても大事あるまいか。

淀平　さらばお供を仕るべい。

ト三人上手へ入る。此の時淀平床几の上に脇差を忘れる。鳥羽平出掛けて見てゐて、宿直之助の落して行きし狀を拾ふ。

鳥羽　清玄樣まゐる、櫻姫より。この狀、若旦那へ。

ト奥へ行かうとする。壬生平出て來る。

士生　鳥羽平、待て。

鳥羽　ネイ。置きやアがれ壬生平か。おのれにやア大分用もあれど今はちつと急がしい。（ト行懸る。）

壬生　われにやアこの壬生平の方で用がある。

鳥羽　若旦那を始め弟同樣の宇治平まで　船岡の館で打のめしてまだ其の上に、おらに迄言分がある
とは、うぬが命は根腐つたな。用事仕舞つてばらしてくれうわい。

壬生　イヤばらされぬ其の内に今の物を貰ふかい。

鳥羽　ヤア。

壬生　ハテぐず／＼いはずとこゝへ出せ。

鳥羽　イヤならぬ。

壬生　ならにやア斯うして。（と鳥羽平の懷より狀を出す。）

鳥羽　ナニひろぐ。

壬生　この文拾はれては若旦那のお身の上、こつちへ渡せ。

鳥羽　イヽヤ清玄櫻姫が不義の詮議になるべき文、そこ放さぬか。

壬生　何を。

ト立廻りあつて、鳥羽平狀を引奪り向うへ走り入るを、壬生平駈けて行く。奥より軍藏刀箱を持ち、上手より惡太郎出る。

軍藏　惡太郎殿。

惡太　コレ。

軍藏　まんまと首尾よく朝日丸の御劍。

惡太　この劍さへ盜み取れば淸玄めは切腹は定のもの。

軍藏　元來淸玄は鷲尾義春が弟、その鷲尾家の系圖の一卷、疾くより奪ひ取りあれば、淸玄兄弟を殺して了へば、鷲尾淸水の兩家は自然と斷絕。

惡太　さうなる時は櫻姬は身共の妻女。

軍藏　この劍を盜み取り貴殿に渡す上からは、お賴み申した船岡の名跡は。

惡太　言はずと知れた軍藏殿。

軍藏　ヱ、忝い。

○　惡太郎樣々々々

ト奥にて呼ぶ。兩人狼狽して、淀平が忘れて行さし脇差を目付け、惡太郎その目釘を拔き慌てゝ朝日丸の中身と入れ替へる。

惡太　軍藏殿、この贋物を護摩壇へ。

軍藏　合點ぢや。

ト軍藏奥へ走り入る。惡太郎淀平の脇差を戴き、

惡太　これさへあれば大願成就、ヱ、忝い。

ト奥へ行からとする。淀平出て來て、

淀平　ア、申し惡太郎樣、その一腰は最前これで一盃引かけ、喰らひどれが一大事の身の守り失念仕つて御座る。何卒こつちへ。

惡太　イ、ヤ身が拾ふたからは戻す事は相成らぬ。

ト行からとする。淀平脇差を引奪くり、

淀平　滅相な二分と三百で調へた奴めが身上で御座りまする。

惡太　イヤサ金が欲しくば、如何程なりともくれう。この一腰はどうぞ身共に。

淀平　ハテナ御大身樣がこの炭かき同樣の一腰を、但しこの脇差がどうぞ致しましたかな。

惡太　イヤ何ともせぬが。

淀平　それにお望みなさるゝは。

惡太　サアそれは。

淀平　どうでもおなぶりだ〳〵。ア、惡洒落なお旦那ではあるわい。（ト刀を持ち奥へ入る。）

惡太　コリヤ〳〵。何の事ぢやい、肝腎の物を持つてうせて、きやつを生け置いては。安達の警固の者參れ。

大勢　ハア、。（ト侍大勢出て來る。）

惡太　コリヤ船岡の下郎淀平めを。（ト囁く。）

侍　畏つて御座ります。

ト皆々下手へ入る。內にて、

軍藏　大切な御祈禱所が穢れた、何れも立合つしやれ〳〵。

大勢　ハア、。

ト軍藏侍大勢と共に宿直之助、櫻姫を引き立て後より住職伴僧大勢、淸玄も附いて出る。惡太郞前へ出て、

惡太　軍藏殿、何事でござるな。

軍藏　イヤこの兩人が祈禱の場所を穢して御座る。

惡太　ム、國家安全の祈禱所を穢したとな。

軍藏　如何にも清玄と櫻姫、櫻ケ谷で忍び逢ふを確に見屆けました。現在の伯父なれども不憫なる不義を致して御座る。

惡太　御劍奉納の役目を蒙り乍ら、祈りの場を穢すとは正しく東山殿を調伏の下心に極はまつた。

軍藏　兩人共に觀念せよ。

宿直　かく露顯に及ぶからは申譯は恥の恥、櫻姫殿に科はない、科人はこの清玄。

櫻姫　イヱ清玄樣は御存じない事、科人はみづからで御座ります。みづからを御存分に成されまして清玄樣はお助けなされて下さりませ。

惡太　ヱ、ほてくろしい腹の立つ、警固の役目は某、軍藏殿、櫻姫は拙者にお預け下されい。

軍藏　如何にも貴殿にお預け申さう、清玄は拙者が繩打ち立ち歸り、御法の通りしばり首。

櫻姫　エ、、、、。

軍藏　家來共、清玄に繩打て。

櫻姫　ハア、。（ト泣き落す。）

悪太　ソレ櫻姫を引立い。

侍皆　ハツ清玄立たう。

ト妻木走り出る。

妻木　イヤ清玄様に繩かけさす事なりませぬぞ。

軍藏　ヤア大切な科人を。

悪太　うぬは何で妨げひろぐ。

妻木　憚り乍ら御詮議がチト暗いやうに存じまする。この科人は違ひます、不義の科は清玄様では御座りませぬ。

悪太　ヤア科人が違ふたとは。

軍藏　これ程確かな證據があつても。

妻木　成程、櫻姫様に忍男があるまいものでも御座りませぬが、申し、お姫様我が身は八つ裂になつてもその夫の命を助けたいと思ふが女の情、ナア お姫様、清玄様と不義密通は御座りますまいがな。

櫻姫　アイ清玄様に科はないわいなア。

宿直　イヤ〱、どのやうにあらがふても清玄が一命は。
妻木　ハテ不義さへなければお命に別條はない、サア不義は御座りますまいがな。
惡太　ハヽ、鳥を鷺に言ひ括めんとしても、櫻ケ谷で兩人が密通。
軍藏　現在伯父のおれが見屆けたわい。
妻木　イヽヤ見屆けたとは暗い〱。
鳥羽　その不義の證據はこゝにある。
壬生　イヽヤこの狀渡す事はならぬわい。（ト向うより壬生平鳥羽平先刻の狀を奪ひ合ひ乍ら出る。）
鳥羽　お旦那、この艶書は姫、清玄が不義の證據。
惡太　出來した、その狀引つたくれ。
鳥羽　サア奴、御前だ、その狀渡せ。
壬生　成らぬ。
　　ト立廻の内惡太郎壬生平に手裏劍を打つ。壬生平仆るを鳥羽平狀を取つて、惡太郎に差し出す。
惡太　出來した、休め。
鳥羽　ハツ。

ト下手へ入る。軍藏狀を開き見て、

軍藏　文體は讀むに及ばず、櫻ケ谷にて忍び逢はんと書いたからは、是こそ確かな不義の證據。

妻木　サアそれは。

宿直　櫻姬殿。

櫻姬　淸玄樣

兩入　ハアヽ。(トうつむく。)

妻木　イヤお氣遣ひなされまするな。何處までも淸玄樣に不義の科は御座りませぬ。

惡太　ナニ、これ見よ、淸玄樣まひる、櫻姬より。

軍藏　見覺えのある姬が手跡。

惡太　ナントこれでも不義ではないか。

妻木　たとへ文が百本出ても、證據にはなりませぬわいなア。

軍藏　スリヤそつちに不義でないといふ證據があるか。

妻木　サアその證據は。

惡太　證據がなくば淸玄に繩打たうか。

妻木　サアそれは。

兩人　サア〳〵どうぢや。

妻木　櫻姫の忍男は外に御座りまする。

兩人　何と。

妻木　アイ迚も遁れぬお姫様のお命、外に忍男があれば清玄様に不義の科は御座りますまいかな。

軍藏　シテその忍男は何者。

兩人　これへ出せ。

ト妻木清玄の胸倉を取り、眞中へ連れ出す。清玄きよろ〳〵する。

妻木　申し清玄様、モウ叶はぬ所ぢや程に、覺悟なされて下されませ。

清玄　ア、コレ〳〵愚僧何を覺悟致すのぢや。

妻木　ハテモウ斯う顯はれては叶はぬ程に、お姫様とお前と、ナア密通して御座るであらうがな。

清玄　ヤア。

ト清玄、宿直之助、櫻姫驚くこなしあつて、

宿直　コレ妻木、勿體ない御出家に。

櫻姬　何の、そんな事があらうぞいなア。

妻木　ハテ大事御座りませぬ、忍男は清水清玄、お姬樣、清玄樣で御座りませうがな。

淸玄　あんまり呆れて物がいはれぬ。

惡太　ハヽヽヽヽ、清玄を櫻姬の不義の相手といふか。

妻木　證據は今の艶書、名宛を篤と御覽じませ。

惡太　この艶書は清玄樣まゐる、櫻姬より。

妻木　イヤそれは違ひまする。

惡太　違ふたとは。

妻木　サア讀みと聲とのその違ひ、淸水清玄ではない清水清玄樣まゐる、櫻姬より。

櫻姬　勿體ない、お許しなされて下さりませ。

妻木　モシ清玄樣、衆生を濟度なされんとは佛の敎、我が身を捨てゝ人を助けるが御出家たる御身の役ぢやげに御座りますぞえ、それにまア、お前は清玄樣を殺さうとは、出家にあらう事かいなア。（ト言ひ乍ら蔭にて、淸玄を拜み、いろ〳〵あつて、）清玄樣は播州淸水の殿樣、家中の數多ある御身、お一人助かれば幾千人の命が助かりまする。ナア我が身を捨てゝ、人を惠む出家のあな

た、不義の相手になつて助くれば廣大無邊の佛のお慈悲、どうぞ不義の相手になつて、サアモウ叶はぬ所ぢや、お名乗りなされて下されませいなア。

清玄 一切衆生蟲けらに至るまで悉皆成佛の果を與へんとある佛の誓ひ、その身は惡龍の餌食となり四句の文を得給ふと聞く、我が身を捨てゝ人の難義を助ける善根、如何にも櫻姫の忍男と申すは愚僧でござる。

住職 ヤア。

清玄 忍男に相違ござらぬ。

妻木 何とこれで清玄樣に不義の科は御座りますまいがな。

惡太 ハテよう言ひ廻はしたものぢやなア。

清玄 身は濡衣の名は立てど、佛名に叶ふて身の滿足、南無大慈大悲觀世音菩薩々々々々々々々。

惡太 面白い忍男に違ひなくば、櫻姫と馴染の話が聞きたい。

清玄 サア戀とやら色とやらの話は。

妻木 これも斯うなるからは、耻しい事はない、早う話を。

清玄 八萬餘卷の經文にも戀話とやらは。

妻木　お姫様、お前の方から馴染の話を早う。

櫻姫　それでもそのやうな耻かしい。

妻木　エヽ辛氣な、ソレいつぞや瀧詣の折柄、互に心を通じたか、坂を登るに姫君の手を斯うお引きなされたであらうがな。

ト姫が手を取り清玄に突き付ける。姫は清玄の手を握る。

清玄　女の手から物を取れば五百生までが其の間、手なき者に生るゝとや、許し給へ〳〵。

妻木　頃は黄昏、人なき小蔭へお供して、

櫻姫　私とお前と、袖から袖へ斯う手を入れて。

ト衣の袂より手を入れる、清玄顔をしかめる。

清玄　ア、釋尊の難行苦行もこの苦しみには。（ト齒を喰ひしばり泣き落す。）

惡太　御坊、齒を喰ひ締めて、何で泣くのぢや。

清玄　ヤア、イヤ櫻姫の志が嬉しさに涙が。（ト又泣く。）

軍藏　それに又顏をしかめて身を背けるは女の不淨を嫌ふのか。

清玄　何の女子は好きで御座るわい。

惡太　女子好きの坊主なら、定めて鳥魚も喰ふであらう。

清玄　喰べるとも〳〵。

惡太　面白い。（ト鳥籠より鳩を出し、引裂き茶碗へ血を絞り込み、その茶碗を淸玄へ突き付け、）これを喰へ。

清玄　ヤア。

惡太　鳩の生血ぢや、これを吸へ。

清玄　ぢやと申して。

惡太　喰はずば眞實の姬が忍男を白狀せい。

宿直　モウ是非に及ばぬ。（ト腹切らうとする。）

櫻姬　さうぢや。

ト死なうとする。妻木兩方を止める。

妻木　コレ申し淸玄樣、お二人がお果成されますわいなア。

清玄　さうぢや、生血に替る殺生界、九十行者の大菩薩、無量の諸佛許し給へ。

ト右の血を飮まうとする。淀平窺ひ居て躍り出でその茶碗を微塵に破る。

兩人　ヤイ下郞め、何で妨げひろぐ。

淀平　イヤ妨げはせぬ、姫君の成敗するのぢや

兩人　何と。

淀平　穢れ次手にどいつもこいつも血みどろちんがい、お旦那にも左樣にお思召し下されませう。

惡太　おのれら如きが成敗とは、身の程知らぬ蛆蟲めゝ

軍藏　妨げひろぐと、命はないぞよ。

淀平　イヽヤ分明なる不義の詮議、清玄といふ不義の相手が出たからは淸玄樣に科はない。無實を言ひ掛け恥辱を與へたその代り科極つた姫君樣を淸玄諸共打殺し、この奴めも直に切腹、くたばるからはどいつもこいつも地獄の道連、サア姫君樣お覺悟あられませう。

妻木　覺悟はとうから決めてござる。

櫻姫　サア成敗してたもひのう。

櫻姫手を合はす。淀平口釘をしめし、刀の柄に手をかける。

軍藏　コリヤ滅相な、姫を殺してたまるものか。

惡太　オヽさうぢや姫を殺しては工面が違ふ、櫻姫を殺す事はならぬぞ〳〵。

淀平　イヤ斯う言ひ出すからは殺さにやア成らぬ。

妻木　ソレ〳〵お姫様は殺さねばなるまい〳〵。
コリヤ櫻姫、こはい事はない、この伯父に引付いて居や〳〵。
宿直　この清玄も科人の仲間、どうぞ腹を切らして貰ふ。
ト刀を抜く。壬生平むつくと起き、
壬生　コレ清玄様、あなたより先に殺さにやア成らぬ科人がある。餘りおせきなさらぬが能う御座ります る。
宿直　ナニ先へ殺す科人があるとは。
壬生　サア悪太郎殿、潔よく御切腹なされませう。
悪太　ヤアこの悪太郎に何科あつて。
壬生　知れた事、大切なる祈禱の場所でこの奴めに、手疵を負はせた血汐の穢れ。
悪太　ヤア
壬生　まだその上に源家を守る八幡宮の御愛鳥、鳩を殺して血を絞り、生るを放つ御供養の祈禱を穢したは正しく東山殿を調伏の證據、サア悪太郎殿潔く切腹し仕召され、但し奴めが御介錯を致さうかな。（ト詰め寄る。）

惡太　コリヤ〳〵これは又情けない、全く以て佛前を穢さうと思ふてはせぬ事ぢやわい。

淀平　サアお姫樣、御覺悟は能う御座りますか。

櫻姬　早う殺して給ひのう。

軍藏　イヽヤ姬は殺す事相成らぬぞ。

壬生　サア惡太郞樣、申譯がなくば介錯致さうか。

櫻姬　南無阿彌陀佛。

宿直　清玄も倶に切腹。

ト惡太郞、宿直之助を止めて、

惡太　コレ貴殿が死んでは我々が身の上。

軍藏　おだてまい〳〵。

淀平　サアお覺悟は。

櫻姬　南無阿彌陀佛。

軍藏　イヤ殺さぬ〳〵。

宿直　サア切腹しようか。

惡太　滅相な。
壬生　介錯せうか。
皆々　サア〳〵。
壬淀　惡太郎樣、軍藏樣、有無の返答承はらう。
惡太　せう事はない、淸玄は櫻姬が男に極まつた。
軍藏　これで互に科はずつべい。
壬生　シテ又證據のその艶書ば、
軍藏　お目通りで斯くの通り。（ト引裂く。）
壬生　スリヤ淸玄樣の不義の科は。
兩人　赦す〳〵。
壬生　スリヤぐつとも申分は。
兩人　ないとも〳〵。
淀平　モウ料簡せうぢやあるまいか。
壬生　ハ、、、、。

仕職　清玄、それへ出よ。
清玄　ハツ。
仕職　コレ清玄、人の難儀を身に引受け、サア人々に難儀をかけ婦人に迷ひしその方の志は、諸祖師にもまさつたれども、世の人口寺院の恥辱不愍ながらも。
清玄　エヽ。
仕職　師弟の緣もこれ限りぢやぞよ。
清玄　ハイ、元より斯く成り行くは覺悟の前、お慈悲の御勘當受けますするで御座ります。
妻木　大道心の清玄樣を、サアお姬樣の大事の戀人、命に代へてお世話致しませう。必ずお氣遣ひ成されて下さりまするなえ。
清玄　エヽ、過分に存ずる。
仕職　定法なれば三衣を脫れ。
同宿　ハアヽ。（ト清玄の衣を取り、額に附けたる傘を前に置く。）
同〇　最早お太刀奉納の刻限、仕職方へお入りあつて然るべく存じ奉りまする。
妻木　お姬樣にも仕職方にて御歸館の御用意を。

住職　何れも客殿へお通り下さりませう。

宿直　サア悪太郎殿、住職方へ。

兩人　參らずばなりますまい。

淀平 宿直 軍藏　下郎も斯うつッぱつても居られまい。

まづお先へ。

ト皆々入り、淸玄ひとり殘る。風の音になり櫻の花散る。

淸玄　アラ耻しや淺間しやなア。（トひよろ〳〵と立ち上り花道へ行く。本釣鐘にかすめて風の音。）破れ衣に破れ笠。

トよろしく思入にて向うへ入る。上手より淀平出て來る。

淀平　淸玄樣はもう何處ぞへ行かれたさうな。

ト四邊を見廻し向うへ行かうとするを、鳥羽平窺ひゐて前へ出て圍ひ、兩人一寸立廻あつて。

淀平　ヤイ鳥羽平め、盛切り仲間の交際はぎごつにするのは承知だが、主人の御用と駈け出すおらを藪から棒に、わりア一體何うするのだ。

鳥羽　ヤア頰桁の水車ハテ能く廻して運んだな。うぬが主人の櫻姬、おらが主人の悪太郎樣がおのれ

一番咲かさんとはづんで御座るを落花狼藉、うぬが其の口車で清玄めに釣飩にかけて取持つか、どつこいそつこい淀鯉の其の俎板にあの姫をどうなとかうなと料理して、本得心を差し庖丁洗ひ鯉の取持すれば其の儘に生けて置く。左もない時は三枚におろしておらがはぶに掛ける、あぶ〳〵水を飲まさないうち返答さらせ、ドヽどうだ。

淀平　ハヽヽヽ、鯉口のあいた儘、ぐわん〳〵鉦のおがくづ詞、ハテ能く鳴して唱へたな、花盗人の悪太郎に過ぎた器量の櫻姫、幾ら信心召されても利生も利益も叶はぬ縁路だ。大念佛でもこづき出し悪太郎殿にもおくたばり成されいといつて聞かせ、アノ爲に中に引かるゝ鳥羽平野郎め。

鳥羽　さうぬかしやアうぬ其の刀を。

ト切つて掛ると、

淀平　こりやア手短かに腕試し。

鳥羽　オヽうぬを始めに櫻姫を。

淀平　咲くと咲かぬは時と時節だ。

鳥羽　彌生待たざる春景色、落花微塵に。

淀平　何を。

ト鳥羽平は始終刀を奪はうとする。淀平は是を知らず支える立廻あつて、

鳥羽　ヤレ來いやい。

取卷　ハヽヽ

ト花道より大勢揃ひの襦袢、切手棡を持ち出で十五人宛別れ、乾度圍ふて、

右皆　久しぶりで水あぶせ。

左皆　一番ひいやり淀平やつこめ。

皆々　受けて見ろ。

淀平　女房持たない其の内はうぬらに水のさかあびせ。音羽の瀧の不動より丈夫な金膈金佛、奴末世の手本にかけおらう。

皆々　何を。

ト誂への合方、淀平皆々を相手に大立さま〴〵あつて、鳥羽平切つて掛るを渡り合ひよいところで極るのが木の頭、一同よろしくあつて、

拍子幕

三幕目

茶屋の場
朱雀野の場

役名　望月上野之助實は蝦蟇丸、粹の與助實は今戸瀨藏、地獄長兵衞實は澤田金兵衞、遠山主膳、同甚三郞、近藤矢柄實は辰巳の東六、奴土手平實は宇治平駕舁孫作、傾城花扇實は妻木、同曙、同雛絹、同丁山、仲居おすけ、同おくら同おまき、婆おかん等。

茶屋の場　造物平舞臺見附暖簾、上手に折廻り障子家體、下手茶屋格子、いつもの所に門口角屋といふ掛行燈。よき所に近藤矢柄大盡の扮裝、藤吉、嘉藤太衣裳羽織にて三人共腹を立てゝゐる。藝妓久江、ゆか江、仲居おすけ、おくら、おまき取持つてゐる。騷唄にて幕明く。

矢柄　仲居共、太夫達は何故參らぬ。
藤吉
嘉藤　人橋かけて呼びにやれ〳〵。
矢柄　とばかり云つても居られまい、酒なりと飮んでくれう。
まさ　ソレ酒と仰しやる、銚子を持ちや〳〵。

皆々　アイ〳〵。

ト銚子盃を持ち出して酒宴になる。奥よりおみち出る。

まさ　お前はおみちさん、何をして、

皆々　居やしやんしたえ。

みち　わしも今宵皆樣が揃ふ事故、座敷は勿論勝手の差圖その上月大盡は只お一人り、圍ひにお茶を上つて御座る故その御機嫌をとるやら、大體いそがしい事ではなかつたわいなア。

矢柄　ヤイ〳〵おみち、月大盡と云ふは我等が主人望月上野之助樣、花扇太夫がお心に叶ひ忍びのお通ひ。

嘉藏　それに付き添ふ我々なれば、大切にせねばならぬ筈。

藤吉　矢柄殿には入山太夫、嘉藤太殿には新造雛絹、この藤吉は新造曙、

矢柄　その肝腎の花扇はうぬが身を揚詰めとて、面出しせぬは不屆至極、

藤吉 嘉藏　時刻が延びれば手を見せぬぞ。

みち　ホヽヽヽテモ仰山なお腹の立やう、ちやつと太夫樣方を見ておぢやいのう。

皆々　アイ〳〵。

ト向うを見て、

まさ　アレ〳〵太夫様方は御座んすわいなア。

ト向ふより曙、雛絹、丁山、後より花扇手を引かれ酒に酔ふたるこなし、何れもさしかけ傘禿一人附き添ひ出て、

丁山　何と皆さん、花扇さんの道中は船にゆられるやうで、こりや餘程酔はしやんしたわいなア。

雛絹　さつき桔梗屋で逢ふた時からめれんであつたぞえ。

曙　それに又今宵の角屋も酒であらう。

丁山　そのお客は私等が姉女郎の花扇さんを身受とやら門出とやら。

皆々　目出度ことではないかいなア。

花扇　身受の噂、聞くもいや、我が手に揚詰めにして外へ身請は望まねど、座敷ばかりは苦界の身の上。

ト ひよろ〳〵する。

禿　アレあぶなう御座んすわいなア。

ト皆々本舞臺へ來て並よく列び、禿各々莨盆を持ち行く。

みち　太夫さん、待ち兼ねて居ましたわいなア。

花扇　私がこのやうに醉ふたのはこの曲輪の門並に呼びかけられて盃の數々、松屋の客の惡洒落な持て餘したお盃を一寸お相と引受け、こつちが呑めばあつちにも押へて飲ます二つ三つ、憎てらしい男つき、其の上に捻上戸とうく\あつちを捻ぢ付けて終にはそこへ大靳、それ程の酒盛にも憚り乍らこの花扇滅多には醉はぬはいなア。

みち　何ぼ醉はぬといはしやんしても、足許は船に乘つたやうで御座んしたぞえ。

矢柄　イヤモウ色ある利を斬う並べたところでは、立つ腹もぐんにやり成るてや。大内の北面望月上野之助が家來近藤矢柄ともあらう武士が、丁山太夫に身を打つての廓通ひ、又花扇太夫は主人望月樣の御執心身請けしてお館へ連れ歸るぞ。

花扇　その身請の噂が嫌ひでく\ならぬわいなア。

ト表口よりおかん汚なき姿の形にて出て、

かん　イヤ花扇はおれが娘、身請はおれ次第ちやぞ。（ト入る。）

花扇　お前はかゝさん、私の事はこゝのおみちさんも能う御存じ、我か手に揚詰めをする程の事、身請なぞの相談は成りませぬぞえ。

みち　オヽそれや私が聞き込んでゐます、突出しから揚屋入りを見ようと廓の内は人群集、それを我が手に揚詰めとは意氣地の強い事ではあるぞえ。

矢柄　イヤ花扇がウンとさへいへば身請けされて御簾中、おかんとやらは殿の姑御。

かん　そりやア旨い相談ぢや、斯うした汚ない處からお大名の姑御では一足飛の榮耀榮華、娘そなたも得心であらう。返事のないのは不承知かアノこゝな馬鹿女郎めが。

ト花扇糀はず頁をのみ居て、

花扇　浪の音聞きしが爲に奥山の苔色變へる濱の松風、この歌の心を思へば何國も同じ苦の世界、その苦しみがあればこそ又樂しみの折もあらう、兎角命が物種ぢやわいなア。

矢柄　何の事はない、寺へ參つて說法を聞くやうぢや、酒にせい〳〵。

みち　ドリヤ月樣の御機嫌を取つて來うか。

ト奥へ入る。皆々酒宴になると向うより與助田舍客の拵えにて出て來り、

與助　何うでも廓の內は賑はしいわえ。（ト門口に來て〕賴みませう〳〵。

まさ　これはお客さんかえ。

くら　こちらへお入りなさらんかいなア。

ずけ　おかしい身振をして立つて御座るわいなア。

與助　廓へ行く者は襟付が大事ぢやといふ事故、そればつかりを苦にしてゐるて。

皆々　ほんに能う御座りますわいなア。

與助　嬉しや首の骨が助かつた。さらばこゝらへ坐らうかな。（トよき所へ坐る。）

つゐ　モシお客樣お相方はお名差しで御座んすかえ。

與助　あるぞ〳〵、俺の好きは花扇ぢや、先刻あの花坊の揚屋入を見受け、傘持つた男衆に名を聞いて來たのぢや。

矢柄　ヤイ〳〵うぬ花扇を求めんなどゝは、身の程知らぬといふやつ。

藤吉　似合ふたやうに河原へ參つて、

嘉藤　濱邊をぞめくが相應だぞ。

與助　慮外ながら花扇を求めようと思ふて、こゝに金で拵へた小判といふ物を持つて參つた。（ト金財布を出し、）憚り乍ら、現金で遊ぶのぢや、ねぎりつこなしぢや賣つて貰ひませう。

花扇　田舍のお方は正直なもの不束な私を見染めたとは、縱へ噓でも嬉しう御座んすぞえ。シタが心願があつてどのお客にでも斷りを申しますれば、あなたにもお目にかゝる事はなりませぬわい

なア。
與助　ようごんす、賣らせにやア買はず分ぢや。
矢柄　何ぼ床惜しみを致しても、金堰にして御主人の望みを叶へる。花扇さう思へ。
與助　金づくならこつちは現金、札入れはせんでごんすぞ。
矢柄　何を小癪。
ト立掛る。向うより、
土手　サア〳〵うせおらう〳〵。
ト土手平奴の形にて、男達長兵衛の胸倉を取り出て來る。
長兵　コリヤ引つぱらいでも行かねばならぬ處、こゝ放せやい。（ト突放す。）
土手　うぬ手向ひ、しうぐかい。（ト又掛るをその手を捻ち上られる。）アイタ〳〵。
長兵　うぬらを相手にするもおとなげないが手籠めにさらす故仕方がないわい。（突放し引伏せる。）
花扇　お前は地獄長兵衛さん。
仲沓　御座んしたかいなア。
長兵　これは歴々のお揃ひぢや、ドリやそれへ成り込まうか。

ト本舞臺へ土手平を突遣り乍ら來る。この内與助舞ひ〴〵してゐて土手平に行き當る。土手平與助を投げる。

土手　これでちつとは腹がすいた。

矢柄　土手平、今歸つたか。

土手　ハツ花扇に四の五のぬかす地獄長兵衞、今出口で逢ふたを幸ひ引立て歸らうと存じ、右の仕合せで御座ります。

長兵　イヤおざぶ達、そこの一文奴に聞きやア、おざぶ達の主とやらが花扇を手に入れようといふのぢやさうなが、この相談はマア成るまい、この花扇には夫がある。

三人　ナニ情夫があるとは、

長兵　その情夫といふはこの長兵衞。おれも鳥羽の里では子分子方もある身の上、花扇今更否とは言はれまい。

花扇　貞女兩夫にまみえずの掟は、誰も同じ事。

長兵　その貞女を立通す先の男は、滅多には言はれまい、ちやに依てこの長兵衞の心に隨ふたがよからうぞよ。

與助　イヤ聞いてもこはい地獄とやら、おれが方は現金ではあり、第一は茶屋の悦び。

長兵　エ、やかましい、すつ込んで居やがれ。

花扇　皆さん私しや長兵衛さんに話さにやア成らぬ事もある、奥座敷へ出てさゝなと始めて待つてゐて下さんせ。

與助　シテおれはどうせうなア。

花扇　お前も奥でゆつくりと。

矢柄　おかんとやら、其方も奥へ參つて一獻呑みやれサ。

かん　エヽあつたら出世をどう馬鹿め。

矢柄　ハテどうせ終は手に入る太夫、ドレ酒にせう騒げ〳〵。

女皆　アイ〳〵。

ト皆々奥へ入る。長兵衛も行かうとするを、

花扇　コレ長兵衛さん、何處へ行かしやんすえ。

長兵　ハテ所詮口說いたとてあかぬ故、奥へ行つて酒なりと飲まうと思ふて。

花扇　お前一人さう飲まして置く程なら、このやうに氣を焼きもさはせぬわいなア。

長兵　イアその氣休めは面白うないぞよ。おれも地獄長兵衞といはれる男、われが張と意氣地を聞きどうぞおれが手に入れてと、頻と口說けばそちらからもどうか話のなりさうな工合、當分百兩欲しいと聞き大枚百兩やつたぞよ。其の時晩に必ず待つてゐるとの約束故來て見れば、今夜は揚で餘所へ行つた、翌日の夜來れば腹が痛いと、モウ〳〵堪忍袋の緒が切れた。

花扇　マア靜にいはしやんせ、

長兵　イヤおれも此儘では男が立たぬ、サア百兩の金を返すか奧へ行つていひまくつてやらうか。

花扇　私しや借りた金返すぞえ、花扇に金の貸があるに依て、その金の威光で心に隨ひおつたと思はしやんしてはお前も面白うあるまいし、私の意氣地も立たず氣も濟まぬ、依て百兩の金は返して置いて、文字野手箱を持つておぢや。

禿　アイ〳〵。

ト蒔繪の文庫を持ち出る。花扇中から剃刀と小指の紙に包みたるを出す。

長兵　コリヤ蠟細工の小指と剃刀、これが何うして金ぢや。

花扇　斯うぢやわいなア、さつき來た田舍の客人たんと金を持つて居やしやんす故、この小指と剃刀で。

ト長兵衛に囁く。

長兵　そんなら離座敷で、この贋物の小指を隠してゐて切つたと見せ、枕をとん〳〵屏風をさら〳〵

それを相図におれが出てゆすり掛けて金を取るのか。

花扇　さうしてなりと金を調へお前に戻し、女夫になりたい私が願ひ。

長兵　エヽ忝い、そんなら初夜の鐘を相図に、ドレ奥で酒なと飲んで待たうか。（ト奥へ入る。）

花扇　よいかえ、遅いと手筈が違ふぞえ。

ト暖簾の内にて、

かん　エヽ赦されませ〳〵。

ト花扇小隠れする。奥よりおかん財布を持ち、土手平引立て出て、

土手　今の金を出しさらさにやア眞二つに。

ト刀に手を掛る。花扇出て、

花扇　土手平さん、コリヤかゝさんを何とさしやんす。

土手　この老ぼれめが旦那の居間へ忍び込み、枕許の財布を巻き上げ逃げ出す所を見付けたわえ。

花扇　コレかゝさん、覺えが御座んすかえ。

かん　コレ娘、堪忍してたも、實は少々無心を言ふ積りでそなたの座敷と取り違へ、入つた目先へ金財布が手に當つたが出來心、面目ないわいのう。

花扇　エヽ、お前はなア、月々の養ひは元よりつらい勤めの其の内で、ソレ十兩二十兩との無心この間も浪作を頼んで持たして上げた十五兩、十日立つや立たずに何になされました。花扇が母は盜みすると名を立てられ、私しや明日からどの顏さげ歩かれうぞいなア、いかになさぬ仲ぢやとて私が身にもなつて見て下さんせいなア。

ト此内上手の障子を開け、内に鍛冶丸衣裝羽織にて褥の上に坐し聞き居る。

かん　ヲヽ能う理屈を並べられた。コリヤヤイその喋る口には誰がした。イヽヤイのうこのやうに全盛するやうには誰がしたのぢや。われが實親は元若狹の侍なれど浪人しての瘦世帶、われは屋敷で腰元奉公、主人の娘がいたずら、其の仲立してお咎め頂き戻つた所が親は世話場、おれが勸めてこの島原へ勤め奉公そのうち二親はごねて了ひ今親といふたら此おかん樣一人ぢやぞよ。十兩や十五兩の金を合力ぢやの無心ぢのとアノこゝな不孝者めが。

上手　うぬが述懷聞きには來ぬ、金を返すか旦那の前へ連れて行かうか。

かん　おりや金を盜みはせぬ、斷りなしに借りたのぢや、きり／＼持つてうしやアがれ。ヘト財布をぶ

つける。）

土手　けしからぬ婆アめだ。（ト財布の中を見て、）ヤ、コリヤ百兩の金が瓦になつた、さては瓦にすり替へたな。

花扇　その金は私が戻します。

土手　然らば受取らうか。

兩人　サア〳〵。

土手　花扇返事は何うぢや。

ト蝦蟇丸金財布を投出し。

蝦蟇　花扇ソレ百兩。

花扇　ヤアお前は月さん。

かん　あなたは奥の御大盡。

土手　お旦那、望月上野樣、

蝦蟇　親の悪事を包まんと、心を痛める孝行に、惚れて貸すその金子。

花扇　手詰めになつた百兩の金忝なう御座んす。（ト取上げ、土手平の前に置いて、）見す〳〵知れた仕だ

らなれども親といふ字が重い故、この金を返しまする。

土手　ネイ〳〵。　（金を持ち奥へ入る。）

かん　オホヽヽあなたにマア大枚の金を出さしまして、お氣の毒で御座ります。娘、ようお禮申してたも。

ト奥へ入る。蝦蟇丸前へ出る。

花扇　月さまお禮は詞に盡されませぬ。

蝦蟇　イヤ禮受けようとて苦勞はせぬ、シタが身共の心底知りやつたか。

花扇　そりやア知らんでは御座んせぬわいなア。

蝦蟇　それに又そちはつれないものぢやぞよ。

花扇　それ知り乍ら今の仕儀、義理と情をかせにして隨はさうとはチトはしたなう思ひます、金故口説き落されては名が惜しう御座んす。

蝦蟇　スリヤ今の金子を返して、

花扇　その上ならどうなりと。

蝦蟇　ムヽ面白い共の時否やはいはさぬぞや。

花扇　イヤ殿御の心は秋の空。

蝦蟇　ヤ。

花扇　月さん、後ちにえ。（ト立上る。）

蝦蟇　ム、。

ト刀にて花扇の裾を押へ見上る。大薩摩の唄になり、

返し

同廓座敷の場　道具三間の二重ニ附襖上手床の間、上手障子家體この取合ひ廊下、向う數寄屋壁、下手落間柴垣石燈籠庭木のあしらひ、いつもの所に風流なる枝折門。大薩摩にて道具納る。ト下手より近藤矢柄酒に醉ふたる體、縫絹、丁山、唄、久江、ゆか江仲居三人付き添ひ出る。

太夫　矢柄さん何處へ行かしやんすぞいなア。

矢柄　醉ひざましにこの庭先で雨の月見も惡なうないやつぢやて。

丁山　お前に似合はぬ風流な事いはしやんす。

矢柄　イヤモウ非といはれても野暮といはれても兎角望みはこれなる丁山、そらや胴慾な者ぢやぞよ。
又皆の者も聞えぬ丁山に應とさへいはしてくれゝばそう達も捨てゝ置かぬは。

ゆか　と仰しやるならば丁山樣より外に女房を持つまいといふ、誓言立がありさうな者ぢやぞえ。
矢柄　誓言とあれば腕を引かうか股を突かうか、但し首でも切つてやらうか。
久江　イヱそんな事は古う御座んす。
ト此内おみち錫の盃洗の鉢を持ち出る。
みち　その誓言立には能い物が御座んすわいなア。（ト上手の家體より下りて來る。）
皆々　お前はおかみさん。
矢柄　能い誓言立とは。
サア　サアあんまり主がいとしい故、マア裸にならしやんせいなア。
矢柄　心中に裸になるとは新しいわえ。
皆々　こりや心中の親玉ぢやわいなア。（ト矢柄襦袢一つになる。）
みち　この鉢の水を滾さぬやうに持つて、戀の叶ふ立ち行きをなされいなア。（ト鉢を渡す。）
矢柄　スリヤこの水を滾さぬやうに持ち通したらば。
丁山　ウンぢやわいなア。
矢柄　イヤモウ易い事ぢや。（ト大事さうに持つて立ち上る。）

みち　覆水再び盆に返らず。

矢柄　ヤア。

皆々　サア行かしやんせいなア。

ト おみち皆々に頷き、笑ひ乍ら上手の一間へ入る。

矢柄　扨マア大分相談が近寄つて來た、ハアクツサメ、どつこいせう。

ト鉢を目八分に持つて上手の家體へ入る。初夜の鐘、獨吟になり　正面の障子上手の障子も一時に引拔くと、正面に花扇布團の上に投帶姿にて坐り、火鉢に梅ケ香を焚き居る。後に屏風を立て枕、料紙の文庫等散らし、上手の家體におみち三味線を彈き居る。

花扇　そこに居やしやんすはおみちさんぢや御座んせぬか。

みち　花扇さん、今の新唄を聞かしやんしたか、夕の騒ぎに覺えて來た故一寸彈いて見たわいなア。

ト廊下を通つて來る。

花扇　今のあとを聞かして下さんせいなア。

みち　この歌はいろ／＼の節を集めて、外題は節付案内とやらいふげな、まだ節つくりと覺えませぬけれど今のあとは

〽始めの嘘が誠となつて年ンを増し、親の怒りもア丶儘よ。

みち　この唄はお前の身の上に能う似た歌のやうに思はれるわいなア。委しい譯は知らねどもそも突出のその日より、我と我が手に揚詰めにする金の苦勞も。

〽嘘の報ひに誠の事。

みち　角な玉子の譬ひも毒が藥になる譬へ、誰さんの爲か知らねども。

〽親につく嘘寢て案じ、客に誠を打明けて。

みち　後は賣られた親の爲か男の爲に、お前又何時まで勤めをする氣ぢやえ、アノ痛ましい母御前の

ほんに〳〵。

〽涙に後は身を捨てゝ、前垂掛けの裏住居。

みち　オヽ私とした事が三味線に搆つて、お前に意見がましい事を堪忍して下さんせいなア、、、。

ト三味線を脇へ置く。

花扇　何のマア御新切な今の御意見嬉しう御座んすが、これには深い譯もあり又いろ〳〵と心積りも御座んす程に、必ず案じて下さんすな。兎角お前を便りにして居ますわいなア。

まさ　（ト奥にて。）おみちさん〳〵、お客がお呼びなさるぞえ。

みち　アイ〳〵、そんなら花扇さん後にえ。

ト三味線を置き奥へ入る。廊下傳ひに與助秃二人に手を引かれて出て來る。

兩人　サア御座んせいなア。

與助　これはしたり何處まで連れて行くのぢや。（ト態とひよろ〳〵とする。）

秀一　そのやうに醉ふた振りせずと、

秀二　太夫さんが呼んでゝ御座んす。

與助　そりやアノ花扇樣が。

兩人　アイなア。（ト正面の家體へ連れて入る。）

花扇　文字野、しげり奥へ行きや。

兩人　アイ〳〵。（ト廊下口へ入る。）

花扇　サアこちらへ御座んせいなア、私のやうな不束者故なぶらしやんすと知り乍ら、ツイほだされるは女子の情、マアコヽへ御座んせいなア。（ト布團の上に坐らせ夜着を着せかける。）

與助　噓ばつかり引手數多の身の上を振つて〳〵振りのめすとの噂、コリヤてつきり可愛の情夫に立る心中であらうぞえ。

花扇　そのやうに思はんすは無理ならねど、そも突出のその日からお客を取らぬは、浮氣か實かと心

の疑ひ、成るは否なり思ふはならず人の心は千差萬別、今日は何うした縁ぢやゝら初めてお前のお顔を見ると、モウあとは言ひますまい。

與助　そのやうにあじに物を言ふてくれてぢやと、首筋元からじは〱としてたまるものぢやない。シタが斯うしつぽりとした一間に梅ケ香の匂ひも粋なやつぢや。今の世は粋な事でなけりやア通れんですぢや。わしもあるとあらゆる色事もやり掛けて見ましたが、こつちにばかり凝つて居るやうに思ふ、車輪になつて行くとやられる所を腹を立てぬが粋の骨頂、所でわしに粋の與助と異名を付ける、アヽ是程粋にならうと思ふと大體な事ではないぞいなア。

花扇　イヤモウお前は油斷のならぬ粋ぢやわいなア。これ讀ましやんせ。（ト火鉢の灰に字を書く。）

與助　ほんまにかえ。

花扇　嘘に惚れたか惚れぬか疑ひを晴らしませう。（ト料紙文庫より剃刀を出し小指を隠し持ち枕をとんと前に置き、）手箱を斯うふうはりと明けて、枕をとん〱屏風をさら〱ソレ襖をさらりぢやごえ。

與助　エヽ誰ぞ來たかえ。

花扇　イヤ誰も來やせぬわいなア、アヽモウよい加減でありさうなもの、コリヤもそつとのぼさにやア成るまい。（ト長兵衛は來ぬかといふ思入にて火鉢を片脇へのけ色々あつて、）お出んかいなア。

與助　お出でゝも大事御座りませぬかえ。

花扇　オヽ辛氣やのう初心らしい、ドリヤ帶を解いて上げよう。

與助　ハイ〳〵。

ト與助襦袢一枚にされる、首に金財布を掛けてゐる。

花扇　與助さん、コリヤ金ぢやなア。

與助　ハイ。

花扇　モウ大方見えるであらうか、マアコヽへ御座んせいなア。

與助　ハイ斯うかな。

花扇　コリヤ勝手が惡いマア手箱をふうはり枕をとん〳〵屏風をさら〳〵、コリヤどうぢやぞいなア

イヤモウとんと約束が違ふたぞ。

與助　わしよりもお前の約束が違うた、どうぞしておくれんか。

花扇　コレ〳〵滅多に傍へ寄らしやんすな、お前は粹ぢやないかいなア。

與助　粹程愚痴な戀の闇ぢや。

と傍へ寄り添ふ花扇思ひ切つて剃刀にて枕をとん〳〵と叩きわつといふ。與助恟りする。後の襖を明

け蝦蟇丸眞中へ出て與助を突き飛ばし、

蝦蟇　ほてくろしいこの有様は。

花扇　ヤアこちの主。

蝦蟇　ヤア。

花扇　イヤサア私が深い馴染の旦那、そのこなさんの目を盗んだもアノ與助さんに惚れました。不義したはあの首にかけて居やしやんす。イヤサ首に替へても大事ないと覺悟極めた今夜の仕儀、ひよんな所を見付けられましたわいなア。

蝦蟇　（ト蝦蟇丸飲み込んで）オさつぱりと能く言ふた、覺悟してそれへ直れ。

與助　このお侍はこなさんの男かえ。

花扇　アイなア。

與助　南無妙法蓮華經。

花扇　ア、能く覺悟して下さんした。

蝦蟇　ア、コレこちや覺悟する覺えはないぞ。

蝦蟇　ヤイ〳〵聲高に申す程、猶身共の武士が立たぬ先づ男から。（ト刀に手を掛ける。）

與助　ア、申し氣の短い。何卒浪風立たぬやうの御思案を。
與助　このばいために腰をくれゝば、身が面皮にも拘はらねど身受の後金相濟まねば、これ以て相成らずと申して金子はなし、コリヤ討ち放して了はにやアなるまい。
與助　ア、申し少々の事ならお手傳ひ申しませう。
蝦蟇　金銀づくには拘はらねど、無事に濟ますは後金の一段、サア如何程出すか申して見やれ。
與助　有難うござりまする、世間在來りの値段で御料簡下さりませ。
蝦蟇　高金を以て買ひ取りたる花扇、左程の事で料簡ならうか。
與助　そんなら一貫目、（ト蝦蟇丸の顔を見て、）モウいつそ〳〵三貫目ぢや〳〵。
花扇　まだ〳〵その位の事ではあるまい。
蝦蟇　財布の儘相渡せばよし、それがならずば首討たうか。
與助　ヱ、きをひ口ぢや。それ百兩。（ト財布の儘出す。）
蝦蟇　命冥迦な素町人め、きり〳〵歸れ。
與助　歸る〳〵、（ト襟をぐる〳〵巻きにして、）太夫買ひに來て腐もたせに逢ふとは、ア、まことに粋は身を喰ふ世の中ぢやなア。（ト下手の柴垣の間へ入る。）

花扇　コレ月さん、今のは去んで了つたれば、女房事は取り置いて下さんせ。

蝦蟇　イヤ身は約束通りそなたの男。今こちの人と申したではないか。

花扇　そりや間に合ひにいふたのぢやわいなア。

蝦蟇　イヤ先刻そなたは何と申した、身共がくれし百兩の金子、それさへ返しなば隨はうといふたではないか。

花扇　サアさうはいふたれど。

蝦蟇　其の上只今手詰めの場所、身がこれへ來合はさねばそなた何うせうと思ひやるぞ。

兩人　そりや言ひ合はして置いた人が。

蝦蟇　サア此の通り金子受取るからは、約束通り隨ふ心か。

兩人　サア〳〵。

ト長兵　襖を開けて出て、

長兵　不義者見つけた。

花扇　ヤア長兵衛さんか。

蝦蟇　そちは。

長兵　おりや花扇が實の男の長兵衛、小指迄切らした程なりや何もかも覺悟であらう。重ねて置いて四つにする、それが否ならあつかひおらう。

花扇　コレ長兵衛さん遲かつたわいなア、モウ濟んで了ふたはいなア。

長兵　何ぢや、濟んで了つたとは。

蝦蟇　コリア長兵衛とやら、そちが頼まれた男の役は身共が勤めて了つたわい。

長兵　ヤア。

蝦蟇　百兩の金子は身共が取つて遣はした。

長兵　それはいかい御苦勞でございました。おりや地獄長兵衛とて花扇が男ぢや、この金戻して貰はうわえ。

蝦蟇　花扇が夫の某に向つて、花扇が男ぢやとは何の痴言。

花扇　月さんその金子、改めて私に返して下さんせ。

蝦蟇　入用ならば幾らでも女房になつた上の事、抱かれて寢るか。

長兵　イヤその金を受取つて、花扇はおれが女房。

蝦蟇　イヤさうはならぬ。

長兵　イヤその金戻せ。

ト兩人立廻りの内、與助枝折門より伺ひゐて入り、兩人が眞中より財布を持ち、

與助　せり合ふものは中からと、取るべき筋のおれが金。（ト引つたくり懐へ入れる。）

蝦蟇　いか樣尤も。

長兵　女房共何も案じる事はない、まだ金が入るなら百兩はこゝにある。

與助　女房共金が入るなら氣遣ひせまい、元より持參の百兩はこゝにある。

蝦蟇　女房共身共も金子の百兩位は所持致す、苦勞に爲やるな。

花扇　から立ち並んだ殿御は三人。

長兵　女房は一人。

與助　得心で抱かれて寢や。

蝦蟇　身共とか。

長兵　おれとか。

與助　但しは俺とか。

蝦蟇　花扇返事は、

三人　どうぢやぞいのう。

花扇　お三人へのお返事は、（ト四邊を見廻し三味線を持つて來てつぎを外し、）これで御座んす。

ト蝦蟇丸へ胴を渡す。

蝦蟇　これを身へ返事とは。

花扇　私が心の表皮裏皮ともにどうなりと、お前の膝に乘るか乘らぬか花輪の木地、長兵衛さんには
この中棹、（ト中棹を出し、）中に立木の表は屹度、角見えて裏に角なき心の中棹。

與助　シテ又わしへの返事は。

花扇　お前さんにはこのてんじ、（トてんじを出し、）三輪の山本神かけて其の糸位の糸による根締めを
きつと引き締めて。

與助　それは誠か。

花扇　本調子三つに分けたる三下り。

蝦蟇　なるか、

長兵　ならぬか、

與助　二上りの、

花扇　繼ぎ三味線のお返事も、

蝦蟇　糸の調べもつかざれば、

長兵　詞のうらのかへ唱歌、

與助　いつそ命も連彈に、

蝦蟇　其の糸筋も手琴をも、

花扇　合はすは追つて、

三人　マアこれ迄は、

花扇　お三人さん。（ト立ち上つて、）傾城の賢なるはこの柳かな。

三人　ヤア。

花扇　皆さん後にえ。（ト奥へ入る。）

蝦蟇　花扇が身共へ返事はこの一品、謎の心の解け次第ウンといふて隨ふとは、ム、傾城の賢なるはこの柳かな、ハテなア。（ト胴を持ち奥へ入る。）

長兵　おれへの返事はその中棹、どちへも付かずに中にぶらりといふ心か、よもやそんな事でもあるまい、コレといふを振り切つて何うやら爲たる柳かな、こいつは思案を引き出さにやアならぬ

わえ。（ト奥へ入る。）

與助　お前へ返事はこのてんじ、天じ天皇あきはてたと言ふ謎でもあるまい。いけんなますにはこの柳かな、コリヤとつくりと調子を調べにやアならねぬわえ。

ト奥へ入る。下手より土手平出て礫を廊下へ打つと、矢柄裸にて鉢を持ち出て、

矢柄　ヤレ／＼世話をやかし居る事ぢや、土手平ぢやないか。

土手　東六、そのなりは。

矢柄　コリヤ、（ト花道へ行けと顔にてこなし、花道へ鉢を持ち乍ら行きて、）慌しい、何事ぢや。

土手　イヤおかん婆アと言ひ合はせ、甘うやつたさつきの計畫、それについて頭の言付、鳥羽平の方へ遣る手紙とやらは。

矢柄　このふんどしの間に挾んである、取つてくれ。

土手　合點ぢや／＼。（ト矢柄の褌の間より狀を取つて、）同じ手下のその内にも貴樣は侍、おれは奴と姿をやつすも、花扇にうつぽれて頭が廓へ通はれる故。

矢柄　宇治平は土手平と改めおれは又東六を近藤矢柄と、家老めいた役を爲乍ら戀故にこそ此の姿。

土手　スリヤそのなりは丁山故か、エヽ置きやアがれ。（ト突き飛ばす。）

矢柄　どつこいしよ。（トひよろ〳〵し乍ら、鉢を恭々しく持ち上手家體へ入る。）

土手　東六めがアノざまわえ、それはさうと此の密書を鳥羽平にオ、さうだ。

トから行とするを。長兵衞出かけてゐて、

長兵　盗賊め、動きやアがるな。

土手　何と。

長兵　うぬらが詮議をなさんが爲め、地獄長兵衞となつて入り込みしは清水の家中澤田金兵衞、合點の行かぬ其の密書こつちへ渡せ。

土手　何を。

ト立廻りあつて、土手平下手へ逃げて入る。長兵衞跡を追ふて入ると與助奥より出て呼子笛を吹く。下手より捕手大勢出て、

皆々　あなたは今戸瀬藏樣。

與助　コレ。（ト上の着附を脱ぎ、捕方の形になり、）澤田金兵衞殿と心を合はせ、姿を變へて入り込みしも主君鷲尾吉晴公を討つて立ち退きし、筑紫の蝦蟇丸を詮義の爲めシテ申し付けし手筈はよいか。

皆々　仰せの通り、この廓を十重二十重に。

與助　ムヽかれ蝦蟇の妖術を使へば取り逃さぬやう。

皆々　心得ました。

與助　コレ、靜かに〳〵。

ト四邊を覗ふ、このもやうにて、

返し

同二階大廣間の場　舞臺一面に襖、よき所に衝立、上手に箪笥定紋附長持、下手二階踊り場の欄干、舞臺前手摺總て二階座敷の體。花扇手箱の上に帛紗を敷き位牌を飾り香を焼き合掌してゐる。傍に禿二人附いてゐる。尺八入の合方にて道具納る。

花扇　今、離座敷での仕儀、女の身で大膽な淺間しい事をと、定めてお三人共卑しんで居やしやんせうが、親に御不自由をさせともなさに此の身を苦界の勤奉公、爺様の御遺言には幼少な時許嫁の殿御があれどお行衛知れず、後の證據とこの柴舟の名香の包みを分けてあれば巡り逢ふて夫婦となり、父の家名を取り立てよとの仰せ、それ故心に誓ひを立て只の一夜も肌身も穢さず、けふと暮れあすとなり仇に過ぎ行く其の内に、一生廓で朽ち果つる我が身の上、お赦しなされ

て下さりませいなア。（ト合掌する。薄どろ〳〵にて上手へ蝦蟇丸をせり上げ、様子を聞いてゐる。）俗名若州船岡の御家中篠木重太夫様御夫婦、年は違へど睦月の十五日今宵に當る御命日、佛果菩提の爲め南無妙法蓮華經。

蝦蟇　人知れぬ思ひの身にて悲しけれ、我が歎きは我のみぞ知る。

花扇　お前は月さん。

蝦蟇　盲龜の浮木優曇華優りのこの香包。（ト香を投げ出す。）

花扇　ム、この香包を持つて居やしやんすお前は。

蝦蟇　若州船岡の家中篠木重太夫が悴蟇六。

花扇　エヽ。

蝦蟇　そなたが尋ぬる許嫁の夫ぢやわいのう。

花扇　ム、そんならお前は夫であつたか。

蝦蟇　（證文を出して、）花扇これを見やれ。

花扇　コリヤこれ私が年季證文。

蝦蟇　その身は苦界に沈んでも立て通したる女の操、身共はそれと夢にも知らず戀ひ慕ふたも親々の

引き合はせ、今おことが獨言を聞くと等しく掛け合ふて、身請は元より門出の用意も言ひつけ置いた。

花扇　エ、嬉しう御座んす。

蝦蟇　スリヤこの上は打解けて。

花扇　望月さんではない、我が夫。（ト證文を懷へ入れ、）親の仇。（ト蝦蟇丸の刀を拔き取り切り掛る。）

蝦蟇　疎相いたすな、仇呼はり、覺えはないぞ。

花扇　ヤア卑怯でござんす、去年正月十五日の夜私はこの島原の廓へ勤奉公、その折母樣は私を送つて歸り途、廣澤の池のほとりにてやみ〳〵御最期、二つに落ち散るこの割笄、模樣は萩に鹿の彫物スリヤこれ豫て母さんのお話しに、許嫁の殿御の方へ紫の名香に添へて送りし割笄、仇と言ふは許嫁の殿御と違ひはござんすまいがな。

蝦蟇　成程仔細語つて聞かさん、よつく聞きやれ。その日嵯峨野にて某が豫て意趣ある女に行き逢ひ、歸りを待ちうけ日頃の遺恨を晴さんと、廣澤の池の邊に待つたる折しも向うより來る駕一挺、なり恰好に目印あれば、駕の垂原切り拂ひ女を引き出し止めの刀、後にて見れば人違ひ、扨てはそなたの母御であつたか。

花扇　人違ひとは言ひ乍ら討たねば親への孝行立たず、討つては貞女の道立たず、ひよんな事して下さんしたなア。

蝦蟇　互に因果の夫婦合ひ。

花扇　こちの人、

蝦蟇　女房共。

花扇　よう嘘をつくお方ぢやなア。

蝦蟇　ヤ、何と。

花扇　母さんは去年正月病ふて死なしやんしたが、許嫁の殿御の方へ送つたはこの柴舟の名香と室町錦の守袋、今出さしやんしたはあり合はした香包、許嫁の殿御とは合點が行かぬと思ふた故、母さんの仇ぢやと間に合ひをほんまに受け、ようマアそんな嘘がつかれた事ぢやわいなア。

ト花扇上手へ行かうとする。

蝦蟇　折角甘うやつたと思へば。小賢しい拵事、エヽ忌々しい。花扇待てそちや何う手を替へて口說いても。

花扇　出雲の神の結び違ひ、思ひ切つて下さんせいなア。

ト又行きにかゝるを止める。捕手一人御上意とかゝるを蝦蟇丸刀を取り上げポントト切る。花扇は上手へ駈けて入る。階段口より矢柄着物を替へて走り出る。

矢柄　頭、これにか一大事ぢや〳〵。

蝦蟇　ナニ一大事とは。

矢柄　東山殿からずきが廻つてこれまでのぼくが割れ、はたの奴原は確に勝手で捕られました。

蝦蟇　ム、大事ない、われは豫て言ひ付けた通り手下の奴原と手筈を定め、伏見の船場で待つてゐよ。

矢柄　心得やした。

蝦蟇　我は蝦蟇の術にて跡を晦まし、立退くは何より易し、早う行け。

矢柄　合點だ。

ト下へ降りる。おかん出て、

かん　お頭さん、どうしませう〳〵。

蝦蟇　コリヤそちは。（ト囁く。）

かん　そんならこの騒動を幸ひに。

蝦蟇　花扇を盗み出し、この場を早う。

かん　呑み込みやんした。

ト奥へ走り入る。踊場の所より捕手ヤアと聲掛けるを蝦蟇丸拔打に切り付け、衝立を踊場へ蓋にしていかうとする、捕手大勢にていろ〳〵立廻あつて皆々を下へ切つて落し、下より大勢の上る所を火鉢を打込む。長兵衛與助凛々しき扮裝の上へ、女の着物を纏ひ兩方より出て圍ひ、一寸支える時上着を放つて龕燈を左右より差し出し、

長兵　盜賊の張本、

與助　筑紫の蝦蟇丸、

皆々　そこ動くな。

ト乾度圍ふ。蝦蟇丸印を結ぶ、大どろ〳〵になり、龕燈燭臺の灯一時に消える。

皆々　これは。

蝦蟇　ムヽハヽヽヽ

トよろしくこなし、皆々透かし見る此の見得よろしく、

返し

洛外朱雀野の場　正面奥深かに黑幕、前に小高き草土手の張骨、往來安全の汁燈籠、總て朱雀野の

夜の體。眞中に駕の垂れをおろし、甚三郎駕舁の形にて茣蓙を尻に敷き莨を喫ふてゐる。時の鐘、合方にて道具納る。

甚三　あれは東寺の八つの鐘ぢやな、相棒の孫作めは虫がかぶると言ふて居るし、モウ仕舞ふていなすばなるまい。

ト上手より六兵衞旅姿にて出て來る。

六兵　伏見へ出ると思ふたが、やつぱりこゝは朱雀野、コリヤ狐挫にでもつまゝれはせぬか知らぬ。

甚三　駕はよろしう。

六兵　伏見の舟場まで何んぼで乘せる。

甚三　六百でやりませう。

六兵　二百〻〻。

藤三　そんなら五百で行きませうか。

六兵　いやだ〳〵モウ三文も出さぬ。（ト向うへ入る。）

甚三　エヽ忌々しい素見客だ。（ト駕の傍へゆき、）相棒どうぢやちつとは治まつたか。

ト垂れを上る。中に孫作駕舁の姿にて寐て居て、

孫作　何んぢや藥があるか。

甚三　ヱヽ聾といふ者は忌々しい。

ト上手より主膳しほれたる疏上下の上へ古羽織を着て、縮緬の頭巾を被り大小の拵へ、小提灯をともし出て來る。

主膳　幸之進殿は捻上戸故、存じの外深更に及んだ、嘸母者人がお待兼であらう。（ト行かうとする。）

甚三　旦那、お駕召しませんか。

主膳　身共、駕は望みにない。（ト提灯の明りにて顏を見合はせ、）ムヽ、弟甚三郎でないか。

甚三　兄者人主膳樣、南無三。（ト逃げようとする。）

主膳　コリヤ待て〳〵。

甚三　ヘヱイ。

主膳　ハテ思ひ掛けない。（ト吐息つき、提灯をばつたり落す。）

甚三　面目次第も御座りませぬ。

主膳　甚三郎如何に貧苦に詰まればとてヱヽそちはなア。もと我等兄弟は丹波丹後二ケ國の主、鷲尾吉晴公の近臣、情なや御主君始め一家中、蝦蟇丸とやらんが爲に地雷火にて討死。當時身共は

武藝の修行に出國なし其方も又望みありとて出國のせしが、某その日折よくも十ケ年振にて歸り合はせ若君をお助け申し、殿樣のおん死骸を拜せしは未だ武運に盡きざる所、その後其方にも巡り逢ひお家に少しの内縁ある仁木殿の情にて此の京地の岡崎にて下し賜はる三百俵は、小祿乍らも故主の餘光、紛失なせし寢覺の轡、鷲尾家の系圖の一卷、何卒首尾よく詮議仕出し吉晴公の遺子をお世に出さんと只神佛を祈るばかり。その弟が町人土民を肩に乘せ僅かの賞を貪る所存は何事なるぞ。エヽ見下げ果てたる不所存者ぢやなア。

甚三　兄者人返す詞は御座りませぬ、さり乍ら申譯の一通り只今仰せの通り拙者も望みあつて出國なし、久々にて京地迄立歸り委しう聞いたるお國の騷動、足ずりしても及ばぬ後悔折よくこなた樣に巡り逢ひ、母人諸共若君と今仁木殿のお情にて一所に居りまするも、わづかの知行で主從四人昔に變るけふの哀れさ、お年寄られた母人にせめては御好物の御酒の一つも差し上げたく二つには又兄者人が若君を守りはごくむお氣の疲れも休めたく、身を捨てゝこそ浮む瀬とかくの仕儀、ここの所を聞き分けられ母人には必ずお聞かせ下さりまするな。（ト泣き落す。）

主膳　オヽウ出來した甚三郎、孝は百行の基とは誰しも能く存じ乍ら、その行ひはなか／＼以つてなし難し、其の心底を知らずして意見した事、兄が却て母へ不孝の罪お赦されて下されい。時に

甚三郎身共も今から駕をかつぎ習はうかい。

甚三 イヤ拙者は部屋住なれば苦しうは御座らねども、仁木様よりお扶持給はる兄者人、第一は家名の恥辱。

主膳 何さ〳〵、唐土の韓信は股をくゞりし辛棒も高祖を助けて四百年の基をば開きし事あり、お身の指南に預りたい、サ、早く〳〵。

甚三 先づ初に肩をかう入れまして、ずつと腰を切りまして杖をチョンとかう掛けまする。

ト息杖を持つて仕方をする。主膳掛合の身振にて眞似をする。

主膳 そりやいかう難しいものぢやわえ。

甚三 さて急いで参る時は、後肩と前肩が互に聲をかけ合ひまする。ハイホオ〳〵。

主膳 ム、なんとおつぢやわえ。

甚三 即ちこれに駕がござります、やつて御覧じませぬか。

主膳 いかさまお身と一手試合ふて見よう。

甚三 (垂れを上げて、)相棒め、よう寢て居る。

主膳 その者はお身の同役ぢやな、身の大事とは相成つたわい。

甚三　なんでござりまする。
主膳　駕の内にて今の樣子を。
甚三　お間違ひ成されまするな、こいつは、これでござりまする。
主膳　聞えぬか、それで安心、一ト馬場せめて見ようか。
甚三　やらかしませう。（ト甚三郎後肩へ肩を入れ、オツトよしか。
主膳　まだ〳〵。
甚三　どうで御座りまする、どうぞ成されましたか。
主膳　股立を取る間暫く、（トよろしくあつて甚三郎と向ひ合せに肩を入れ）イザ參らうか。
甚三　合點ぢや、ソレ腰ぢや。
主膳　ム、。（トやう〳〵舁き上げる。）
甚三　そこで杖をちよん。
主膳　腰をふつて運びをしと〳〵、どうぢやさつぱり足が運はれぬ。
甚三　身もちよつとも動かれぬ。
ト兩人顏を見合せる。

甚三　ア、その筈ぢや、申し前棒はそちらを向くので御座ります。

主膳　成程これは身が不調法。（ト駕をおろし主膳向うを向いて、）からであらうが。

甚三　左様々々。少々早めて駈けまするぞ〳〵。

主膳　承知々々。

甚三　ハイ〳〵。

主膳　ホオ〳〵。

ト先徒士のやうにいひとゞ躓き駕を落す。内より孫作轉げ出る。

孫作　アイタ、、、。

主膳　サア怪しからぬ事をした、怪我はないか〳〵。

甚三　何の構ふ事はござりませぬ、こりや、（ト孫作の袖を引き、）手前は歸つて休め。

孫作　モウ休んでもよいか。

甚三　（腰に狹んだ錢百文出して、）宵の符帳ぢや。

孫作　忝ない、去んで丸藥でも呑まう。

ト花扇しごきの上に男の羽織を着、黑縮緬の頭巾にて走り出で孫作に行き當る。孫作びつくりして逃

げ入る

花扇　コレ駕の衆々々々。

甚三　ハイ〳〵。

花扇　この駕へ乘せてどつちへなりと早うやつて下さんせ。

甚三　ハイ遣りませうが相棒が居りませぬから。

花扇　私は悪者の爲に盗み出され、後から追はへて來る程に早う連れて退いて下されいのう。

主膳　仔細は知らねども其の者の樣子。

甚三　助けてやるが大きな功德。

主膳　未熟乍らも身が先肩。

甚三　一息にやりませう。

ト おかん、矢柄伺ひ寄つて、

兩人　そのげんさいを。

ト掛るを立廻つて双方息杖にて當てる。仕掛にて草土手胴折になり黒幕を切つて落す。遠見に島原の書割、甚三駕の垂れをおろす。

甚三　サア。

主膳　おつとしよ。

ト兩人ひよいと駕をかき上るを木の頭、本釣鐘を打つ、兩人花道へ掛り。

甚三　ハイ賴みます〱。

主膳　下に居い〱。

ト向うへ入る。せはしく題目太皷にてよろしく、

幕

四幕目

主膳浪宅の場

役名　遠山主膳、同甚三郎、義若丸、河合新五右衞門、淸瀧岩之進、三島官藏、待乳伴右衞門、奴烏羽平、辰巳の東六、奴三平、奴壬生平、手代勘七、鶺鴒五助、同太吉、同孫作、同權兵衞、主膳母岡の谷、女房妻木、おすは、下女おかく、お糸等。

主膳浪宅の場　三間の間正面古びたる唐紙、上手に骨を見はしたる障子家體、その前に角釣瓶の古びたるを手水桶の心にて石臺の上に乘せあり、よき所に荒菰を敷き稻荷大明神の掛地をかけ、上手あとへ寄せて黑板塀、いつもの所に煤びたる屋敷門、下手に流し元、二つ竈破れたる土鍋釜擂鉢手桶等を並べ、總て貧しき屋敷の模樣、二重に破れたる疊を敷き母岡の谷汚き三寶土器にて小豆飯、高盛り油揚なぞ稻荷の御膳を拵へ居る。本舞臺の上手に妻木屋敷者の形にて大盥にて洗濯して居る、謠への鳴物にて幕明く。

妻木　申し母さん。この洗濯物を片付けたら御膳も私が上げますわいなア。

岡の　イヤ今日は目出度い初午、殊に又あの掛地は過ぎ行かれし夫、隼人殿の直筆、手づから上げるが御奉公、そなたも明日の事にしやいのう。

妻木　私もさう存じますれど旦那のお襦袢が汚れて居りましても、お召替へといふてはなし、今日に限つて曇らしやるは機轉の利かぬ天道樣、チト嗜みなましたがよいわいなア。

岡の　ア、是はしたり、又なませを言やるわいのう。ふとした事で、この春から此の屋敷へ引取りしに、母を譏の介抱、なじむに附けていやまさり、悴主膳が兎や角いやれど惡さ盛りの坊はあり婆が手一つでは手も屆かず世間の手前はあの子を産んだ主膳が妻と、母が勸めて夫婦の盃。

妻木　その時旦那には由緒正しき遠山の家、傾城遊女を妻としては世間へ濟まぬと仰つしやつたを、

岡の　母様の御威光で賤しい私を武士の妻、眞實嬉しう御座りんすわいなア。
岡の　ハテ其の御座りんすわいなアが、惡いわいのう、
妻木　サア愼んで居りましてもツイ言ひ馴れた里なまり、堪忍してくれなませえ。
岡の　アレ又いやるかいのう。
兩人　ホヽヽ。

ト向うよりおすは屋敷風の娘拵の枝を提げ、お糸同じ拵へおかく腰元にて提重を風呂敷に包み抱へ出て舞臺へ來り、

かく　お頼み申しませう〳〵。
妻木　どうれ。（ト門口へ出る。）
すは　妻木さん、私で御座ります る。（ト三人内へ入る。）
岡の　是は〳〵木曾兵衞様のお娘御おすは様お糸様もようお出なされましたなア。
妻木　マア〳〵あれへと申した所が見苦しうてお耻しう存じまする。（ト箒にて掃く。）
岡の　この疊の破れた事わいなア。
すは　ア、申しそのやうに遊ばしますとお氣の毒で御座りまする。おゆるしなされて下さりませ。

ト兩人座につき、

兩人　今日はお目出度う存じまする。

岡の　イヤモウお互で御座りまする、さうして思ひ掛けない今日は。

すは　父上には殿樣の御代參のお留守故、おうらの紅梅を拜見致したいと存じまして。

岡の　住み荒した屋敷なれど、梅は老木、恰度今が盛りでござりまする。

すは　それはマアよい折柄に參じました、このひと木は貰ひましたればお慰みに。

岡の　おやさしい、主膳が歸りやつたら生けて貰ふて樂しみませう。（ト釣瓶へ入れる。）妻木、お茶でも上げやらぬかいなア。

トこのうち妻木しちりんに茶瓶をかけて古團扇にて煽き居る。

妻木　只今お煮花をしておりんすわいなア。

ト岡の谷目で呵り妻木は我が口を押へる。おかく風呂敷を解き妻木の傍へ持ち行き、

かく　お世話になりまするもお氣の毒で御座りまする故、お辨を持つて參りました。

妻木　何から何までお心付きましたお持たせ。

岡の　お二人共隱居の庭へ。

兩人　左樣なら、岡の兮樣。
妻木　お茶もこの儘。
岡の　サア御案內を。
妻木　かうお越しなされませ。

ト岡の兮先におすはお糸妻木茶瓶を提げおかく付き添ひ奥へ入る。向うより鳥羽平着流し大小酒に醉ふたるこなしにて出て來ト、

鳥羽　ア、醉ふた〳〵エヽイ。

ト橋掛より東六走り出て、花道にて行き逢ひ、

東六　コレ〳〵鳥羽平。
鳥羽　オヽ東六か。
東六　又酒を喰ふたな。サア分口をおこさぬか。
鳥羽　ナニ分口とは。
東六　預けてある寢覺の轡の。
鳥羽　コリヤ大きな聲をさらすな、いつぞや淸水の喧嘩から惡太郎に追ひ放され、蝦蟇丸に一味して

預つてある寶覺の一軸、その後清水櫻姫惡太郎もはなれ〲に追放の身の上、迂濶にばらされもせぬ代物故、その儘に持つて居るわい。

東六 サア貴樣に預けて置いた所が、この春島原の騷動からお頭も跡をくらまし、仲間の奴等もふつりちりばら〲、所が今日頭から狀が來て其の代物をおれに持つて來いとの事ぢや。

鳥羽 そりやアどうともせうが今こゝには持つては居ぬ。

東六 そんなら後には取りに來る。

鳥羽 目立たぬ内歸れ〲。

東京 ハテ困つた生酔ひぢやわえ。（ト向うへ入る。）

鳥羽 海鼠の化物見るやうな野郎だ、それはさうと惡太郎といひ蝦蟇丸まで行衞は知れず、おれは伯母御の縁あれば遠山の貧乏屋敷へ居候、その主膳兄弟は夜々辻駕に出さらすとの事、駕の奴に吹込んで後で彼奴等をいぢめる魂膽、是も酒手位にやアなるであらう。イヤモウ屋敷へ歸つた、妻木なといぢめて二三合やらかさうか。

ト舞臺へ來る。おすは出て、

すは 梅見にかこつけて來て見れば甚三樣はお宿には御座らず、お歸りなさればよいに。

鳥羽　伯母じや人歸りましたぞや。
すは　オヽ鳥羽平さん。
鳥羽　イヤ珍しいおすはさん、ハテ美しい者ぢやなア。
すは　ほんに世は儘ならぬもの、待ち焦れてゐるものを。
鳥羽　（我が事と心得。）コリヤ怪しからぬ事ぢや、（ト衣紋を繕ひ。）その心であらうとは眞以て存ぜなんだ、忝けない〳〵。
すは　そりや何を仰しやるぞいなア。
鳥羽　ありやうは我等も惚れては居れど申出す折もなし、お前がさういふ心なら拙者を戀婿に聞野の家を相續、マアこゝらで一寸内祝言を。
すは　不作法な慮外なさると赦しませぬぞ。
鳥羽　ムヽスリヤ今申したは間違か。
すは　知りませぬわいなア。
鳥羽　エヽとんと譯が分らぬ。
ト向うより甚三木綿やつし大小にて德利を提げ出て、

甚三　ドレ早う母に進ぜませう。

鳥羽　お前その筈ぢやあるまいがな。

すは　ヱヽ存じませぬわいなア。

ト甚三入りかけて表に控える。

鳥羽　ハヽまだ御存じないか、ムヽ成程御傳授を致して進ぜませう。

甚三　これはおすは樣。

すは　甚三樣ようお歸り遊びしましたなア。

甚三　シテ今日は何御用あつて。

すは　サアアノ一寸あなたに、（ト寄らうとする。鳥羽平見る。）お聞き遊ばせ、鳥羽平樣があたしつこい。

鳥羽　アヽコレ／＼身共は何も知らぬぞ。

甚三　アレ／＼今こゝに母者人が

鳥羽　ヤア伯母君が來るか、ヱヽ忌々しい。（ト慌てゝ障子家體へ入る。）

甚三　母者人とさへいへば鯨に鯱、逃げ廻はりまするが妙ぢや。ハヽヽ時に何からお話を申さうやら何が不自由なる母者人、蔭乍らお心付け有難うござりまする。

すは　ハイ。

甚三　その上拙者へ毎度お文千萬忝なう存ずれども、物堅い木曾殿の御家風。

すは　ハイ。

甚三　豫てこなた様までお頼み申し置きたる鷲尾家再興の儀、木曾兵衛殿のお執りなし、御前の首尾は如何でござりまするな。

すは　ハイ。

甚三　樣子が承はりたう存じまする。

すは　（甚三の顔に見とれてゐて、）ハイ何うぞモウ一遍仰せられて下されませ。

甚三　（むつとして、）先達てより折入つてお手前まで申込んだる儀で御座りまする。

ト　おかく出かけて聞き居て、

すは　ハイそれは何やらマア一度仰つしやつて下さりませ。

甚三　イヤモウ申しますまい、馬鹿々々しい。

すは　エ、勿體ない、何のあなたを。

かく　（前へ出て、）これは又もどかしい、あなたのお顔に見とれて御座るから、ソレいつぞや甚三樣が

お文を以てお頼みなされた其の事を。

すは　ほんにその事は早速父上へ申し上げたれば、系圖の一卷と寢覺の香とやらこの二品のうちどちらなりとも在所知れなば、吉晴樣の忘れがたみを以て本知にお歸りあるやう計らうとの事。

甚三　チエヽ忝けない、段々との御厚志有難う存じまする。

かく　イエ〳〵そんなお禮の仰つしやりやうでは、なか〳〵合點致されませぬナア御粂人樣。

すは　アノそれでは。

かく　ハテ不承知でなければ。（ト仕方にて呑み込ます。）

すは　さうぢや、不承知〳〵〳〵。

かく　さうぢや〳〵。

甚三　然らばどう申したらお氣に入りますな。

かく　エヽモウずつとお傍へ寄つて。

甚三　何と致さう、是非がない。（トおすはの傍へ寄り、）然らはかうで御座るか。

すは　エヽ嬉しう御座んす。

かく　アアそれで役目は濟んだドリヤ粹を通しませうか。

と奥へ入る。向うより主膳、後より壬生平、世話旅形一本ざしにて出て來り、

壬生　遠山主膳様よいところでお目にかゝりました。

主膳　清水清玄樣の召遣壬生平、清玄公には不慮の御勘氣シテ御機嫌は。

壬生　下郎が母方の親類に櫻姫樣諸共、お忍ばせ御壯健に御座りまする。

主膳　マア屋敷へ來やれサ。

壬生　左樣ならばお供仕りまする。（ト本舞臺へ來る。）

すは　申し甚三さん、必ず見捨てゝ下さりまするなえ。

甚三　二世かけて夫婦で御座る。

主膳　案内仕らう。（ト入らうとして、）ヤア是は怪しからぬ。（ト直に外へ出る。）

壬生　お差支えでも御座りまするかな。

主膳　イヤモウ怪しからぬ、差支える。（ト入り又出る。）

壬生　ハテ氣の毒千萬な。

主膳　主膳只今歸りました、母人々々。

ト兩人狼狽、甚三洗濯物の浴衣をおすはに冠せる。

甚三　兄人者お歸りで御座りますか。

主膳　サヽ壬生平これへ。

壬生　モウ宜しう御座りますか。（ト内へ入る。）

主膳　餘程早い積りで歸つたが、變つた事で暇が入つた。

壬生　甚三郎樣お久しうお目に掛りませぬ、あなた樣にも御健勝で。

甚三　オヽ是は壬生平、堅固で珍重に存ずる。

主膳　（二重へ上り、）サヽ壬生平、これへ。

壬生　矢張これに居ります。

ト　おすはの傍へ坐らうとする。

甚三　これは怪しからぬ事、マアあれへ。（ト無理に二重へ上げる。）

壬生　眞平御免下されませう。（ト下手へ坐る。）

主膳　甚三郎その浴衣はどういたした。

甚三　こりや隣屋敷のソレアノなア。

主膳　犬でも捕へたか。

甚三　エヽ、ハイのら犬を捕へました。（トおすは腹を立て手を出しつめる。）アイタヽ、ヽ、ヽ、テモ氣の强い犬で喰ひ付いてなりませぬ。

主膳　アノ白犬め不屆な奴、二疋寄つて白晝をも憚らず尾籠なる事を取り行ふ畜生め、浴衣の儘荒繩でしばつてぶちのめしてくれるがよい。

甚三　エヽ、滅相なこの犬を。

主膳　それもはや、よしない殺生、裏の木戸から追ひ放して遣りやれ。

甚三　畏りました。壬生平殿これでお話しなされい。

壬生　有難う存じまする。

甚三　ソレ嚙みつく犬ぢや、あぶない〱。

ト兩人に見せまいとおすはを閉ひ乍ら、下手の柴垣の內へ入る

壬生　扨て主膳樣、豫て主人淸玄樣よりお願ひ申したる彼の劍の詮議の手筋を。

主膳　承知致した、身共が亡父は鷲尾家の家臣又淸玄公には故主吉晴公の御舍弟播州淸水家へ御養子にお成りなされし事なれば、何しに捨て置かうや。

壬生　その詞を承はりエヽ、有難く存じまする。

主膳　その儀につきチト存ずる仔細もあれば一間へ參つてゆるりと話しやれ。
壬生　御母公様にもお目に掛りお禮も申したし。
主膳　心置きなくサ、行きやれ。（ト壬生平日禮して奥へ入る。）故主鷲尾家を再興せんには系圖の一卷寢覺の卷、又清玄公勘氣の元は朝日丸の劍、世に稀なる三品の寶ハテどうがな。イヤ凝つては思案に能はずと打寛いて考へると致さう。（ト上下を脱ぎ、）南無三コリヤ餘程損じたオヽ幸ひ、盆に糊の入つたるを取つて來り、懐より紙を出して、）この塵紙で裏打を致した所が忽ち破れやう、とて半紙の用意もなし、それ〳〵時の用には障子の古紙幸ひ〳〵。

ト障子の紙を引破り裏打する。奥より岡の谷義若丸を連れて出て、

岡の　主膳、歸りやつたか。
主膳　ハテ母人、今日は晝前の御番故先刻歸りました。
岡の　さうして桃井様にもお變りなう。
主膳　隨分御健勝の體に御座りまする。
岡の　そなたは何を爲やるぞいのう。
主膳　袴に灸の蓋を致して居りまする。

岡の　ア、時世とは云ひ乍ら鷲尾の家臣遠山主膳とも云はるゝ武士が、一具の袴調へる事さへ成らぬ貧しい中に、この母には何一つ不自由させまいとそなたの孝心、殊に甥子のあの鳥羽平幼少の時分から手に餘つた惡黨なれど、意見を加へて誠の人間にしてやつてくれいと、くれ〴〵も兄御のお頼みそれ故度々異見したれど、惡者の安達惡太郎に折助奉公、一昨年の騷動から伯母の内とて此の家の厄介、衣類着そげも見苦しうないやうにして置くは、こりや妾が兄御への御恩報じ、そなたは元より弟の茜三嫁女妻木迄が親切忝なう御座るぞや。

主膳　これは又勿體ないお詞實は相應の貯も致しては御座れども、態と貧窮な暮しを致しまするも朋友共に無心合力を受けぬ用心、その袴の繕ひも儉約第一と仕事が當時武家の風俗、耻辱には御座りませぬ。ヤこりや紋所を表から貼つたわえ。（トめくる。）

岡の　妾に案じさせまいと其のやうな事云やる程我子乍らも、オ、こゝにも穴があいてあるぞや。

ト上手より甚七手代の拵へにて出て來り、

勘七　御免成されませ。

主膳　オヽ山形屋の家來だな。

勘七　ハイ早速乍ら申しまする。

主膳 （引取つて、）オヽ承知ぢや一寸來やれ、（ト表へ出て、）定めて金子の催促であらう、一兩日の內に持參致せば能く斷りを云ふてくりやれ。

勘七 左樣ならば、どうぞ宜しうお賴み申し上げます。

主膳 オヽ退儀であつた。（ト勘七向うへ入る。主膳一寸思案して瓦の片を拾ひ右の障子の紙に包み、大きな聲で、）確に落手致したとよう云ふてくりやれ、（ト言ひ乍ら內へ入り、）ハヽヽヽ、イヤ母者人室町の山形屋作兵衞方より金子三十兩遣はしくれました。この通りで御座ればお案じは御座りませぬ。

岡の それはマア／＼嬉しう御座る、妻木にも悅ばしませう。

主膳 當分入用にもない三十兩、アヽ金の餘るも困つたものぢやて。

岡の 又類ひなきそなたの孝心、確にその包みの內は。

主膳 ヱヽ。

岡の 瓦の中の黃金ぢやなア。

ト岡の谷義若の手を引き上手へ入る、奧よりお糸出て來り、

お糸 伯父樣お歸りで御座りましたかえ。

主膳 オヽ隣屋敷の御息女年始のお禮で御座るか、忝う存じまする。

お糸　ハイ姉様とお連れ立ち申しまして。

主膳　ナニおすは殿も御座るか、よう來召された。

お糸　モシ伯父様お願ひが御座りまする。

主膳　身共に願ひとは。

お糸　サアあのそれは、どうぞお願ひ申す事を。

主膳　身に叶ふた事なれば、（トお糸紙袋より紅筆を出して書いて、）私が心は。（ト見せる。）

主膳　何ぢや、伯父様お前に惚れて居りまする、ヤア、ハヽヽヽこりやおもたせのさゝに醉ふての事か何時の間にそのやうな洒落者に成つた、ハヽヽヽこれお手前と身共は年がこれ程違ふ、まだその上に妻木といふ奥もあるに餘りの事だ。これだから今時の子供は油斷は成らぬ、その筈だ最前の犬の妹だものアハヽヽ是れふつゝり思ひ切るがよいぞ。

ト　お糸は主膳の膝に凭れて泣いてゐる、奥より、

妻木　畏りました、その由申し上げませう。

主膳　ヤアありや奥の聲ぢや。

ト引退けても退かぬ故狼狽して羽織を脱ぎ。すつぽり着せる。奥から妻木出て來り、

妻木　旦那様これに何して御座りましたえ。

主膳　身共か、オ、さうぢやさうぢや隣屋敷の白犬めがいたずらを致す故、羽織を追つ被せ取つて押へた所ぢや。

妻木　イヤモウ全體あの白犬は大體悪い奴ぢや御座りませぬ、いつそこ羽織でぐるみぐるぐる巻にして思ふさま叩いて叩いて。

主膳　ヤア。

妻木　それも餘り可愛さうぢや、裏の切戸から逃がしておやり成されませいなア。

主膳　何も角も皆見て居たやうぢや。

妻木　ヱ、。

主膳　イヤサア早う逃がして遣はさうわい。

妻木　私が連れて参りませう。（ト寄らうとするを。）

主膳　ソレかぶり付くぞ。

妻木　オ、こは。（ト逃げ退く。）

主膳　ハア、何にも知らぬな。

妻木　エ、。

主膳　イヤ知らぬ佛、ちんころまじない〳〵。

ト羽織にてお糸をかこひ乍ら、柴垣の蔭へ連れて入る。

妻木　ほんに緣は味なもの此の春島原での騒動の時、漸う落ちのびこのお屋敷の御兄弟が貧苦を包む駕舁業、乘り合はしたる不思議の緣、お兩人の親切母御樣のお情、貧しい中に厚いお世話、母御の起臥や小さいお子の介抱にと母樣始め甚三樣のお勸めで、主膳樣の女房と表面ばかりの武家の妻ハテ移り替つた我が姿、これはしたり私としたことが誰も問ひもせぬ獨言、ドレ洗濯物を干して置きませうわいなア。

ト奥へ入る。鳥羽平出て來り、

鳥羽　隣屋敷のおすはめもあの妻木めもせしめた跡を、女郎にでも賣つてやらうと思ふ故最前奥座敷で居守の惚藥を人の知らぬ間に入れて置いたが、あの酒を飲む時はおれに据膳うまい〳〵、それはさうと奥庭に埋めて置いたこの寢覺の轡、（ト袂より帛紗包の轡を出して、）追つゝけ東六が來る筈、マア何處やらに忍ばせて置きたいものぢやが。

ト四邊を見廻はす。向うより官蔵伴右衛門出て來り、

伴右　官藏殿急ぎまいうか。

官藏　サアお越しなされい。(ト本舞臺へ來る。)

鳥羽　寶物の隱し所は額か手水鉢が當り前ぢやが、この屋敷には何にもないハテ不自由な内ぢやなア。

兩人　頼みませう〳〵。

鳥羽　どうれ〳〵。(トうろたへる。)

伴右　待乳伴右衛門で御座る。

官藏　三島官藏で御座る。(ト内へ入る。)

鳥羽　これは御兩所、(ト奥口を見廻して、)幸ひの折柄御覧に入れる此の一品。(ト右の轡を見せる。)

伴右　こりや寢覺の轡。

鳥羽　お二方の取次にて安達逸當殿へ差し上げなば。

官藏　褒美の金は望みの儘。

鳥羽　蝦蟇丸へ返す約束なれど、若し火急に調ひますれば身共の仕合せ。

主膳　(奥にて、)奥は居らぬか母人がお召し成さるゝ。

鳥羽　アリア主膳。

ト狼狽して薬を釣瓶の中へ投り込む。主膳奥より出る。

官藏　主膳殿御在宿で御座るか。
伴右　先刻は詰所に於て。
主膳　お互に御苦勞に存ずる。
甚三　（奥より出て、）これは伴右衛門殿、官藏殿。
伴右　甚三郎殿。この程は打ち絶え申した。
官藏　今日は御門前を通りますからお尋ね申した。
甚三　それは能くこそ御入來下されました。

ト向うより五助駕舁の形、二升樽を提げ、孫作權兵衛太吉駕舁にて出て來る。

權太　オヽ、料簡ならぬ／＼。
五助　何ぢや騒々しい靜かにさらせ／＼、（ト舞臺へ來て、）ハイ遠山主膳樣と云ふはこなたかな。
□羽　オヽこゝだ。
五助　サア皆入れ／＼。
三人　オヽサ往け／＼。

ト内へ入る。孫作もうろ〳〵爲乍ら内へ入る。

甚三　見れば迯に見付けぬ者等シテ何の用ぢや。

五助　オヽおりや拳固の五助といふ駕舁ぢや、同商賣のおいらにさうおうへいにものをいふ筋はあるまいがな。

太吉　おいらが邪魔をされては商賣にならぬ、そこでせりふに來たのぢやわい。

權太　料簡せぬぢや〳〵。

甚三　コリヤ〳〵朋輩の來て御座る所へそりヤア何を云ふのだ。

鳥羽　（態とそぼけたる顔にて）駕舁商賣の仲間なぞとは推參なやつの。

甚三　門違ひ。歸れ〳〵。

五助　この內の兄弟衆は覺えがあらう、お侍知らざ聞かさう、此の主膳殿又弟の甚三殿二人共每晩々々〳〵朱雀野へ駕舁に出られるわいのう。

甚三　こりや〳〵しつこいやつだ、シテ駕を舁がばわいら何うする。

五助　島原朱雀野東寺の邊十八丁が間はおいら仲間の總持場ぢや、侍止めて駕舁になるなら今後心安う付き合ふて貰ふと思ふて樽を提げて來た。

權太　今から宜しう頼みます。
官藏　こりや珍しい儀を承はる、大小をたばさむ者が。
伴右　辻駕を舁ぐと聞いて樽入するとは。
鳥羽　コレサ甚三殿もじく爲召さるは。
兩人　お心覺えの、
三人　御座る儀かな。
甚三　曾て以て存じませぬ、ナニ五助とやら當時貧窮には暮らせども、遠山主膳は武士ぢやぞ門違ひであらう。
五助　イヤ證據人を連れて來た、こりや彈よそこへ出い。
　　ト孫作を前へ連れ出す。甚三悔りのこなし、
三人　ナニこの者を證據人とは。
五助　孫作この男を知つて居るか。（ト掌へ書いて見せる。）
孫作　オヽ相棒の甚兵衞われが所はこゝか、（ト主膳を見て、）オヽ又先肩の善めが侍になつて居やがる、こいつは可笑しいわえ。

ト主膳甚三赤面する。

鳥羽　コレサ甚三殿覺えがないとなぜ言はしやらぬ、ムヽうぬら主膳殿に意趣意恨ある者に頼まれて言ひ掛けをひろぐのだな、コレサ甚三殿この明りを立てさつしやい、たとへ誰が何ういふても鳥羽半様が納まらぬ、サア甚三殿の返答次第でうぬらはいち〳〵生けちやア歸さぬ。

權太　ヨオ〳〵。

五助　箆棒め何が恐はうて顫ふのぢや。しつかりしておれに引き付いて居いやい。（ト同じく顫ふ。）

鳥羽　サア甚三殿返答さつしやい。

五助　返答のないは覺えがあるか、よいわ仁木様の屋敷で御家老様に裁いて貰ふわ。

權太　オヽさうぢやヨア〳〵。

五助　（孫作の手を取つて、）サア來い〳〵。（ト行からうとする。）

主膳　三人共待ちやれ。

三人　ヘヱイ。（ト三人とは〳〵つくばる。）

主膳　甚三郎硯を持ちやれ。

甚三　ハツ。（ト扇箱の硯を持ち行く。）

主膳　（さら／＼と書いて、）此の一通をきぼに致して料簡に預りたい。

ト甚三取つて五助に渡す。

五助　謝り證文之事、一我等儀各々の稼業を内々以て相働き候に付御立腹の段重々御尤もに存候、向後毛頭妨げ致す間敷候後日の爲め如件、遠山主膳同甚三郎。

伴官　スリヤ證文を差し入れて。

主膳　この上に得心なくば是非に及ばぬ。

三人　ヱヽ。

主膳　サア返答が承はりたい。

伴官　イヤモウ興もあすも醒め果てた。

鳥羽　主膳殿傍で聞いてさへ此の鳥羽平悔しう／＼て血の涙が溢れるわいのう、如何に喰ふ事がならぬとて辻駕舁とは御主人の面汚し、せめて皆への言譯に腹切らつしやい、ヱヽいつそ手短かに身共が介錯。

ト切つてかゝるを主膳腕首を握り、

主膳　人外の鳥羽平め、うぬらが指圖で腹切るまい。

鳥羽　何を。

ト振り放し又切り付くるを下へ突き落す。甚三下にて引き付ける。伴右衛門官藏主膳へ掛らうとする。

主膳　御兩所そりや何とし召さる。

兩人　イヤサ是は。

主膳　惡黨者の鳥羽平に加勢召さるか、お控えなされ。

兩人　ムウ。

主膳　甚三、そやつを打据えい。

甚三　兄者人のお詞、こう〳〵。（トむね打にする。）

鳥羽　コリヤ客分の身共を何故打つた。

主膳　あのこゝな人外め、うぬら如きに言ひ聞かすにはあらねども、一間に御座る母人への言譯。

ト居直り、顔にて甚三に釣瓶を取り寄せよといふ、甚三取りに行くを、鳥羽平南無三と掛るを、支え乍ら主膳の前へ置く。

主膳　今この主膳が身の上を譬ふればこの椿の如く、亡父は丹州鷲尾の家臣我れ惣領の身なれども下賤の腹に宿りし故、弟に家を讓らんものと武術修業を言ひ立てゝ諸國遍歷、弟は又兄を思ひ

我を慕ふて同じく出國、年月を經て歸りし所その夜の騷動、兎やせん角やと思ふ内仁木晴久公のお目にかゝり倩に給はる三百俵。

甚三　その恩祿も故主の餘光、何卒一つの功を立て元の身に立ち歸らんと時節を見合はす此の年月、持ち傳へたる衣類は元より夜具迄も賣しろなし、辻駕舁、水引元結の捻賣、削り楊枝や扇の畫手のあく時は錢さしと、三十五十の端錢盡くるも早き運命の只せつなさを悔むばかり。

主膳　さばかり苦しき中なれど住む所なき其方を、甥子不便と思し召す母は元より某迄、鼻紙貰の類迄何不自由なきやうに、今日迄養ひくれたのは、皆母人が恩義ある其方が父竹田爲之進殿への、義理を思はるればこそ、それに引き替へ性根の腐つた錆刃この主膳の身に立たうと思ふか。

甚三　この駕の者等を以て恥辱を與へる企み事も、大方そちに相違あるまい、いつそ捕へて。

三人　ヱヽヽ。

甚三　サア眞直にいふて了やれ。

三人　こいつは溜らぬ。

ト逃げて入る、引違ふて東六走り出る。

東六　サア鳥羽平、約束の物はどうぢやいのう。（ト入る。）

鳥羽　ア、こりや又うせたか、今は悪い〳〵。

東六　早う往生さしてくれんか。

鳥羽　これ又情ない。

東六　是は又とんと分らぬ。

主膳　弟悦べ、賓詮議の緒に取り付いたぞ。

甚三　證據の品が御座りまするか。

主膳　外でもない即ちこれに。

ト釣瓶に手を掛ける、鳥羽平立ち上る、甚三郎止めるを振り拂ひ主膳の方へ行く。主膳鳥羽平の頭へ釣瓶の水をざんぶとかぶせる。鳥羽平身を縮めるところを當てる。此の時釣瓶の中より轡出る、甚三郎取り上げる。

甚三　これこそ尋ぬる寢覺の轡。

東六　南無三。（ト入つて取らうとする。）

壬生　（奥より出て、）動きやアがるな。（ト立廻つて當てる。）

主膳　そやつが懷中改めて見やれ。

壬生　心得ました。（ト東六の懐より密書を引き出し、）辰巳の東六へ筑紫の蝦蟇丸。

甚三　扨こそ密書。

主膳　開いて見やれ。

甚三　ハツ。（ト甚三壬生平密書を廣げる、その内官藏伴右衛門ひや〳〵してゐる。）豫て申し置いたる通り清水の重寶村雨丸の劔安達惡太郎より早く請取、預け置きたる寢覺の轡諸共持參可致候。

主膳　扨こそ劔の行衛は惡太郎。

甚三　再び手に入る寢覺の轡。

壬生　かゝる證據の手に入りしも偏に御兄弟のお働き。

主膳　弟には木曾兵衛殿迄轡を差し上げ、再興の議を願ふて宜からう。

ト東六うぬとかゝる。

主膳　早く行きやれ。

甚三　ハツ。（ト東六を引立て橋掛へ入る。）

主膳　まつた壬生平は證據の密書を清玄樣へ御覧に入れ、詮議致すが肝腎肝要。

壬生　有難う存じまする。

主膳　早う行け。

王生　心得ました。

ト向うへ走り入る。伴右衛門官藏主膳に切つてかゝるを投げて、

主膳　うぬらの手に合ふ主膳ぢやないわい、ハ、、、。

ト刀を兩方へ捨て屹度見得にて、

返し

妻平隣座敷の場　本舞臺二間半の二重家體、正面古き唐紙、押入、藁屋根竹椽、東西落間後へ寄せて數寄屋壁所々毀れあり、西東竹の枝折門紅梅の立木、二重に古き六枚屛風角行燈灯しあり、妻木幕明の提重を置き莨盆を控え、大小入靜かなる合方にて道具止る。

妻木　如月のけふ初午の祝ひとてお隣屋敷のおすは樣がお携へのこのさゞえ、最前母樣がお一つ上つて後は旦那にと仰つたに、けふは又生憎と人絶えもせず何をして御座るやら。

主膳　（奥より出て、）妻木これにおりやつたか。

妻木　オヽ旦那樣。

主膳　朝疾くよりすゝぎ洗濯、食事の調へ、嘸草臥れたであらう。

妻木　私よりあなたには別して何かとお心遣いで、イヤ申し此のさゞえはお隣のおすは様から母様へお持たせ、一つ召し上られませう。
主膳　母人には召し上られたか。
妻木　先程お上り成されました。
主膳　母人さへ召し上ればよいと申す者、この主膳酒は一水もいけぬ、お身は勝手に過したがよい。
妻木　イヱ最前母様の相手に思はず過しまして御座りまするわいなア。
主膳　ハテ最早寝るばかりぢや、身共が濺いで遣はさう。
妻木　餘りそれは恐れ入りまする。
主膳　何の〳〵。（トさゞえを取つて濺ぐ。妻木戴いて飲む。）から夫婦差し向ひで酒をたべた所は喜見城ぢやな。
妻木　イヤそりやお偽りで御座りまする。サアお盃を。
主膳　押へた〳〵。
妻木　又御無理を。
主膳　母人の前で過して身が前では受けぬか。

妻木　何のマア、左様ならたべませう。（ト主膳つぐ。）私がたべ酔ひまして申すでは御座りませぬが必ずお笑い遊ばすなえ。

主膳　誰が笑ふものがあらう。

妻木　いつぞやお情に命助かり、賤しい私を勿體ない奥とお呼び下されたれど、祝言の其の夜から終に一度の添臥も、モウ後は申しませいでも。（ト盃を置く。）

主膳　話を殘すと心に掛つて悪いもの、盃は身が納めて今の後は寢てから聞かう、床を取りやれ。

ト この内妻木酌をして主膳酒を飮む。

妻木　モウお休みなされまするか。

主膳　イヤモウ今日は目出度い事の調ひしか、怪しからぬ程酒が廻つた。（ト飮み納め、）サア片付けて寢ろ〳〵。

妻木　畏りました。（ト妻木押入より紙子蒲團を出し敷く。）

主膳　先づ此の屛風もこゝへかう。

ト 宜しく立てゝ帶を解き蒲團の上へ坐る、妻木は酔ふたるこなしにて守袋を落すと、主膳それを拾ひ、一寸思案して懐へ入れる。妻木是れを知らず、

妻木　コリヤ中から色々なものが、オヽ否やの。（トべつたり坐はる。）

主膳　そりやそろ〳〵と尾を出し掛けるぞ。

妻木　眞平お赦し成されて下さりませう。

主膳　ハヽヽヽ。

ト向うより三平奴の形にて桐の丸の提灯を持ち出て、

三平　主膳樣、御在宿で御座りまするか。

主膳　隣屋敷の御家來三平殿か。

三平　主人木曾兵衞申しまするは只今甚三郎樣お越しになり、お上屋敷へ參られし處御家老樣が遠山主膳を御同道申せとの仰せ、直樣お上屋敷へお出であられませう。

主膳　吉事とあれば直樣これより。（ト帶を締め、）奥、大小を。

妻木　ハイ〳〵。（ト差し出すをぼつこみ。）

主膳　歸りの程は知れまいから母人に心を付けい。（ト行からとする。）

妻木　申しお頭巾が。（ト差し出す。）

主膳　オイ〳〵。（ト懐へねぢ込む。）

三平　左様ならば主膳様。

主膳　三平、退儀。

三平　ネイ。

ト花道へ行き、主膳頭巾を落せしに心付かず入る。

妻木　今寝ようとした所へ、ヱ、アタ辛氣な。

ト下手よりおかく出て、

かく　奥様それにお出でなされまするか。

妻木　お隣りのおかくどん、何の用ぢやえ。

かく　申し。（ト囁く。）

妻木　そんならおすは様と甚三様を、心得ました、枕も恰度こゝにあるし。

かく　ヱ、有難う存じまする。

妻木　廓ばかりか屋敷迄。

かく　ヱヽ。

妻木　ほんに色の世界ぢやなア。

ト奥へ入る。おかく下手よりおすはを連れ出して、

かく　御寮人様へ甚三様は確か今頃はお歸りで御座りませう。道迄迎ひに參りましてお願ひ申して置きます程に、日頃の思ひを一時にナア。

ト伴右衛門官藏上手より出て聞き居て囁く。

すは　それでも耻かしいもの。
かく　その耻かしいのも今の內、よい夢を御覽じませ。（ト背中を叩き下手へ入る。）
すは　コレおかく〳〵もそつとこゝに居て給ひのう。
兩人　（傍へ寄つて、）サア爲てやつた。（ト兩方より引き立てる。）
すは　あれえ。

ト振り切つて逃げようとして立廻の內、おすは行燈を吹き消す。

伴右　南無三、眞暗だ。
官藏　取逃すまいぞ。

ト危き模樣あつてトヾおすは下手へ逃げて入る。兩人互におすはと心得捕へ合ふ。

伴右　官藏か。

官藏　件右か。

件右　おすはは何うした。

官藏　取逃がした。

兩人　ヱヽ忌々しい。

ト兩人探り乍ら入る。上手より庭下駄を履き、妻木醉ふたるこなしにて出て來る。

妻木　今夜のやうに辛氣な晩もないものぢやわいなア。（ト屛風の傍に聞耳立て、）コリヤ睦言が始まらぬさうぢや、（ト障子を開け、）まつくらで何も見えぬ、何うやら誰も居ぬ樣子、（ト内へ入り探り見て、）コリヤマア何うしたのであらうなア、醉さめで寒うなつた。（ト夜着を引冠り、）寢所暖めて待つて居やう。

ト屛風を引廻し寢る。向うより甚三出て來る。下手よりおかく手燭を持ち出て向うへ行きかゝる。

甚三　ヤレ〳〵嬉しや、寢覺の轡をお手渡し申したれば、早速上屋敷へお出で成されたであらう、ドレ吉左右を待たうか。

かく　甚三樣只今お歸り遊ばしましたか、最前お話し申した通り、御寮人樣があの一間で。

甚三　ヱヽそんならモウ待つて御座るか。

かく　宜しうお頼み申しまする。

ト下手へ入る。甚三は主膳の落せし頭巾を踏み、心得ぬこなしにて取り上げ透かし見て。

甚三　コリヤ頭巾、よい物を拾ふた。（ト冠り、）これですつぱり色男よし〱。（ト探り乍ら家體へ上りさゞえに手觸はる故思入あつて、酒を二三盃飲んで屏風をそつと開け、）おすは様は寢て居る筈、ドリヤこそぐつてやらう。

ト甚三は守袋を外し屏風にかけ、その屏風をぐるりと引き廻はす、

返し

裏座敷の場　元の場面に返る、大小入りの鳴物にて道具納る。ト上手よりおすは出て來てうろ〱する。

すは　おかく〱何處に居やるぞいのう。（ト小聲にて言ひ乍ら四邊を見る。）

かく　（下手より出て、）オヽ御寮人様あなた何うしてこゝにお出で遊ばしたえ。

すは　そなたの行きやつた後へ、盗人のやうな侍が二人來て私を引立てゝ行かうとする故逃げて來たわいのう。

かく　そりや合點の行かぬ事、甚三様にはまだお逢ひ成されぬのかえ。

すは　そんなら甚三様はお歸り遊ばしたかいのう。

かく　何ぢや、とんと譯が知れぬわいのう。

ト伴右衞門官藏出る。

官藏　オヽおすはこゝに居つたか。

兩人　うせおらう。(ト掛る。)

かく　(隔て)　さうは私がさゝぬわいなア。

官藏　エヽ面倒な引つくゝつて連れて行け。

伴右　オヽ合點ぢや。

トおかく棕梠帶を持ち支える内おすは下手へ逃げて入る。可笑味の立廻あつて三人乍ら下手へ入る。向うより主膳上下立派に改め、跡より新五右衞門岩之進上下大小にて、三平提灯を見せ乍ら出て來る。

新五　主膳殿には御滿足に御座らう。

岩之　共々珍重に存じまする。

主膳　これは〱御挨拶、組頭間野木曾兵衞殿の御執成にて望み叶ひし此の身の本懷、これと申すも全く各々の御引立忝なう存じまする。

新五　程なく御上使として木曾兵衞殿にもお越しで御座らう。
岩之　お勝手なりともお手傳ひ申しませうかな。
主膳　アイヤそれは俤りに憚り過ぎ、却々迷惑に存じまする、最早お引取下されい。
新九　左樣ならば明朝請所にて。
主膳　新五右衛門殿、岩之進殿。
兩人　主膳殿。
三人　お別れ申す。

ト兩人引返して入る。

三平　お急ぎあられませう。
主膳　(ト本舞臺に來り簾に躓き、これは怪しからぬ取り散かして。
三平　左樣ならば下郎は是より。
主膳　オヽ、退儀々々。
三平　ネイ〱。(ト向うへ入る。)
主膳　母人お休み成されたか、奥は居ぬか、甚三郎は居らぬか。

ト奥より岡の谷義若丸を連れ出る。

岡の　主膳今歸りやつたか、その姿は。

主膳　若君にもまだお休み成さらぬか、母人お悦び下され、今日寢覺の轡手に入り古主鷲尾家を再び興し、幼君守護は我々兄弟と許し給はる上より御内意。

岡の　そりやマアほんの事かいのう。

主膳　程なく管領仁木様より御上使入來、弟や奥は何れに居りまする。

岡の　サア大方裏の離座敷に。

主膳　嘸承つたら悦びませう。

岡の　オヽ永々の艱難辛苦、そなたら二人の誠が顯はれ。

主膳　不思議に寶手に入るも、再び開くお家の業。

岡の　こりやマア夢でないか知らぬ。

鳥羽　(伺ひ出て、)イヤ鷲尾家再興はこの鳥羽平が働きぢや。

主膳　ヤ何と。

岡の　最前の仕儀といひ、云はうやうなき大惡人。

主膳　盗賊蝦蟇丸に一味の科、系圖の一卷、朝日丸の劍の行衞、うぬにはまだ詮議があるわえ。

岡の　サヽ憎いやつとは思へども、母に免じて何事も許してやつて下されいのう。（ト主膳を拜む。）

主膳　チエヽ血で血を洗ふ中でなくば。

鳥羽　何うぢや双向ふて見ぬか、こりやおれのおとつさんには大恩があるぞよ、エヽこの小倅もこの老ぼれも土足にかけて。（ト蹴りにかゝる。）

主膳　（止めて）スリヤ是程に辱かしめても。

岡の　ちつとも性根は直らぬか。

鳥羽　オヽお生れ付きぢや、燒かにやア直らぬ。

兩人　エヽおのれはなア。

ト双方より見上る。鳥羽平立身にて屹度見る。

返し

同離座敷の場　再び前の離座敷に戻る、本釣鐘蛙の聲にて道具納る。ト屏風をそつと明け妻木しどけなき形にて出て、手桶にて手を洗ひ行燈の抽出より附木を出して煙草盆の火を附ける、この内甚三も手を洗ひふつと互に顏を見合はす。

甚三　ヤア妻木樣。

妻木　ヤア甚三さん。

甚三　スリヤおすは殿と思ひの外。

兩人　ヤア〳〵。（ト妻木行燈の灯を消す。）

甚三　さうぢや。（ト腹を切らうとする。）

妻木　（止めて、）尤で御座んすが、その言譯は私が先へ南無阿彌陀佛。

ト甚三の刀を奪ひ咽喉へ突込む。

甚三　ヤ、こなたを先へ死しては愈々以て言譯立たず。（ト妻木の刀を取らうとする。）

妻木　イヤ不義では御座んせぬ。

甚三　ドハ又何故に。

妻木　この春島原の騷動から不思議の緣でお世話になり主膳樣と夫婦の盃、表面は妻よ夫よと呼べど御心願ありて一つ添寢は今日迄せず、名ばかりの夫婦なれば不義密通では御座んすまい。とはいふものゝ、一緒にお果てなされては、愈々旦那のお名の汚れ、そこへお氣が付きませぬか。

甚三　一つ添寢はなさずとも一旦兄者人の女房と呼んだ人、不義の咎は遁れぬところ。

妻木　サヽヽ其のお詞を聞くにつけ面目もないこの身の誤り、旦那を除けてまだ外に定まる夫のある身の上。

ト正面の襖を開け主膳手燭を袖にて覆ひ出て立聞きする。上手の柴垣より関の谷、下手の柴垣より鳥羽平一寸出て引込む。主膳は花活の筒を取つて手燭の火に冠せて窺ふ、

妻木　もと私が父様は船岡式部様の御家中、私は幼少から櫻姫様に付き添ふての奥勤、五年以前父様には御用金を盗賊に奪ひ取られ其の場で改易、私にはお構ひなく姫君に仕ふる内清玄様との不義顕はれ、お二方の御難儀の場合勿體ない御出家の清玄様に濡衣着せし報ひにや。仲介の科とあつて永のお暇その後父様の御流浪故この身は島原へ勤奉公、間もなう二親ともお過ぎなされ其の遺言に許嫁の殿御はあれど様子あつて出國、巡り逢ふ時節もあらば夫婦となつて盗賊の詮議仕出しそれを功に、父の家名をお興しくれしよのお詞、その殿御に逢ふ迄はと心一つに誓ひを立て肌身を穢さず勤の奉公、其の甲斐もなきこの身の成行。

甚三　ム、それに又今宵の仕儀は。

妻木　サアその言譯にこの生害、今宵旦那は御機嫌よく御願がゆりたやら後にとのお詞、許嫁の殿御の事思はぬ事はあらねども、お助け受けて貧しい中にお世話を受けし恩と義理、思はず絆む心の弓

弦、さはる頭巾に心をゆるし恥かしい此の身の果、たとへ兄御と一緒に寝ても所詮生きては居られぬ體、お前に汚名を着せましたはお赦しなされて下さりませいなア。

ト泣落す。この内主膳屏風にかけし守袋と以前の守袋と二つの中を改め悔りこなし。

甚三　こなたの御座ると夢にも知らず、おすは殿と今宵の逢瀬は全く色に迷ふにあらず、義理ある我を世に出さんと兄者人の御心勞、切めては一つの功を立てんと、隣屋敷の木曾兵衛殿へ助力を仰ぐ緒の、むすぼれ果てし今宵の出來事、畜生同然の我が身の上、切腹は刀の穢れ瀬川へ身を投げ姿を隠すがこの身の言譯。さりながら母人のお歎き兄者人のお怒りも思ひ遣らるゝ、重なる不埒はお赦し成されて下さりませ。

妻木　申し甚三様、千萬言ふても返らぬ事、いまはの際の一つのお願ひ、何卒未來で末永う。

甚三　スリヤこなたにはこの甚三に。

妻木　初めてお目に掛つた時から。

甚三　疾うから身共の事を。

妻木　それでは今迄立通した誓ひもみんな仇事と、心で心を入れ替へても諦められぬが、是非のサアそれも因果。

甚三　これも因果。

兩人　因果同志の寄合ぢやなア。

ト泣き落す。本釣鐘鳴る。

妻木　アリヤモウ夜半。

甚三　妻木殿さらば。（ト行きかけるを。）

主膳　甚三郎、待ちやれ。

ト手燭を差し出す。

甚三　ヤ兄者人。

妻木　主膳樣申譯はいろ〳〵あれど、

甚三　未來で言譯仕りませう。

主膳　イヤ未來で言譯するには及ばぬ。この守りをとつくりと改め見よ。（ト二つの守りを投げやる。）

甚三　ヤアこの守も。

妻木　ほんにこの守も。

主膳　寸分違はぬ室町錦。

兩人　ヱ丶

主膳　スリヤ妻木が許嫁の夫といふは、弟の甚三郎ぢやわい。

兩人　エ丶。（ト中をあけて見て、）

甚三　コリヤこれ中にはしるしの名香。

妻木　この柴舟の名香と、

甚三　しつくり模様の、

兩人　合ふた事は。

主膳　ホ丶、兩人共幼少の時なれば知らぬは尤、我れ十五六才の頃親人は常々軍學の朋友篠木重太夫殿とそち達成人の上は夫婦になさんと、語らひ居られたる事確に覺えあり。さるにても我は早く摩利支天に誓ひを立て主家再興の上は弟に家督を讓り、又母の御先途見屆くる迄は色情を戒めんと、妻木を妻とは呼べと臥戸を隔てゆく〳〵は弟に娶せん心底なりしが、左は知らずして我に氣を兼ね又許嫁への操を立てかゝる覺悟を成せしよな。淺ましき身の果は清水寺の清僧に濡衣着せたる報ひにや、現在夫に逢ひ乍ら不義の汚名に死ぬるとは、甚三郎には妻木を花扇と呼び未來永々夫婦の印、いまはの際に盃なし心殘さず成佛させよ。

ト手桶柄杓にて水を掬ひ置く。

妻木　ヱ、忝ないそのお詞年月焦れた夫に逢ひ、操も汚さず盃とは死にに行く身のよい引導。

甚三　かく名乗り合ふからは切腹御免下されませ。

主膳　アイヤ滅多には死なれまい、女は操を立て通し潔白に相果てたが其方には功がない。

甚三　ヱ、。

主膳　古主鷲尾家は今日より元の如く取立てあれば、幼君の成人ある迄見届けて一つの功を立てねばなるまい。

甚三　ナニ一つの功とは。

主膳　主君吉晴公の怨敵蝦蟇丸、きやつは正しく山名の殘黨今妻木が物語りし篠木重太夫殿が奪ひ取られし金子の目當も確にそれ。

妻木　その蝦蟇丸といふ者はこの春島原にて私を盜み出せし騙りの曲者。

甚三　スリやその時も蝦蟇丸の仕業とな。

主膳　その曲者を尋ね出し亡君の仇、系圖の詮議、舅の仇を討取つて、功を立てねば忠孝の道は立つまい。

甚三　成程そのお詞に隨ひ、やがて吉左右お知らせ申さん。

主膳　ホヽ、勇しき途首、ソレ一献乾して花扇に。

妻木　チエ、殘る方なき情の數々。

甚三　今ぞ別れの水盃。

ト互に飲み納める。

主膳　名殘が濟まば急いで出國。

甚三　お去らば。

トつか〳〵花道へ行く。

主膳　コリヤ。

ト甚三立ち止まり妻木顏見合せるこなし、

主膳　早く行け。

甚三　ハツ。

ト向うへ入ると、奥より鳥羽平義若を引張り、岡の谷支え乍ら出る。

鳥羽　その小忰をこつちへ渡せ。

岡の　イ、ヤ渡さぬ〳〵。
主膳　ヤアこりや若君を。
岡の　何もかも委しう聞いた、何はさて置き若君を。（義若を主膳へ渡す。）
鳥羽　寢覺の轡を奪ひ返へされたればこの小悴をぶち殺し、鷲尾家を斷絶させるは。
主膳　（立廻つて、）主人に手向かふ大惡人め。
岡の　義理もこれ迄、主膳合點か。
妻木　申し、母樣。
岡の　可愛や嫁女。

ト主膳鳥羽平と立廻り乍ら、

主膳　上使のお入りにも間もあるまい、若君樣の御衣服を。
岡の　オ、尤、若樣こちらへ。（ト義若を連れ奥へ入る。）
妻木　（咽笛を掻いて、）おさらば。
鳥羽　うぬ義若。

ト立ち上るを主膳鳥羽平の腹へ刀を、突き立てる。向うにて、

呼び　御上使。

主膳　最早御上使のお入りとや。

ト妻木落入る。

主膳　お通り下されませう。

ト刀を後へ廻はす、此の見得よろしく、

柏子幕

大詰

清玄庵室の場

役名　青水清玄、奴淀平、百姓辨太郎、同勘太、同茂右衛門、櫻姫。

清玄庵室の場　本舞臺眞中に九尺中足の二重、藁葺、竹簀の子の本椽附、向う鼠の破壁反古張障子の納戸口、上手佛壇經机、よき所に圍爐裏、自在に古びたる土瓶をかけ、この傍に交張りの二枚屏風、行燈、上手誂への立木、日覆より同じく釣枝、雪を降らし、時の鐘、雪おろし合方にて幕明く。辨太郎、勘太、茂右衛門出て來る。

辨太　墓守殿居やつしやるか。

勘茂　清玄殿々々々。

ト清玄屛風を退けて出て來る。

辨太　オヽ鹽梅はよいかの。

勘太　雪が降り出したに依つて。

茂右　言ひ合はして見舞に來ました。

清玄　それは有難う御座ります、サア〳〵こちらへ。

茂右　これは旨うもないものぢやが、此のはつたいを茶にうけてやる時は第一は體の藥ぢや。

勘太　この燒米はこちの婆樣の志ぢや。

辨太　この茶はよう焙じてある程に飮んで下され。（ト各々出す。）

清玄　イヤモウ御親切なお志の品いたゞきます、兎角煩らふて居りますと人懷しうて成りませぬ。

辨太　さうであらうとも元は京の清水で立派な出家なさうなに。

茂右　淺間しい形で步いてゐるを見付けた故。

勘太　幸ひこの堂へ無理に坐らせたが、この頃は托鉢にも出やしやらぬは餘程惡いと見える。

辨太　コレ氣をしつかりと養生さつしやれ、サア夜の更けぬ内行きませうか。

清玄　ハテマア話しやつしやりませ。

勘太　さうしてもおられぬ、隨分大事にさつしやれ。

辨太　サア御座れ〳〵。

ト三人下手へ入る。これにて床の淨瑠璃になる。

〽心殘して立ち歸る、清玄は跡うち見やり吐息つき。

ト清玄思入あつて、

清玄　いつも〳〵深切な人達ちやなア。今日も暮れたか、行燈なと灯して姫に逢はう。（ト立ち上って行燈に灯を移し、佛壇より姫の人相を掛軸に拵えたるを出す。）破戒の罪の淺間しや、身は煩惱にとぢられて明けくれ慕ふ櫻姫、この程思ひ掛けなく手に入る繪像よく見れば人相書、餘りによう似た姫の面ざし、せめてもの心ゆかせに一軸にしつらへ肌身離さず。かういふ間もドレ〳〵姫に逢ひませうか。

ト繪像を佛壇の下の所に掛け、經机に凭れて清玄思入。雪おろし

ア、又降つて來たさうだ。

〽畫像を掛けて餘念なく見とれて戀の重荷なる葛籠を脊負ひ淀平が、來掛る庵

の傍近くこれ幸ひと歩みより。

ト向ふより淀平、櫻姫の袖の出かゝりし葛籠を背負ひ出で來り、思入あつて舞臺へ來る。

淀平　チトたのみませう、此の雪に連れにはぐれ日は暮れかゝる、庵室と見受けましてお賴み申し度い事がござる。

〽おとなふ聲に清玄が、

清玄　何事か知らぬが、こちらへ來て煙草でもあがらつしやれ。

淀平　それは千萬忝い。

〽いざなふ言葉にやれ葛籠、どつかとおろして打ちくつろぎ。

ト能き處へ葛籠をおろす。

清玄　サア此の圍爐裏へござつて、しぶ茶でもまいらぬか。

淀平　何も構ふて下さるな、御庵主にたのみと申すは外ではない、來掛る道を踏違ひ連れにはぐれて難澁致すが、連れを尋ねる内此の葛籠をばしばらく預つて下さるまいか。

清玄　そりや心安い事ぢや、そこらあたりへ片附けておかつしやれ。

淀平　それは早速忝い。お世話さまながら暫くお預け申します。幸ひ雪も小止みの樣子ドレ一と走

り行つて參りませう。

〽立ち寄る庵は清玄が住家と知らず、戀慕ふそれとも知らぬ、枝道を引返して淀平が、心せはしく出て行く、又降り出す雪空や。

ト淀平向うへ入る。雪降り出す、清玄思入。

清玄 心の闇に迷ひの靈、唯徒に月日を送り、世に樂みはなけれども眺めあかぬは姫の繪像、迷ひの道といひながら、實に去り難きは煩惱ぢやなア。

〽胸に思ひのたえ間なく、遠寺の鐘の告げ渡る。

ト本釣鐘。

あゝ今日も暮れたか、ア、忘れたい〱。

〽ともす灯かげに身をこがす、又も繪像にうつゝなく。

ト佛壇の下より行燈を出し火をうつし、掛軸の傍へ持ち來り、

コレ櫻姫どの、嘸氣づまりにござらうのう。（トなまめいた聲。）こなたに逢ひ度いいつ心が屆いた事やら、此のやうに不思議に此の家へござるとは、やつぱり盡きせぬゑにしとやらか、いつぞや別れし其の日より寢た間も忘れぬ面ざしを、見る度毎に思ひが增す、美しいその顔に惚れ

て〳〵惚れ抜いて身も世もあられぬ愚僧が心根、恥かしい事なれど深草の少將も百夜車のこがれ死、われもそなたに迷ひの身。

〽戀路の闇のはるゝなら、死ぬとて何どか厭ひはせぬ。

コレ櫻姫どの、わしにばかり物言はせ、そりやつれないぞや胴慾ぢや、是程慕ふを不便とは思はつしやらぬか、譬へ繪像なりともそなたの五臟へ分け入つて、おもひを晴らさで置くべきか。

ヱヽ恨めしい櫻姫。

〽罵る聲も恐ろしく、胸にこたへて葛籠の内、ワッと叫びし聲に悔つくり。

ト内にて櫻姫ワッといふ。

ハテ心得ぬ今のはたしかに姫の聲、もしや繪像が物言ふたか。

〽怪しみあたりを見廻して、葛籠にきつと目を付けて。

ト淸玄椽先なる葛籠を見て。

ムヽ最前預りし此の葛籠、何にもせよ。

〽合點ゆかずと細引ちぎり、蓋引き明ければ、内よりも走り出たる櫻姫。

櫻姫どの。

櫻姫　アレエ、。

〽すかさず飛び下り、庵の戸はたとふさがる胸の內、淸玄夢に夢見る心地。

と淸玄葛籠の蓋を明ける。中より櫻姫出る。逃げやうとすると淸立ツカ〳〵よつて櫻姫を　退け、枝折戶を締め掛金をしつかとかける。櫻姫震ふ。淸玄嬉しき思入。

淸玄　ヤア櫻姫どのか、能う來て下された、こなたに逢ひたい〳〵の心が通じて、

〽慕ひ寄る程身をちゞめ。

ト淸玄櫻姫に抱きつかうとするを留めて、

櫻姫　マア〳〵待つて下さりませ。最前から葛籠の內で始終の樣子を聞きました。數ならぬ身をそれ程に迄思ふて下さるお志、お嬉しうござりますれど、淸玄樣といふ殿御のある身、何してあなたに添はれませうぞ。こゝの道理を聞き分けてさつぱり思ひ切りお返しなされて下さりませ。

〽いふ顏、じろりと打ながめ。

淸玄　思ひ切れとは胴慾ぢやわいのう。（ト床の胡弓。）六つの年から去年迄出家堅固に勤めし淸玄、無理にこなたの戀男淸玄どのを助けんとて、萬座の中で私の手をじつと取られたその時の、此の淸玄が心の內なんぼう苦しうムつたわいのう。其の僞りが誠となりぞつこん惚れた櫻姫、アレあ

の如く掛軸の繪像はふつと手に入る人相書、それをこなたの筐と思ひ朝夕一緒に居る心、寢ざめにもうつゝにも片時忘れぬ凡夫心、勿體ない事ながら佛祖の法恩、日毎の勤行、二親の命日も忘れ果てゝ三千世界に清玄が願ひといふのはたつた一つ、どうぞ抱れて寢て下され。慈悲ぢや情ぢや、櫻姫、コレ手を合せて拜むわいのう。

〽泣いつ口說いつ身をもがき、思ひ込んだる一心の物苦はしき有樣に、姫は心も消え入るばかり、生きた心地はせざりけり。

エヽおれにばかり物言はせ、何が怖うて震ふのぢや。咎むる人はたれもない。肌寒ふごさるたらほだくべてまゐらさう。

〽いひつゝ柴をさしくべて、

ト柴を爐へ入れて、

サア姫こゝへ。

〽情ある程猶うるさく油斷みすまし逃げ行くを。よろばひながら走り寄り、姫が袂を引き戾し。

ト櫻姫震へながら門口へ逃げ出るを、清玄追ひかけ留めてきつと思入。

コリヤ女いづれへ行く、逃ぐるとて逃さうか、最前よりわつゝ口説いつゝいふ事が、こなたの耳へは、

ト櫻姫を内へ入れて、

聞えぬか。モウ斯うなつた上からは、嫌でもおうでも抱いて寢る。

櫻姫　エヽ。

清玄　得心するか、但しは嫌か。

櫻姫　エ。

清玄　抱かれて寢るか。

櫻姫　ハイ。

清玄　そんならさうして下さるか。

櫻姫　イヱ〳〵おゆるしなされて、此の場をば。

清玄　返して呉いれか。

櫻姫　サア。

清玄　返事は。

櫻姫　サア。

兩人　サア〳〵。

清玄　女め、返事はド、どうだ。

〽怒れる聲はかみつく如く、肝に堪へて櫻姫、毒蛇の口に憂き難儀、よその見る目もいぢらしく、飛びかゝつて清玄が、姫の裳裾を引きちぎり、既に危き其の折柄、引返して淀平が、心も空にいつきせき簀戸に、押せどもいつかな事、内には女の叫ぶ聲、扨てはと驚き押し破り、駈入る内はまつくらがり、當るを幸ひまつかせと、摑んでほうる荒木の柴、もゆるも天運焚火のかげ。

ト清玄、櫻姫を捕へるはづみに行燈消ゆる、時の鐘、清玄櫻姫を引き倒し無理に乘り掛る。櫻姫聲を立てあせる。此の時向ふより以前の淀平戻り來て、捨臺詞にて、門口を押せどもあからぬうち、櫻姫の叫ぶ聲を聞き悔くり、無理に押し破り内へ這入り、さぐりよつて清玄を引きのける。清玄淀平へむしり付く。是にてあり合ふ柴を取つてほうる、此の儘園爐裏へ入る。兩人立廻る内、淀平清玄を思はず當てる。清玄ウムと倒れる。此の時いろりの柴パツともえ上る。是にて淀平櫻姫顏見合す。

淀平　やアあなたは姫君。
櫻姫　そなたは淀平。能う來てたもつた、清玄どのが無體の戀慕を。
淀平　スリヤ此處は清玄の住家にな。
櫻姫　ちつとも早う此の家を立退き、清玄樣に逢はしてたも。
淀平　お氣遣ひ遊ばすな、此奴めがお供してお旦那樣に逢はせまする。
櫻姫　そんなら淀平。
淀平　サアお供致しませう。
〽イザお供と立ち出るを清玄むつくと起き上り、姫の袂を引きとゞめ。
ト淀平、櫻姫の手を引き表へ行掛るを、清玄櫻姫の袂をひかへ、
清玄　ナニ清玄に逢はせるとや、エ、ねたましや。姫は行かさぬ、金輪際添はさぬ〱。
淀平　エ、せうこりもない芋堀坊主、土に埋めて呉れべいか。
〽にらみ付れば。
ト淀平清玄を引退け、思はず投げのける。清玄起き上り櫻姫へすがりつく。
清玄　サア殺さば殺せ、たとへ奈落の底迄も放れぬ〱。

櫻姫　アレエこゝはなして下されいのう。

清玄　いゝや放さぬ。

淀平　エヽ面倒な。

〽エヽ、面倒なと引摑み投げても突いても放さばこそ、唯一ト打と淀平が柄に手をかけ詰めよれば。

ト淀平、清玄を突き退けても、放れぬ故一ト腰を拔からうとする。櫻姫留めて、

櫻姫　アヽ是々自ら故に殺さうとはあんまりむごい、マア〳〵待つてたもいのう。

〽取りつきすがり、詫び給ふ。

清玄　サア殺せ、迚も此の世で叶はぬ戀、倶に奈落へ連れ行く女、サア〳〵殺せ。

〽サア殺せとすがりつく、首筋摑んでにぢり附け、

ト清玄をむごく引きつけ。

淀平　サア是でもこりぬか、邪魔するか。

〽打据えられても執着の、一念こつたる清玄が、病苦を忘れ聲振り立て。

ト淀平清玄を打据え突き放す。清玄無念の思入。

清玄　オヽ邪魔する〳〵、サア殺せ。われ幼少より劍難の相ある故出家になさば遁れんと、觀音の像を守に添へ、出家させられたるは六つの年。

ト懐より守袋を出し、

今は仇なる此の守、親の一句も思ひ當る。サア〳〵殺せ、おくれたか。

〽どつかと座したる有様に、淀平不審と立寄つて、捨たる守を焚火にすかし。

ト清玄守りを打ちつくる。淀平之を取上げ見て、

淀平　ヤヽコリヤ是、覺えある荒礒ぎれ、

ト中より臍の緒書を出して、

臍の緒書も覺えの手跡、建久四年三月の誕生幼名は曾根松、そんならそちは弟であつたか。

清玄　ム、扨てはこなたは眞實の。

淀平　そちが兄の曾根吉ちやわやい。

清玄　兄であつたか。

淀平　弟か。

兩人　ヤヽヽヽ。

〽絶えて久しき兄弟の、名乗りに姫も打ち驚き、しばし詞もなかりしが、淀平はひざすり寄せ。

淀平　知らぬ事とは言ひながら、現在主人に連添ふ姫君戀ひ慕ふとは勿體ない。兄が爲に主筋なればそちの爲にも御主人同然、知らぬ中は是非もなし、今から心改めてさつぱり思ひ切り居ろう。

清玄　イヤ〳〵兄の意見いつかなきかぬ、戀に上下の隔てはない。思ひ切る事ならぬ〳〵。

〽一心こつたる其の顏色、憎いやつと拔きはなし、只一討ちと思へども、さすが同腹同姓の、血筋の緣に刄金もなまり。

ト淀平清玄を切らうとして思入。

淀平　すりやこの樣に言つても、ヱ、己はなア。いかなる天魔の權化にや、その根生にはなり居つた。過ぎ行かれた二親は草葉の蔭で嘸おなげき、剃髪したは六ツの秋、一子出家すれば九族天に生ずと聞く。親をみす〳〵奈落へ落すか。コリヤ己に見せる物がある。

〽懷中より取り出す過去帳。

ト表紙の付たる過去帳を出す。

コリヤ過去帳に二親の御戒名、利秋居士利照信女、二親の戒名で親の折檻、不孝の罪五臟へこ

たへ居らう。

〽過去帳取つて散々に打たるゝ身より、打つ兄がはり裂く胸をこらゆるつらさ。

清玄怒りの聲あらゝげ。

清玄 無間地獄へ落つるは愚か、此の身は荼毘に掛るとも思ひ切る事ならぬ〳〵。

淀平 ヱヽ情なや是程言ふても聞き分けねば忠義の二字にはかへられぬ。二親の魂魄は此の過去帳に止まれば、目前親を誓ひに立て今兄弟の縁切るが、それでも思ひ切り居らぬか。

清玄 やア愚〳〵、二親ともにあびせう熱に苦しむとも、いつかな變せぬ我が魂、切るとも突くとも厭はぬ〳〵、親の戒名まつ此の通り。

〽過去帳取つて引裂き〳〵、圍爐裏の焚火へ打込んだり。

ト清玄過去帳取ってづた〳〵に引裂き、いろりへ投げ込む。

淀平 ヤヽ、二親の戒名迄火中なしたる罰當り、ヱヽおのれはなア。

清玄 サア〳〵殺せ〳〵。但しは兄が仲立ちするか。

淀平 馬鹿盡すな。

清玄 いやなら姫に、喰いついても抱いて寢る。

淀平　ヱヽ勿體ない。

清玄　仲立ちするか、

淀平　サア。

清玄　サア。

兩人　サア〳〵。

清玄　コレ姫。（ト櫻姫に抱きつく。）

淀平　モウ是非に及ばぬ。（ト清玄を切り下る。）

〽是非も涙に切込む刀、あなたは執念、こなたは忠義、中にハア〳〵櫻姫、仇なあらしに氣もはらはら、流るゝ血汐は阿鼻叫喚。

ト兩人立廻る中へ櫻姫留めに入る。木魚入謎への鳴物堺風をかせに立廻る。トド清玄を切り下る。

〽八寒地獄、兄弟が修羅の劒のおそろしく、肩先ぐつと差し通せば、はつたとにらむ無念の形相。

ト淀平清玄の脇腹へ刀を突き込み、立身にゑぐる、清玄苦しき思入。

清玄　ヱヽ恨めしや口惜しや、是も誰故櫻姫、生き替り死に替り、恨みをはらさで置くべきか。

淀平　こしやくな事を。

〽怒りの聲と諸共に、血走る眼に恨みの悪念、姫は身も世もあられぬ思ひ。

ト淀平刀を拔く、清玄ばつたり倒れる。淀平血刀を拭ふ。どろ〳〵にて烏數多群がり、烏笛に成る。

淀平　ハテ心得ぬ、今血汐を拭ふと齊しく數多の烏の群がるは、烏は日輪の形を表はす。扨ては尋ぬる朝日丸よな。（ト刀を見て、）コリヤ是正しく朝日丸、ハヽア日外清水にて悪太郎がすり換へしに極つたり。今こそ我等の時節到來、是さへあれば清水は元より船岡のお家は安穩、チヱヽ忝ない。その喜びに引きかえて悪人ながら血筋の弟、未來は必ず成佛得脫。

清玄　成佛いやじや。

兩人　南無阿彌陀佛〳〵。

淀平　心柄とは言ひ乍ら、不便の亡骸、此の儘置いては犬の餌食、庵の庭へさうぢや〳〵。

〽力なく〳〵立上り見廻はすこなたに有り合ふ鍬、是幸ひと傍なる柳の根元掘うがち死骸を抱き埋むる淀平、姫は泪の手向水。

ト時の鐘かすめたる禪の勤め、淀平鍬にて柳の元を掘り清玄を是へ覆ふ。櫻姫合掌して居る。

淀平　かうして仕舞へば氣遣ひなし。夜ふけぬ内にしるべの方へ。

櫻姬　そんなら淀平。

淀平　サアお越しなされませ。（ト行き掛る、雪おろし。）　折惡う又降る雪、幸ひこゝに傘が、是をお持ちなされませ。

ト誂への番傘を取つて櫻姬にへ渡す。

〽いたわりかしづき淀平が姬の手を取り行かんとする、時に不思議や庭先へ瞋恚のほむら立ちのぼれば、姬は驚き打伏給ひ。

是はしたり姬君樣、どうなされました、サアお立ち成さいませ。

櫻姬　どういふ事か一と足も行かれぬわいのう。

淀平　エヽお心弱い、サアお手を取りませう。（ト上手へせうちう火出る。）

〽又も吹き來る風に連れめう火の熱湯どう〳〵、こなたにすつくと淸玄が、ありし姿を其の儘に、引戻したる後ろ髮、恐しなんども愚なり。

ト淀平、櫻姬の手を引き花道へ行き掛る、ドロ〳〵にて柳の木仕掛けあり、淸玄燒ちう火にて振り出しにてあらはれ出で、ドロ〳〵寢鳥、兩人行かれずふり返り、

櫻姬　あれ淸玄どのが。

淀平　扨ては弟迷ふたな。

清玄　エヽ恨めしい櫻姫、戀ひ慕ふ清玄めに、やわかおめ〳〵添はさうか。

ト連理引にて兩人を引戻す、傘よりせうちう火出る。

淀平　ハテ恐ろしい。

ト持つたる傘を舞臺へ打ちつくる、是を木の頭。

執念ぢやなア。

ト櫻姫震ふ。清玄兩人を惱す。大ドロ〳〵にてよろしく。

ひやうし幕

巻末に

「天竺德兵衛韓噺」は、實は今日六代目菊五郎の演る、「音菊天竺德兵衛」なのである。文化元年七月河原崎座で、初代尾上松助が大當りを取つたといはれる、「天竺德兵衛韓噺」は何ういふものだか編者は知らないのである。只言へる事は、「音菊天竺德兵衛」は「天竺德兵衛韓噺」から、德兵衛に關する件だけを取つたものだといふ事である。御承知のやうに、昔は一ながれの狂言で、一日演つたものであるから、原作は長いものに相違ない。書卸の時の松助の役割を見ると、彼は德兵衛の他に乳人五百機といふ女形にも扮してゐる。船の中で五百機が天竺德兵衛に殺されるところがあるさうである、卽ち二役早替りで見せたのである。何しろ、夏狂言で、蟇の妖術で屋臺崩しを見せる、座頭で池の中へ飛び込むと向ふから上下で出てくる、といつた風にケレンで驚かした狂言である。

作者は世に大南北といはれる鶴屋南北である。この作は彼が立作者になつてからの第一の作で、さういふ意味で、演劇史的に注目すべき作である。今日では、普通に時代狂言として、一番目に据えてゐるが、私は彼が新歸朝者を描いて、當時では珍しい外國の事情を物語らしてゐ

る、その社會劇としての味ひに、重きを置いて世話狂言の中に入れたのである。私は厚司の上に上下を附けて出て、天竺の話をして、「貧乏人が伽羅で蚊いぶしをする。」などゝ、新歸朝者らしい誇張を得意に喋つてゐる、エキゾチックを愉快に思ふものである。決して輕蔑する氣になれないのである。さう考へれば、この作の中心になつてゐる早變りなぞも、單なるケレンではなくなるのである。南北に取つては、いや、さういふよりは南北等に依つて開拓された歌舞伎劇の世界では、早變りは、全く一個の立派な詩なのである。その點でも、この作は歌舞伎劇のある一面を代表する作であると思ふ。

權八と長兵衞は、曾我狂言と同じやうに、歌舞伎劇に取つては一つの方程式である。A+B=Cである。狂言作者はこの方程式に嵌め込んで、いろ〳〵の戯曲を書いてゐる。「幡隨長兵衞精進俎板」は無論そのうちの一つである。伊原青々園氏の説では、權八と長兵衞とを一つ戯曲に仕組んだのは、安永八年五月森田座の元祖河竹新七作の「緑曾我」が始めださうである。又「精進俎板」といふ名題は、享和二年八月中村座の櫻田治助作が最初であるとの事である。その時は五世松本幸四郎の長兵衞、三世坂東三津五郎の權八である。

「鈴ケ森」は櫻田治助の手で殆ど纏つてゐたものが、鶴屋南北に依つて今日のやうな完全なも

のに仕上げられたのである。さうして、どんな權八長兵衞の狂言にも、挿入されてゐるやうだが、同時に立派な一幕物として獨立してゐるのである。

こゝに納めた四幕のうちで、序幕と三幕目とは、辻褄を合はせてあるだけで、大詰の「長兵衞內」にかつきり續いたものでない。殊に序幕の「五社明神の場」なぞは、何か他の權八長兵衞物から持つて來たものらしい。いろ〳〵にいちくつたものゝ寄せ集めである。

渥美君に調べて貰つたところでは、文政元年三月中村座で、「幡隨長兵衞精進組板」の名題で、五世幸四郎の長兵衞、五世半四郎の權八、七世團十郎の閑心、三世三津五郎の八內、五世菊之亟の小紫といふ顏揃ひで見せてゐる。この時の臺本があつて、照し合はす事が出來たら申分ないのだが、それが手に入らなかつたのは殘念である。

「艶姿女舞衣」の酒屋の段は、上中下と三段に分れた、下の卷の切、上鹽町の段の事である。これが歌舞伎で持て囃されるやうになつたのは、恐らく明治になつてからの事らしい。書卸は安永元年十二月の豐竹座で、作者は竹本三郎兵衞、豐竹應律、八民平七の三人である。

櫻姬淸玄も、權八長兵衞と同樣に、歌舞伎劇の一つの方程式である。これが歌舞伎劇に現は

れたのは、私の知つてゐる限りでは、津打治兵衛の作で、寶永七年三月中村座の「一心二河白道」である。これは丹波與作と清水清玄の綯ひ交ぜであるが、臺本を讀んだ事がないから何んなものか分らない。清玄の名は近松の作にもあると渥美君はいつてゐた。兎に角古くから扱はれてゐる事は明かである。

櫻姫淸玄の「庵室の場」は、歌舞伎劇の舞臺面のうちでも、最も深刻なものゝ一つで、かなりに執着といふものを突込んで描寫してゐる。戀慕の情に痩せ衰へた淸玄と、濃艶無比な櫻姫とが、庵室の薄暗い行燈のひかりの中に、相對する光景は何ともいへない凄艶さである。淸玄が櫻姫に訴へる戀の苦しさはいふまでもなく、淸玄の鼠色の着附と姫が美しい友禪の振袖との對照の妙、更に二人の動きと、この一場を抱擁する風音と三味線樂と、それは惱しきこと限りなき感覺の王國である。驚くべき洗練と彫琢である。

この「傾城入相櫻」は、大阪で行はれたものらしい、相當な惡本である。しかし、この戯曲の本統の內容であり、又實際今日の劇場に行はれてゐる、「淸水寺の場」と「庵室の場」とは、上演されてゐる正本としてといふ意味で、無論完全なものである。最初は安政五年三月市村座の小團次菊五郎に河竹默阿彌の書いた「江戸櫻淸水淸玄」に據つたのであるが、あの大震火災で、原稿は秀英舍の工場で燒けて了ふ、原本は麹町の私の宅で燒いて了ふ、そんな譯で仕方が

なくつて、これに代へたのである。幸ひ「庵室の場」だけは燒け殘つたので大體それを用ひる事にした。つまり「庵室の場」は「岩倉宗玄」に近いのである。

燒いて了つた原本は、繁俊君から借りたものであるが、文字通リタマなしにして眞に申譯ないと思つてゐる。默阿彌の創作といふ程のものでないから、少しは自分で慰めてゐるが、友達づくで貸してくれたものだけ、猶濟まないと思ふ。改めて、この際詫びをいふ次第である。（濱村米藏）

大正十四年二月二十五日印刷
大正十四年二月二十八日發行

『世話狂言傑作集』第貳卷
定價金參圓

編纂者檢印

編纂者　河竹繁俊
　　　　濱村米藏
　　　　渥美淸太郎
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　和田利彦
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二地番
　　　　瀧澤一郎
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
　　　　株式會社秀英舍
發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　春陽堂
　　　　（電話本局五一番
　　　　振替東京一六一七番）

岡本綺堂氏著　新刊

綺堂戲曲集

定價各　二圓三十錢
送料十八錢

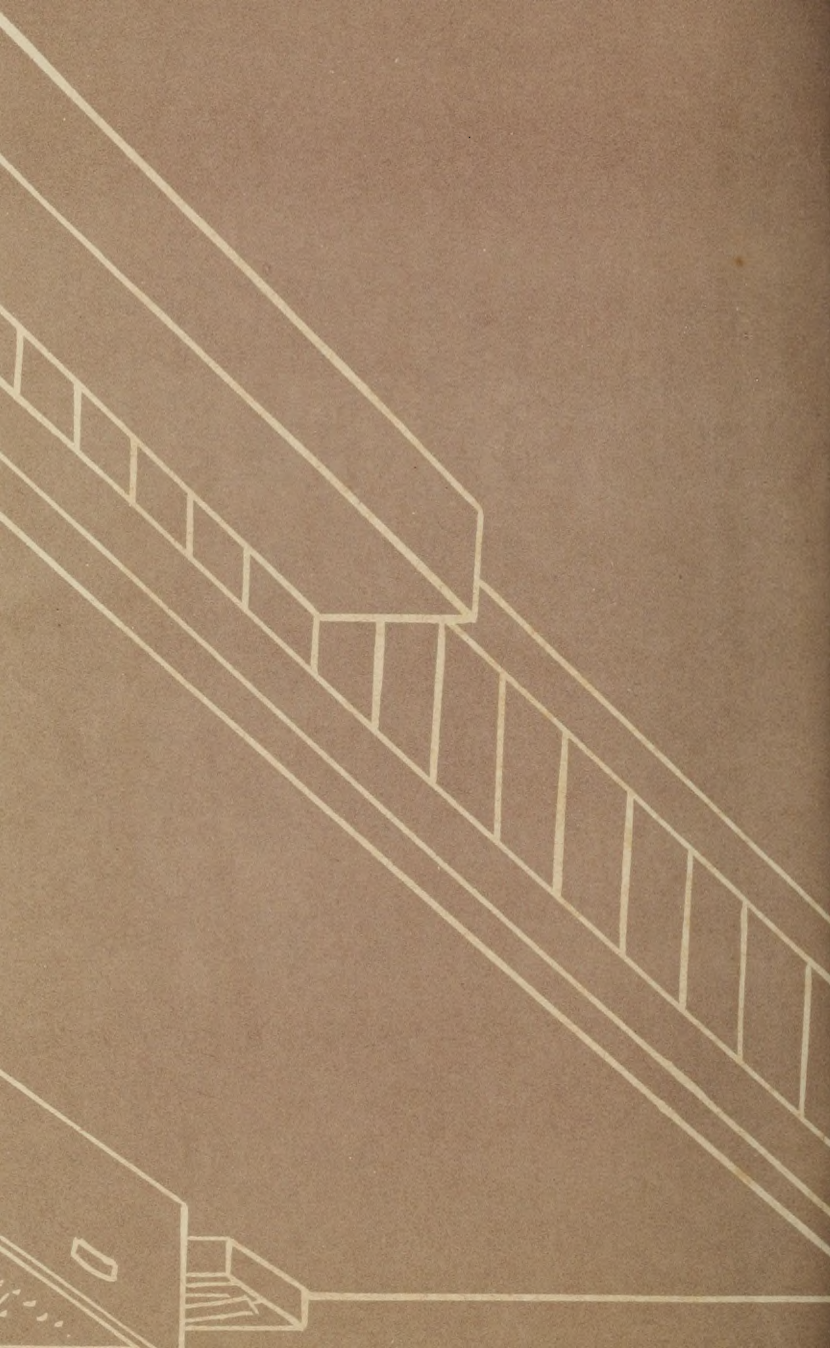
續々刊行

―全國到る處に滿場の觀客を
熱狂陶醉せしめてゐる『綺堂物』の上梓―

江戸時代から明治時代に亘る劇作の大家河竹默阿彌の脚本集を愛讀した諸君は大正の默阿彌を知らなければならない。綺堂氏の戲曲百餘篇、舞臺に上ること幾百回、單に讀物としても必ず本集を備へ給へ

第一卷　◇室町御所◇切支丹屋敷◇俳諧師◇熊谷出陣◇鳥過山心中◇名立崩◇修禪寺物語◇わが家◇能因法師

第二卷　◇勾當內侍◇雨夜の曲◇貞任宗任◇番町皿屋敷◇入鹿の父◇兩國の秋◇蟹滿寺緣起◇小栗栖の長兵衛



北斎漫画

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02988 8047